

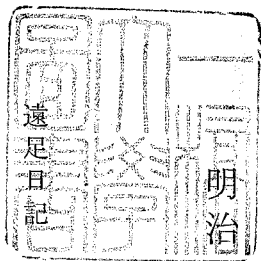
上田貞次郎日記

明治二十五年—三十七年

明治二十五年

十月十六日 午前六時新橋停車場を発車品川海岸を過ぐる頃、朝暾漸く上り海面為めに紅色を呈し、仏氏の所謂極楽も斯くやらんとぞ疑はる。巳でにして川崎横浜を経て、大船に至り、横須賀支線の列車に乗り移り、七時四十三分遂に鎌倉に達し、此に下車す。実に東京を去る三十三哩半の道程なり。此に於て人員を調査せしに殆んど百五十名余なりき。乃ち発す。此地三面丘陵を繞らし、南一面相洋の波浪を以つて洗はれ、

記。 明治二十五年十月正則尋常中学校鎌倉地方遠足



二十五年 (一八九二年)

広袤僅かに方二里に過ぎずと雖も今より七百年程前にあつて之を見れば、実に日本全国の中央政府ある首府たりしなり。即ち、源頼朝公は此に覇府を開きしなり。続いて北条氏及び足利氏の支族も之れを根拠として、一は全国の、一は関東と奥羽とを支配し来りしなり。されば名所旧跡に富み、神社仏閣に乏しからず。先ず第一に吾人は一丘に登り又其半腹故右大将源頼朝公の墓及び大江広元、島津忠久の墓を見る。墓辺松伯鬱翁として日影を洩らさず、岩石突兀として蒼苔滑なり。而して碑は苔辭の蔽う所となり、葛蘿の纏ふ所となり、寂として声なく唯小鳥の樹間に叫ぶ有るのみ。嗚呼英雄一度力を得て天下に覇たれりと雖も、子孫の愚遂に二伝して亡び其墳墓今に於て斯くの如し。誰か往事を追懐し、歎慨せざらんや。石階を下り、路を左に取り

鎌倉の宮に至る。宮は二階堂にあり大塔の宮護良親王を祀る明治五年の新建にして官幣中社に列し、社後の山麓に土窖あり。窖は親王賊の爲め幽閉の害に遇ひ給ひし所たり。其入口六尺許り内は、冥濛として窺ふ可からずと雖も閨人は深さ一丈三尺広さ八疊敷なりと言ふ。又伝へて曰ふ、此辺當時は樹木蒼蒼たり榛莽蕪穢なり、人跡稀なる所なりしと。社の傍側東の方に一小林あり。賊が、親王を弑ひし奉り首を持ち去らんとせしに其口に折れたる刀を噛み頤を凝らして、睨まへしを見怖れて棄てし所なりと言ふ。余輩熟々當時の事を考ふるに、実に悲涙袖に滴らん許りの思ひこそすれ。稽首再拜して出で旧路を取りて行く、途に滑川を渡る。此川一つの小川に過ぎずと雖も、昔青砥藤綱の錢五十を投じて炬を買ひ以て錢十を拾ひたりと言ふ古跡と思へば何となく価あるを覚ゆ。雪の下に至り鶴ヶ岡八幡宮に詣づ。宮は康正六年源頼義の創建する所にして旧と由井ヶ浜にありしを、頼朝公に至り此に移せしとかや、国幣中社に列し石階重畳殿宇宏壯巍として美を尽し麗を致す。傍の拝殿こそ静が心の貞節を歌舞に奏せし所にして、階下の銀杏樹こそ公暁の隠れて將軍実朝を

弑せし旧跡なれ。通を隔てて白旗山あり。之れ頼朝が始めて、旗揚げせし所なりとか。登れば頂上白旗屓たり、眼に影するものは幾万の勇兵が、火花を散らして戦争せし古跡なる鎌倉の野にして、今は禾黍の実るを見る。難有哉明治の聖代。西の方小袋坂を越えて建長寺に達す。寺は山の内にあり北条時頼の創建にして巨福山と称す。堂宇宏大古色蒼然実に五百年前に於ける建築物の好見本なり。其れより長谷に赴き大仏を見る。大仏は総国寺の旧跡にあり、青銅を以て之を鑄る。高五丈、周圍十六間二尺、面の長八尺五寸、眼四尺肩四尺二寸、耳六尺六寸、鼻三尺八寸、口三尺二寸五分、螺髪の高八寸なり。中に三丈五尺の盧舎那仏及頼朝の守菩薩を安置す。之れ亦鑄刻鮮明にして慈眼溢るゝ許り、当代鑄術彫刻術の進歩想ひやらる。時正に亭午、因て長谷寺に至り各々携ふる所の行厨を喫す。終て隊三に別る。即ち日帰、江ノ島行、金沢行之れなり。余は江ノ島行に加はる。極楽寺坂を越え七里ヶ浜に出づ。此所水浅く砂深し右を眺めば稲村ヶ崎海中に突出し、新田將軍の勇鬪を今人に追懐せしめ、左を望めば、鎌倉の丘陵三浦三崎煙霧の中に糶糊として出沒す。海浜を

行く里許、腰越駅に達す。之れ義経が頼朝の猜忌心の爲め望みを失ひて口惜やしの涙を絞りし所なり。之れより棧橋あり江ノ島に達す。両側旅店、細工物店を以て連なれる道を行き又石階を上る。上に神社あり、江ノ島神社と云ふ。此辺松樹の蔭に息ひて遠く前方を見渡せば、相模の洋茫茫として際なく、沖つ白浪交々見え、景色絶佳真に一幅の絵画を見るが如し。其より進んで崖を下り海岸に出づれば、仰ては断壁の上老松の蒼みたるを見、俯しては白浪岩に砕けて霧を起こす見ゆ。左すれば洞あり口大にして五丈許りもあらんか。傍に燭を買ひ衆相携へて中に入れば、暗は一歩より暗なり、之れ即ち龍の穴なり。四十間許にして穴二つに分る又各間の先に達す、出でて又素との所に帰り余等特に舟を命じて鎌倉に向ふ、左に浪に足を噛まるゝ断崖を見、右に茫々たる相洋を眺め、後には江ノ島稲村ヶ崎に送られ、前には鎌倉の丘陵に迎えられ行々唱歌す壮又愉、快又愉遂に達す。上りて待つ事数十分陸行隊に会し、共に鶴ヶ岡八幡前を過ぎ金沢に向ふ。途に朝比奈の切通しを横ぎる。此時巳に日暮を過ぐ。行けば行くに従ひて道は険となり、夜は益々暗らし。唯耳に

聞ゆるものは、溪流の潺々たるあるのみ。目に見ゆるものは、残螢の道傍に薄光を放つあるのみ。此に於て衆勇を鼓し軍歌を唱へ詩を吟じて行く。已にして後火光あり、或は見え或は隠し、余等叫けべば彼等応ず。近づけば即ち後より来りたる一隊が、松明を持ち来れるなり。因て合して進む、阪路益々急岩石道に凸出して足を傷む、仰げば両側の断崖は峭絶たり。然して上方は、松明の光及ばず只朦々たり、稍々あつて道は平夷に帰したれど腹は空にして胃の神経は頻りに食物を求め、咽は渴して水を欲し来れども、山深く里遠くして食なく、四肢は益々疲労す。是に更らに勇を鼓し、氣を励げまして進む一里余。八時過ぎ金沢に達し、旅宿東屋に投ず。先きに至れるの人亦欣欣然として余等を迎ふ。及ち鞋を脱し、足を洗ひて浴に入り須臾にして、食事をなし、寝に就く。半夜雨の金沢の江に降りしきるを聞き、翌の天氣をきづかひつゝありし。

十七日 翌くれば十七日雲は濛々として天を蔽ひ前方の丘も霧の中に彷彿たり。朝食を終へ近傍を徘徊す。又一葉を浮べ之に乗り中央に至る。地形を見るに此灣三面は山にして、東一面口を開く、風景は明眉なれど

も、江の島に及ばず。水又浅くして大舟を入る可からず。余等の舟又浅州に乗り上げて動かす可からず。宿の雇主に依つて漸く漕き出づるを得て復へり、行厨を携へ、八時北方横浜に向ふ。途に称名寺を見る。之れ金沢文庫のありし所にして天永の頃には、和漢の書多く集められ盛大なる学校ありしが後屢々兵乱に係り、今は唯一碑を残すのみ、時世の変遷も亦想ふ可し。去て谷沢を過ぐ道是より二に分れ、一は旧にして山路に、一は新にして海岸に沿ふ。余新道隊に加はり一里許りにして富岡に達す。奇穀美貝を採集し進んで二小岡を越え杉田に至り東楼に入りて行厨を食す。是れ新旧両道の合する所たり。出てひさしく行けば、即ち屏風ヶ浦なり、絶壁断峭たるを以て此名あり。龍頭に至りて道を左に取り運河に沿ふて、横浜に入り、右曲左折して停車場前に至り一小亭に入り茶を喫す。午後四時人員を検査して、汽車に乗じ汽笛一声長駆して、新橋に着す。時に四時四十五分是に一同解散を告げ各々家に帰る。

明治二十六年 (一八九三年)

一月一日 快晴 午前九時より学校にて祝賀の式に列し十時帰宅、邸内諸戸を巡り祝詞を云ひ、十一時旧藩主殿に行きて祝詞を白す、午後邸内にて遊び、夜鶉沢氏に行き歌留多遊をなす。本日来簡三葉、午後十時十分前眠る。

二日 快晴 午前八時起。午後一時金原君と日本橋に今村君を訪ひ直に去り、三田に松山君を訪ひ、帰宅せしは七時。

門松は名譽の旅の一里塚

楽しくもありうれしくもあり

元日や柳も上戸下戸の春

十時半寝に就く。

三日 快晴 午前八時前起。九時より岡田、津田、塩谷、佐々木の諸宅へ年賀の為行き、十時帰宅。正午

より邸内にて散歩し、又は諸戸にて歌留多し、七時より飯倉熊野神社の縁日、夜見世を見に行き、帰りて暫時鶉沢玄次君と談話、十時五分過寝に就く。

四日 快晴 午前九時起。正午より交学会新年会に出席。午後九時帰宅。其より金原、妹尾、笠井、鶉沢諸君来り遊び、十一時二十分寝る。

五日 快晴 午前十時起。山本、妹尾二君と入湯に行き、正午より金原君と鳥居坂町に田中君を訪ひ、午後九時より高橋氏宅の歌留多会に出席。

六日 快晴 午前一時、歌留多会より帰り、直ちに寝。又十時起、午後八時より名倉氏宅の歌留多会に行き、十時半帰宅、直ちに寝ぬ。

七日 快晴 午前九時起、邸内にて遊び、午後七時より長井氏宅の歌留多遊びに加はる。

八日 快晴 午前一時十五分家に帰り寝ね、十時三十分起、邸内にて遊び、午後六時より鶴沢氏宅の歌留多遊びに加はる。

九日 快晴 午前二時十七分前帰宅、七時十分過起。学校始業日なれば朝飯を食ひ、直ちに登校す。尤も学課はなし。時間割を写し、諸教員の話の聞きたるのみ。九時二十分帰宅。其より山本君と入湯に行き、十時四十五分帰る。午後遊び、夜に至り勉強、九時五十分寝ぬ。

十日 雨 午前七時十分起、学校に行く。平常の学課あり。午後二時前帰宅、復習。午後七時より奈良氏宅の歌留多遊に加はる。帰宅せしは十二時少し前なり。

十一日 快晴風あり 午前七時十五分起、学校に行き、帰り、其復習及明日の下稽古すること常の如し。午後九時二十分寝床に就く。

十二日 曇 午前七時五分起。以下同前日。

十三日 初雪 午前七時十五分前起。以下同前日。朝より雪降る、午前止む。

十四日 晴 同前。午後六時より自宅の歌留多遊に

加はる。

十五日 曇 午前三時歌留多遊を終り、直ちに寝ね、七時起。午後二時より藩主殿に詣り、頼貞殿に拝謁す。八時寝に就く。午前山本君と湯に行く。

十六日 晴 午前七時二十分過起。午後十一時寝。

十七日 晴 午前七時十五分前起。午後九時半寝。

十八日 晴 午前七時十分過起。午後十一時寝。

十九日 晴 午前七時十分起。午後十一時寝。

二十日 晴 午前七時十五分起。学校帰宅後直ちに藩主殿に行き、主家の宝物を拝観す。陳列物は殿の大奥に設けらる。正面床の中に二掛物あり、一は藩祖南龍公の書にして、一は東照公の御書なり。下にある名刀は是ぞ東照公より藩祖に賜はる宝刀なり。其他代々の御鏡、中黒の旗、馬印、東照公時代の鏡等凛として威あり、此説明終るや、須臾にして琴陵の神祖に関する講談あり。此時主も出でて嚴然として正面に坐し、聞き居られたり。午後五時帰宅。

二十一日 晴 午前七時十分過起。午後七時より笠井氏宅の歌留多遊に加はる。

二十二日 晴 風烈し、午前一時帰宅、直ちに寝ぬ。

三時に至る頃鐘声、人声と和し、喧々として事あるが如し。由て起きるに果して一ノ橋辺出火あり、再び眠り十一時起。其時松山信二郎来て門を叩く、乃ち自室に導き談話数十分、正午なれば膳を同ふして午餐を喫す。直ちに本野亭が門を叩く。下婢出でて在らずと答ふ。失望し信が家に至り稍ありて共に出て日影町に至る。写真を取らんとし店に至りて乞へば二枚を以て一組となす能はずと云ふ。復失望、中原兵太を訪、また在らず。失望、失望、新し橋に至る頃、一警報あり。

北向すれば烟煙天に漲る。之れ浅草区某町出火なり。其より松山梗庵氏の愛宕下出張所に至り、楼上にて茶菓を饗され、五時去て帰路につく。途中愛宕山に登り、先の出火模様を見、四辻に至りて信と別れ家に着きしは六時なり。此時松尾謹一郎来りて家にありしが、其家より迎來り去れり。是に於て夕餐を食し、暫時自室にて読書の後寝。

二十三日 風烈しく、寒威身に徹す。而して晴天洗ふが如し。登校、復習、下読常の如し。国会は十五日の停会を命ぜらる。本日帰宅後入浴したり。

二十四日 快晴なれども非常に寒し。学校は午後二

時間石川教員欠席の為、早仕舞にて帰宅せり。

二十五日 朝起、洗顔し居るとき、仰て天を望めば淡雲漠々天を蔽しが、忽ちにして降り来る。蕞爾たる細粉、已にして学校に行けば粉は漸く大となり、地は遂に *Wrapped in the spotless ermine of the snow* となりたり。木は白花を開きたり。四方皆皚々として一銀世界をなす。蔽々又蔽々。学を退く頃尚止まず、家に至れば家兄其他交学会員装をなし將に羽根沢の御別邸に雪見の宴を開かんとせり。此時余は学課の下読あらんことを慮り、不行と答へしかば衆出で発せり。由て自室に入りしに下読は甚だ少き様子たりし故、後より独歩雪中を行く。途に一軍隊に遇ふ。彼兵士等の帽子は雪を以て帽子となしたり。黒き外套は霜降となりたり。整然指揮官の命に従ひて途歩する様勇ましくして威あり。於是余勇氣は更に増したり。邸に至れば衆は頻りに雪を賞しつつありたり。稍々ありて牛肉を食し、酒を酌みて快を尽くす。五時頃雪止む。衆雪戦なしたり。而して帰る頃は全く七時なり、此日積ること二寸五分許。帰宅後少時下読、談話。九時少し過寝る。

二十七日 学校帰宅後、直ちに入浴。夜鶉沢清治の宅に遊ぶ。

二十八日 午前八時より校友会に出席す。当日開場は幼稚園なり。例により、第一席に神田会頭の演説、其に次ぎ教員諸氏、生徒諸氏打交せて演説朗誦あり。此内にて最も吾等に必要なる話は医員重見周吉氏の伝染病に関するものなり、又余興として講談及福引あり。総代済て帰宅せしは三時なり。夜鶉沢清治、笠井小次郎来り遊ぶ。

二十九日 朝起、窓を開きて見れば雪復た蔽々として降るを見る。暫時文を草し、昼飯を食してより、交学会例会に梅尾館に出席す。当日は一の会議をなし、其より懇親談話の後、散会せしは五時頃なり。夜山本喜三郎来り遊ぶ。七時頃雪止む。積る事三寸余。

三十日 孝明天皇祭——晴天——午前邸内にて遊び、午後新聞雑誌を読み、夜に至りて学課を下稽古し、十一時寝ぬ。

二月二日 晴天 午後家兄の用達の為日本橋の内田氏に至り、其より松尾氏に至り謹一郎と散歩して新橋を喫し、又石碑を見る。一は蒲田の諸所よりの道程を記し、一は刻して曰く「海苔しびも梅の花さくばかりなり」一は「白梅のこずえや月のたかみくら」其他二三。少くして発し、新田神社に赴き詣れば、追懐措く能はず、然りと雖も止まる可きに有らざれば遂に熱涙を拭ふて去り、矢口の渡に至る。義興公を惜しむの情又勃々として胸に浮ぶ。已にして原村梅園に達す。梅信蒲田に同じ。其れより帰途池上に寄り、本門寺内を徘徊し、大森停車場より乗車、品川に下り、三田に至りて牛肉店に登り、晚餐をなし、家に帰り直ちに入浴して寝ぬ。

十八日 夜入湯す。

二十日 学校退散帰途、新田義夫が飯倉の新宅に至り、茶菓を喫し、閑談時を移し、午後四時半帰宅す。

二十一日 学校、午前学課を終り、直ちに生理教員石川一男氏に導びかれ、級生と校を出て本郷なる帝國大学に至り、動物学講義室に入り、同氏が心臓、肺臓、榮養器、骨格等に付ての講義を聞き、三時十分終て帰途に就く。此教授や実完全無欠たる器具実物を以て満され、僅か二時間に足らざる間に莫大なる知識を得

に至り、袂を分て帰宅す。

三日 曇天 淡雲漠々として雪降らんとするもの如し。

五日 曇天 午前十時鈴田九年十来りて門を叩く。乃ち出で俱に田町に今村周を訪ふ。不在由て富島正治を訪ひ暫時海岸にて遊び、同家にて午餐を饗せられ、二人共に又周を訪ふ。在り、是に於て四時頃迄遊び、帰家、晩飯直ちに算術、代数の復習をなして寝ぬ。

六日 曇天 門田教員欠席の為、午後一時間早仕舞にて退校。

七日 曇 午後湯に入る。

九日 暁小雪——晴天

十一日 紀元節 天は雲を除き地は風静かにして此日を迎ふるもの如し。午前八時参校拝礼の式に列し、其より帰宅、終日神武の觀聖を煩し、且我邦憲法発布の日たるを思ひ、陛下の方歳を祝し且聖恩を忘れざらん事を之れ望む。

十二日 午前六時より妹尾克巳、鶉沢清治と髪を北風に梳り、顔を寒気に曝らして蒲田梅林を訪ふ。蕾未だ綻ずと雖も香氣已に馥郁たり。林中小亭に息ひ、茶

たるや明なり。甚運よくも外山正一先生に逢ひ、旧師の温顔を拝する事を得、又快なる哉。

二十五日 午前八時より幼稚園の校友会に出席、会員の慨嘆なる演説、優美なる朗誦を聞き、午後三時半帰宅。又夜、榮町教会の幻燈会を見に行き八時帰宅。

二十六日 正午より梅尾館に交学会例会に出席す。三時半まで会議、それより演説をなし、五時に至て閉会す。夜入浴す。

二十八日 門田教師欠席のため、午後の学校日課休みとなる。帰途より紛々たる白雪蔽々として降り来る。

三月一日 朝雪止む。積ること四寸許。

七日 藩祖南龍公祭典執行に付参殿す。

十一日 夜入湯す。

十二日 正午より笠井、金原、鶉沢清、妹尾、山本等と荏原郡渋谷村なる一草野に趣き、之にベースボール戯をなし、午後七時帰宅す。此日晴天雲なかりしも、疾風時に起て塵砂天を蔽ふ。此中に立てバットの音を森林原野に響かす、最壯なり。

十五日 夜入浴す。

十九日 味爽五時半出発にて交学会遠足に加はり亀戸、臥龍梅、江東梅木、下川、妙見、浅草、上野等へ赴く。此日東風徐々に吹き、暖気を催し、晴天復た一点の雲を止めず。而して梅は唇を綻ばせて香馥郁たり。故に此間に笑つ、語りつつ遊びて、愉快絶なり。然れども、里程の多きため、帰宅（五時頃）の時には足いたみて歩行するに苦しむ。其より入浴しぬ。

新地にもかくなるものか梅の核 西山

真夜中やをしくもこぼす初時雨 花魚

二十日 午後渋谷村原にベースボール戯をなす為め行く。会するもの鶴玄、清、笠、金、山、妹等とす。

二十一日 学校にて生理、代数試験あり。

二十六日 正午より交学会例会に梅尾館に出席す。

三十一日 午前八時より幼稚園に校友会に出席す。

十時頃帰宅す。

○四月より七月末までの心得

起眠 六時迄に起る事

十時迄に寝る事

忽ちにして霰交りの雨は又もや沛然風に吹き巻かれつつ荒れ廻り、暫しは止みもならざりしが、四時頃に至りて全く止み、青空明らかなり。

八日 学校は七日間の春季休業を終り始業せり。八時二十分前頃より登校直ちに時間割を写杯して帰る。

九日 晴天 雲なく風暖にして、徐ろに吾人の面を試ふ。真に春の長閑の盛りの時なり。夜入湯。

十二日 曇天 午後三時頃より雨降り、夜に入り益々止まず。六時より入浴。

十三日 晴天 午後八時頃倚机読書しつつありしとき、警鐘頻りにひびく。窓を開けば北方樹間に火焰の天に影せるを認むるのみ。之れ吉原某町の出火なり。

十五日 晴天 土曜日なれば二時頃帰宅。それより呉服町叔父松尾三代太郎氏を訪ふ。之れ山王祭祀につき招きに応じたるなり。町辺は鬱々声裡、或は山車、或は神楽あり、所として賑はしからざるはなし。赤飯を饗せられ、七時過に至り、桶町に至り叔父内田匡輔氏の店に行き、暫くして去り家に帰る。ときに九時半なり。

十八日 我が為めの忌日なり。

清潔 日に一度必ず室の掃除する事

週に二度以上必ず入浴する事

学問 学校より帰宅後三時間以上の復習下習をする事

新聞雑誌を読む時間二時間以上

運動 平日二時間の外出運動をなす可し

日曜日可成戸外運動をなす事

四月一日 本日より学校は春季休暇となる。

四日 午後一時頃より山本喜三郎、妹尾克巳と芝山内を逍遙す。今や桜蕾已に紅を含んで春雨に浴し、残梅の香亦芳ばし。乃ち山林の美観は尽せり。而して遙に品海を眺めば波静かにして風帆徐ろに動き、二の軍艦は旧砲台の彼方に碇泊して陰然帝国の武威を張る。陸の美、海の佳！

六日 朝よりいやに寒く、春の心地せず。果せる哉、九時頃に至り雨霰を交へたる事や。

七日 午後三時頃、戸外騒々轟々、恰も一大異変の起りたるかと疑はる。窓を開けば一陣の疾風、力強く草木を靡かして吹き来り、天は黒雲墨を流すが如く、

二十八日 学校より遠足会にて箱根に向ふ（早晩。此日湯本より宮ノ下、塔ノ沢を見、又小涌谷、底倉、芦ノ湯、木賀を見る。進んで西ノ河原の先きに行けば芦ノ湖眼下にあり。日暮、宮ノ下に帰り旅宿奈良屋に投ず（温泉に入る）。

二十九日 早朝より大涌谷に向ふ。大涌谷は硫黄を採掘する所にして焰烟洋々焉たり。正午旅宿に帰り、昼飯を食し、湯本より帰途に就き、午後六時家に帰る。

箱根地方へ向け正則学校遠足記

四月廿八日 午前五時新橋停車場に集り、人員調査を行ひ乗車。六時発。品川海岸過ぎ田圃の中に入れば、蓮華の花も、菜の花も今を盛りと咲連なり、緑の中に赤や黄色を色どり美々しき事限りなく恰も毛氈を布きたるかの如し。六郷川を打渡り、横浜を過ぎるや汽車の歩みの稍々遅くなるかと思へば、忽ちにして闇世界に入りぬ。之れ隧道なり。其より藤沢を過ぎ相模

川を渡り、大磯を通り国府津に達す。其より鉄道馬車に乗り、酒匂川を渡り、小田原市街の中を走り、又田圃の中を通し、十時箱根湯本に達す。是に隊分して二となり、一は旧道よりし、一は新道よりす、余は新道隊に加はりて行く。一橋あり旭日橋と額す。岩石水を遮りて、此処彼処に横はり水声撃々烟霧岩間に濛々たる溪流は、此橋下を走るなり。此即ち早川にして芦の湖より起こり木賀宮の下を廻りて此に至る。抑々此川は此かる好景色を呈するのみならず又其水力の強きが故に人之れを利用して、電気燈を点ずるに供す、又善からずや。新道右には、此好景なる利益ある溪流を俯して望み、左には断崖絶壁屹として峙ち、其上に草叢の青みたるを仰ぎ見る。而して路は岩石出沒する事往々、又わきに飛泉の懸るありて涇々灑々たる音を聞く。凡て上り坂なり。塔之沢を過ぎ、太平台を越え宮の下に達せしは、已に正午に近し。旅店奈良屋に入りて昼行厨を食す。進んで底倉に至る、此処又溪流あり岸に沿ふて行くに道と云ふもの絶えてなく唯凸出したる岩石に足を置きて、葛蘿を握り苔藓に瓜立匍匐して行くのみ。下は烟霧溼々として谷を埋づめ、老樹蒼鬱として

日影しれず。流の上に至れば、巾五間の瀑布三四間の上より懸かるを見る。烟蒸し浮々焉として揚がり、音轟々たり、試みに手を触るれば熱湯にして、之を味ふに塩味あり之れ硫黄を溶解せるを以てなり。又崖を攀ちて上り林間を行き數十丁にして、小涌谷に達す。山腹に登れば硫気紛々鼻を襲ひ足の踏む所皆黄青色を帯ぶ。而して岩間沸々煮ゆるが如く湧くが如き所三四ヶ所杖を以て地を穿てば、音ブクブクたり。之れ小涌谷温泉の源なり。去て山路を進む事里余、芦の湯に達す。此間山岳相連なり一山を越ゆれば一岳又其前に見ゆ、又上ぼり行けば、風疾く吹き、衣袂を払ひ帽をも飛ばざん許りなり。又桜樹の如きも成育し得ず、頗る矮く三尺に満たず、花期亦後くれ今は即ち其盛時にして木少なき山のほとり所々に、残雪の如く白色を色どりて、何となくゆかしく見ゆ。此等は凡べて高山の頂上にあるの結果なり。其れより薄茅生ひ茂げれる小径に出づ。道傍、曾我兄弟の墓及び源満仲の墓を見る。何れも此荒山に幾百の星霜をか経けん、草生じ懐古の念をして人の脳裡に満たしむ。又広大なる地藏仏を見る、弘法大師の作なるとかや。高さ一丈余の自然石に影み付け

あり。幾回の雨にか浸されけん、何回の雪にか蔽はれつらん、苔むして一見凄然の思あらしむ。其先きに一草亭あり、息て前方芦ノ湖を見下す可し。離宮は凜乎として其表に立ち、向岸の山岳模糊として雲霧の中にあり。晴天の日に此に富嶽をも見得しと聞けども、惜哉今日天気濛々として浮雲天を蔽ふ。余等尚ほ進まんと欲すれども日已に暮れんとし、且つ一行中に疲勞者を発見せしかば、口惜けれども此より引き戻し木質に廻はれり。木質は此より二里余早川の岸にあり、少しく凹地なれば、四顧巍々たる高山峻岳なり。町の中は小橋あり其上飛泉したたり落ち大石に咽びつ流れて早川に合し共に峻山の齧を噛みつつ下り行く。川に沿つて坂を下れば、宮の下なり。此に奈良屋に投じ温泉に浴し食事をなし、共に今日の話をなしつつ寢床に就く。余等が床室楼上にあり、夜起て外を望めば連山波瀾の如く視線の両側にあり、前面は唯々溼々濛々として海も町も模糊の中没し去り月は峯上に皎々として面影を麓の溪流に抛ち快よき事云はん方なし(前面は即ち東南なり)。

二十九日 早朝起床顔を洗ひ、口を嗽ぎて戸外を散

歩すれば、白雲峯の頭を隠せしよと見る間に漸々下り来りて、遂に屋内に入り袂を溼すに至る。以つて地の高きを知るに足る。食事を終れば隊二つに分かる。一つは湯本に向ひ進んで小田原を見、他は大涌谷に向ふ。余大涌谷の隊に入る。行々、箱根草、山梨、山桜、くるもじ等の異植物を採集しつ、或は尾花枯れ伏す荒野を辿り、或は山麓の小林をくぐり、或は道狭く僅かに一人を通ず可き如き所を行きしに、二里許りも行きたらんと覚ゆる頃一の溪流を渡る、此流こそ大涌谷より来るものにして、水は皆熱し硫黄を含みてあるなり。因て沿ふて上れば、硫化水素の臭、鼻を貫かんばかりに吹き来り、見れば山上には草も木もなく唯々赤黄色の地が盛んに白烟を吹き出すのみ。衆之れぞ大火山の跟跡ぞと心を励まして硫黄色の地を、歩み登れば、人夫の俵を負ひ来るあり。此中には採掘し来れる硫黄が、充たされてあるなる可し。山頂に達すれば、臭益々高く、工夫等は頻りに採掘しつあり。衆烟立つ所に至るに、地熱し湧く音は、宛ら汽船の機関が運転する如く、轟々として人語聞えず、試みに杖を以つて湧口に当つれば白き硫黄の粉は忽ちにして、結晶し

附着するなり。此に於て各々小隊を採り又教師石川氏の言に従て時計の如きものを見るに、銀は皆硫化銀となりて稍々暗色を帯るを發見せり。此れにて大涌谷の見分はすみたれば、足先を転じて旧路を取り宮の下に帰り、奈良屋にて、昼食の行厨を食し終て、早川に浴ひ、湯本に至れば、先に来れる人々も亦あり、合して鐵道馬車に乗りしは、殆んど三時半頃なり。小田原を過ぎ国府津に至りて下車。汽車にて長駆新橋停車場に達す。此の間藤沢のあたりにて、一間四方許りの大鷲風を見たり。之れは、此地方にては毎年旧曆の三月節句に至れば、少し大家と言へば、皆之を揚ぐなりとか聞く。新橋にて解散。帰宅せしは六時頃なり。

抑々、箱根の大火山の火口と言ふは、今七湯ある所は、悉く其内にて、内にある駒岳、二子山、冠岳等は、火山の勢のやゝ弱はまりつる時に降らせし灰が、外に散らずして、中に積りしものなり。又此火山の消えたるときは、山一面の大湖にて、今の山々は、其中の嶋なりしが湯本所より切れて水突出し、其残りとして、芦の湖、早川、須雲川を以てせり。

塾運動会観覧に行き、午後五時頃帰宅。遊戯は高、中飛、競走各種、体操等にて頗る盛会、又余興として風船花火等あり。

二十七日 午前七時より校友会に出席。午後一時半帰宅。当日の最も緊要たる演説は神田乃武氏の「The City of Hirose の區別」、猪間収三郎氏の「火山に付て、附箱根山」なり、余興には南龍の講談あり。

六月一日 午後、家用にて呉服町に行き、八時頃帰宅す。

三日 夜、交学会例会出席。開場は梅尾館にて散会せしは十一時半。

四日 正午過理髪。其より院行、六時帰宅。夜入浴。十日 午後家用呉服町行。

十一日 朝家用にて呉服町に行き、帰途芝公園地内の動物園を縦覧し、午前十一時帰宅。午後入湯。

十六日 午後院行。長井氏夫人同道。夜入浴。

十七日 夜、愛宕下町に松山信二郎を訪ふ。時既に鈴木成功、中原兵太、安川幸二来り居れり、乃ち、主客五人閑談時を移し、九時半信を辭して各々自家に向

五月三日 召に應じて殿に昇り、旧藩主、若令室、令嬢、幼君に謁す。

四日 午後院行。

七日 午前家用にて松尾、内田二叔父の家に行き、正午前帰宅。

八日 午後院行。

十日 夜家用にて呉服町行。

十四日 午後院行。帰路神田に廻り、字書を購ふ。

十五日 学校理科教員石川一男氏愛媛県富貴中学に聘せられ赴任に付、新教員猪間収三郎氏の教授を受く。氏は石川氏と同窓理科大学の卒業と聞く。

十七日 学校にて生理学試験あり。

十九日 学校教員欠席のため、二時間早く退。

二十一日 午後一時より召に應じて旧公の内庭に参し、祭礼なる万徳稲荷に詣り、又茶番、手品等の余興あり、頗る賑かなり。午後六時帰宅す。

二十二日 学校十八史略試験、美術試験あり。

二十三日 夜家用呉服町に行く。

二十四日 午後院行。

二十八日 正午少し前より中村二人を率ゐ、慶応義

て歩を運ぶ。

二十日 此日は吾れの為めには一大祝(?)日なり……一大記念日なり……今後忘れざらん事を期す。学校一時間早く帰宅。

二十二日 夜入浴。

二十五日 都合有て、学校小運動会に出席せず。

二十六日 学校小運動会の翌日なるを以て休業なり。

七月二日 学校にて元良先生伊能忠敬氏発明にて同

氏が日本国沿岸を測量せしとき用ひたる実物なる測量器械を持ち来りたれば余も之れを見るを得たり。

梳器は車ありて道を引き行きて其歩みたる丈けの長さを知る器なり。

二十日 学校は明二十一日より夏季休業となる故に本日は唯月謝を渡すのみにて終れり。

二十二日 午後家用、小石川行。

二十四日 交学会例会出席(午後)。

八月三日 本日より亡父上所蔵の書籍など土用申干

に取り係り、そが中に遺墨、詩文などあるを見て思出で奉まつる。

十日 閑を得たれば午後七時頃より山本喜三郎と飯倉町を散歩し、又回て十番に行き、氷を喫して帰る。時に十時。此夜、涼風徐ろに吹きて昼間炎熱の苦を洗ふ。

十二日 午前、正装着袴して青山神葬地に行き、父上の墓前に至り、捧花撤水慎んで其靈を拝す。父上今此世に在さば如何。父上は兄上の卒業も見られつ可し。母上も斯かる御病氣には罹かられ給ふまじ。涙こそ出さね、我れ胸は実に嘆慨の情を以て満たされぬ。偶々墓碑の間に響く兵士等の喇叭の声は勇ましくも又力強く我心をして励ましめたり。

十三日 八幡祭礼なれば、夜少閑を得て飯倉街を散歩し、町内鼓声鑿々煙濛々として賑かなり。

十五日 本日閑を得て午前八時過ぎより麻布三ノ橋に岩上省三を訪ふ。過日の郵便に応ずるなり。戸を叩けば省三方に楼上の自室あり、互に旧を談じ、今を語つて時を移す事一時間半許、俱に共に携へて西町に旧友溝口俊彦を訪ふ。在らず、乃ち歩いて材木町に至り此

に車を馳す。時に風徐ろに吹て清涼袖に満ち、爽快云はん方なし。達するに氏不在、即ち去りて銀座街より帰りしに同時電燈屋の如くなりければ

日の本の国の進むに従ひて

銀座の街に夜は絶えにけり

三十日 早朝、洗顔嗽口直ちに車を桶町に馳す。昨夜の用を達せんが為めなり。

九月一日 午前、鵜沢玄次を訪ふ。共に愉快なる談話をなして時を移す。正午に至る頃、彼れが兄清治帰り来り、其熱海より持ち来りたる雁皮紙三帖を以て余に与ふ。余喜び受け帰る。

此頃二百十日の附近なるにも拘らず、天気殊に穏かにして風徐ろなるは誠に社会の為めに、殊に農家の為めに喜ぶべき事なり。

七日 夕刻より家用を以て桶町に行く。帰途学校用読本を買ふ。

十一日 学校の暑中休暇は早や昨日を以て終り、今は其授業始となり、又されば朝六時半頃より登校して、神田乃武氏の談話等聞き、八時頃帰宅せり。

に別を告げて帰る。省三は飯倉小学同窓の友なり。二年前袂を別つてより文通はなせしと雖も、直に面語したるは今を以て始めとなす。二年前の同窓の友に会して親しく談話するは復た愉快なる事なり。

十八日 昨朝より疾風絶えず吹て力強く木枝を靡かし、雨時に交りて暴風の如し。

十九日 早朝起れば昨日の嵐いつしかやみ、晴天に風徐ろに袖を払て暑熱を和ぐ。

二十日 朝床を起れば頭痛に四肢だるく、加ふるに昨日よりの腹下り尚ほ止まず。乃ち、井関に行きて診察を乞ふ。薬を貰ひて帰り臥床す。正午過ぎ地稍々震ふ。

二十三日 病漸く癒えたれば、床を離る。

二十五日 病全く癒えて薬を止む事を医より許さる。

二十六日 朝、岩上省三来る。由て室に引て茶を喫しつつ閑談す。

二十九日 昨夜、房州なる浜堅信より来月上旬帰京する旨の手簡来りたれば、今朝其返事を出し置く。

是日浴を終へて後、家兄の手簡を携へて桶町内田氏

本年の暑中休暇中は旅行をなして一般の見識を弘めんとせしも、之れを果たさざりしのみならず、家に在て自由なる遊戯、勉学等をなす能はず。愉快なる事はなかりしが、幸に地理学の研究をなしたり。読みたる書物左の如し。

万国商業地誌、日本商業地誌、地学新篇、南洋探險

実記。

別にスウイントン氏、万国地理総論、亜細亜の部、オセアニアの部を訳したり。

十二日 叔母菊枝氏不在。兄上当番。我乃休学校、看母。

十三日 出校。今朝竹馬の友山本喜三郎の父君の死したりと聞きたる故、本日午後三時半頃、一寸其宅に行きて悔を述ぶ。又夜に至て同氏宅へ行き、仏前に物品を捧ぐ。喜三郎と暫時亡人の話をなし、共に哀悲の色を顯はし、分れ帰る。

十四日 是日より散校後直ちに松井氏に行きて新聞を閲する事となる。之れ母上に新聞紙を見せざらん為めなり。

十五日 松井行かず、学校帰退後直ちに家に帰り午

後四時より山本伊八氏の葬儀に列す。式は一ツ木の一寺にて行ひ、梅窓院（青山）に埋葬したり。我は埋葬の時まで柩に従ひたり。我感情は山本伊八其人にあらずして却て遺子喜三郎にあり。之れ一つは彼の身の上を我れに較し、一は我れが少時より就学の事等常に彼と伴ひたるとにあり。帰宅せしは七時頃。

十七日 午前十時頃より登殿す。之れ藩主祖南龍公秋季祭典の奉日なればなり。参拝者に接待し、後三時吾人一同赤飯を饗せられて帰宅せり。

二十三日 午前母命を拜して青山神葬地に父上の墳塋を謁し、帰途野原を過ぐ。今や秋色濃ならんとし、薄、よめ菜の花こぎ交せて径を縁採り、何となうゆかしく見えたり。

二十六日 本日より学校にて英語新教科書 *The Three Beautiful Princesses* に取かかる。夜、福島行俊よりの手簡を受領す。

三十日 校友会に出席、今回の最も余をして、又恐らくは満座をして感ぜしめしものは猪間取三郎氏の北極旅行に付ての談話及び長谷川方文氏の幼時維新の乱の一端に遭遇せし事の話にして、又中頃の高橋鎗四郎

が大声我等の亡友竹村久助を弔ふの文を朗読せし如きは転た嘆に堪へざりしものありき。

十月二十日 学校休欠す。入湯。

二十一日 本日は学校の遠足なれども都合悪しくて欠席す。

二十二日 朝、岩上省三来り暫時談話して去る。それより桶町に行き、十二時帰宅す。（理髮）

二十三日 今日都合悪しき為め学校を休む（此頃齒頬にいたむ）。

十一月一日 午後七時より二長町に行く。全所に一泊。二長町は松尾謙一郎のハンケチ裁縫工場なり。

二日 同所宿泊（四時頃一度帰宅、直ちに赴く）。

三日 午後一時より上野公園に遊び、動物園を一覽す。今や秋仲半にして公園には千歳の緑なる松が枝の間より、楓、桜等の紅なる葉を頭はして錦を織りなせる如きなり。

是日、天長節なるを以て、いづこも全しく皇室の万歳を祝する日丸の国旗を掲げ、にぎやかにぞ見えけ

る。夜、帰宅。

四日 朝、板葺尾根の上に白霜のうすくかかれるを見る。夜、入浴して二長町に行く。同所に一泊。

五日 朝より出でて神田をすぎ靖国神社に至りしかど、祭祀の余興はあらざりし故、お茶ノ水を渡りて本郷に出でて行慶町の曾山達夫を訪ふに在らず。因て食事なして湯島神社に至り、上野、浅草の幽閑なる、華美なる景色を見、それより上野に出で、谷中をすぎて団子坂に至り菊細工を見る。皆菊にて衣服等造りあれば、香よく、美しく、誠に見事なりしが、中に福島中佐愛馬惜別の場などは見ばへある方なりしも、惜哉無学なる植木屋は其雪の中に棕櫚を植ゑたり。弁慶勸進帳のまはりぶたいなどはいと立派なり。寓に帰りしは三時頃、一泊。

六日 早朝帰宅、学校に行く。招魂祭の祝として午後の稽古なし。

十日 夜、桶町に行く。

十三日 朝、銀座に赴く。

二十三日 新嘗祭、朝三田へ行く。

三十日 夜、岩佐氏に赴く。

十二月二日 家用を以て午後本郷に赴く。

明治二十七年 (二八九四年)

処世余録 第二冊*

十一月二十一日 午後七時より暇を得て六本木町高橋K君を訪ふ。既に高橋丁、加藤成一、南君あり。暫時して両君去り余は独り留りK君と談話。九時少し前帰宅せり。此帳面は、其帰途に買ひしなり。夜一時まで看護。

二十二日 午前六時半起床、午後二時半入浴、昨夜雨竹君より其自記見聞録を借り来るによりて夜看護かた／＼読むに、感じたる事ありたれば、しるし置く事左の如し〔目録文面通り〕

元良博士予にいふて曰く、汝に交際秘訣ありや。予

きしに、患者多きため氏は会計事務を処するの暇あらざりしならん可。書生は直きに足す可しといひ居れども、中々に、書付けを出しくれず。余は、催促し、是後程頂きに来ましようかといへば、書生は、直きに足す可し少し待たれよといふ故、余はヨツポド帰らんと思ひたれども、今少し待ち居らば出してくれるならん。少しの事ならば待ち居るにしかじと思ひ、待ち居たるに、暫し時間たちて一時間半にもなりし頃やうやう出してくれたれば、そこにて私をすませ帰宅せしに、家にては家兄大に嘲笑し、今までかしこに坐り居りしが馬鹿気たはなしだなどといひ、又少しは、宅の事も考へて早く帰へればよきなど叱られたり(宅に用事ありしならん)。余はこの時心の中になに彼様兄はいへども無理なり。何となれば、先方にて少しまてといはるれば、少しの処をまたで二度足はこぶよりは、今少しまたんと思ふは、余ばかりの考へにもあらじと。然るに後にて前にいひつけられたる兄の言をくりかへされ(兄はもし書付け出来居らざれば来れといひしとなり)又自身に考へて見れば成程と合点したり。即ち、其時間つぶしは余の不注意に因る事を知り自ら、いんま

曰く「なし唯々淡々として、水を学ぶらんと思ふなり」と。博士曰く「過ちの少なきを欲せば然り。知らず過なきを望まざるや。」予曰く「谷を問て、美桜ありたるを得ず。博士曰く「尤も易し。若し人を見ては、先づ彼の長処より談を起せ、これ決してこぶるに非ず、而れば彼欣々として、又己れにむかふて長所をいふ事をのぞむ可し。是谷をよぎるの橋なり」と。予曰く「大謝、唯憂ふ世間狂人あるを」博士曰く「天の落つる何れの年か」博士大笑、予慚愧。

元良先生曰く事に注意すると、然らざるとは三年の後には恰も甚第の差を生ず。

元良先生の戒 汝其全力を間断なく使用せよ。

廿三日 朝家兄より命ぜられたる事に、医井関氏に行きて、薬価勘定をなし来る可しと。因りて同氏に行

と思ひたり。即ち兄の言を不注意にききし事、患者多くば書付けはをくる位の事を自身は悟るの頓智なかりし事の二つは、余のいんまなり。之を合点してより余は不快去りて、潔よく感じ用もよく出来たり。

余は、氣のよく付く時とまたうか／＼し居る時とある。故によく注意して善きくせをつけなば氣のきいたる人となる事を得んと自身にて思ふ。

今日の時事新報は、英国のある科学紙より訳出して曰く(題号「地下の熱を利用せんとす」)

「米国の某技師は、地球内部の熱を捕へ来りて、人間の用に供するの計画を公にしたり。即ち合衆国ウエストヴァージニアのフィリングといへる処には深き鑛孔あり地下五千呎の点に於て、華氏百三十九度を示したり。而して其先は、七十五呎毎に一度をたかむ。若し其割合を不変と見なせば、圧力百封度の蒸氣に等しき熱を得んには、凡そ三哩半を穿たざる可らず。然れども火山国に於ては、是より容易に其熱を得可し云々。素より尚ほ理論たるにすぎねども之を実にするの望みあるは争ふ可らず。我日本は先づ水力を利用し、次に浅間山其他の火力を以つて電熱を感し、家屋をあ

ため、食物を調理するに至らん。我国は、水火の天幸を専有するものといふべし」云々。越後などにては、地中より出づる瓦斯より火を焼し、食物を煮るといへば、其考へを進歩せしめたらんには是に至るやも知る可からずと貞城は考ふ。

今の吾妻橋は、元大川橋といふ。吉田雨岡といへる人（明和年中に栄えたり）の始めて架するところなり。雨岡は、幕府の与力役を務め吏務明敏なりしが、私費を以つて之を架したるなり。（本朝立志談）

伊能忠敬先生が江戸に出て高橋東岡に天文数学を学びしは、齡既に五十才にして此時は、家産の衰へたるを恢復したるにより、家の子の景敬に委ねたる後なり。又地理を実探して日本全図を作りしは、其後に十三年を費やし、年は七十三才なりし。（本朝立志談）

二十四日（土）昨夜半前〇時半眠り今朝六時起床す。此日家兄しきりに余を叱す。瑣事といへども仮借せず。余は彼れ余を試むるものか、もしくはこらしめんと欲するならん。なれば宜しく唯々して反言するなからんと思ひしにも拘らず、時々其決心を実行する能はざりき。余の量胆尚ほ小なりと後に悔ゆ。

読んで己れと同論なるを思ひ而して▲を附したる所の事の如きは、余に於ては是非共力を処世余録に借る事必要なりとおもへり。

二十六日 昨夜十一時半頃就眠、今朝六時半起床。夕刻三十分の暇を得て、飯舎より芝山内を散歩す。

二十七日 火曜日 午前八時四十分より三田へ行く。家兄より「理財科講義」を買はん事を托せられたればなり。帰途尚時間ありしを以つて、高橋徹夫君を下宿に訪ふ。君あり四十分余の談話を果し帰宅す。

高橋君は郷里美濃にある時、父君より托せられ自家及村の会計事務を取扱ひたる事あり。東京に出でしは、去る廿五年なり。其後神田の物理学校、大成学館、國語傳習所、又芝正則学校に学びたるが、其間下宿食料等の入費も自ら計算して、自家の財産収入等に相応せしめ居たるものなりといふ。今は米國に渡りて牧畜製作を研究せんと企て、略々来月中には、出発の見込みつき居るなり。故に辛苦したる事も少なからざれば、見識も実地に適し、人の思ひやりも知れるものの如く見受けらる。君曰く「我々の学校には「ソー、コレハおとつさんが学校へ行けといふから行く」との考へを

今宵旅順口占領の報を得たり。此攻撃は十九日以来劇烈なる戦闘の末二十二日に終りを告げ、首尾よく我全勝に帰したるものなり。七時半より六時まで眠る。二十五日（日）朝理髪。今日も家兄は少しく余を叱りたれば、余は大抵反言に堪え得たり（叱するの度うすぎによる）。

今日の時事新報は、バンクーバー領事よりの報告を記載したり。之れを要抄すれば、生肉、生魚、蔬菜、果物等を保存するに、彼地方にては、氷蔵もしくは、冷却の法を用ゆる由にて、其装置機械をそなへ因て生活を立てる人あり、即ち冷却機械は百馬力にして（氷を製する機械もあり同馬力）潮水をアンモニアにて冷やし、鉄管によりて数多の室に導びき之を通過せしむ、而して、蔬菜、果物、バター、チーズ等（生魚、生肉は氷蔵を要す）を其室内に納め置くものなりといふ。「我等毎日の閱歴よりして得るところの実益は遙かに学校の才能の上に出でたり。」（下略）西国立志篇

（上略）「シルレル名づけて人類の教道といへり、即ち日用の品拳々動の上にて自ら身を修む。自ら己れに克つ事に力を用ふるなり」（下略）西国立志篇（余は之を

もてるもの多けれども、中々左様気楽なる世の中にはあらず」と。余以て真に然りと為す。今日のはなし。

去る二十五日の時事新報に、旅順占領の公報をのせたり。其要に曰く、二十一日の拂曉より全軍三道より進み、同日午後四時頃までに陸上諸砲台を、二十二日午前中に海岸諸砲台を占領し終り、茲に我全勝に帰し、戦利品甚だ多く、特に大口徑の大砲、彈藥等あり。此役我死傷二百余名あり。又海軍公報は、今日達せり。曰く、海軍は唯砲台を前面より砲撃して、応援せし如し。全く第二軍により、占領せられしなり。目下港内掃海に着手し、水雷の如きも片付けつゝあり、此水雷は数甚だ多く尚ほ船を内に入るゝは、安心ならず。砲台等は其まゝ使用し得らるが如し。

我友誰乎之説 人不可無友、友不可不詳其性、白宇先記各概評於処世余録、而未付一目下、且其後有悟処、乃作我友誰乎説 丁白宇誌

○T、T君は、熱心家、實際家（但不銳尖）

○斎甫君は、不平家（似海豚）

○敬丁君は、才子、熱心家（但備喇叭）

○交注君は、勉強家、狐公（此意不可解）

○得無遠君は、熱心家、公子（但有菜）
 ○公傳君は、數理家、こども以下（烏賊但冊鰓有外套之下）

○字異、悠君は、勉強家、学者（即非實際家）
 ○楚三君は、内氣者、温厚之人

○敬、俣君は、遲鈍之人、正直者

○品、屋君は、喇叭手（有意）、英雄（好何乎）

○英、丁君は、才子、平々坦々（蓋狐君適評）

○注、元君は、熱心家、衣至肝袖至腕（但精神共）

○愛、椽君は、勉強家、仏僧之食（精進）

○三、奇君は、雀（喧々）胆囊如腎臟（腎臟似豆）

右計十四名、真友也、親友也、面友也、感友也、一正

則學校生徒也Ⅱ邸内友也Ⅲ元正則生也、面友尚甚多、

如左（君各通）（尚有有有）

三之辺貞男、日猷義雄、宇沢清二、傘為小白、斤腹

東象、背男克身、堀中智寒呂、錫貴成高、富士掛重二、

沼之憲象、待山信白、小間林広四、巖紙省象、富久嶋

行年、川牟良峯貴智。

二十八日 水曜日 仕立屋余が新調の衣服を持ち来

る。仕立賃羽織着物は三十八銭也、之に絹二子一反、

二子一反、裏地、綿を加へて大凡三円七十銭許り、是を窮屈にして、唯數年間を支ふ可き洋服に比すれば、其代金、持ち、及着工合に於ける益は幾何ぞや。午後七時より一時間閑を得て、西の久保不動の縁日を見、愛宕下より山内を経て、飯倉通りに出で、買物をして帰宅。

二十九日 木曜日 デトリング氏は、支那の国書を持ち来れるにあらず。唯李伯の依托により、伊藤伯に面会し、日本政府の平和恢復に関する意向を聞かんとするものならむ。伊藤總理は其を拒絶したるもの如し。然れども、デ氏は尚止まりて、企つる処あらんとする模様なり。（時事新報、神戸電報）

三十日 金曜日 デ氏は伊藤總理よりは、面会を拒絶され、且つ北京よりの來電もあれば一旦帰津する事になりしといふ。支那政府は我政府が斯様な曖昧の外国人使節を相手に容易に講和談判を開かざるは、勿論一切取り合はざるを、知れるもの如し。（時事新報）

有名なる北里博士は先生独乙にある頃より、デフテリア菌の事を研究し居りしが、未だ實際其患者に當りて、博士が発見したる新治療を施す事あらざりしに、

一、軍事手形は我清國に於ける新領地に流通せしむる為めに発行するものにて、日本銀行の建議に係り内閣にて、既に會議により可決せらる。其仕方は、占領地に於ける通貨として我銀貨を用ゆる時は、不尠少ながらざるのみならず、硬貨の流出する事夥だしく斯くては我經濟に損害を及ぼすの掛念なきにあらず。故に此を發行すとなり。

二、日米条約改正 先きに我國は英國と談判して、彼我間に新通商条約を締結せしが、又、米國とも交渉ありて、去る十一月二十二日首府ワシントンにて兩國全權委員の調印済となりたれば、批准を経て、正式の改正を見るも近きにあらんとのこと、同國にて、從來日本に望み置く人々多きは、其文明誘導者たるが為なるか、兎に角今回の戦争以来は、我に同情を表するもの殊に増加し、此改正の如きも、其英國に先んぜられたるを、政府の手落として之を攻撃するものあり。

三、都新聞 先月三十日の紙上に社説として論ずらく。我國が、支那の要地占領せんと求るは、東洋の霸權を握らんとするなり。即ち支那を始め其他の諸東洋國を興して、將に此を蹂躪せんとする歐洲諸國に抵抗

此頃に至り、伝染病研究所の如きも、充分用意とゝのひたるに付愈々同法を実行せしに果して好結果を得たり。此法は、猶種痘の如く、山羊、綿羊等を免疫の体ならしめ置き、其血液を健児の体に種えて免疫せしむるか、又は新らしき患者に施こして、効を修むるなり。独乙に於ける実檢によれば、初日に施こしたる患者は皆癒えたりといへり。（時事新報社説）

今夜八時半地震あり、稍々強にして、棚の物など落ちしもありしが、此時余は、第一番にラムプを持ちて急に立ちしが為め、其火を消したり。然るに家兄は直ちに戸をはづし、母を擁したり。而して、ラムプは台のなきものにて、畳の上に板一枚ひき其上にあり、なれば、地震の為めに倒るゝ事は、中々ならず。故に此を持ちて居る必要なく、況んや、此を持ちて、急に立ちし為め、火を消すが如きは甚だあわてたる事なりし。

十二月一日 午前入浴。

二日 昼間及夜半まで看護。

近事片々 此頃の新聞紙より抜萃して一文を草す名けて近事片々といふ。

せんとするなり。日本人士の責任大なるかなと、真に余が論と符合せるものといふ可し。

四、ジャパン・ガゼット 同日の紙上に曰く、日本は諸欧州国が、未だ看破する事能はざりし所の支那政府の腐敗を看破したり。斯くの如きの探索は、現に香港、シンガポール、印度に於ても行はれつつあるに相違なく、行く／＼は欧米にまでも行はる事ならんと、暗に早く勢力の膨張せざる中、日本に干渉せよといふものの如く論じたり。輿垂策に抵抗する論者は思ふに之か。

三日 午前三田に行き、兄の理財科講義を買ひ、余も和文英訳教授書を求め、又帽子及びシャツ（共に余の）を求めて帰りしに、家にてはシャツのヨゴレあるを見て（余は承知にて求めたり。）之は換へ来れといはれたり、買物も中々六ヶ敷ものと思ひたり。

四日 午前三田行、昨日のシャツを他のもの（シャツ）と換へ来る。帰途高橋君を訪ひしも留守なりし。昨夕高橋君来訪せしが、直ちに去れり。夜一時半まで看護。

五日 午前入浴。「旅順は占領後略々整理の緒に付意願なる事たる可らず。」

キリサンセマムを軽蔑す可らず。彼女は長く町家にありたるが、我に其事情をよく知れり。彼女に雑談の際は、成る可くは、此事及版の事などを材料とす可し。学問政治等の事は聞かれたれば、丁寧に説明す可し。

フラワーには、成可く御苦勞様、気の毒だが等々語を多く用ひよ。是れ甚だ効能あり。（六日夜認）人が得意然として、話するは容易に攻撃す可らず、出来得る限りフーンフーンといひ居れ。（六日夜認）

元良先生曰く、立憲国の人民は、己達よく社会の制裁を動かすの熱あるに非ずんば、決して社会の制裁に背く可らず。若し之を動かさんと務めて力及ばずむば恨まず、憤らず、坦々として之が制裁に甘んず可し。尤も或る特殊の場合には此限らず。（雨竹君見聞録）

他人に対し、怒気を生じたる時は、其人を大に軽んずるか大に重んず可し。蓋し、軽んずるは、賤むの意、重ずるは、貴ぶの意。（雨竹氏同）

七日 午前用事あり。西の窪八幡宮社務所に行く。夜六本木高橋繪君を訪ふ。座に高橋徹君、曾山君、中村君、及弘中君あり。笑談一時間高橋両君と邸門前まで

きしといふ。「行政官は武官にして、金州と旅順とに置くといふ。」砲台はそのまま守備の用をなすよし、尤も多少の修繕を要するならん。（時事新報）

六日 午後岡田夫人母上の見舞に來しが、其時初めて余が接待し、家兄は用事ありし為後より來しに、此時余は、余の応対法遙かに家兄の下にある事を知り、益々勉強して成る可く經驗を得るの機に会ふ事の肝要なるを見たり。比頃は、一日置きに夜一時まで看護の事。

家兄より用事を命ぜられたる時は、其事を、最も嚴格に勤勉し、他には少々必要の事あるも其の必要の、目前に迫るまでは口にす可らず。又「此事はせずともよきや」といふ語は成るべく発せざる様にす可し。決して功をなして御賞めに預らんと思ふ勿れ。家兄が仕掛りの用事はたとへ、手伝ふるに気付き居るとも一般の場合に於ては、控へ居る可し。家兄もし知らざる事多くは理學上の事なり）ありて、余に尋ねたらば、其時は謙讓の辭を以て、平易に唯必要の最大なるもののみを答ふ可し。関係の様子は、問はるゝまで、いふ可らず。此も半知りの事は、知らずといふ可し。決して得

同行す。此の日の話により、弘中君が深光寺に転宿したる事を知れり。帰途一天晴れて月清澄なり、思はず「霜滿軍營秋氣清」を一吟す。

八日 昨夜半より頭痛、腹下り、心地悪し。昼前入浴す。其後益々胸悪し、会々其より明朝八時までの許可得床に就く。

九日 朝稍々心地よし、且つ昨夜も眠りたる事なれば、少々のだいぎを耐へて起床す。終日かゆ、パン食ふ。

今朝新聞紙を閲せしに、「可児大尉之自殺」と題する項中同大尉は二龍山砲撃の命を受けしが、渡清以來、風土の変りたる為めに胃腸病に罹り、殊に昨夜二十一日の如きは、一夜中に十余回の下痢を催はし、当日の攻撃には、七八合目までは衆を督して雨下する弾丸の下に、苦戦せしが遂に、腹痛に堪へず去て病院に入りし事。その後二十九日に至り同砲台の上に自殺したる旨を、記載したり。余は昨今胃腸悪しき様子なるが（先日悪しかりし）是れ恐らくは、運動の不足に因るも然ならんか。而して運動不足の原因といふものは、即ち母上病氣の看護是なり。此事業は、我家より

考ふれば、我日本の日清戦争に於ける程重大なり。此を思へば余は、少しの胃腸を損する位は決して、不満とするに足らざるなり。況んや、若し余が食欲に於て、大いに注意するに於ては、決して此が病を起すの患なきに於ておや。(たとえ他の病気を発する事あるも)

本日はこれいかなる日ぞや、苟も我大日本帝国の首府東京市民が、今日をはれとの日清戦争祝捷大会の開日なり。即ち同会は、我大東京市の有力者が企てたるいとも尊とき大会にして、開場は上野に於てし、同所にては前日来より玄武門、軍艦等をしつらへて此大会を、盛にするの準備をなせりといへり。余は例の件あれば親しく会場に列する能はざれども、唯々一片愛國の赤心は、勃々禁する能はず。打ち揚げられし花火の音はいとも愉快にきこえし。

我清風の皇軍向ふ所敵なく、今や奉天、天津の占領も近きにあらんとす。而して、此戦のをこりし本は、一には朝鮮国独立のためであり。然るに、其朝鮮国を見れば、毫も進歩の有様なきのみか、却て退歩の微あり。是れ最も怪むべきの咄々怪事に非ずや。されども尚ほ深く考ふれば、甚だ解し易すぎの事たり。即ち太院君

国に於て、全権委員の調印済となれり。引つづきパン食す。

母上病床の辺にあり。端坐中一思想胸に湧出す、曰く、余は事をなして一世の模範たることを大目的とす。而して、今全力を挙げて母上の看護をなさざる可からざるの機に会す。是れ余が子の親に対する行為の模範を作る可きの秋なりと。乃ち意気昂然として、家事の執掌に勤むる事實に優さる。

友人某氏曰く、君(貞城)は困難なる境遇に際会して意気の憂鬱なる事なきは、感心なりと、又同氏は余の、余は人のいふ事に雷動し易しと、いへるに對へて真に、然りとはいへり。余は此頃其事に就ては自ら大に自信力がなく、又人の言を妄信し易き事を知りたるが、其は処世余録の功による事多し、片言獄を断ずる勿れ七たび尋ねて人を疑へ(信ぜよ)とは、余を戒むる諺なり。

今日の時事新報は「眼中清国なし」と題して戦勝後我が割領す可き土地は清国の後嗣に備ふべき限りにあらず。何となれば、彼国は已でに滅亡の運命にあればなり。宜しく向後大清帝国を各国が割分するに際して

は先きに朝に立ちて新政を布き、王妃は権力を失ひしと雖ども、同君もまた守旧の一老翁にして、専恣妃に譲らず陽はに我勸告を入るゝと称すと雖ども、密々事大の精神を脱せず、又陰かに東学党を煽動して我進軍を妨げ且つ、少しも我心を体せず即ち暴を以て暴に易えたるものにして、流石に井上公使も、其処置に苦しみたる可し。頃々「公使朝鮮政府の我勸告を突にせざるを憤りて軍隊を引上ぐるの旨を彼に通知したり」彼政府の大臣は之を恐れ、数ヶ条の規約を謝罪書として公使に草し出したたり、「王は之を裁可し結果公使に謁見仰付けられたり」杯の電報文が新紙上に初号活字を以て頭はる。時事新報は暗に此を諷するが為めか、数日前の紙上に左の短文を記載したり。(此文は其意を記す即ち句に關せず)

If you pick up a distressed dog and make it happy, he would not bite you.
This is a great difference between the dog and the man.

十二日 午前中一時間半の閑を得て、長与君を訪ふ。談話の後帰宅す。入浴す。日伊間新条約は本月一日彼

彼の中原に腕を振ふに便なるを、撰む可しと論ぜり。

十五日 土 曇 午前中少しく雪降る。此を当冬の初雪とす。十二時まで看病。

十六日 日 晴 本日の時事新報は、石黒衛生長官の「旅の日記」なるものを載せり。其中に左の如き事ありたり。

清国盛京省の新領地中安東県といへる一村あり。富有なる市街にして、家は概ね煉瓦石を以て之を疊む。戸数は千七百あり。聞く所によれば山東省の人は多く此地に來りて、商買をなす。其業は大豆を絞りて油を取る(此には牛を用ふる機械ありて随分規模大なり)と鴨綠江沿岸の森林より伐採する材木を買ふにあり。而して此二者は真に当地方の富源なり。又麻を産する事多く地味は概して瘠瘦なりといふ。

余叔母に通常吾々の用ゆる木棉綿の事を問ふに、此れは青梅綿といふ(青梅地方の産か)一包の中に三枚あり。通常の綿入には一と包みにて足れり。其価は七、八錢より十錢位までなりといふ。

十七日 日 晴、寒甚 此頃余は毎月の小使金を金沓円五拾錢と定められたれば、其予算表を作る事左の

如し。但し小使中より出ざるものは、一切の衣服(シャツを除く)、常食料、油炭等の費用其他なり。

月々の分

一、金壹円五拾銭の内

内訳 十五銭 文房具学校費部

四銭 筆類

三銭 紙類

五銭 郵便費

十二銭 雜誌費

十一銭 書物費積立

二、金四拾銭 日用諸費部

内訳 十銭 理髪

三銭 はみがき

二銭 雑費

二十五銭 大物積立

三、金五拾銭 保養費部

内訳 三十銭 日曜小遣

十銭 雑費

十銭 旅行費積立

四、金拾銭 臨時費として貯蓄す。
年中に於ての通費

一、金壹円三十二銭 文房具学校費積立金

内訳 壹円 書物費

三十二銭 帳面其他

二、金叁円 日用費

内訳 四十五銭 冬帽子

四十銭 夏帽子

三十五銭 高げた

三十五銭 せつた

二十銭 傘

十八銭 ようじ

三十九銭 たび

二十銭 ハンケチ

十銭 雑費及たし前

三十八銭 シヤツ

三、金壹円廿銭 保養費

内訳 壹円 旅行費

二十銭 雑費

。但し右の中にて、予算外の残金ある時は、これを

其部中の臨時費として貯蓄す可し。

十八日 晴、稍暖 午前中人力車にて番町岩佐氏方に行く。蓋し、家兄より薬価及謝儀を送らん事を命ぜられたるに由れり。此を、余が人より五拾円以上の金を托せられたるの始めとす。其より、更らに赤坂仲の町を経て、青山神葬地に車を走らせ、同処にて父君の墓に謁し茶屋年末の礼をすまして帰る。是日車上より市中を見、最も目立ちて忙し相なるは、糺町にて見し、鐘詰製造の工場、麻布三連隊の面会人多き事を、最とす。

十九日 水 晴 午前入浴。

井上公使の厳酷なる談判により、朝鮮政府に大改革を行ふ事となり去る十七日開化党諸氏のみを以て、新内閣を組織したり。即ち金両氏、魚、趙、等諸氏の外此程復爵されたる朴、徐の二氏を入れたり。而して、大院君は、退く事となりたるなり。東学党は尚ほ諸方に蜂起して止まず。王妃は、相不変陰謀百出す。

此頃、関后井上公使の厳談が一時の驚喝なるや、又何れの程度に伯の心があるやを知らんと欲し、日々公使館に出入する某氏に托して、窺かに探らしむ。公使烟

眼之を看破す。曰く、今日の事三途あるのみ、其一策は、李鴻章を聘して顧問とするなり。二策は東学党を煽動して京城に入らしむるなりと、某苦笑して去る。(時事新報) 好逸話といふ可し。

二十日 木 晴 早朝高橋鎗四郎、曾山達夫の両君来り訪ふ。曰く、高橋徹夫君は、愈々明後二十二日出京、翌日横浜発便船にて、渡米の途に上る。就ては今日午後三時より自寓にて、親交の朋友相会し、彼の為に談話をなさんとす。就ては貴君も若し都合よくば、御出席ありたし。尤も無理に強ふるにあらざれば、左様御承知あれよと。余は多分末席に列するの榮を得る能はざらんとこの返事をなしたり。然るに家兄も又其用務あらん事を曰ひ且つ、其代りとして、午前中に三田なる高橋君の下宿を訪ふ事を許したれば、余は大に喜び早速之に赴きしに生憎にも同君は留守なりし。因りて一書を遺して帰る、此書には、私は用事ありて何分にも君に会するを得ず遺憾なれども、已むを得ざる旨を認め且つ、君が益々自愛して勤勉愈る事なからんを祈りたり。午後六時に至り医師の来診も済し、其後は大した用事も、なかりしゆえ、請ふて六本木高橋君の寓

に行く。席に主賓高橋徹夫君を始め、当日の来会者、長与、高橋K、曾山、弘中、加藤成一、国弘文吾の諸氏あり。蜜柑、芋を食ひつゝ互に談笑せり。一方には、机上二所に書物数十巻を積み、其上に更に書を渡したし、此処に、日章旗と連隊旗とを交叉し、其下に額して「分袖門」と題す。門の両柱に紙をたれ一詩を書す。曰く、

抱志多年偶得期 忽挺身欲向天涯
天寒願老親何在 勲業何悲有別離

評曰、真情溢所自有力(貞城)

蓋し是高橋T君の述懐なり。余はこれより此詩を誦する幾十回益々其真情の敬す可きを悟る。八時頃に至り諸君帰り残るもの五名。余今日の模様を聞くに招きたる人は、或る曰むを得ざる人、一人を除けば、みな来り会す。総て十八名和氣霽々の内慮なき親友相集りみな赤誠の忠心を以て高橋君の健康と其事業の成功とを祈り、万歳声裡に、或は演説し、或は吟詩し、余が行きたるときはすでに其多くが帰退したる後なりしといへり。九時帰宅。又今日の話により曾山君が、深光寺に移りたる事を知りたり。就床後高橋君に関する感慨

交々起り、遂に十一時まで眠らず。余は始め、高橋君の三田の寓を訪ひたる時(不在なりし)致し方なし。唯々此を訪ひたる丈けが関の山と考へ居たりしが、用を済ませたる後に至り、意気勃々禁ずる能はず(もう会は終りたるならん。もはや高橋君は、会を退きたるならんと思ひしにも拘らず)遂に行く事を請ひしなり(甚だ申出しにくかりしが)。然るに、尚同君の在るありて、大いに満足すると同時に又当日会に列せざりし事が残念になり来りたり。

高橋徹夫君は、農科大学に入りて、牧畜を研究せんと目的にて上京せしに、我大学は実際に適したるものにあらず。却て、多岐の牧畜法を教へて未だ一事を専攻するに適せざる事を知り、ここに、牧畜の最も盛んなる米国に渡りて、大に望の通りに、斯学を研究せんと思ひ立ちしに、幸にも君は、耶穌教宇宙神教派の信者にして、其宣教師米人、ドクトル・ペリン氏と識ありしかば、直ちに同博士につきて、此事につき周旋せん事を請ひしに、同氏も始めは、青年の空論として、取り合はざりしが、請ふ事頻りなりしかば、遂に其誠心を看破し、始めて尽力を諾したるより君が企図は、

着々歩を進め、今は其一段落たるの時とはなりしなり。然りと雖も、横浜港頭杖を立てて遙かに東に向へば、水は洋々たり、空は蒼々たり。其業の前途も尚ほ遠しといふ可し。君性正直、熱心、精密、淡泊、其才は甚だ敏なるにあらざれども、実地に適し、学は卓なるに非ざれども、実着なり。蓋し、牧畜家たるの資ありといふ可し。余は此一親友……敬愛す可き年長の親友の一人が、健康逾はる事なく益々勉勵して、将来大実業家たらん事を祈りて止まざるものなり。聞く君は、合衆国ワシントン州、タコマ府の某牧場に弟子入りし、年期大凡六年の積りなりと。

二十一日 金 晴 今日、家兄他用ありし為め、

終日看病す。午後五時半、晩飯を終へて後、甚だいひにくかりしが、外出を請ひたり。即ち、昨夜の高橋君送別会に列せざりし残念といふ精神消えず、何分氣すまざれば、今一たび、同君に会して、此念を払はんと思ひしなり。然るに、家人は事情を斟酌して、諾したりしにより直ちに三田の同君寓を訪ひしに、不在なり。九時半にあらざれば帰らずと。余は、昨夜高橋K君の宅にて今夕西君等が同君宅に行くに聞きし故、或

は他所にて会するなるかと思ひ、それより芝山内正則学校寄宿舎(西君此に宿す)を訪ひて、某塾生に西君の在否を問ふ。生曰く、彼は只今高橋T君の家に行けりと。余は、彼等相携へて外出したるならんと思ひ、まず六本木深光寺(曾山、高K、弘中君の寓なり)を訪ひしに、曾山、弘中両君あり。其他人なし、因て余は、高橋T君に会ひたき旨を談し、長与君宅にあらざる可きかといひしに、彼等曰く否長与君も又、高T君を今夕五時半より訪ふ筈なれば、在らざるならん。此の高K君の在らざるも、彼を訪はんが為めなりと。余因りて、暫く談話の後帰宅す。此時高橋君に失敬するは、実に止むを得ざるに出ずる事なれば、唯々余が友情を酌みて咎むる事なからん事を彼に伝言する事、彼の在米宿所、彼が出発の期(或ひはいふ便船は、二十四日に延びたりと)がもし分りたらば、知らせられる事等を両君に頼みたり。此により、余は今夜八時より余が看護当番の任をつくすを得たり。余は、恋々の友情禁ずる能はず、其会ひたきは山々なれども、今夕の足労は、却て、余をして満足、得意ならしむるの機をなしたり。故にもはや、二度会する能はざるも、残念、不

平なし。(以上二十日よりの分、今夜十時十分認む)
 二十二日 土 晴 高T君に手紙を送り、昨夜の事、もはや面会出来ざらんれば、余が失敬を咎めず、唯友情をくめといひやる。

二十三日 日 晴 午後二時半頃、高橋徹夫、曾山達夫、の二氏来訪す。今日は医も来らざる日なれば、余も此時暫時の閑を得て両氏に接話す。須臾にして高橋君も来る。蓋し、前来の二氏と約あるなり。始めより二十分程にして三氏相携へ去る。此時話は多く米國遊学の日本書生に係る。高T君曰く、「余は先日大滝氏(正則学校英語教員)を訪ひ、渡米に關する忠告を聞きしに、氏曰く『余が渡米せしは、十九年なりしが、此頃には日本貧書生の米國に行くもの甚だ多かりし。而して此輩は彼地に行けば、日々一、二弗の給金は、些少の労働によりて得らる可し。此を以て学問の研究費となす事を得んと思ひ居りしが故に、みな渡航後大いに後悔するなり。余は彼の地にて中学校に入りしが、其学資は労働より得しなり。(余聞く、同氏は初め学資を用ひずと壮語して渡米し、或は田畑を耕やす雇夫となり、或は羊を養ひて此と共に藁の上に眠り、或は

二日間水飲み生をつなぎてはたつき、其給金にて僅かに学校に通ひしが、其後支ふる能はずして遂に学資を郷里に乞ふに至れりと)米國にては労働して通学するもの甚だ多く、此人々は却て尊敬せらるゝ風あり」と。君又余が「君は大滝氏位の辛酸は辭せざる覚悟なるは勿論なるべし」との言に對し「然り、勿論牧場へ丁稚位の雇人として行く事なれば、羊の子とねる事も、豚の子とねる事もあらん」と。余思へらく、中産以下の家を生れて、洋行せんとするものこの決心ありて可なりと。同君は明日午後出京。明後日横浜より発船。目的地タコマ府へ直航する事となりたり。尤も同市に永住する積りにはあらず。暫時滞在して彼國の様子分りたる上にてオハヨーに向ふ心算なりといひ居たり。(余思ふタコマ近傍にても、相当の牧場ありとの事なれども、君は米國の文筆を味はんとの考を有する事ならんかと)君歸るに臨み、余に母を大切にせよと言ひのこしたり。

此頃発行の少年園社説「虚飾」と題する論中の一節に曰く「年若き学生が、巻煙草をふかして道を高慢氣に行くは、豈才子、紳士と称せらるゝ人を氣取るに非

ずや、又夫の襯衣に、派手を好み、靴足袋に赤き美しきを競ひ、帽子に新形を逐ふもの亦其一流なり。螢雪に違あらざる身を以て、妄りに牛肉屋、天麩羅屋に入り、苦味を忍びて酒を味ひ、太き「ステッキ」を引きずりて、朴齒の足駄高くふみならし、犬の夢を驚ろかし、按摩の笛につきあたり、大声叱咤衣至辭兮を吠えて巡查にとがめらるゝを目的とするは、豈武人を未來に期し、英雄を壯年の後に夢みる虚飾にあらずや」と、余が先日羽織に絹二子の細縞を撰み新形の帽子を買ひたるは、一方に於て衣服もしくは帽子は、常平生に着用すれば、多少よごれるものなれば、そのまゝにて目上の人又は朋友に面会する様は礼儀を重んずるものゝなす可き事にあらずとの考へなりしが他の一方には、いかにも江戸ツ子なり、大商人の卵なりとの虚譽を博せんと分子ありき。今余は、後者を脱せんと決心す。

近日の大本営揭示に、我第三師團長よりの報告なりとて蓋平にありし宋慶は、十八日以来遼陽地方に退却せんとするものゝ如く、我陣前地ガイカトン・リウコウトン付近を運動するを以て、其運動を妨げんため十

八日未明及十九日より、大嶋大迫各隊を出せしに、十九日午後に至り、兩隊共敵と衝突し、激戦五時間の後コウガイを占領せり。敵は西方及營口に向て、退却すといへり。我軍は、先頭海城、復州を占領せり。此はつひつけ落したり。山県大將先頭御命により、帰京す。病氣のためなり。

第八議會は昨日召集せられ明日開院式を行はせらる。
 二十四日 月 晴 開院式の詔勅には、外征軍の連捷、中立国との親交、条約改正の進行速かなる可、等の事あり。夜は、早くよく眠る。

二十五日 火 晴 午後入浴。議會は、明日より休会す。

二十六日 水 晴 午後二時頃、高橋鑄君来訪す。曰く「高橋T君は、去る二十四日早朝、横浜発タコマ号にて、タコマに直航の道に上れり。船室は下等なれども、欧州人の下等なり。又好都合にも、乗客少なく、一室を一人にて占め得る事となれり。彼は出発に際し、君が(貞城)あまり健康の体にもあらざる如くなれば、よく自愛す可しといひ残たり」と。其後稍々あ

りて長井勇君来る。一片の葉書を余に示し、「正則学校よりかく言ひ来れり」と、余之を見るに「御保証の上田貞二郎君久々、御出校なし来学期よりは、出席さるゝにや。至急返事を乞ふ」旨をしるせり。因て余は「来学期早く登校は、出来ざれども、いづれ致すには相違なき」由を語り、宜敷願へり。蓋し長井勇君は、余の正則校の保証人、長井誠氏の令息なり。

二十七日 木 晴 風強し
 二十八日 金 晴 午前入浴。
 二十九日 土 晴 現在世界各国が有する水雷艇の数は左の如し(少年園一四七号)

国名	一等	二等	三等	總計
日本	一	四〇	—	四一
清国	二	二六	一三	四一
英国	八五	三三	一八	一三六
露国	五三	六	—	五九
仏国	四五	一四八	三八	二三一
伊太利	一〇〇	三六	四	一四〇
独逸	七七	六四	—	一四一
澳地利	—	—	—	—
匈牙利	二四	五	二六	五五

集会の出席に一回、都合十四回なり。次に友人より訪はれたるは、二回(K・T及T・S両君T・T三君)なり。

養生 余は本月九日以来、日々の食事にペンを用ひ、又朝はかゆを食する事あり。且つ夕刻には、重曹少量を服し、時に胸わろき時には清心丹を用ゆ、こは余は元来胃腸の健康なる質にあらず。然るに先頃来、母上看病の為め運動充分ならず、為めに屢々心地不良、下痢、浹腹等の小病にかゝり気分爽快ならず。剩さへ医を煩はしたる事もありき。さるにても、養生を加へなば、斯程の事はなからんと、思ひたればなり。又余は間食を節せん事を期せり。(二十八日よりの分此日の夜認む。)

三十日 日 晴 早朝無名の一葉書を受信す。文意は発信者の帰省を報ぜるに横須賀より来りたれば、福嶋君と知らる。

三十一日 月 晴 午前理髪。正午過入浴。夜福嶋君へ発す可きはがきを認む。

当年は、一月より、母上病氣にて今尚は癒えず、為めに余は常に運動不足等よりして、消化器に病をまね

西班牙	和蘭	瑞典	那威	丁抹	葡萄牙	土耳其	希臘	合衆国	伯西	智利
二	六	—	—	六	五	九	六	二	三	八
二七	一四	一六	五	四	三	一	—	—	—	—
—	三	二	二	二	一	七	一	—	—	—
四〇	二	一八	二	九	三	一	—	—	—	—

日本の「こたか」号、長五メートル二九、巾五メートル七九一、排水量二〇三屯なり。

一連は、陸埋の一哩と七分の一に当る。

処世の統計 処世余録第二冊中十一月廿一日より、十二月廿一日まで三十日間の諸項につき、区分をなせば、左の如き統計を得、社会十件、聞き書八件、自身のこと九件、友人四件、逸話三件、学問三件なり。又余の外出は、友人を訪ひに五回(T・T、K・T、M・N、三君) 散歩及自分用に五回、家事向の用に三回、

き、又ある時は飲食物の調理等に至るまでの経験をも得しなりき。社会に至りては、日清戦争あり実に愉快なる年なり。又我家は当冬は、例年に付歳暮年始の礼一切欠く事とせり。(三十日よりの分此日の夜認む。)

* 処世余録第一冊は滅失している。この件については巻頭の凡例参照。(編者註)

明治二十八年 (二八九五年)

処世余録 第二冊 (続)

一月一日 火 晴 我家は、母上病氣に付新年の賀
礼を一切欠く事となし、玄關も閉ざして欠礼の張紙を
なしたり。然るに余が友人中には、来賀して名札を置
き行きし人々(西磯次、松山信二郎、曾山達夫、高橋
鎗四郎、弘中儀一、国弘文吉の諸君)はがきにて賀正
をいひ送られし人々(滝村斐男、西磯次、山崎小麓の
諸君)ありたり、因て余は此等の人々に向て発する可
きはがきを夜に認めたり。是日母上容体甚だ宜しから
ず。終日荒れ模様なりし、此連戦連捷の最中に迎へた
る新年元旦にも面白く暮す能はず、剩さへ叫声、あば

れ等のために終日を費やすとは、さて／＼狂病にかか
りし者のあはれなるよ。昨年元旦には、此程にあら
ざりしが、矢張り口やかましかりし。故にこれを通常
に考ふれば実にあはれに感ず可き筈なるに、實際なれ
て見ればさ程にもあらざるなり。余は一昨年四月頃、
母上の病が発せし当時兄上は其入院等のために外出し
居り独り家居したる時などは随分断腸の思ひをなした
る事もありし、故に是れ一は余が世事に経験を積み
て「天は人の上に人を作らず又人の下に人を作らず」の真
理を了解し随て「うき事の尚ほ其上につもれかし限り
ある身の力ためさん」の決心をもためし得るに至りし
に因るか。

二日 水 晴、半曇 今朝西浦君より賀正のはがき
を受く。直ちに同君に向けてはがき出す。(以上一日よ

りの分二日夜認む。)

余は此頃数時間を費やし、数度の検閲を経て一つの
規則を作れり果して芙蘭克林氏の十二則の如き功を現
はすやいなや。(一日一日此規則にふれたる事なし。)

事することに最なる可し。

十、細心 仕事は丁寧なる可し。万事ぬげめなくす
可し。

十一、守約 いかなる小事といへども、守約す可し。
十二、決心・固執 よく考へて決心し、其上は容易
に變ず可らず。 以上

此規則を守りしやいなやは、毎日の日記に記す可き
ものとす。 一月二日夜誌す。

今夜昨二十七年の事を回顧して一文を草す、名けて
回顧録とす。

回顧録

- 五、負け惜み、瘦せ我慢は小人の事となり。
- 六、談話及書信はすべて明了簡潔を貴ぶこと、恭略
其宜しきを得ること、人にも己れにも害あること
は勿論、益なきことは可成いはざるを宜しとす。
- 己れの長所を喋々すべからず。
- 七、動作を静かにすること先輩に対して恭しきこ
と。

- 八、衣服、居室、身体を清潔にすること、虚飾に陥
らざる様にすること、奇麗にすること。
- 九、勉強すべきは勿論のことながら義務として、従

二十七年は余に取りては、普通の意味にていへば凶
年なりし。即ち母上は一月一日より十二月卅一日まで
床にあり給ひたり。従て自由外出、遊歩等も能はざり
し、殊に一、二月交及十一月十二月の如きは、学校を
全欠するのを曰むを得ざるに至りたり。然れども更に
一考するに外にありては、日清戦争破裂(七月)して我
國は益々其名譽を高め、内にありては伯父家におありし
為め(一月より九月まで)、政治、哲学談の對手を得

て、外出せざるも大なる不足、退屈を感ぜず。剩さへ不幸の爲めに却て世事に経験を、且つ時としては、鵜沢文君(七、八月)西浦君(五月)長与君(たま〜)高橋鎗君(十、十一、十二)高橋徹君(九、十、十一、十二)弘中君(十、十一、十二)岡田君(八、九)等の益友諸君と往来することを得たりしなり。故に一方よりいへば大吉の年なりき。而して此中最も余に利益を与へしは、遊歩、外出其万事の不便なりき。余之によりて大に利巧になりたりと思ふ。大事柄左の如し。

一月、新年欠礼 一、二月、台所まわりをなす 四月、ボートを習ひ始む 七月、日清戦争破裂、北里氏大発見 九月、平壤陥、海洋嶋海戦日軍大勝(八月岡田君と往来す) 九月、腹胃を病む 十月、学校屢々休む。高橋区君と結交、三十一日伯父松尾氏渡韓上途 十一月、母上容体大に悪し、不図感じて年来の悪癖を一掃す。二十二日、旅順口陥、(十月臨時議會) 十二月二十四日、高橋徹夫君渡米。

三日 岡田友吾君より、新年はがき来る。はがき同君へ出す。中原兵太君来賀す。「是日「規則」三条に違

背す。)

四日 中原兵太君へ新年はがき出す。午前入浴す。(三日よりの分四日夜認む) (品行通常)

五日 土 晴 福島行俊君より新年状来る。(品行通常)

六日 日 晴 是日「規則」四に背く。余が命ぜらるることはみな運動せざる用事のみなりと思ひ不平なりしが後遂に思ひ直す。

七日 月 晴 午前入浴。是日「規則」四に背く。家兄の命令に対し、不服なりしが明月照る夜景に対し高吟して之を散す。

八日 火 晴 午前長与、曾山二君来訪せしが直ちに去れり。午後一時より山本喜三郎君を訪ふ。是れ客臆君が病気に罹りし事を聞きたるにより、見舞ひたるなり。然るに、君の容態、顔赤くなり居りしが別に苦しさうにも見えず。又自身にもさる事少しもなしといひ居れり。而して唯熱あるなりといふ。病名を「マラリア」熱といふ。一時間許り枕頭にて話をなし、それより六本木の深光寺に行きしに弘中君のみ在り。此も暫時にして去り、又宮村町長与君を訪ふ。不在なり、

因りて帰る。途に西磯次君に逢ふ。是日「規則」に背きたる事なし。

九日 水 曇 是日規則三に悖る。同時に十二の二に悖る。

十日 木 曇 午後一寸用事を兼ね、山本喜君病床を訪ふ。其後暫くして、長与又郎君来り訪ひしが、直ちに去れり。訪問謝絶。是日背則せず。

十一日 金 雨 午前入浴。是日背則せず。

十二日 土 曇 午後晴。是日背則せず。

十三日 晴 是日規則三(同時に十二の二)に悖る。

十四日 晴 是日反則せず、午後入浴。

十五日 晴 是日反則なし。

十六日 晴 是日反則なし。

十七日 晴 午後家事向の用事にて與石氏に行き、又松井氏に出産の慶賀の爲め行く。蓋し、同氏家内去る三日朝に於て、女子分娩の通知を得たるによれり。是日反則なし。

十八日 曇 昨夜雪降る。此日午後又降る。午後入浴。是日反則なし。夜十一時大地震。

十九日 晴 午後六時四十分より、閑を得て山本喜

三郎君病床を見舞ふ。それより高橋鎗四郎君を訪ひしに、深光寺の諸君はみな不在なりしを以て、長与又郎君を訪ふ。之亦不在なり。因て飯倉にて買物をなして、帰宅。更に時間ありしを幸、鵜沢玄次君を訪ふ。同君在宅。乃ち、火鉢を擁して相俱に学校の話、時事談等に時を移し、午後九時半に至りて帰宅す。是日規則一に反す。併し十一には特に厳格なりしと考ふ。
二十日 晴 是日家兄より規則十に關する事柄につき注意を受く。
二十一日 曇 是日規則三、同時に十二に背く。午後入浴。

自十二月十二日 至一月廿一日 小使勘定表 一月二十一日夜製

入之部 (月極)	円十錢厘 一五〇〇 (一五〇〇)	差引残高	一〇七七
出之部 (文房具)	四二三 三四三	積立金	九八二
和英	一六〇	内 文房部	六二
		日用部	三二〇
		保養部	五〇〇
		貯金	一〇〇

廿一日	切手	二〇	差引大残	九五
十九日	第九本	四〇	特別入金	六五五
十七日	都新帳面	一〇	訳(先月越高)	一五五
		九三	内(年末特別)	五〇〇
		二〇	二項合計	七五〇
		八〇	右は臨時残金として	
		五〇	隨時書物を購入する	
		三〇	事を得	
		一〇七七	総入(除特別費)	二一五五
				一七三二

備考 一、本期勘定は予算と甚だ異なれども是れ家事一件にて学校に行かざると外出する事稀なるとに由るものなれば之は、適当なる実例とする事能はざる也。

- 二、保養の月入用は前項と同理由により当期はなし。従つて積立金多し。
- 三、文房積立の少なきは、其一部を隨時書物費のたし前を作らぬがために差引大残一項を設けしに由れり。

◎の公報二十四日午前〇時三十分接手)

「二十三日午後宇品に帰航せる薩摩丸の報に曰く、同船は十九日午後一時若干の運送船と共に大連湾を発し、二十日未明榮城湾に到着せり。八重山等の諸艦は此に先で、該所に到り陸戦隊を編成して上陸せしめたり。此時敵は急造肩櫓内に備ふる野戦砲四門を以て多少の防戦を試みしに、我はテイ(艇か)砲を以て之と応戦せし間、八重山等の諸艦より砲撃して敵を撃退したり。故に我陸戦隊は一兵をも損せずして上陸するを得該野砲四門は、奪て八重山艦に搭載せり。

第一次出発の運送船は二十日朝続々着港し、直ちに上陸を始め、二十一日午前三時四十分薩摩丸の該地を出発するまでには、既に其九分通り揚陸を終へ、二十日の夜には、若干隊榮城果に進発したり。

第二次の運送船も、二十一日午前に着港し既に半ば揚陸を終れり。天候は至て平穩にして上陸の諸動作能く整頓し、頗る好結果なりし。山東角の燈台には、英人二名独乙一人名支那婦人一名あり。是には、相当の手当を給し従前通り点燈をなす事を命じたり。」
二十五日 金 晴 午後より暇を得て鵜沢玄次君を

二十二日 曇 是日規則に反し事なし。

此朝新聞紙は報じて曰く。

日本軍は、些少の抵抗を受けたる迄にて榮城湾に上陸を終りたり。(廿一日上海発電) 榮城湾は山東省の東端威海衛をさる事十三四里の所なり。

又、曰く

今廿日多数の日本軍隊榮城湾に上陸し、多数の運送船は港口に碇繋せり。同湾の諸堡壘は、日本軍艦よりの砲撃にて破壊され戦鬪力を失へり。(廿日芝罘発電、廿一日上海統電)

二十三日 晴 是日反則なし。晩刻十分の閑を得

て、鵜沢玄次君に一事を通知し、山本喜三郎君宅に行て其病状如何を家人に尋ね(同君病氣マラリアは伝染病なる事を聞きたれば、面会は時々にする事とせり)又邸内を散歩して帰る。蓋し、晩刻用事終りて後運動するは甚だ身体にも適し家用にも差支少なきを以て、極少時にて宜しければ時々之をなしたしと家兄に申入れたる事ありしに由れり。

二十四日 晴 午前入浴。是日規則十の二に適せず。今夕の新聞紙号外に曰く(広島大本營、児玉次官宛

訪ふ。席に笠井小次郎君あり、又暫くして鵜沢清治君入り来り、色々雑談笑話して二時に至り去りて高橋鑰四郎君を訪ふ。曾山達夫君も在宅なりしかば共に俱に或は笑語し或は嚴然として人世の行路を談じ四時半に至る。此日反則なし。

二十六日 土 晴 此日反則なし。

二十七日 日 曇 午後入浴。此日規則三同時に十二に背く。

二十八日 月 晴 夕刻飯倉へ買物に行く。此の日反則なし。就寝後十の二に反したる事を発見す。

二十九日 火 晴 反則なし。長与君及中原君に郵便出す。前は、寒中の健康を祈ると共に無音、及其他の事がらを申遣り、後は、寒中見舞、疎瀆の謝と共に、余が休校を申送る。然るに長与君よりは夕刻返事到着せり。此には、高橋徹君、学校の諸君の消息をもらせり。又西君は水産伝習所に入りしと報せり。

三十日 水 夕刻二十分間散歩。規則三同時に十二に背く。

三十一日 木 晴 夕刻散歩の許を得て、深光寺に行き、過日借り来りし書物を返す。正午前入浴。反

則なし。

二月一日 金 雨 朝少し雪降る。午後理髪、反則なし。

今日の新聞紙に左の記事あり。(威海衛没落と題す。)

威海衛攻撃は、本日をして始められ、三ヶ所の砲台は、陸軍の爲めに奮はれ、一ヶ所の砲台は、艦隊の爲めに、破壊されたり。

又其次に曰く(其前報)

威海衛の陸上砲台は全く没落し、唯島上の砲台より抵抗を試みつつあるのみ。

二日 土 晴 反則なし。心地悪しく食進まず。

三日 日 晴 正午前入浴。反則なし。

今朝時事新報を読みしに昨二日我伊藤、陸奥の両全權委員は清国講和使張邵二氏に会见し、其全權より清国皇帝より委任せられし資格に於て見るところあるを以て、談判に込せざる旨をいひ放ちたりといふ由を二重丸うつて、見受けられたり。

四日 月 晴 夕刻より二時間の暇を得て山本喜三郎君の病状を同家に行きて尋ねしに家人は尚ほ下り坂

に向かず、医の言によれば当月一杯はかかるべしとの事なりといへり。次に鵜沢玄次君を訪ひ色々話あり。学校の話は最も重なるものなりし。八時帰宅、反則なし。岡田君へ手紙を出す。学校の様子を知らせ玉へといひ、又、抄録をなす事を勧む。

五日 火 晴 反則なし。

六日 水 晴 午前入浴。反則十二条。

今日の時事新報により大山將軍より大本營に宛てたる公報を読みしに威海衛は二日に占領し今劉公島のみ遣り彼軍艦は尚ほ同島と陸との間にあり我艦隊と砲戦せりといふ。

七日 木 晴 午後家兄の用事を兼ね山本喜君を訪ひしに同君は尚ほ熱ひかずといひ居たり。又高橋君來訪。曰く岡田君より伝言を頼まれたり。君より手紙を与へられて有難し。今兩三日の処返信する事能はざる可きが、こは不意思はれよ云々。反則なし。

昨六日外務次官林氏は衆議院に於て辯和使に対する談判顛末の公報を報告せり、其中にて清使に對し伊藤全權が演説したる言の中に清国は殆んど列國と分離し、時に或は列國と共に得可き利益を享有する事あれ

ども其實際上の責守に至ては淫に顧みざる事あり、「清國は孤立と猜疑とを以て其政策とす。故に善隣の道に必要とする所の公明と信実とを欠くや宜なり云々。清廷の欽若使臣が外交上の盟約に公然合意を表せし後却て翻然として之れに調印する事を拒み或は儼然已に締結せられたる条約に向て更に明白なる理由もなく之を拒否するの事跡一にして足らず云々。其より彼使が有する全權の不完全をのべて清廷の意は未だ和を求むるに切ならずと確信す」といひ、つまり左様の唯日本全權の陳述を自國政府に報するに止まる如き使臣に向つて談判を開く能はずと結論し、尚ほ相當の使臣を派し切実信誠に和を求めんには、更に其談判する事を拒まざるならむという。之れ其要領なるが其前述の如きは

大拍手を以て迎へたる由時事は記しぬ。

八日 金 晴 風あり、反則なし。

九日 土 晴 反則なし、小説牡丹燈籠を読みきる。該書は円朝の口演にして曾て囃菊兩優の演じたる事あるものなりとす。此夜の新聞紙号外により、我海軍は四日定遠を撃沈し、五日鎮遠、威遠、砲艦一隻を沈め

たる事を知れり。此等は我水雷艇隊の功にして我亦死傷及損害ありたり。且つ六日には敵の水雷艇十數隻を追つめて破損、用に堪へざらしめたりといふ。以上公報による。入浴。

十日 日 反則なし。

十一日 月 雨 夜閑を得て三田に行く、之れ雑誌を買ひ、旁々慶應義塾運動会を見んとせしなり。然るに今朝来雨降りし爲め同会は見合せとなりたれば家兄の講義録及余の「日清戦争写真画譜」を買ひ序でに松山信二郎君を訪ふ。一時間半程對話の後辭し帰宅す。此会話に於て中原君、商業学校、豪放なる人等を主とし、帰るに臨み同君の写真を貰う。規則十二。

今日より食事にパンを用ふる事を止む。

十二日 火 晴 午前入浴、夜三田へ雑誌を買ひに行く。其時、鳥渡慶應義塾の炬火行列來りたり。此行

列は何百人と云う人がみな手にく一つずつカンテラを竹の棒のさきにつけてもち、軍歌を歌ひつつ歩み、其中にまんだうの大なるものをかゝげた、どり行くものにて盛なる事限なく、又、之を見んとし見物に出掛けたる人々は之又何千という数ならんか、聞くなり、

是れ同塾二回目の行列にして威海衛没落北洋艦隊滅亡を祝せしものなりと。反則なし。

十三日 水 晴 規則四及十二に反す。十二日夜侯の陸尺来りて命を伝ふ。曰く、若し差支なくば相談なしたき事あるにより、直ちに来れと。余は病人看護の為め之を謝せり。

十四日 木 晴 朝より閑を得たりしかば正午よりまず学校を訪はんと思ひ、栄町の坂を上りし時、彼方より来りしは高橋鑄四郎君なり。因て直ちに同行して同君寓に至り暫時談話し居る中、曾山達夫君来りしかば又曾山君とも談したり。此時丁度高橋君の所へは加藤成一君来訪せし故、余は曾山君と共に散歩に出で兵營の裏手より田畔を横ぎり神葬地に出で曾山君の祖母上及余の父上の墓に謁し帰る。此間亦種々話をなせしを以つて余は十分に愉快と利益とを得たり。帰宅せしは四時四十分なりしがそれより入浴す。反則なし。

今朝の新聞によるに

去る十二日北洋艦隊の一砲艦白旗を掲げて来り、我艦に向ひて提督より軍艦砲台及兵器等一切差出すによ

り陸海軍人、外国人、及平民の生命を助けられよと申越したりとの報昨日大本營より陸軍省に達せしといへり。又右に付き我手に入る可き軍艦は、平遠、鎮遠、濟遠及広丙はか砲艦十余隻にして丁汝昌は捕虜として日本へ護送せらる可しといふ。

十五日 反則なし。

十六日 土 反則なし。夕刻大山信吉氏来り、先夜陸尺を以て用達せし事は明日の兵士余餞会に關する事なるが嗣侯は充分君の事情を察せり。余は只命によりて主意のみを伝ふ。

十七日 日 夜深広寺を訪ひ高橋君と談話する事二時間余。反則なし。

十八日 月 夜反則なし。今朝着の新聞紙。

一昨十六日午前七時より約そ一万の清兵我海城を襲ひ来り遼陽、營口、牛莊三道より進みきたるも我軍隊の猛烈なる射撃に堪へず遂に退却し死傷百五十人を下らず我死傷は八名のみ。

又、

去る十二日の夜即ち降参使を送りたる当日北洋水師提督丁汝昌、定遠艦長劉步蟾、及劉公島守備統領紀文

宣は自殺したり。

支那軍人中共に語るに足るものは丁氏を措て求めやすからずといふ。其戦ふの不利なるを知りて寧ろ生靈を救げんと決心して降服しこれを自ら生くるの恥なるを思ひて潔よく自殺せしと激賞するに足る。然れども捕虜となるの恥を忍び戦止みて國に帰るの晩更に大に奮発して國の兵制を改革せんとの大量あらば尚ほ賞賛すべし。然れ共、こは支那の國体として出来能はざるやもしれず。

十九日 火 午前入浴。反則十二、今夜より雪降る。

二十日 水 朝見れば雪は木々の枝に三四寸積りて、朝日に照あひ銀世界は赤みを帯びて奇麗いはんかたなし。反則なし。

二十一日 木 反則なし、母上容体此頃は変動なきにより家兄も今日より出勤する事となれり。

二十二日 金 正午より閑を得て麻布仙台坂の仙華園を見る。こは花屋敷にして幾個のむろありて、花卉を培養し、又境内には東屋あり。此辺高台なるを以て品川の海を遙望し又、芝公園の丘陵と對して市街を眼下に見下だす景色よき所なり、併し今日の如きは霜

解けては歩行六ヶ敷且つ園内をあらすの恐れあり。それより長与君を訪ひしに、未だ学校より帰らずときき又材木町の方に出て六本木に来り、深広寺を訪ひしに、唯弘中君のみ在り、其中高橋君も帰り来れり。此時先日借りし雑誌を返し又暫く談をなして再び長与君を訪ひしに、此度は歸りて在りしにより同君室にて談話し、四時過ぎ辭して帰る。此間四の橋近辺に火事ありし由にて警鐘しきりなりき。帰途金原君に逢う。此日反則なし。

此頃、友人某に付き宜しからぬ風評学校中に流行する由を耳聞せしにより余は此人に向て、君につき妙なる風聞を耳にせり。曰く某悪友と交密（此友は前に某君が嫌忌せし人）にして共に男色の談喧々たりと。こはいかなるものにやと。某君曰く、然り、（同君は前に余が此間を発せざる中より「をれも此頃は馬鹿ばかりいつてをるのだ」と二度程いひ居たり）なれども、君は真に彼の輩と余が交際し又男色如きものを実行すると思へるや。答へて曰く否、余は第一に此事に關し聞きたるときは左様にも思ひたり。再考して君が病後の體散のためならんと思へり。三考して之れ或は此輩流

の内幕を探るためかと思へり。君曰く、余は只慰みのため、一つは四角ばらないために其風の話を友人と交え唯稚児の美否を評する位にて居るつもりなり。又彼輩（悪友某君）等と真に交際し居るものにあらずと。又某君は余が某氏よりききたる話を聞き、然るや〜某氏も亦余を左様つまらなきものに擬し居るかといへり、又曰く僕輩の爲し居る事は書生のみなする事にて必ずしも之を実行する如き野蠻流にはあらずと。余は之に對し、僕は君が現今この事に溺れ居るとは思はざれども、青年のつねとしていかなるはずみにてか、悪弊中にまぎ去られ果ては遊びに行く如くなりたらば、人物はいくらにてもをちる可し。唯、僕のいふ事も参考とせられたしと。同君曰く、謝、併し僕は失望心に對しても、左様の域にまで墮落せんとは思ひもよらず。尤も明日より某君とは疎なる可し。又他の事につきても一考して見ん。此夜、余は今の時に於て彼に向て此事をいはざりし方がよかりしと思ひぬ。

二十三日 土 晴 風あり。一昨日より風邪の気味あり。今日夜早くより眠る。反則なし。午前入浴。
二十四日 日 昨夜強風今朝に至りて止む。晴、夕

刻高橋鎗四郎氏来る。曰く、某君は其後悪友某君とは少しく疎くなりしも他の一方に於ては却て長じ来りはずやと思はる。因つて余は一応自分よりも申出んと考ふれども、先ず君にも一寸打ち合せ置く方よからんかと来りしなり。尤も事の次第はK君より聞けり。余は君よりの申出しは今少し延ばされては不都合あるや。僕は彼れをよせばよかりしと思ひし次第を君にいはんと思へばなりと。君諾し去る、今日反則なし。

自二月二十二日 小使勘定表
至三月二十日 日
金 老円五十銭也(但し二十二日受取)
此内 二十二日 まめ 二銭
二十五日 さいふ 八銭五厘
三月四日 かがみかり 五銭
いんし、はがき十銭
状袋 三銭
まめ 二銭
まめ 二銭
二月二十六日まめ 二銭
三月六日 しない 二十三銭五厘

十二日 雪踏直 七銭
十六日 雑誌 六銭
友愛館々費 六銭
はみがき 一銭五厘
西洋フンドシ 十一銭
切手 二銭

メ九十一銭五厘也
引残 五十八銭五厘也

二十六日 火 晴 午後中閑を得たるにより学校へ行きしに、鳥渡第四年級、即ち加藤、高橋君等の級は体操時間にてありし。米津教員にも挨拶し高橋君に後程参画する旨を通じ置き、それより山内をあちこち逍遙したる後、弘中、曾山、滝村三君と同道し、余は深広寺に入り同寺宿三君と暫時談話。高橋君と外出。材木町、三軒家、神葬地など散歩して五時少し前、寺に帰り晩飯を饗せられて帰る。反則なし。

神海居主人問、余曰、僕將忠告某氏。然彼不信僕。故固可不有其効。雖然僕一旦信彼、誓信友。今彼如彼。於是僕考一考、再考、再三考。因理不可不言、因利可

不言。是果如何。對曰、余知其有害、而未知利也、而不妨言。唯以不言為不義論、大反對。主人遂決不言、而與簡單手簡、又主人閑先日余忠告曰、於關係与悪友、有多少効。而於他一方、如益甚歟。
二十七日 水 反則なし。今日大須賀新六君来る。
二十八日 木 晴 午前入浴。反則十二。

三月一日 金 曇雨 昨夜雪降る。反則なし。今日にて田尻氏經濟大意読み了る。
今日の新聞紙に依るに
諸国政府は弥々第三回講和使として李鴻章を派遣する由にて、今度は充分なる全權を与へられたるが如く、又出發地は天津、日は三月三日なるが如し。其会見地は馬関なるやに聞く。
二日 土 昨夜より雪降り今朝は二寸位つもり居り。尚ほ止まず。反則なし。
今日の新聞に依るに

第二軍第一海団は去る二十四日午後二万二千の敵軍に攻撃されしが、我軍は此を營口方面に撃退したり。死者二十名。敵の死者約二百余名。此時の敵將は宋慶

馬三元、姜長、孫等なりし。

三日 日 晴 午前入浴。午後三田へ行く。雑誌を買ふ為めなり。夜閑を得て鶴沢次君を訪ひ一時間話をして帰る(撃剣の事)。反則七条。

四日 晴 午前理髪。夜閑を得て山本喜三郎君を訪ふ。同君は尚ほ病床にあり。尤も熱度も余程下り其内全快の見込みなるよし。其より高橋君を訪ひ、座にありたる本山、曾山君と一時間半程談話をなし(洪水、美濃米)辞して帰る。反則一条。

五日 火 晴 日本地理調べ。反則なし。

六日 水 晴 午前入浴。夕刻、邸内巡査詰所に行きて間宮永吉氏(巡査、撃剣教師)に面会し、小生儀其内に友愛館撃剣道場へ入館を願ひたしとて又二三の事を聞き取りて辞し、それより鶴沢次君を訪ひ、しないを買ひに同行せられたき由を語り承諾せられし処へ、草野武雄氏来りしかば、三名にて飯倉五丁目のしない屋に行き、余も一本を求む。反則なし。今日高橋徹夫君へ向け郵便送る。之には当地の模様と、友人等の消息をのべ、又彼地の様子を御通知あらん事を望む。経済学応用新論読了。

七日 木 晴 今日南竜神社の祭典なれば、謹んで三拝す。日本地理調べ。反則十二。高橋、曾山両君より引越の旨郵便。

今日の時事新報号外は六日の午後陸軍省着(大本營より)の公報として「我軍は去る四日に午前十時より牛莊の敵を攻撃せしに敵は頑固なる抵抗をなし、我軍が同市内に入りしまでも退かざりしため激烈なる市街戦となり午後十一時に至りて漸く同地を占領せり。而して我軍死者二百六名、敵の死者千八百八十名、降伏人五百名、分捕品大砲十六門外甚だ多しと報ず」此軍は第一軍にして降伏人の数は後に七百余名としたり。

八日 金 晴 午後三時より四時十五分まで撃剣稽古。是れ生来始めての稽古としての撃剣とす。二十年来経済世界の景況(田尻博士)を読む。反則なし。

九日 土 雨又は曇 午後三時より四時二十分迄撃剣、二十年来経済世界の景況生産過度の章を読む。午
前入浴。

今日の新聞を見るに、第一海団の一部は三月六日已に宮口を占領せり。唯其海岸砲台は当時尚ほ抵抗し

つゝありし由。

夕刻より(六時四十分出、八時帰る)閑を得たれば、直ちに行き高、曾兩君の新規の下宿を訪ふ。折しも沢野、加藤及椿の三君居合はせしが直ちに去れり。余は撃剣道場の吹聴をなし辞す。帰途にも兩君は余の爲めに邸門まで送り来れり。此時余は、君は人のふざけを本氣にうける事多しとの忠告を与へられたり。反則十の二条。

十日 日 曇 二十年来経済世界の景況物価の革命の章を読む。反則なし。

十一日 月 晴 午後、撃剣。経済世界景況五章読む。日本地理調べ。反則十二。

十二日 火 晴 経済世界景況六章読む。午前入浴。午後四時半より一時間撃剣。写真画譜読む。

(今日の新聞)我第一軍が去る九日午前田庄台を占領したる事を報す。

十三日 水 朝より雪降り夜に至る迄止まず。経済世界の景況八章読む。午後撃剣一時間、反則なし。

十五日 金 曇 日本地理調べ、撃剣。今日は岩佐氏が来る時分なるに家兄の留守なるにも拘らず外出せ

しは不注意なり。乃ち反則十の二。

十六日 土 雨 正午過ぎより閑を得たれば、鶴沢兩君を訪ふ。其時先ず妹尾克巳君来りて次に人見某君来る。人見君は鶴沢清君と学友にして快談願をとき、且其中一片の隠蔽する所なきが如き人なり。其より直ちに撃剣一時間許り。夜に至り又雨を犯して三田に行き途々買物をなし高橋、曾山兩君を下宿に訪ふ。折柄椿亮君あり。余は三時間談話の後辞して去る。椿君は正則学校にあり、高橋君のいふ所によれば、觀察緻密にして人と交る城壁なしといふ。午前入浴。此日反則一並に十二。

十七日 日 曇 経済雑誌読む。反則なし。

十八日 月 曇 経済世界の景況読む。午後撃剣一時間半。反則なし。

十九日 火 曇 経済雑誌読む。午後撃剣一時間。此時一寸山本喜三郎君を訪ふ。夜六時半より三田に行き曾山君の下宿を訪ひしに、同君も高橋君も留守なりしにより歩を転じて芝公園を抜け、愛宕下町より西の久保を散歩して帰る。(七時半)反則なし。午前入浴。

此頃の社会の大事件左の如し

十六日、皇后陛下下広島へ向け御発途、大総督府を戦地に進め小松参謀総長殿下を大総督に任ず。此の大総督府といへるは、大本營の一部作戦に関する局部にして総督は総ての軍隊の任免等の権を有するものなり。前文部大臣井上毅氏逝く。

十七日、内閣に小更迭ありて黒田通信大臣は秘密顧問官に、渡辺大蔵大臣は通信大臣に、而して松方伯は大蔵大臣に親任せらる。

十九日、清国第三回の講和使李鴻章伯馬関に着す。使節も三度目の事とて多分は完全なる全権を委任せられ居るならんとの事なり。随行員として、米国人フォースター氏も来れり。

二十日、水曇 読書。反則なし。(今日衆議院にて頌徳上奏案、軍隊慰勞文差遣案可決せらる)

二十一日、木晴 経済世界景況読了。夜一時間散歩、名倉善四郎君に逢ふ。反則十二。

今日の新聞紙に依るに「昨日清国使節李伯は我全権大臣と馬関の或る旅館にて初度の会見をなせり」といふ。

ふ。

二十二日、金 経済雑誌を読む。午前中入浴。内田叔母さん、おせつちやん来る。反則なし。

小使勘定表 自三月二十二日 至四月二十日

金、一円五十銭の内	
二十四日	かみかり 五銭
	みかん 三銭
二十八日	切手 二銭
	半紙一帖 二銭
三十日	うなぎ弁当 十五銭
三十一日	入りくづり 十二銭
四月二日	兵古をび 二十一銭七厘
十日	雑誌 六銭五厘
	はみがき 一銭五厘
十三日	ゑんびつ 五銭九厘
	ポート 十銭
	こうゆうかい 五銭
	パン 五銭

車代	五銭
ぞーり	七銭
シャツ	四十六銭
ボタン	八銭
切手	五銭

計 一六五、六

差引 一五、六不足

二十三日、土 午前九時より神葬地へ墓参す。西浦君より返事来る。曰く、君は美術的思想に富めり、長与、高橋二、並びに君、是余の親友なり。長与君は浜野と親しくなりしが如しと雖、ども心は正ならん。岡田君は一部分の人物なり藤懸君の人物上達したりと。其他雑事を申越す。午後撃剣(此時賀島金輔氏来)夕刻井沢氏へ行く。山本君を訪ふ。

今日の新聞によれば、去二十一日、日本軍艦の陸戦隊澎湖列島中の漁翁島に難なく上陸し、之に続いて陸軍も上陸し之を占領せり。此島を取れば澎湖列島は既に掌中にあり。

此頃余謂へらく、成る可く交際を避けんと思ふ人には成可く質問的の話をせざるをよしとす。尤も先きの

人によりては其氣をそこなはざらん為めにするならば、余程注意する可し。

二十四日、日 晴れ風あり 午前入浴並びに理髪。午後撃剣一時間。反則なし。夜三田へ散歩に行く。

二十五日、月 晴 午前日本地理、昼過ぎ英字雑誌読む。夜経済原理(中隈先生著)読む。反則なし。

昨日の号外に

李鴻章伯は二十四日午後我全権との会見を終へたる後帰途に於て、一兇漢の為めに狙撃せられ面部に傷を受けた。但し生命に別条なし。

二十六日、火 曇 午前九時より閑を得。先ず長与君を訪ひしに留守なりしかば、更に椿亮君を訪ひしに都合ありしを以つて、高橋、曾山両君を訪ひしに幸い居りし故暫時談話せる中、椿君も来り、いろ／＼談しをなし、其中屋になり飯を御馳走になり、それより学校に行かんとて四人にて出でしに、山内にて迷子ありしたため、高橋君等は彼を其家につれ行きければ、余は別れて学校に行き、藤懸、堀口両君としばし話をなして帰る。学校は来る三十日に卒業式兼運動会を催はすにつき、今は仕度中なるなり。余が帰りしは二時

少し過ぎなりし。三時半より撃剣に行く。反則なし。国会の閉院式は今日の筈なりしも延引仰出された。天皇陛下は李鴻章氏来朝につき、充分警戒を加へたりしにも拘らず、今度の事変ありしを遺憾とする旨詔勅を発せられたり。

二十七日 水 曇 午前入浴、午後撃剣。反則なし。
二十八日 木 曇 風強し 午前日本地理、午後經濟、反則十の二。

二十九日 金 曇 午後金原東造君を訪ひ、三時間談話、又それより撃剣、反則なし。

三十日 土 曇 正則学校の第一回卒業式ある事とて朝八時半より同校に行きしに、やがて九時半頃に一同写真を取り、それより神田先生、外山先生、渡辺洪基氏、木場貞長氏の演説ありたる後免状をわたり、卒業総代田中文雄君の答辭、尾崎巖君の英語演説ありて正午になり散会。余は長与、中村、沢野、藤懸の四名と愛宕下の鰻飯店にて昼飯をなし、又帰りて学校に至る。此時丁度運動会始まりたり。競走、旗拾、サック・レース、竿飛、巾飛等の競技あり。午後五時散会。直ちに帰る。皆校門には国旗を交叉し、正面には高竿を

午に切れるものとす、といへり。余は此に對し、大に不平を感じたり。何となれば李伯の負傷は唯一私人の天災なるに、日清戦争は公の國際事件なればなり。況んや、我第二軍は已でに太沽天津に進むの時機熟せしとの事なるに於てをや、此に至りて兇漢益々憎む可し。然るに彼は同じく三十日山口にて無期徒刑をいひわたされたりといふ。余はかれをころしく思ふなり。

四月一日 月 午後余は今度の試験に及第したるか落第したるかを、又もし落第ならば何れの級に入るものによなどの事を聞かんと芝公園の米津音次郎氏（体操教師幹事）及尾崎弥太郎氏（唱歌、普通学教師）を訪ひしに両氏とも留守なりしによつて帰宅せり。撃剣一時間程、反則十二。

二日 火 都合により午前九時より岩佐医院へ車を馳せ薬を頼む。調剤を待ち居る間に西浦君を訪ふ。談話一時間余り。余は学校にて再試験をする事になり居る事をきけり。又、書物の事、我級の程度の事なども問ひ合せたり。それより又、岩佐氏にて薬を受取り車を驅りて帰る、時に十一時。それより入浴。午後撃

立て、三方に各国の国旗、軍旗をあげたり。又、渡辺木場、外山、鈴木次官、本山大佐、各中学校校長、各小学校長、其他学校に關係ある内外の紳士、貴女數十人來賓として見受けられ、又、加ふるに樂隊は始終奏樂したれば、真に盛会なりし。運動会中にて最も興ありしは滑稽運動なり。これはいろ／＼さま／＼の服装をなして数十人が列び出で、一人号令をかけてねりあひむなり。中には達磨もあり。陸海の軍人もあり、田舎娘もあり、旧弊の爺もあり、支那人（これは本ものの服を着たり）もあり。実に抱腹絶倒の至りにて満場の大喝采を博しぬ。反則なし。

三十一日 午後經濟原論読む。松尾三代太郎氏より兄へ宛て用済みにて去る二十八日夜和歌山へ韓地より帰朝せし旨申來る。反則なし。

今日の新聞に

始め我全權は李全權の休戰要求に對し、担保として山海關、太沽砲台の引渡しを申出せしが、今度の事變にて平和条約談判の進行を妨礙せしを以つて盛京、直隸、山東三省に於て無条件にて休戰を許す事に昨日談判整ひたり。期限は二十一日間にして四月二十日の正

劍一時間。經濟、地理。反則なし。

三日 水 雨 經濟、地理。反則なし。在米高橋君よりはがき來る。其文意はタコマ着及同地駐在の事、四週間の後サトリップのバタ製造所に入り、日に午前八時より三時まで実地の研究をなし得る事、同地方には日本人なき事、其他メソジストの牧師と宗教論をなし、釣をなして遊ぶ事、止宿せる家の小児の事など同君生活上の事がらを申し來たる。又我母の事をも回復をいひのるといへり。余が外国にある友人より手紙を受けたるは此を始めとす。

四日 薬取りの為番町岩佐氏医院へ行く。今日は八時より家を出で、少し閑ある故、途にて山王の山に上り散歩せしに、一二分さきたる彼岸桜の若木の梢に遺れる、昨夕の雨滴が旭日にてらされてきら／＼する処何ともいわず美しく見えたり。又医院にて待ち居る間に靖国神社の境内を散歩したり。ここも処々に桃や桜の唇をときて笑へる景色、まことに美しく又清國陸海軍の分捕品を展列したる所ありて軍旗……これは別に竜の印しあるにあらず。唯何となくいろ／＼の色を以つて縞を作りたるが如き直角形のものあり、又通常

のにて赤地と楊、劉など染め出だせるもあり、其切れ地は何やらよくわからねども多分は旗地ならん、金巾とおもはるゝも見えたり、みな甚だ大なり、一間四方のもありたり……操江号艦長の帽子……ピロッドと覚ゆ、上に水晶の玉あり、外にあかき鳥の羽のかざりものありたり……清国製クルップ式砲……これは甚ださびたり……砲弾……でこぼこあり……等甚だ多く、中に最も物の哀れをとめたるは、みつまたの槍、劍のぶりき製のおもちやの如きものなりし。帰り道には半蔵門入所へ出で、廓にそひて来りし処、その青々したる畳みの如き芝の土手、青き鏡の如き止水。其上に点々として時々ギヤ／＼となくかも、土手の上につらなれる青柳等最も視神経をよるこぼすものなりし。十一時半に帰りしに、家には曾山、高橋二君来れりとして名札を示されしに、其裏に転居の番地ありたり。午後八時に撃剣に行きたり。夜英字雜誌読む。反則なし。

五日 金 晴 午前英語。午後入浴。地理、夜鶉沢両君を訪ひて談話十時帰る。反則一。

此夜の話によれば鎌田先生の言にて我政府にて朝鮮の独立及印度の独立は先年より企て居りて現に印度

入るべき積りなる処、今日は出来ずとの事にそのまま帰宅す。反則なし。

十二日 金 晴 登校せしに、教師岡幸祐氏のいはるゝには今試験するも無理なれば、一ヶ月なり二ヶ月なり課業に出でたる後に試験して、其より級を定むること適当ならむとの事にて余も尤もと思ひ、謝して其様に取扱を頼み今日直ぐに第三時間目より五年の二(高橋氏等の組)に出席し、明日よりも此級の学課を受くる事となれり、午後入浴。榊亮君、余の撃剣の話を聞きて頼みたしとて(学校にて約束す)来りしにより、道場まで送り行けり、撃剣す。反則十二。

十三日 土 曇 学校出席。正午よりボート会に出席す。此日帝国大学のボートレースあり。桜は盛りを少し過ぎたる処にて舟をしがらみに繋げば、花の吹雪は扁々としてふりかゝり、花見る人々は千軍万馬の往來するが如くぞろ／＼として、パツパとあがる紅塵の中を散歩す。余は行途の大半をこぎ又帰りには(五時出発)全体をこぎたり。「ハラ」はへる、舟の中に水は入る、日はくれる。大橋より小き川にまがりし故、舟は左右にある、つかえる、「オール」の向きは、わから

の如きは頻りに調べつゝありとの事なり。

六日 土 晴 午前経済一時間、午後地理二時間、撃剣一時間、夕方より閑を得て高橋君を訪ひしに両君とも留守なり。因りて芝山内を散歩す。此頃桜花咲き居るにより今夜の月明に乗じて夜桜見に来るものぞろ／＼然たり。それより山本喜三郎君を訪ひ一時間談話し八時帰る。反則十(物忘れ)、帰りし時長井氏へ宛たる学校よりの手紙来りありたり。十一日より始まる事をいひ来れるなり。

七日 日 午前英学、午後地理、反則十二。

八日 月 午前入浴。反則なし。

九日 火 午後撃剣、夜高橋鐘、曾山両君を訪ふ。反則一、但し不得已に出づるもの也。

十日 水 晴 午前入浴。正午より長与君訪ふ。談一時間半許り。同伴外出し高、曾両君を訪ふ。長君は直きに去り余尚ほ残りて暫時談の後、仙花園に入り更に芝公園に散歩す。桜の花はも／＼散る方のもの多し。反則なし。

十一日 木 晴 今日より学校も始まるといへば、午前七時より登校せしに余は試験の上にて相当の級に

ず、体はくたびれる、実にくるしき修業になる。又愉快なるボーテングなりし。舟宿につきしは八時なりし故、直ちに車にて帰る。反則なし。

十四日 日 雨 朝、入浴中曾山達夫君来り訪ふ。直ちに二階に導き談話二三時間。午過に至りて同君去る。此日話す所重にも抄録の事、其他修養論に關す。又余が昨日同君に來遊を求むる事を得しは、此母の容態も静かに且つ叔母は余が同君の寓に行きて度々世話に預る事を聞き、一度招けとの好意を余に与へしにより。

午後入浴、反則なし。

十五日 月 晴 風あり。登校。反則なし。

十六日 火 雨 登校、入浴、撃剣、反則なし。

十七日 水 晴 登校。撃剣。今日新聞紙号外来る。曰く「講和談判まとまり、遼東地方、台湾を割譲、二億兩の償金を条件として今日午前にまとまりたり」と。平和条約の条件は此他尚ほ、通商上の便利を我に与へ、即ち開港の数をまし、無法の苛税を廢し、我々は最大の裁判権と税権を有し、彼は裁判権を有せず、税権は有限とする等の条項あり。

十八日 木 晴 登校、唱歌エスケープ。帰途買物。
 撃剣、反則一（朝六時十五分起）。
 十九日 金 晴風あり 登校、反則なし。
 二十日 土 晴 学校出席、曾山君を相友舎に紹介す。反則なし。今朝高橋徹君に手紙を出す。余が学校へ通ふ事、及友人諸氏の近況を申送る。
 二十一日 日 晴 反則十二。
 二十二日 月 晴 学校出席、午後入浴、一時より外出、二時半より三時半までボート練習。買物（書物）して四時四十分帰る。反則なし。

定規 六錢
 パン 三錢
 馬車乗賃 二錢
 竹刀先皮 二錢五厘
 理髪 五錢
 三錢
 ボートワリ 三錢
 三角法本 六十七錢
 相友舎親睦會費 十錢
 特別入 二、二二七
 三日 つれづれ草 十一錢
 史記 九錢

自四月二十一日 小使勘定表（総入六四九、七）
 至五月二十日

五日 地文学 八十錢
 六日 ボート會 十錢

前月より繰越高 一、十六
 四月分 三、〇〇

七日 撃ケン費 六錢
 八日 竹刀代 十二錢
 ハミガキ 一錢五厘

合計 四円十六錢の内

二十一日 十二錢入る

象のぐ 二十三錢

二十二日 文典の本 二十二錢

十一日 ボートキフ 十五錢

化学書 三十八錢

十二日 鉄道馬車 九錢

ボートワリ 三錢

ラムネ 二錢五厘

十四日 ゲタ 十二錢五厘

一九二 合計 三五八、五

二十六日 金 晴 学校出席、学課済みて後直ちに銀座町に赴き、又日本橋にも行き諸書店に就きて探ぐ

二十三日 火 雨 学校出席、反則なし。去る二十一日、平和克復に関する詔勅を発せらる。其要旨、我帝國の国運を振張するは陛下が祖宗より受けさせ玉へる、天職にして又、陛下が維新以来の御素志なりし。然るに去年清国と覺端を開くの已を得ざるに至りしは、御遺憾と思召さる処なりしに、今や彼真実前非を悔の使臣を遣はして和を請ふ事熱心なり。因つて陛下は之をいれ、全権大臣を命じて商議せしめられしに、我全権はよく陛下の旨を奉じて適切なる条約を結び、平和を復する事を得たるは、陛下の御満足に思召さるる処にて後勝になれ喬傲なるが如きは陛下の断じて取り玉はざる処なれば、臣たるもの宜しく励精して益々謙讓の徳を以つてせん事を望ませらるゝとなり。

銀座町に赴き、又日本橋にも行き諸書店に就きて探ぐりしも思ふ書ども見当らず。それより築地に行き、長与又郎君等と会ひ、ボートの練習をなす。一時間ばかりにして帰る。途中愛宕下まで松山得四郎君と同伴す。反則なし。

二十七日 土 晴 学校出席、今日は都合ありて第一三時間目より休課なりし。反則十。

二十四日 水 学校出席、午後入浴、撃剣、夕刻より関を得て専光寺に赴き談話、九時前に至りて辞し去る。反則一。

二十八日 日 午前入浴、理髪、正午より鶴沢玄次君と同伴して羽根沢御別邸に赴く、相友舎員懇親會に出席せんとてなり。此日天麗かに日暖く、草青き田の畔を行けば蓮花草は水の縁をあかく色取り、農夫は正に田地の起しかへしに従事せり。又芝地の小山より遠く望めば、目黒火薬庫の烟を吐く様など見る。景色として面白からぬはなし。やがて十数人の會員は両手にわかれて綱引きをなし、碁をかこみ笑話する杯くさくさの遊びをなし、夕刻に至りて酒をくみ筒飯を食し笑談放歌して懇親を温む。余は特に家の都合を患へて早く

二十五日 木 曇晴 学校出席、撃剣に出席す。反則十二。

（五時）帰りが、諸子は夜十時頃までのこりしといふ。因に記す当日は旧侯幼主頼貞殿も御出ありて特に會員

に菓子を給はりたり。反則なし。
二十九日 月 学校へ出席、反則なし。此頃は学校試験準備の爲め、毎日に宅中の多時間を費やす。
三十日 火 曇 学校へ出席、午後入浴、撃剣へ出席、反則なし。

五月一日 水 晴 学校へ出席、反則なし。
二日 木 曇 学校へ出席、撃剣へ出席、入浴、反則なし。

三日 金 曇 学校へ出席、反則なし、夕刻より三田に行き高橋君の新下宿を訪ふ。留守。よりに椿君の家に談話し、又代敷の質疑をなし、辞し去りしは、八時半。撃剣。

四日 土 曇 学校へ出席、撃剣へ出席、夕刻より琴平町に曾山君の新下宿を訪ふ。暫時談話の後、散歩に出かけ飲食して帰途につく。(九時)入浴。反則なし。清帝条約を批准すとの報至る。

五日 日 晴 反則なし。
六日 月 曇 学校へ出席、午後入浴、反則なし。
七日 火 晴 学校へ出席、撃剣出席、夕刻より散

加藤両氏と同行し、例の如く乗車し、余は更に高橋君の下宿に行きて晩飯を馳走せられ、八時半まで談話して帰る。当日は中々愉快なるレースにて、教員レースの時などは、勝ちたる組の人を一人／＼胴上げし、拍手して万歳を叫ぶ。又殊にクラスレースは五年の二の勝に帰し万歳の声は墨江の長流にひびきわたりたり。反則なし。

小使勘定表つづき 十五日より

当季総入 六、四九七
月 謝 一、五〇〇
小 使 三、五八五
現 在 一、四一二

十三日 月 晴 反則なし。
十四日 学校出席、反則なし。
昨日遼東半島還付の詔勅出づ。日清条約公にせらる。今日東京市中は国旗を出して祝意を表す。

十五日 水 学校出席、当日は条約批准交換の祝意を表する為め学校は八時より休業となれり。撃剣出席。反則なし。入浴。

歩。反則十二。
八日 水 晴 学校へ出席、撃剣出席、反則なし。
九日 木 晴 学校へ出席、入浴、撃剣出席、反則なし。
十日 金 晴 学校出席、反則なし。

○八日夜半条約交換、芝罘に於て我伊藤大使と彼全權との間に調印済となる。

○此頃、京都に於てしきりに大臣、枢密顧問、軍人等の間に会議あり。或時は午前に於て開かれ、或時は夜半に亘り、山県將軍を旅順口より呼びかへし、東京林次官と長文電報頻繁なるなど、何か一事変の萌しあるかの如く見ゆ。

十一日 土 曇 学校出席、午後入浴、反則なし。
十二日 日 晴 今日学校はボートレースある事なれば、朝六時より家を出て、増子君と同行、新橋より浅草まで乗車、それより公園内を一回りして会場に入る。レースは九時頃より始まり、赤緑白三組にわかれ、距離は七百メートルにて回数十二回。次に教員レース、クラスレース及来賓レースあり。余も二回の中一回の勝を占めたり。帰りにつきしは五時にて高橋、

十六日 木 学校出席、反則なし。

十七日 金 学校出席、夕刻山本喜三郎君を訪ふ。反則なし、入浴。

十八日 土 曇 学校出席、画学エスケープ。美濃部の家にて談話して帰る。夕刻高橋君来り訪ふ。暫時対話の後、外出して散歩す。夕立にあひてビシヨ／＼たり。反則なし。

十九日 日 曇 西浦美次君へはがき出す。内田子供来る。反則なし。

今月十三日軍人に勅諭を賜はれり。其御意は陛下が平素より軍人を股肱として愛し、自ら其大権を握り給ふ事より、此度戦争中に於ける軍人の功勞をのべ、之を賞し給ひ、遂に益々奮励して其任を尽せとの旨なり。
二十日 月 学校、撃剣共出席。西浦君の返書を領す。病氣なりとの事ゆへ、更に書を裁して同君に発す。反則なし。

自五月 廿日 小使勘定表

至六月 廿日
繰越金 一、四一・二

入金 一、五〇・〇
合 二、九一・二

二十日 切手 二銭

二十二日 ぞうり 五銭五厘

二十六日 筆 五銭

三十日 水 三銭

た び 二十一銭

金 二十銭入り

三日 かみかり 五銭

ようじ 二十一銭

はみがき 一銭五厘

四日 校友会費 五銭

ボート会費 十銭

十一日 アルゼブラ 二十三銭

ペンマンシツプ 五銭

はんし 四銭

一、一〇・〇

三十銭特出

一 円特出

十三日 ボート、ハタ、ワリ 十一銭

帳めん 五銭
ペン 三銭
ぞうり 五銭五厘

十七日 切手 五銭

十八日 フンドシ 八銭

ペン 十二銭

鏡前 二銭

二十日 特出 五銭八厘

二十一日 特入 五銭

全 二、五三・三

残 三五・四 (二五不足)

三十三銭

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

残 三五・四 (二五不足)

二十三日 木 曇 学校出席、マコーレー伝を読む。反則なし。

二十四日 金 晴 学校出席、高橋徹夫君の信書四月二十四日発)を得たり。同君は益々勉強して社長も親切なるより此頃にては自分一人にてバターを製造する事を得るに至りしより、又毎日朝五時に起きて聖書をよみ、朝より十二時まで製造し午後は遊ぶ由。反則なし。

二十五日 土 晴 暑し 学校出席、画学エスケープ、入浴、夕刻より加藤成一君を訪ひ、漢書をさらひ、又暫時対話して辞し椿君を訪ひ、共に出でて丸山、及公園中を散歩し、いろ／＼談話し終りて一寸寄宿舎によりて帰れり、時に九時、反則十。

二十六日 曇 正午過ぎより長与君を訪ひ談話す。其中加藤君来り、又談す。須臾にして辞し高山君を訪ふ。同君は叔父渡辺氏の家に寄宿し居らるゝなり。其渡辺氏は、即ち現在通信大臣なり。氏は、政治上の方と共に禅理を知り亦経済の学に通ずるの人。其家の風裁を記するは無益ならず。先ず門は割合にひくき形のものにて余り大ならざる札に渡辺国武と記されたり。

二十一日 火 学校、撃剣共出席、入浴、反則なし。
二十二日 水 学校出席、数日前より余が身体に現れたる徴候は恰かも常ならざるが如きにより、膝がく／＼として歩行に折れやすく、朝起床の時非常にだるく通便の割合に少なきが如き)家人に問ふて遂に脚気の初兆にはあらずやとの疑を起す。夕刻曾山君来り訪ふ。暫時にして出で邸内にて散歩しつゝ種々談ずる処あり。反則なし。

入れば通常の洋服を着たる護衛巡査は余を誰可す。意を通ず。更に六尺巾の道を進めば、直きに僕のあるあり。因りて直純君の有無を問ふ。又西洋風平家の側なる一平家によりて君を呼ぶ。因りて相見を得たり。共に芝の土手に下りて池畔に出ず。池は甚だ大にして一舟を浮べあり。四方は小丘をなし樹木鬱々たり。竹の筧は水を落して音を発し、水畔の楊柳垂りたり。又其側の小屋ありて風雅を尽したり。要するに其全体の構造は、家小さくして美ならず、庭広くして雅なり。其又庭の風趣は小細の点に洒落て尽さずして、大体の規模高尚也。其池の大なるが如きは他に比とふべきもの少なし(芝弁天の池程にして島なし)暫時にして辞し帰る。夜山本喜三郎君を訪ふ。反則なし。

又今日高橋徹夫君に向けて郵書を発す。大意は西浦君の病氣、ボート会、元良先生の倫理問題、朝鮮政治上の問題等を報じ、余が性質に付き同君の意見を聞くにあり。夕より雨降る。

二十七日 月 学校に出席、終二時間エスケープ、反則なし。入浴。

二十八日 火 学校出席、ルーテル伝を読む。(グレ

トリーダースの中、トーマス・カーライルの著より抄出せるもの)

二十九日 水 晴 暑し。学校出席。終り一時間エスケープ。新し橋凱旋門を見に行く。同門は長さ一町許り全体材木を組み骨となし、之に杉、檜、樺等の葉を以て飾をつけたるもの、最も荘嚴なる形にして今現に飾付け中にあり。人の之を見ん為めに行くもの甚だ多く、往来雑繁なり。

明日は天皇陛下還幸により、明後日は皇后陛下還啓により学校は休業なり。

三十日 木 晴 午前七時半頃より加藤成一君を訪ひ談話す。或は青年立志の方針を論じ、或は学友の批評を試み、又或は自分の経歴を陳べて其得失利害を説く。二時間許りして共に携へて外出し、芝公園丸山を散歩し、又徳川氏の靈廟を見る。道すがら談ずる処亦多し。昼前帰り食事をすませ復出で約に従て学校に至れば、河野、椿両君已でに有り。相互に加藤君を待つ。已にして至る。乃ち発す。向ふ処はいづれ……今日は何なる日ぞや、各戸日章の国旗を揚げ、提灯をつるせり……のみならず道側、或は大国旗を立つるもの

で来りしに、曾山君に会ひ、余は二君と分かれて同君の下宿に行き暫時休みて帰れり、時に四時、反則なし。三十一日 金 晴 朝より薬取りに行へ。序々に西浦君及福島君を訪ふ。西浦君は本日出京。程々谷在に転地養病すまふ。反則一及十。

本月来友二、友訪十二、通信三、来信二、入浴十、外出五、撃劍九、学校二十四、反則七内第一が一、第十が三、第十二が三。

Promises with my conscience.

1. I will never be late the time denoted.
2. I will never eat or drink too much.
3. I will never be in bed after 5:30.
4. I will never be angry or discontented, but will always be active.
5. I will never be thoughtless.
6. I will bath one time every three days.
7. I will study the lessons of the school at home more than one hour a day. (excepting Sunday)
8. I will never forget to do something ordered, or intended myself.

あり。或は道を蔽つて国旗と連隊旗とを交叉したるあり。みな其下に奉祝の意を顯す。又某町中と頼す。明治二十八年の五月三十日、果してかくも祝すべき日なるか、然り此日は実到我文武賢聖の天皇陛下が東京に還幸せらるゝの日なり、去年九月聖駕西に向て走りしより以来此に九ヶ月なりしを戦争目出度勝に帰して平和の条約成りしによりて、陛下は東に帰られたるなり。果して然らば是我國民が義務として大祝大賀せざる可らざるの秋といふべきなり。而して余輩が相携へて共に発せしも亦是意にして、即ち聖駕を奉迎せんとしたるなり。往来はみな三々五々、美しき衣を着けたる人々のしげ／＼しく新橋、虎の門方面に向ふもの引きもきらず。議事堂の裏に至れば人の群集堵をなし、をしあひへしあひ巡查警部にとがめられ叱せらるゝ事常にかくの如き場合にあるが如くして、更に甚だしきを覚ゆ。又多くの国旗を何々會、何々学校などそめ出したる大旗と共にたてゝ整列するものありし、余等は十二時より二時まであちらこちらでもまれつゝをされつゝ、みな汗を流して待ち居りしに、やがて聖駕は来ませり。万歳の声は四方に起り、又帰途河野、加藤二君と虎の門外ま

9. I will never get out from the items which I determined myself.
10. I will never do
These items are to be executed surely.
T. Ueda
2555, Asabu, May 30th, the day on which H.I.M. The Emperor reached Tokyo.
Be the matter what it may be always speak the Truth

June 1st. Saturday. Clear weather. I went to school: escaped 1 hr. I received a letter from Mr. Nishura.
2nd. Sunday. Clear weather. I had my hair cut and bathed. In the evening, I went out to see the festival of Kumano-Jinsha.
3rd. Monday. Clear weather. I did not go to school being prevented by domestic circumstance. Unfit for P.3.
6th. Thursday. I went to school: escaping the last lesson, I visited Mr. Soyama's house with him. I was informed by Mr. Kadota to be allowed to enter the 5th class, II.

7th. Friday. I went to school.

According to the public information from Viceroy Kabayama, our army landed at Settei, a town in the Northern Formosa, on the 29th. ult.

9th. Sunday. I read Mr. Matsumura's statement of the telegram, informing the battle between the Japanese and the German squadron in Tansui, mentioned in the news papers. I wrote a letter to Mr. Nishinra.

10th. Monday. I went to school. I received a letter, hoping my visiting his house from Mr. Matsui. A particular issue of the *Mai-nichi* informed us that Kirun had been taken.

11th. Tuesday. I went to school. I bathed. I went for fencing. I violated P. 8.

12th. Wednesday. I went to school. I went for fencing. I violated P.3. I lent my "Shoseiyoroku" to Mr. Katô.

15th. Saturday. I went to school: escaping 1 hr. In the afternoon I went boating to

Tsukiji. Our company were Messrs. Katô, Miura, Kawai, Horiguchi, and some others. They swam skillfully, but I couldn't do so. This strongly touched my heart. On the way home I visited Mr. Soyama and talked. It was about 5 when I returned to home. This evening I wrote a letter to Mr. Nishinra, whose letter to me I received yesterday. Unfitable for P. 3.

16th. Sunday. I read Mr. Ishii's "Kujira Iktaro", a novel relating to the whale fishery. 20th. Thursday. I went to school. On the way home from there I went to Mr. Katô's with him. In the evening I visited Mr. Katô's again and talked with him till 9 there. He gave me his opinion on me and I also gave him mine on him. I received a letter from Mr. Nishinra this morning. Mr. Katô Seichi is the first son of Mr. Katô Shigenari, the Naval Commander. He is as many years old as I am. He is calm and clever while his affection to his younger brothers and sisters is extraordinary. I

earnestly love him, I honour him as a man of first class, and he would be for me too, I suppose. Indeed he is one of the most friendly friends of mine.

21st. Friday. I went to school, escaping one hour. I visited Mr. Minobe's with him. His room is in the upstairs of a Daikyûba. I went for fencing. Unfitable for P. 3.

22nd. Saturday. The Koyukai having been to take place today, I went to the Genkoin. There were delivered a few addresses both in Japanese and English by students.

維新の際、西郷、勝の二人傑、朝幕の全権として相会するや、幕府の諸有司は頻りに騒ぎたてたり、然るに勝氏は一人睡り居たり。而して相手が西郷なら、こちから別に要求するに及ばない。あちひでそんなに不都合な事をいふ氣さかひはない。と。談判に取りかゝるや、唯だ一言幕臣、飢餓せざる様になしくれよといひしのみ、然も尚ほ七十万石を得たり。

In the afternoon Principal Kanda addressed a very sound story, and next Mr. Kô

Hidesuke, a war correspondent of the Tôkyô Nichinichi's delivered a story he executed in the seat of war. We left there at about 2 P.M.

Mr. Kanda's story.

試験するや教師と生徒となつてざり合ひ居り、先生の方では生徒がすむをこやをしなうか、と思つてゐる。生徒の方では、先生が番をして見張つる中は見なすがすぎがあれはいつでも見ようとて居るやうな風ではござる。こんないやしい事じやいけな。わたしは始終かういふ事は大きぢひで、生徒に名誉といふ事を重じさせる様にしてゐる。だから生徒の中で話をしたいといふ人があれば、別に他の人の邪魔にさへならなければしてもいゝ、と思つてゐる。そして又、生徒を見張て頭がもじや、になりて分らなくなる様にするよりは、少々生徒にだまされてもいゝから之れを名誉を重んずるをえらい人と信じて見なして、かまはずに居るが却て之は結果がいゝよ。あのアメリカで、かういふ事を聞いた。ある先生が試験の最中に、あした、をまくたもホートに行くかおといつた所が、生

徒の方で、其の出来をなめた事が、考へてゐたところから話だが、果て高岡だか、りのちあ。ちがひかゝる人は先住をあげなむらひなむらひ。自分だか、ちがひかゝるんだ。等々、ちがひかゝるんだ。頭は、ちがひかゝるんだ。ちがひかゝるんだ。ちがひかゝるんだ。

He told pleasantly and soundly as he did always.

June 23rd. In the afternoon I visited Mr. Nagayo's where Mr. Katō came after a while and then Mr. Motoyama with Katō. Messrs. Takahashi and Akashita were there. I bathed.

25th. I went to school. I wrote a letter to Mr. Nishiura. Unfitable for P. 3.

26th. I received a letter from Mr. Soyama who went to his brother's in Hongo in order for the convenience to go to the hospital where he received 治療. I went to school. I posted the letter for Mr. Nishiura. I went for fencing. I read Mr. Matsumura's "On the great men". Unfitable for P. 1. I bathed.

27th. Rainy weather. I went to school. I went for fencing. I read Mr. Tokutomi's "Yoshida Shoin". Unfitable for P. 7.

28th. I went to school. On the way there I just visited Mr. Kato. At school, our class' members resolved to send a 香典 for Mr. Oka, the teacher of the Mathematics, whose mother-in-law died lately in his native province. Of this I was of opposite opinion because it is of no profit but of a 弊害 for damaging the student's purity. I wrote a letter for Mr. Soyama, visiting his sickness.

29th. I posted the letter to Mr. Soyama. I went to school. (escaped 1 hour) We went to "Kaimon", the men of war by boat. There a sailor explained the guns (12 centi, 17 centi, and machine), rooms, and other arms and ammunitions. It was about 8 when I returned. I was so much tired that I scarcely had appetite and threw myself down on bed as soon as I took the supper. I received a letter from Mr. Nishiura who returned home to Tokyo.

30th. Sunday. Rainy weather. Unfitable for P. 3.

In this month,

I visited the friend 11. I wrote the letter
4. I received letter 5. I went for fencing 8. I bathed 7. I went to school 28.
I cut hair 1. Unfitable for P. 1.=2, P. 3.
=5 P. 7.=2, P. 8=1, P. 10.=3. I went out 4.

July 1st. I went to school. Unfit for P. 3. I was still tired with the labour day before yesterday.

2nd. I did not take the examination of the Chinese, because I felt head-ache from a little sleeping of last night.

3rd. I went to Genkoin where an address was delivered by Mr. Nagano, a 陸軍中尉 who had been asked to do so by our school. The address took three hours, 10 to 12, explaining all the battles which carried on by the Second Army with maps. I received a letter from the uncle and I wrote a letter to

him. On the evening I just called upon Mr. Yamamoto.

4th. I walked about at the Shiba Park escaping one hour on the morning. I received a letter from Mr. Soyama. He says he has to go to Kumamoto in order to recover his health, and it need two or three years for the subject.

5th. About 2. P.M., Mr. Nishiura came: he said he is greatly well now, and asked me whether there is any news in the school. For this I replied with Mr. Soyama returning home to Kyūshū. I bathed. 3 P.M., I just visited Mr. Motoyama and talked with him. On the way home from the school, I visited the Nishinokubo Post-Office having a 用事 of uncle.

6th. I did not go to school. This was for the reason that I have to be at home because my brother was appointed as a Kajū to-day. I paid a visit to Mr. Kato and we had one hour's talking. I read Mr. Hirata's "Thomas Carlyle".

7th. In the evening Messrs. Motoyama and Takahashi just called upon me.
 11th. I visited Mr. Kato in the morning and went to Mr. Minobe's with him on the way home from our school. I read a novel.
 12th. Friday. Rainy weather. I bathed. I read Mr. Shiga's "the Scenery of Japan".
 13th. Saturday. Cloudy in the morning but clear in the afternoon. I read a novel named "Ohan Hanhichi".
 17th. Wednesday. Rainy weather. I read *Hyakunin-Isshu*.

朝もあつて目をすりのながらふとみれば
 しようこのかげはさかななりけり
 雨十番ごはなのおもてに松の蔭

21st. S. My body-heat was 37.7 at 2 P.M., and Myakuhaku 95 times a minute. In the evening our family had a dining of celebration for my brother's having been appointed. I went for a walk to Iigwa.
 23rd. T. I read Mr. Tajiri's "Bank". I received a letter from Mr. Soyama in Kumamoto, and I sent him a reply.

moto, and I sent him a reply.

七月二十四日 朝より加藤君を訪ふ。同行外出して学校に至り同君の用事をたし又教員の発起にかゝる三崎行きの事など聞きて後、同君とわかれ、三田に行きて椿君を訪ひ談話す。又同行外出学校に行き、次ぎに酒井君を訪ひしも、同君は用事ありしより直ちに去り、丸山下の花園を一望して正午家に帰る。午後製紙分社より記憶学会の規則を送り来る。一枚を直ちに松尾伯父に転送す。入浴す。午後の学課は経済二時三角一時半、英語半時なりし。
 二十五日 朝より風よく曇り。天気予報も出でず。唯、風雨の警ありしのみ。午前の勉強は論語半時代数一時、歴史一時半、午後の勉強は銀行論三時間、暑中休暇中の規定を作る。
 二十七日 午前勉強、午後長与君を訪ふ。不在より更に加藤君を訪ふ。四時頃まで談話す。此間君はその処世論として、人間は生れながらにして私慾の如きは勿論棄てざる可らずといふ。今は長き以前より考へてある歴史、即ち古英雄人傑の伝記を一般倫理教育の骨子として我々の先人はかくの功績をのこ

し、今日吾々が有する所の幸福を与へたり、故に吾々も亦古人に対し、子孫に対し、奮発興起して世界人類の爲めに尽くさざる可らずといふ事を宗教の様にすべしと論ぜり。それより相携へて山内を散歩し、終りに河合敏一君を訪ふ。同君は即ち其名の如く敏捷なる才能なる人にて、現に我級の総代の任にあり。又同君は昆虫類採集に尽力し居り、現に蝶類、蜂類、蛾類、及甲虫類を合せて、千余種を蔵し居る故、吾々は其を見て採集上の方針、之に従ふ研究の方法等を談じたり。河合君曰く、余は此採集虫類を適當の装置に排列して学校に密附する考へなりと。その間、時間もたちもはや点火頃なりしかば二人は辞して去り三田に行き、牛肉店に入りて食事をなし歸れり。時に八時。
 去る二十四日の夜半、広島より神戸の間の鉄道に損所出来、汽車転覆し乗客たる負傷病兵の全癒して帰国の途にありしものゝ中、七名死亡す。此他九州鉄道にも損傷あり。薩州、長州、二漁船の流失人民の行衛不分明等甚だ多く小数の人民負傷、家屋道路の損傷の如きは各府県にあり。東京にも少々ありたり。

七月二十八日より小使勘定表

現在金	一円一三銭六厘	日 摘要	日 摘要	円十錢厘
卅 理髮	五〇	小 計	六〇	
一 經濟雜誌	五五			
一 ラムネ	二〇	總入金	五五五六	
一 出	一〇〇〇	總出金	一四八五	
二 ハガキ	二〇	差 引	四〇七一	
	(小使より借)	八・一九理髮二度	十〇〇	
四 入	三〇〇	小 計	不足 九	まで文房具費 十五〇
四 かりを小使にかへす	二〇	雑 誌	五五	
七 入	四〇〇〇	菓 子	十一〇	
八 出	三〇〇	ラムネ水	十一五	
八 入	八〇	ハミガキ	一五	
十一 ラムネ	二〇	計	十三〇	
	切手(かり)	計	六七五	
	二〇			
三十一日 水	午前銀行論、三角法、午後珠算。			
八月一日	午前銀行論、地理、英語、午後時事、古			

き社説読む。七時半より加藤君を訪ひしが直ちに去り、三田に行きイロハにて帳面遺失の事をきゝしになしといふ。それより雑誌を買ひ帰途二三の交番所にてきゝしも、みな確ならず。所々散歩して九時帰宅す。

先七月中の反則

第三	起床	一四度
第七	勉強	五〃
第十	〇〇〇〇	四〃
第八	忘却	一〃
第一	時間	一〃
合計		二五〃

○処世余録の第一冊を遺失せしは、余最も不注意なる所為と認むる処にして、いかにも残念なり。其物品はをしからねども、此悪習は人の信用に関する事故、実に残念なり。然れども、かゝる事ある故に、今後の注意をますの利はあるなり。

○起床五時半の定、決して厳にあらざり、九時に眠るとすれば八時間半あり。然るに、之に後るゝもの十四度、一ヶ月日数の半分弱とは驚き入りたる事どもなり。

三度の戦地談あり。第一は丸井氏、第二は酒井氏、第三は当時特に御召に預りたる北白川宮家令恩地氏なり。十一時頃より御飯出で、御宴の終りしは十二時なり。電気灯の光は勲章にてりかへして、ことにうつくしかりし。旧侯、五位公も其間にありて談笑せられ、五位公夫人阿高様も御列座被遊、軍人の談話を聞きしめされぬ。

五日 月 午前勉強、夕刻入浴後、鶴沢清治、山本喜三郎二君と共に飯倉より十番を散歩し帰りて、又鶴沢次君を訪ひ一時間余談し、九時帰る。

伊藤、山県、大山、西郷の四伯は侯爵を、樺山、野津の二子、伯爵を、伊東(祐亨)、川上の両氏は子爵を、いづれも今朝授けられ、又伊藤侯は大勲位に、大山、山県、西郷三侯、樺山、野津の二伯、伊東、川上の両子は金鵄勲章功二級に叙せられたり。小松宮彰仁親王殿下は菊花頸飾を賜はれり。

八日 もくやうび ひるまへぎんかうろん、さんかくはう。ひるすぎナシヨナルリーダー。ゆふがたすこしさんぼす。きをくぐわくくわいよりへんじきたる。

九日 きんやうび ひるまへだいですう、ばんこく

〇〇〇〇遂に尚ほ除く能はず。慚愧の至り。(八月二日誌)

〇きちようめん条目

- 一、物忘れ一切法度
- 二、小使勘定は銭位まで進ぶ可らず
- 三、時間は五分以上後る可らず
- 右本日より規約として実行す

(八月二日定)

二日 金 朝二葉のハガキを受取る。(曾山君) 到着以来外出したる事なし。セキ出づ。(西浦君) 田中君は及第したり。学校より余に月謝の収納を促せども余欠席の月は、無月謝なるの例なりと覚ゆ。君の時はいかなりしや。

両君に返事出す。夜山本喜三郎君の宅にて話す。

四日 日 旧君御殿に於て軍人(和歌山出身の将校) 諸氏の宴を賜ふにより、我等は給仕の御手伝として御殿御奥へ参上す。三時頃より川口、児島、村井兄弟、丸井少佐、酒田氏、其他合せて三十九人の陸海軍々人は続々来り点灯頃に御奥なる宴席につく。宴の間々に

し。ひるすぎうちだゆたかくんきたる。

十日 どやうび ひるまへ、えうろをぶのちづをひく。ひるまへちよつときんばらくんをとひしが、るすなりし。ひるすぎ、こくみんのともをよむ。

十一にち にちやうび ひるまへだいですう。ひるすぎ、うざはくんをとふて、はなしするうち、かさあくんもきたりしかば、つがふ四にんにて、もとかうぐわくくわいきねんのしやしんをとりに、いゝぐらのみわへゆく。このしやしんをとることは、をとゝし、かのくわいがやめらるゝときよりのはなしなるが、ぜんくのびくになりぬるものなり。たかはしくんよりはがききたる。わかやまのまつをおちへてがみをだす。

十二にち げつやうび ひるまへだいにほんしより、とものでんをよむ。たかはしくんへてがみをだす。

十三にち ゆうがたかとうくんとさんぼにいで、じうばんよりさんのはしまでいつた。そのとき、かとうくんのやうにてちよつとかうのくんのうちへよつた。十四にち すみやうび ちゝのしんだひだから、あさしんそうちのはかへまあつた。じうじはん、くりこ

わめしをもちて、ながる、まつる、およびうちだへい
つた。うちだでひるせいやうりやうりをごちそうにな
つた。三じすぎ、うちだをでかへりにまるぜんへよ
つたが、ほしいほんがなかつた。
よるうちだこうちやんと、はちまん、あたごへさん
ぼした。ねるじぶんには、ころもちがよほどわるく
て、あしがだるかつた。

十五日 もくやうび 朝ころもち悪しく、ばんを
食す。

十六日 金曜日 午前地理、夕刻より加藤君を訪ひ
しに、河野君も丁度来合はせ居ければ、直ちに同道し
て山内にゆき丸山上にていろ／＼理屈話をなす。

「……此頃学校では校友会がをとろへたね……そ
さ、ありやゝ教師が多ざるのも一の原因だが、生徒が
第一無責任でいかん……ン、それだから従つて権利
もなくなつて委員会なんかつづれてしまつたんだ。僕
あこんだ、校友会で少ししやべつてやろーかと思ふん
だ……フン……それはねー委員会を再興して、会の基
礎をかためて、それから雑誌を出そーといふのだ……
そーか、なか／＼いいが、委員の権力が今の様ぢやー

こまる。生徒は小使につかつてゐるぢやあないか……
そーだ／＼」

本月一日より十五日まで反則は、(Ⅲ)七、(Ⅴ)二、
(Ⅹ)一、(Ⅶ)二なれども。此中、(Ⅲ)三、(Ⅶ)二はゆ
るす可き性質のものなり。

十八日 曾山兄より三角へ転地の報を、三浦兄より
暑中見舞の葉書を受く。
十九日 午前九時より外出。本山兄を訪ひしに不在
なりし故又加藤君を訪ひ、正午まで談話す。

二十日 家兄は明日より嗣君御内室様の御伴として
日光地方へ旅行に発足の筈なりしが、御内室様少々御
所勞にて延期遊ばされたるにより、家兄も明日は出発
せざる事になれり。今日内田穰来る。

〔新聞〕二十日 叙爵、叙勲の御式あり。陸奥子
(伯爵) 渡辺氏(子爵) 山地、左久馬西男(子爵) 以
下の叙爵(和歌山県出身にては、茨木少将、川口総督
男爵になる) 及金鷄勲章三級其他勲章授与ありたり。

二十三日 金 昨夜雨降る事甚だしくありしが、今
朝はくもれり。昼頃より晴れとなれり。午前七時過ぎ

のまたぬ事

四、入浴の度を減ずる事 長湯せざる事
五、雨天に外へ出ざる事

第二、飲食

一、飯をかゆとする事 但し茶碗二杯づつ、又日
に一度は玉子を用ゆ

二、牛乳を毎日五勺づつ用ゆる事

三、服薬時間 九時、三時、八時の事

四、間食は余程注意し、且つ三食の時と雖ども水
分を多く摂取せざる事

第三、勉強をきまかせにする事

二十六日 月 井関氏行診察、午前鶴沢君宅にて談
話。

話。

二十七日 火 松尾伯父より手書来る。内田伯母、
稔君来る。

稔君来る。

二十八日 水 家兄の日光行、三十日と昨日定まれ
り。学校より保証人へ手書来る。

二十九日 木 家兄日光行更に九月三日に延びた
り。

三十日 金 朝一寸長井君を訪ひ談話す。今日の毎

より本山君を訪ひしが、不在なりしかば、長与君を訪
ひ談話したり。同君は当月初めより、チプスに罹りし
が、此頃は稍々よくなりしを以て其内那須地方に旅行
する筈なりとかたれり。暫らくして辭し、更に加藤君
を訪ひ、同道にて外出し、山内を散歩す。学校にも行
きたり。終りに大々餅によりて飲食し帰宅せしは十一
時半。午後八犬伝。

第一、起居

一、朝寝無用 五時迄に起床の事

二、着座無用 但し靴下を常に用ゆる事

三、運動は平和にする事 朝夕散歩の事 重きも

日新聞に英領婆羅島の買入云々といふ事あり。如何なるものによ。

近衛師団更に前進し、彰化、台湾府を占領するの報あり。

三十一日 土 内田稔君来る。今夜宿る。

処世余録 第五冊

九月一日 日 井関氏行、牛乳を日に二合づゝのみ、又常に滋養を取る事を忠告せらる。明日より此事を実行する事を許されたり。(余の体は、余程衰弱したれば、滋養分を取らざる可らず。もし然らずむば、手足に麻痺を生ぜんといふ。又むくみはとれたり。)

井関氏行。今日牛乳二合づつ飲む事を忠告せらる。

二日月 昨日の医師の言を今日より実行す。夕刻

松井氏へ行く。(兄発覚知らせのため)

三日 火 今朝家兄日光へ発足す。(従て爾後留守中は、家事の日記も本帳に記入する事とす)

齋藤勇見彦氏、出発を祝して来る。宮本氏より謹一

十一日 水 近藤潔氏来訪す。

十二日 木 朝、鵜沢雅房氏来訪す。井沢安次郎氏来る。同氏は来る二十日頃函館へ行くこととなる由也。昼前齋藤勇見彦氏来訪す。(今夜より叔母歯痛す)

十三日 金 朝、井関氏へ行く。又学校へ一寸行く。

上州伊香保なる家兄より信書来る。一行は十一日同地に移られしと報ず。又西浦、高橋両兄より葉書来る。高橋兄は昨日帰京せしなり。午前理髪す。家兄へ信書を出す。夜雨降る。

十四日 土 朝、奈良正氏来訪す。屋頃江川良純氏来訪す。同刻より内田伯母、下女たけと共に来る。午後長井氏内方来訪(カステラ内田伯母は晩刻長井氏へ

行きたり。伯母は夜に至り帰れり。夕刻より母、様子あし。

十五日 日 昨日より北風ふき、冷涼なり。単衣に

羽織を重ねざればさむし。午前松井娘来る。夕刻一寸加藤君を訪ふ。(昨年今日、是れ実に平壤落るの日)

十六日 月 朝、在熊本曾山兄より手書を領す。夕刻三田へ行き一寸高橋兄を訪ひ、又同兄と少し散歩して帰る。朝、興石敏氏来訪し、夜川島おぼさん来る。

郎君一件につき葉書来り返事を出す。桶町へ兄の出發を知らず(葉書)。和歌山へ余より書状を出す。川嶋浅次郎君来る。興石敏氏来る(砂糖)、記憶学会より送本到着す。和田守記憶法よむ。

四日 水 和田守記憶法をよむ。行水。

五日 木 井関氏行、内田伯母、碓井庄吉君のかみさん来る(菓子)、昼より夕飯まで居たり。川島おぼさん来る。曾山兄より郵便来る。行水。此夜母様子少しあし。

六日 朝 曾山兄へ郵便発す。八犬伝をよむ。夕刻一寸加藤兄を訪ふ。

七日 土 英字新聞研究録をよむ。夕刻少しく雨ふる。

八日 日 松井のお豊さん来る。十時頃より少しく雨降り且つ風起る。夕刻一寸鵜沢兄を訪ふ。行水。

九日 月 朝、井関氏へ行く。(かゆを今少し増す事を忠告せらる)。興石クワ氏来る。長井誠氏来る。夕刻一寸鵜沢兄を訪ふ。

十日 火 朝、内田の使、高来る。昼帰る。午後山本長安氏来る。行水。

八犬伝を読む。

十七日 火 朝、長井誠氏来訪し、家兄は明日午後五時着京の由を伝へらる。横山房次郎留守見舞。井関氏へ行く。帰りに山内を散歩す。夕刻外出、加藤兄に逢ひ飯倉より十番を散歩す。

十八日 水 朝、奈良正氏来訪。内田老母氏来る。夜家兄帰る。朝山内へ行く。八犬伝よむ。

十九日 木 山本長安氏来診。近藤、江川両氏及横山、川島来訪。八犬伝第七輯読む。夕刻西の久保より市兵衛町を散歩す。

二十日 金 鵜沢氏来訪。八犬伝よむ。夕刻より高橋仙舟兄を訪ひ、九時頃帰る。

二十一日 土 曇、但し午後雨降る。朝、井関氏へ行き診察を受く。序でに飯倉にて買物したり。八犬伝第八輯を読む。

二十三日 月 終日雨降る。夕刻我善坊より芝山内を散歩す。八犬伝をよむ。

二十四日 火 終日雨降る。八犬伝。中外英字新聞をよむ。

二十五日 水 終日雨降る。朝、長与兄よりの手書

を受け取る。松尾伯父及長与兄へ郵便出す。菊叔母外出す。

二十六日 木 曇天、正午より加藤成一君を訪ひ二時間談話。それより更に高橋鑰四郎君を訪ひ五時辭して帰る。同君の処には河野君来りて居りし。

二十七日 金 終日降雨。午前、井関氏行。英研読む。八犬伝よむ。今日下の如き書をなせり。

(一) めんげ

(二) かたきのみ

(三) あらびごきみの

右本日より絶む候也。

二十八日 土 曇 幾何、文法、午後美濃君を訪ふ。山本長安氏来診。八犬伝よむ。

二十九日 日 晴 朝、井関氏行。正午より加藤君を訪ひ談話し、又河野成一君を訪ひて談話す。辭して去りしは五時前なりし、八犬伝よむ。

三十日 月 晴 但し雨あり。午後一寸山内を散歩す。八犬伝よむ。代数、歴史。

October 1st. In the morning I took a walk to

Park. P.M. I went to Mr. Takahashi's (talked about smoking and drinking.) (Chinese.) (Trigonometry)

7th. (Chi. & A.) Doctor Motora's advice on sincerity.

8th. (Tri.) Read Mr. Takezoe's "In China".

10th. (A. & Chi.) Went to Mr. Takahashi's place in p.m.

Abbreviations. — A.; Algebra, Chem.; Chemistry, Chi.; Chinese, C.H.; Chinese History, En.; English, Eth.; Ethics, Geogr.; Geography, Geom.; Geometry, Gym.; Gymnastics; H.; History, J.; Japanese, P.; Painting, P.G.; Physical Geography, Phys.; Physics, T.; Trigonometry.

11th. In the evening we were summoned to the Master's Palace to attend at the lectures of the military and naval officers. The lectures were delivered by Paymaster Tsujimoto at first, Captain Ujita of the army next, and lastly by Surgeon Yamamoto of the navy. It was about eleven when the lectures were finished.

Sannohashi and Jūban. On the way I called upon Mr. Kōno, but he was not at home.

In the evening I visited Mr. Katō, and talked about our money accounts. This day I studied geometry and English composition.

2nd. In the morn. I visited Karibe's house and offered our congratulations on their marriage, presenting a wedding gift. I had hair cut. In the even. I walked in the Shiba Park. Read "B. Franklin" & "Hak-kenden".

4th. In the forenoon I went to Dr. Iseki's and consulted about the disease. He said that as I had become much better now, I might be able to do the usual school's duty, and the medicine will not be necessary some one week after. I having told brother this, he said I shall go to school from to-morrow. I called on Mr. Usawa and talked about our school-lesson. Trigonometry. "B.F." (Ben-jamine Franklin) and "H.Ke.D." (Hak-kenden).

5th. I did my school's duty. Strolled in Shiba

12th. I went to doctor Iseki's place and consulted my disease a.m. He said as I was better by and by I might stop taking the medicine. I called on Mr. Motora with K.T. and S.K., but the doctor was not at home, so we talked till about seven at K.T.'s.

13th. I wrote a letter to the uncle. (The Twelve Rules.) I took a stroll to Hiroo with S.K. p.m. (1-4:30.) (Chi.)

14th. I visited The Rakwan-dō at Zoji-ji with Mr. Kōno. I saw the funeral of one Mr. Tajiro, a killed soldier. I took a stroll to Sannai with Mr. Katō, called on Mr. Takahashi, p.m.

17th. (Geom.) Called on Mr. K.T., p.m., strolled in Sannai with him.

19th. I wrote a letter to Mr. T. Takahashi. I attended at the Buddhist addresses of Shigakai at Yayoi-kan, p.m. I visited the house of Saito Esq., who was absent.

26th. I had my hair cut, morn. I went to the Higher Commercial School to get a contribution paper of that school, and then

visited Mr. Nishimura's, but he being not at home, I went to Mukōzima alone on foot, where the boat-race of our school took place, a.m. I took a walk with Mr. Nishimura in Asakusa, p.m. It was about thirty minutes past seven when we returned home. At the boat-race some students of the Chiba Ordinary Middle School attended.

31st. I walked at the Park with Messrs. Kōno, Katō, & Takahashi, in the evening.

November 2nd. I visited Mr. Usawa's and offered our regretting on his daughter's death, p.m. (Miss Koto died last night at about 12.) I called on Mr. Yamamoto on business.

3rd. I visited Mr. Uzawa's for consolation, a.m. I composed "the Rules for Self-culture".

5th. I attended at the funeral of Miss Usawa Koto, which took place at a temple in Aoyama, 5:30-7. I went to Mr. Nagai's on errands. (V.R.II.) I called on Mr. Katō in

the evening.

6th. The school rested from its works in order to express its sympathy to H.I.H. Kitashirakawa's death. I went to make a visit to Mr. Okada Shōsaku, whose old mother died about a month before, a.m. I went to Mr. Nagai's on an errand, a.m.

8th. I received a letter from Mr. Soyama in Kumamoto on the morning. I called on Mr. Katō in the evening.

10th. Our female servant became free from her service. I wrote a letter to Mr. Soyama in Kumamoto. I went to Iigura for shopping in the evening.

11th. I visited Mr. Katō and then called on Messrs. Tsubaki Ryō and Takahashi Kakushirō with him, p.m.

13th. Examination in Trigonometry. (school.) I called on Mrs. Matsui & Mr. Nakamura on an errand. I went to Iigura for shopping, even.

14th. I called on Messrs. Nakamura and Matsui and Miss Koshishi on errands. I just

visited Mr. Katō.

15th. I went to Mr. Katō's. (Exercise of Geometry, failed.) I called on Mr. Nakamura on errands, in the morning. I began to use *watavire* dress from this day. I saw the frost for the first time.

18th. I began "Bunshō Kihan" from this day. (school.)

21st. We (teachers and students of our school) went to Shimbashi to welcome the Imperial Guards Body returning to the capital. I went to Mr. Sawano's, p.m. I called on Mr. Yamamoto; he was ill in the bed.

22nd. As Mr. Kishi Mosaburō, who was one of the members of our class, will enter to the troops, some of his friends proposed to open a meeting of farewell. So I offered to be a member of it.

24th. I inspected the man-of-war Yoshino in the Shinagawa Bay with Messrs. Katō and Kōyama. We started at 7:30, went to Shinagawa, and then, by lighter, to the ship. As we were introduced to the Navigator

Lieutenant Mr. Takahashi of that ship by Mr. Katō's father, we had many advantages: we were explained particularly by the lieutenant himself and some other members, dined in the ward-room, returned back to Shinagawa by a steam-boat belonged to the Yoshino. The worthiest things I inspected were the pieces of the bullets which were fired at the ship by the enemy, the searchlights, the engineering-room, topedoes, etc. It was about 3:30 when I returned to home.

28th. This morning I saw a man hunny himself at the Shiba Park.

29th. I went to the Shin Kōji at Roppongi, where Mr. Kishi's Sōbetsukwai was held. At first Mr. Motoyama spoke about the purpose of the meeting, next some congratulatory words delivered, and then, Mr. Kishi required. "Banzai!" were exclaimed by all the members. After these welcome 'Chaban', 'Kembu', and 'Biwauts' were done. It was about seven when we returned with full pleasure. The students met were

accounted over 40.

December 1st. This day the festival of the Nanryū Jinsha, the ancestor of our former master, was held. So I went to the Palace. Main persons seemed there were Barons Andō and Kawaguchi and many military officers from our native prefecture, and also I saw Mr. Matsuyama Shinjiro.

7th. I appeared myself at the *Keikokazime* of Soyūsha. I called on Mr. Sawano, even.

Lately, among the lessons of the school I have succeeded in the Japanese, Chinese, Trigonometry and English,...Compositions, Dictation, Translations, but failed in all in the Algebra, and Geometry.

14th. Examination of Algebra. (school.) I went to Dr. Yamamoto's on an errand.

Lately 金融緩和のこぼれ、物価、黄金等一體に騰上り、炭薪の如き、人力車賃の如き殊に高し。米は七升八合

より(一等)九升(五等)なり。かくの如くなるが故に新会社の起るもの甚だ多く、中でも水力利用業は目下の流行なり。

市議の景気甚だよじ。田舎は、当年を生米、茶の上作好況なりしが、急いで購買力あり。

16th. I had my hair cut. I visited my grand-mother's grave at Kojimachi, and then went to Bancho to call on Mr. Nishinura.

I visited Yasukuni Jinsha with Mr. Nishinura. There were seen various flags and many horses which had been captured in China.

20th. Examination of Chinese History. I went to Mr. Kono's to take a lesson of trigonometry. I went to Mr. Nagai's to be left in charge of the house, even.

21st. Examination in Trigonometry. I went to Mr. Takahashi's with him and Mr. Kōno right way from school, we took a walk at the Shiba Park. We were examined about our physical strength. (Our school begins its winter-vacation from the 22nd.)

22nd. In the morning I went to Yuitsukwan.

ceived my uncle's letter, this carried very sorry information—divorcing his wife!

A Christmas was held there, a lecture being delivered by Mr. Kishimoto Nobuta on the subject of "The birth of Jesus". He said that Christ never said about etiquette but the true spirit of the Christianity is to do good to the man.

24th. I went to Genkōin at the Shiba-Park, for there was held a Kōyūkwan. Many addresses were delivered by Principal Kanda and some other members, one of whom was I, and Tōrin (Hanashika) also spoken about Chūshingura. Effect of the examination of studies and physical strength were reported, in the former I was successful but failed in the latter. This perhaps I might owe to my disease during the summer. I wrote to Mr. Soyama and my uncle.

28th. I visited my father's grave-yard at Shinsōchi. I called on Messrs. Takahashi, Usawa, and Maeda on errands.

31st. I visited Yakuoji's grave-yard at Mita, where my paternal grandfather, grand-mother and elder sister lies buried. I re-

処世余録 第三冊

一、処世余録第三冊の首に書す。

「考察の理、実歴の事を録して遺忘に備ふるは詳慎にして、学を好む人のする所なり」とはスマイルス氏自助論中の一節なり。余又曾て抄録を作り、「処世余録」といひしが、其記する所は以上の事のみならず、「日記」及び書物、雑誌、新聞紙等の中に見し事をも混じたるが故に、甚だ錯雑にして後日之をよむに便ならず、且つ抄録の体裁を損へり、因て第二冊は尚ほ結了せずといへども、之はただ「日記」のみの用に供し更に第三冊を作りて「日記」外の事を記し別に旧日の「諸事筆記」を本冊の付録とし、之には諸般統計の事項を録する事となしぬ。十七歳の正月中旬（廿八年）

本冊中に録する下の如し。

○自身の実歴考察、○学問事項、○倫理事項、○逸話伝記、○時事評論。

ひを高尙の域に走せ且つ為めに世故の経験を得たるもの、之は古今の人傑に多し。家康公、フランクリン其他甚だ多からん。余が真友にてはまず鉄腹君の如きものか。而して余が自身を期する処も此にあり。

(5) 悪事情、不運の為に奮発興起するもの豪商大倉喜八郎氏の幼時の如きもの。

此中にて(1)は生来かんの強き人又は輕薄なる人に多きが如く、(2)は氣の小さき人に多く、(3)は極く幼少の時より母を失ひて繼母に育てらるるが如き事情の下に生ずること多きが如く、(4)は無頓着なる人、又は忍耐力強く、篤実、快活なる人にあらずむば能はず。(5)は一概にいふこと難し。尤も(1)の如きは後に改心して却て嚴格なる性質となることあり。少しく話はちがへども真友雨竹君の如きもの也（一月十八日夜誌す）

三、通識と専門

真友鉄腹君の談によるに、慶応義塾教育の方針は一事を深く修むるにあらず、広く研むれば浅きを不可とせずといふにある由。余君がこれにつけて曰く「實際

二、青年の性質と家庭の悪事情

人の心は水の如くにして、常に外界の事情に由て其形を變ずるものなり。而して幼少の時は特に然りとす。故に少時に於ける家庭の事情が大きく其人の性質に影響を及ぼすことは無理ならぬ事がらといふ可し。余は青年が其家庭の悪事情の爲めにいかに動かさるるやを考へ、又實際に徴して左の事を得たり。

(1) 不如意の爲めに所謂やけ腹となりて粗暴なる行爲に及び遂には其性質までも惡變するもの。此粗暴なる行爲とは或は青樓に往來して女色にすぎみ、或は諸方に奔逸して不正の遊樂を試み、甚だしきに至りては詐欺、窃盜の範圍に延入するもの、現に従兄K・M君、友人如海君の如きものは之かと思ふ。

(2) 不如意の爲に圧迫せられていじけたる考へを起し、又は憂鬱なる性質となり、遂には獨立心若しくは大望心を失ふが如き傾きあるもの、親友K・Y君の如き之にはあらずや。

(3) 不如意の悪事情に制せられて、ひがみ根性となるもの、友人空論君の如き之にはあらずや。

(4) 不如意に屈せず悪事情の中にありても、常に思

実業家のやりてといはるる人々は必ずしも専門の学者にあらざるにあらずや」と、余は甚だ価値ある一説として是を納る。(又余は同君が如何なる事柄、学科をもぬけめなく研究するを察して、君が此主義を奉ずるの人たることを知る)然るに、余は曾て正則学校に於て元良博士より教られしことに「専門は人によりて大切なることなりと雖も普通一般のコンモン・センスを得るを忘る可らず。此なき人に一事に卓越せるも人の上に立つこと能はず、従て真に社会のユースフルネスをなすものとはいふ可らず」とあり、而して余は勿論一偏の専門学者を好まず、然れども以上二説につきいづれが可なるやは尚ほ疑問の中に存す。(一月廿日)

其後真友高橋繪四郎君を訪ひ談復た此事に及びしに同君は深きを欲せず、唯広きを要すといへる主意は、即ちコンモン・センスを得るの手段にして、此又一の専門なり。ただ学問上の専門にあらざるのみといふ意味を語り、余は彼塾は重にも実業家、政治家、等を養成するを目的とせるが故に、殊更コンモン・センスを重んじたるものなるべきかと付言せし次に、又話ありし後同君は専門家にして活事業をなすものはみなコ

ノンモン・センスあるが如しといへり。(二月廿六日)

四、学友諸氏の人物 一

学校同級生の人物に関して長与君は曰く、田中不二君は抜群の秀才あり、弘中、河村両君等の及ぶ所にあらず。然れ共只今の所余が目より見れば高橋徹君には比す可らずと考ふ。弘中君の才には時々驚くことあり。村沢君は級中の滑稽家なれ共人物とはいふ可らず。河村君は驚く可き勉強家なり。西浦君は当今級中人物の一人ならんか、之を要するに当時にては我級に非常の人物は先づなしと余は見る云々。

以上は二十九日の同君郵書より抄録せしものなるが、元来同君は余が真友と思へるもの一人にして望高く慮深く才あり智あり、性純粹にして兎に角有望の一青年なるが如し。唯少しく神経質なるが如く為めに動もすれば架空の想像を画くことがあるかと思はる。君はナポレオンを好む。(二月三十日)

五、余の性質と職業に関する一話

一月三十一日真友仙舟君を訪ひ、帰途君と共に徐歩

訳したるが如きは、当時医学の泰斗といふに足る。又十有余才より六十余才日々耳聞目撃のことを記し、筆を採て曾て倦まずと謂へらく。蓋し余の処世余録の如きものならんか。——其記事の表現は措き目的に於ては。(二月七日記)

七、決心

決心は真に為し難きものなり、否決心するのみならば容易なれども此を守るの難きなり。余は嘗て数年来の悪癖を一掃せんと決心したるにも拘らず、漸々当初の気概を衰はしめて、又々此頃に至りては日々規則十二に反すと記せざる日の稀なるに至れり。是れ実に自制克己の精神に欠くる所あるが故にして、猛省一番大いに警戒を要する所のものたり。適々昨日○君と談話して△の風評余り宜敷からざることを聞き、青年の心は風の心なりとの諺、誠に人を欺かざることを知ると同時に自身の自省に於ても亦其度の鋭うせざるを得ず。因て更らに×の出ぬ事は×の多量のいふと同様なることの理由を以て益々自ら制するの決心をなし效に自身の良心を相手として誓約するものなり。然れど

す。君曰く「君(貞城)は商業が望なりとの話なるが、もし僕の弟に君の如き人ありとすれば、僕は其業を止めさせんと思ふなり。然れども他人の望は変ぜしむること能はざるものなれば唯僕の考へとして参考の為め云ふのみ。尤も会社の如き規則立ちた団体を支配するには適當なるやも知れず」云々と、余曾て伯父松尾有一氏に答へて、「然です。僕は株式とか米とかの相場にはいつて大もうけを一度にするといふ様なことは出来ないでせう。然し実着に徐々に正直と勉強とによりて進んだならば、或は有数の豪商となるかも知れん。」と自慢せし事ありし。思ふに仙舟君の考へも大方ここに帰するならんか。唯余が豪商となるならんは同君の関する所にあらず焉阿々。(二月一日記)

六、林洞海翁

翁は此頃逝去したるが、時事の記する処によるに翁高齡八十四にして没す。翁は幕末の名医にして夙に長崎に遊び、洋医を学び幕府の侍医となりぬ。維新後皇太后陛下の侍医となり医学界の爲めに尽くす処少なからず、殊に幕末時代に於て已でにワートルの薬性論を

も余に此を防ぐの方便として、小新聞の雑報、小説本等を見ることがやむるは望ましからず。何となれば此等こそ世間の有様を知り、コンモン・センスとして価値ある事と思へばなり。(二月十五日記)

八、食塩を清国に輸出することに付て

此頃村田保氏は一片の建議案を貴族院に提出したり。其理由といふを見るに、我国食塩の製産地は一府卅二県に亘り、現在の反別は七千四百町歩にして、其産出高九百余万石に上る。而して更らに開墾す可きものにして已でに調査を経たるもの三千町歩余に及べり、因て仮りに此等をも産地と見て現在の産出高に割合はし計算すれば、反別は一万四、五百町歩、又産出高は一、千四、五百万石となる。然して更らに製法に改良を施せば、其一倍半以上即ち二千二、三百万石以上に至る可し。又我國の需用は凡そ五百万石なれば、余の一、千七、八百万石は残る訳なり。而して尚詳細に調べて産地をます時は三千万石以上を出すも難きあらず云々となり。(二月十五日時事)

九、雨竹夜談(余の天資、經驗は何事にも必要なり)
二月十七日夜、雨竹子を訪ひ談話二時間余に亘る。

其間余の天資につき子の曰く、君は充分に臨機応變の才ありとは思はれず。故に商人として投機的の利を占むるには少しく奈何がはし。されど其才も丸で無しといふにはあらず。即ち或る一事業、例へば絹なら絹といふ商買にて今度朝鮮へは如何なるものを出さば利あらんとか云ふ丈の機に投すべき才はある可し。唯々一定の商品なり。唯時と場合に從つて大利を博するは難しと云ふなり。故に之に加ふるに君が正直、信義、精密及び統率力を以てしたらば、規則的に定められたる会社若しくは銀行の如き業を取らば、其腕を最も敏に振ふことを得んかと思ふなり。然れども若し僕をしていきなり君を論ぜしめば、先づ文学者といはん。尤も之が根拠を問はれんには答ふべき由なし。是れ唯何となくしか感ずるのみなればなり。要するに君は人間を相手とするの人たらん云々——余は又子に對ひ君を以て余が論をいはしめば教育家といはん。是れ君の緻密なる性質は無姓空漠の哲理を研究せんよりは寧ろ僧侶又は教師となりて衆人を教化するに適せりと思へばな

り。——余曰く、T・S君は中々気節あり。子曰く、然り中々人物なり。唯今迄かくし居たるなり。

子曰く、M・N君は此頃甚だ様子変れり。

子曰く、人は何でも為て見ねばならんものなり。君は寄席へ行きたることありや、義太夫、新内を聞きたりや。一膳飯を食ひたることありや、都々逸、二上り、三下り、小うたを知れりや。吾人コムモン・センズを養はんが為めには之等も必要なり。唯々牛肉屋、ぐらいのことにてはだめなり。唯々必要なるは此等の下品なるものを見聞するに當り、身中にこれと定まりたる不撓、剛強の見識あるを要するのみ。余は女郎屋を除けば此等の所へはすべて経験あり。女郎屋の経験はあまり極端なる可し。中島先生曰く、何事にも人の注目する所には經驗をなし置けば利益ありと。(二月十九日夜誌)

十、成功の秘訣は其境遇の教育を最もよく受くることなり。即ち商店にあらば其商店の事柄を覚え田舎にあらば田舎の事がらを学べし。別に境遇以外の學問を学ばんとして能はざるを嘆ずるは迂遠の至りならず

や。空なる将来を妄想するなかれ。徒らなる過去を顧みるなかれ。目下差し迫りたる運につきて汝の福分を求むべし。斯くして歩一步と進まば其惠福も無限なりといふ可し。(國民)

十一、杉浦重剛曰く、青年が立世の方針を定むるに當り則る可き要点二つあり、即ち人々の嗜好と社会の需要なり、故に學問を畢生の目的とし、収入の多少の如きは論ずる所にあらず。余は寧ろ時機に遅れず、早く社会に立ちて実地に取りかかることを望む。(少年團)

十二、余が本年一月中の反則は一条が一、三条が一、四条が二、十條が三、十二條が五、合計十二、差出郵便十件、受取六件、友人往尋六件、同來訪九件、学校は悉皆欠席、食事にパンを用ゆ。

十三、定紋に陰と日なたとあり。例へば、白く染抜紋はひなたにて線紋はかげなり。

十四、日濠關係、二十四日の時事新報寄書欄に、東京

商業會議所議員吉佐移民会社社長、佐久間貞一氏の「濠州線と孟買線」と題する論文あり。其一節は海国日本の盛衰は航權伸縮の如何に在ることなれば、航路擴張の必要なるは勿論なる可し第四議會の政府提出航海奨励法案当期の航海業伸張に関する建議案の精神も之にあることにして、余の最も賛成する所なり。さて之につきての三要件といふは、海員の養成、船舶の保護及び航路の擴張なるが、今余は前二者を措きて航路擴張のことにつき一言を陳ぜんとす。抑々此擴張すべき航路は目下我國に於て三つあり。欧州線、アメリカ線及び濠州線是なり。此中余は最後のものが最も時機に投じ、且つ國富増進上利益あらんと思ふ。其理由は欧米兩線には競争者あるが故に、今此に向て開路せんと欲せば、政府より受くべき補助費甚だ大を要し、從つて目下軍国多費の時には不都合少なからず。濠州線に至りては未だ之なしと雖も、早晚開通す可きの儀は欧州実業家中に已にありといへば時の遅速に於て大に便否を異にす可し。第二に濠州は地味豊饒、沃野千里の地なれども、人口寡少にして労力の價格高く為めに資本家も之を利用すること能はず。其地味豊饒なる実例として

クインズランドに於ては百エーカーの土地を借りて之に甘藷を植ゑ作れば一ヶ年收穫三千屯に達す。該地時価一屯十三志とすれば此価は千九百五十磅なり。此中通常土地借料として、一屯につき一志を払ふにより三千屯ならば百五十磅を払ふ可し。又運送費、耕作費其他一切にして一ヶ年千磅を要すとすれば九百磅は純益なり、以上は実況に通ぜる人の話なれども、農産にかぎらず金銀其他何につきても同様なり。而るにも拘らず其人口は三百十八万余なれば、二百九十四万四千余哩の面積に対し平均一人強なり。顧みて我国情を察するに人口漸々増加して生計の道日々困難ならんとし、労力は充分に余りあるにも拘らず、資本の供給に至りては豊富なりといふ可らず。而して自今我植民地の候補者たる伯良爾留、墨其古の如きは労力と共に資本を要することなるに此濠州に至りては、資本余りあり、唯々労力のみを要するが故に我国に最も適せりといふ可し。斯くいはいはば遂に支那人の如く放逐の運命に立ち至らざるべきやといふ人もある可けれども彼國にて欧州労働者を使用する事は到底不能なるに加ふるに、其策士は早晚機を見て独立を謀らんとせるにあら

ずや。又彼政治家、実業家にして、我新興國を見て親交を結ばんと彼より求め来るものも多きにあらざや。先頃、我國に來遊したる濠州紳商ダイヤー氏の如きも日濠償還貿易のことを説けり。即ち彼の粗生品を取りて我の製造を加へ、以て各国市場に供給せんとするなり。是れ一日も早く濠州線開通の望む所以なり云々。(論文は以下次号なれば、此段は日濠の実業的關係を説けるものならんかと思ふなり。二月二十四日、貞城)

十五、青森港は浦塩斯德港を去ること僅々四百廿海里にして、我國本土中最も同港に近き港口にて年々輸出の米穀二十万石、露領沿海州に出稼する漁夫の數七万なり。(議會議案)

十六、支那の面積は八十五万方里の中に食塩を産する地は本部にて直隸、山東、江蘇、浙江、(以上海水より取るものにして結晶は釜にてせしむるものと、日光によるものとあり)、山西(概ね地塩)、四川、雲南(井塩なれば煮つめて作る)、福建、広東(海塩)の九省のみ、統計不十分なるが故に、精確ならねども大凡九

百万石余(我日本の産額と同じ位)なり。されど之も私製品を合わせば恐らくは此二倍に上る可し。其品は甚だ悪く、上等も我国の中等より下り、下等に至りては砂などを混せて量を多くせり。みな風色又は赤黄色にてきたなし。又其税は高く一千四、五百万円に上る(同國政府歳入は一億三千万円)。従つて価も一石につき二、三元より高きは十余円にて、或土地にては米と同料にて交換するといへり。(兼田代議士意見)

十七、Brazilは余り強盛ならざる共和國なれども、元來欧州人の移植せるものゆえ、日本などは輕蔑して裸體、洗足の國と思ひ居たるもの多かりしも、此頃日清戦争のことを聞き、其文明に驚き、尊敬し、直ちに日本と通商条約を結ぶ可しとて、使節已に欧州を経て日本に向へりと在 Brazilの邦人より通信。(二月二十七日時事)

十八、日本気象学会員野中至氏は夙に富士山上に気象台を設けんと思ひし人なり。先づ自ら山頂にて越年したる上、人身に害なく冬期と雖も住居に適することを

証明し、而して後に天文台のことに及ばんと企て、去る二月十五日單身登山して、雪及び風力の模様を観察せしに、温度は摂氏の零以下十八度(即ち華氏の〇度)にて、雪は余り深からず所々岩石の頭はれ居るもありたり。因て此夏より小屋を作りて食料、機械を用意し、五、六年間経験する筈なりといふ。(二月廿七日時事)

十九、衣服を作るの要件は、下の丈、巾等を知るにあり。襦袢は之に準ず。

- ゆき 一尺六寸五分(七寸五分)
- そでぐち 六寸五分(七寸)
- たけ 三尺一寸五分(人による)
- そでたけ 四寸(三寸五分)
- うしろ 七寸八分(八寸)
- えりした 一尺五寸(七寸)
- まへ 六寸(五分)
- をくみさがり 五寸(五分加ふ)

以上余が衣服によるものなるが、大人のは括弧内の如也。(二月廿七日叔母より教)

廿、福井県の羽二重 元來同県にて斯業を起したる瀧
 鱈は明治八年の事にして、当時伝習生二名を京都二条
 河原町に遣りたるが其帰るに及び、仏式ボタン機を
 買入れて傘地絹を試織し、翌十年一会社を起し、それ
 より漸々進歩してハンカチーフを産出するに至り、十
 八、九年に至りては機数二百台あるに至れり。されど
 も此頃は尚ほ販路其地に於て不如意の件少なからざり
 し。二十年に至り桐生より羽二重の織工を聘して、大
 に進歩を見、今日に至りては本邦輸出高の十分九、即
 ち五七一九三疋、五〇七六一二七疋は同県より出で
 たり。(これは昨年之事なるが、昨年の本邦羽二重総
 出額七百二十五万円) 原料は県下より出づるもの一割
 七分五厘、他県より来るもの八割二分五厘。此はみな
 横浜より買入るゝなり。而して販売先たる米國は日清
 戦争以來、益々本邦品の需要を増したれば前途は愈々
 多望なりといふ。(二月廿八日時事)

廿一、余が志望の大方針 はいずれにあるや。半夜人
 靜まるの後、黙言端坐して思のままの点に運べば、殖
 産の事業によりて身を起し、温厚篤実なる一紳士とし

入り、毎月一回位は之に出席する事を得、大に歎び居
 りしに、十月に至り、又々家の都合あしくなり、余は
 外出不如意の身となりしたため今尚ほ学校へさへも出席
 する事能はずしてありぬ。然るに余は亦十月頃より甚
 だ少しの閑を得て鵜沢玄君を訪ひ、談話せし間、同君
 より友愛館撃劍場の事を聞き、いつぞ余も稽古をなさ
 んものと思ひ居りしに、此頃に至り許を得、三月六日
 直ちに鵜沢君を訪ひてしないの事を頼み、又間宮氏を
 訪ひて稽古の事を依頼し兩三日中より出席せんと定め
 しなり。余は今此項を記するに当りて友愛館の事を筆
 にせざる可らず。抑々同館は旧山井先生塾舎の道場を
 以て充てしものにて撃劍の道具を備へ、邸内有志者の
 稽古に供せしものなるが、其教師としては間宮、岡本
 兩巡查及び井出氏にて、間宮氏は少より斯術に上達し、
 曾て台湾の役に兵士として従軍したる事あり、現に撃
 劍の事に於ては三段の地位を占め居るといふ。然るに
 邸外よりも教授を依頼するものありて、今にては合計
 三十余名の生徒を有するに至れり。(当館は其後相友
 舎と改めたり) (三月七日記)

て一世の手本となるにあり。其他公共事業を勤め、円
 潜なる家庭を形り、金満家となる如きは之が枝葉なる
 可し。(二月廿八日記)

廿二、余が先二月中の反則 は十二条七、四条一、十
 一条一、都合九件なりし。友人の來訪は二回、往訪は八
 回、來信はなく、通信は一回なりし。(三月二日記)

廿三、撃劍稽古を始めたる事

余常に思へらく、方今或種の書生輩が故更らに粗暴
 の服装をなし、空大なる議論を弄し放歌して往來を横
 行するは嘗む可き事にあらねども、彼等が体育を重ん
 じ徒らに机卓の上に踞踏たらざるは賞するに堪へたり
 とても、実業といふのみにして体のやせるを知らざる
 輩の及ぶ処にあらず。而して又、彼等が外人を嫌ひ、
 耶穌教を惡むが如き癖あるは、余輩固より反対なりと
 す。兎に角余は青年が体を養ふは甚だ必要なる事と信
 じ、一昨々年來常に機を見て、水泳、漕艇を学ばんも
 のと心掛けしが、恰もよく昨年三月頃余は少しく閑を
 得るに機ありしかば、当時学校にありたる艇クラブに

廿四、頃者新聞紙は伝へて曰く、威海衛の攻撃に際し、
 一美人の走せて我軍に投ずるものあり。樋口大尉とい
 へる人、折柄此軍に長たりしが、直ちに道を教へて戦
 線外に出でしめしに又行く事少許りにして、空屋の中
 に泣声の聞えしかば之を伺ひしに、果して一小童を発
 見せり。此時大尉は捕虜支那兵をして之を戦線外に運
 ば、汝を許さんといひければ、兵は大に喜び負はんと
 欲すれど童子はきかずして大尉に尚々なつきけり。大
 尉之を見て、すつるに忍びず、乃ち左手に赤子をかか
 へ右手に劍をふるひて兵士を指揮せりといふ。余おも
 へらく、是ぞ日本固有武士道にして、西洋の文明諸
 國といへどもかゝる義俠仁慈の軍人はあらざるべし
 と。

廿五、支那種陸稻(おかぼ) の試作は一昨年農務局よ
 り府下の農会に下附されしにつき、各地にて試みしに
 最も劣等なる地に於て最も好結果を奏せり。今高井戸
 村に於てなせしものを左に記す。(土質は礫土、一反
 につきの事と知る可し)「かくの如き利益あるおかぼ
 從來我國になし」

1、小作料	150
2、種四升	20
3、第一肥料	240
内、ぬか十二貫目	100
醬油かす二石	100
堆肥人尿二荷入着子	40
4、第二肥料(鱒かす四斗)	100
総計	570

此收穫高支米 一石八斗二升七合。

(以上二月三月七日記)

○—海陸軍費 は一ヶ月に陸軍九百万円、海軍百三十六万円都合千三十六万円なりといへば、一日には三十四万五千三百…円なり。誠に巨額の数字といふ可し。

○—日本流 我海軍水雷艇を以て清国北洋艦隊を威海衛に殲滅せしむるにや。其後日某独乙人來たりて我艇員に問ふて曰く、此程の雷撃には何国の式を用ひしやと。蓋し彼其独乙式たるを知るが故なり。答へて曰く、式は独乙式なれども其使用法は日本流なりと。問ふもの為めに呆然たり。此話は實に余輩の意を得たる

り。蓋し氏等は余が行動上の如くなる上に、ボート若しくはベニスボールの如き体育の方向には少しも意をむけざりし(これ時間を多く要すればなり)、を見て二郎(従前余は純粹なる小供なりしかば、彼等は家兄の呼ぶ如く余をかく呼びぬ)は此頃因循になりて、本ばかり読んで居やがると思ひしなるべし。此時余は唯心中に彼等失敬なる事をいふものかな、然れどもぼーさんなる彼輩は同邸内にありながら、余の境遇を洞察する事能はざるならんと思ひ、笑ひてすませしに、先頃其中の一人は余に逢ひたるに、君の母堂はなほわるきと聞けりなどいひ居たり。又此頃其人はちと遊びに來たまへなどとしきりに余に向ひて好意を表するが如し。此他某々氏等の邸内友人は始めより余が事情を知りて、時々逢ふ事あれば、従前よりは余程尊敬の色あり。此頃擊劍を始むるに至りては、みな親切に又少し敬の色を以て余を遇せり。今此時に當りて余が従前の不信用を取りかへすには、第一物をわすれずしてより注意する事、第二言語に於てあまり狎れ狎れしきにすぎざる事等必要なる可し。(三月十五日記)

ものといふ可し。即ち日本は文明と共に生命ををしむの情を進むれども一旦緩急あるの際に至りては、復た之を顧みざるの義勇心あるものにて、此心はまた文明と共に進むなり。(三月十五日)

○—日本魂 平素氷炭相容れざるものは耶蘇教と仏教より甚だしきは稀なり。政府党と民党とより激しきは少なし。然るに政界の争鬪は臨時及び第八回議會に於て少しも行はれざりき。然るに此頃きく所によれば戦地に派せられたる耶、仏兩教の慰問使は相親みて平常の反目に似たる行少しもなく、只管慰問に余念なしといふ。是皆日本魂の発したる形にして、是ぞ我大和民族の本色なる可し。

○—Buxton 氏の格言 氏が讀書につきての格言中「Never to begin a book without finishing it」といふ節あり。余は此を「Self-Help」中に見て大に感ぜられたり。

○—去年の春頃なりしならんか。余は家の都合にて学校の他は外出する事甚だ稀にして常に家内にありて讀書などなし居りしかば、顔色等も衰へしなる可し。此時分、友人某氏等は失敬なる言を以て余を嘲笑した

○—去る十年西南役には 軍の負傷一万二千余名、戦死四千六百五十三名に及びしが、此度の征清軍にては、去る二月十日迄の戦死者は五百四十二名にて、其後の分を加ふるも七百内外なり。(三月廿四日)

○—李鴻章氏の負傷 につき余は第一に如何なる感情を起せしや、余は實に思へり。あゝ彼兇漢は日本の名誉を毀けたりと。何となれば今西洋の諸国が日本は文明強國の中に仲間入りせんとなし居る所なるが故に、少しにても悪き事あればさまで咎むるにたらぬ事までもやあ虐殺だとかやあまた文明の皮をきた丈で身は野蠻だとかいひてしきりにけなしたがる時にて、これもやきもちといふ人情なれば致方なしとして、吾人当人たるものは充分に戒心して之をいはれざる様にしてこそ本當の日本民族なり。然るに彼は敢て此心掛…巴でに輿論となれる此心掛をもそのけにして此様な不都合千万なる事を仕出かすとは、第一李君にも氣の毒なりし。実以て欧州人に日本をまだ開けずといはしむる種をつくるといふものなりと此様に思ひたり。而るに翌日になり新聞を見るに、世間の諸団体等も余と同様の感情をもちて之を表明するために慰問状を送るも

ありとか。してみるといよいよ兇漢は輿論に反したるものなり。(三月二十五日)

○余が趣味ありと思ふものはなにか、それを一々挙ぐれば下の如し。

地理、経済、及び倫理の研究……読書、考察、調査、実験(旅行の如し)

人と談話する事、散歩、小説を読む事、好文章(わかりやすき)を読む事、新聞雑誌を読む事、統計表、ポート、撃劍、処世余録。(同)

○高橋繪四郎君の忠告、君は人のふざけを本気に受け取る事多し。「別に害なしとは君の御世辞のみ」(同)

○西浦美次君の忠告、君は美術的思想に富めり。(同)

○自分が成可く速からんと思ふ人には、成可く質問様の談かけをせざる可し。尤も先きの氣を損ぬぬ為にせば、充分注意を要すとは自分の考へにて頃名倉、賀嶋二氏に逢ひて思付きたるなり。(同)

○三月卅日正則学校第一回卒業式に於ける諸先輩の演説の要旨、並びに諸氏の演説振りを記する事左の

如し。

先ず第一の神田校長は卒業の喜びを話したる後曰く、官立学校の特徴は徴兵期を延ばすにあり。而れども私立中学校にも自ら取るべき所あり。そはいかなる事かといふに、凡そ物事はお役目としてやるならば、立派な事の出来る事はなきなり。然るに官立学校に於ては其教師は官員なり。即ちお役目としてやるものなり。而して教育なるものは凡百の事物中最もお役目ならざるを要するものなるが故に到底其神髓たる精神的薰陶は行ふ可らず。されども私立学校の教員は悪俸給又は些少の給料によりて、自ら進んで其事に当るが故に効力甚だ多し。且つ我校の如きは、只々一の学問知識を教ふる所にはあらず。智、体、徳三育の上に於て完全なる家庭なり。又我校は規則を以て生徒を制する事を好まず。始め他校より入りし人々の多かりし時は、随分校内もあれて居たれども今となりてはかかる事少しもなし。而して何々すべからずといふ札は一本もうたざるなり云々。諸君に於ても充分にこの所を弁へてもらひ度し云々。同氏の弁舌は話の如くなれども静かにして甚だよく分るなり。次に外山正一博士は例の

如く質朴にして余り新しからざる洋服を着て通常の話の如く話しかけて曰く、此頃黒死病の瘡見あり。又日清事件あり。皆我國の好成績なるが、これ等は我邦教育の進歩を示めずものなり。余が観察したる所にて、昔は兵士が何となく兵士らしくなかりしに、今は拳動に於ても、品行に於ても大に兵士たるに背かざる有様となりしはいかなるものかと、或る当局者に問ひしに昔は単に機械的の教育のみを用ひしが、今は大に精神的教育を用ふるによる事与て力ありといふ。実に精神教育は大切なものにて之なくばたとひ日本人が天性頓智あるにもせよ此度日清軍に於て顯はしたる如き結果は望む可らざりしならん。斯様に日本の教育は進歩したる事なれば、諸君は我々より見れば実に好運なり。故に充分にこの完全なる教育を受けられん事を國家の爲め切望に堪へず。次に渡辺洪基氏はやはり派出ならざる服装にて訥弁に演じ去りたれば其真意のいづくにあるやよく分らざりしも智、体、徳三育の中にて最も必要なるは徳育なり。封建時代には君臣の分よくとのひて主従関係の如きもまことに義ありしが、今日は然らず。僕はやとひ人、主人は用役人といふ丈の関

係になり来たり。これは王政古に復りて一天万乗の天皇陛下の他はみな臣民といふ事になりし結果といはんか。さらば学校の組織につきて教員は唯学問を教へる爲めに雇はれたるが如く、生徒は月謝を出して学問を買ふといふ丈になりしは何事ぞ。余は此事なきを望むといふにありしが如し。氏の音声は低きが故に聞えざる所もありし。次に木場貞長(文部省専門学務局長)氏は曰く、中学校教育は学問の將た実業の基礎にして苟も事業の大を望むものは此程度の教育を受けざる可らず。故に此を卒業したるは真に名譽なり、えらき事なり、賞讃すべき事なり。さりながら未だ日清戦争にていはば平壤を取りし位なれば未だ容易に慢す可らざるなり。然るに我々共は今までに於て中学教育を終りし時程えらいと自ら思ひし事はなかりし。これは丁度自慢心の起り易き時季なるが故ならんか。兎に角諸君に於てこれに慢し終るが如き事ならん事を希望す云々と。氏は金縁の眼鏡をかけ、長き髪は少し偏して分け、フロック・コートを着、時々手を胸の両側にさはる様、少しきどる方にて一見才子氣あらんと思はる。然れども弁舌明亮の方なり。(三月卅一日)

○—当三月中の余が反則は七条一件、一条二件、十二条四件、十条の二、二件、訪友十二件、通信二件、来信二件、撃劔出席十五度、入浴九度、理髮二度、読書は毎日の時事新報、都新聞、田尻博士著経済大意、同氏著経済学応用新論、同氏著二十年來経済世界の景況、吳氏著實際統計学、中隈氏著経済原論、古き経済雜誌、日清戦争画譜(英文)、中外英字新聞研究録四号、太陽三号等なり。(四月一日)

○—誰でも知りて居る様な事にて中々面白くないひぐさあり、例へば甲が、「君絵米といふ人は正六位だねー官吏も正六位ぐらゐなところになると中々いいねーといへば乙が、「君は位がそんなにすぎかい。そんならお稱荷さまになるといいぜ。とひやかすが如き、又「此雜誌はいゝな論説はみな博士だね、やあ外国のドクトルもある。といふものあれば、「うむ、そーさまあ肩書の比べつこかね。といふが如きは俗界に坐して、俗界の大勢を諷刺したる大金言といふ可し。又俗界の故事、熟語ともいふ可きは、唐人の尻(からつけつ)の如きあり。此他は今一寸考へつかず。

○—「Museum」に下の如き詩あり。

“Heads and Heads,
There's heads and heads and heads,
Long heads, round heads, and fars;
Some heads are made to carry brains,
And some just carry hats.”

“What a tasteful poem!” I thought.

○—人の性質は其面の様々なるが如く、種々雑多のものなるが、余が此頃観察したる一種は余程奇体なり。即ち情の甚だ強き人にて其行動はみな情によりて動かさるるなり。先づ一寸した話が哀憐す可き小説を讀んでさへ涙をこぼし、朝よみしものならば昼までも、晩までも、「あゝ、かはいさうだ」といふ事幾度なる事を知らず。又同様に面白おかしき話をきけば大に笑ひ(思ふに此時は心胆の鼓動を自分に覚ゆるならん)それをいつまでもおもひつづけ遂には夜のねむりをさまたげるにいたる事さへありといふ。かくの如くなるが故に其の人を信する事深しとすれば其人のためには自分の財産一切を質に置ても尽しやらんと思へる処に、又他の一人ありて、いやあの人はいかゞの事ありなどあし様にいへば、ただちにかつと立腹して、こ

れはけしからんと唯々一筋に其人をにくむなり。この時に至りてはいかなるものも此人を誘ふ事能はず。即ち一度さらはるれば其疑はるゝまではいかなる財物を以てするも、待遇を以てするも此人をこちらの組にする事あたはず。此種の人は女性に多きが如く、之を待遇、処置するには余程の注意を要すべし。之を使用するも同様なり。余は現にかくの如き人に毎日接しつゝあるなり。此種は随分世間に多かるべしと思はる。

○—人が処世の時に当りて、最も要する事は観察の才(Ability of Observation)なる可し。よそのものごとを正しく観察、判断すれば、其行ひに間違なき筈なり。それにはよく(Common Sense)を養ふに注意する事肝要なり。余は之を学識の前に置く。(以上三件三月九日)

○—我新版図の面積は台湾が330方里余、澎湖其他属島が80方里許り、盛京省はよく分らざれども800方里位、然るときは合計880方里位なれば北海道本島より800方里多し。又

○—償金は二億兩(一兩我一円四十銭許り)即ち二億八千万円なり、而して現今我国にては日本銀行の

準備金七千万円と他全国に散在せるものと合するも、正貨は一億円を出でざれば、つまり硬貨の額が今迄より殆んど三倍だけ多くなる訳なり。(以上二件四月廿日)

○—昨四月中の主要件 反則は一条が四件、十条が三件、十二条が四件なり。友人の来訪せしもの二件、之を往訪せしもの七件、信書を発したるもの一件、之を受けたるもの一件、撃劔に出席せしもの十件、入浴せし事十度、理髮一度、学校に出席せし事十六度即ち無欠席、項外の外出六度、是れボート、相友舎の会合、及び家用等の件なり、数学に身を入れしは此月の特徴なり。

○—余が親しく交はれる友人は下の如し。但し順序は不整なり。(五月一日)

・高橋鑰四郎、長与又郎、高橋徹夫、
・西浦美次、曾山達夫、鵜沢玄次、
岡田友吾、金原東造、松山信二郎、中原英太、
山本喜三郎

(以上の中、或る事情に妨たげられて数々往来する事能はざるものあれども、皆充分余の信する人々な

りとす。

・加藤成一、高山直純、椿亮

(以上の三氏は将来親交せんと望む人なり)

弘中儀一、山崎小麓

(二氏は之を信ぜざれども交際の永きを望む)

以下分類の便を計るために、此帳面には人より直接にきたる事及び自身の実歴考察に関する事項のみを記載し、且つ紙の頁によりて事項の種類を分くる事とせり。

第巻集 倫理事項

元良先生の訓戒

1、物事を知ると行ふとの関係は古来学者の研究したる処にてソクラテスは人に善行なきは其人善の道を知らざるが故なり。事を知れば必ず人は之を行ふべき筈也と説き、王陽明は知れる事は必ず実地に行はざる可らずとの注意を以て、知行合一之論を主張したり。さて、ソクラテスのいひたる事は今日其誤なる事発見

したり。陽明の学に至りては大に取る可し、該学は禅より起源を發し、王氏が文弱の世に生れ、其俗を慨して悟りたるものなり。方今交通頻繁にして、社会の現象は益々複雑ならんとす。宜しく知れる事は成可く実行し得るの方針を取る可きなり。(五月廿日倫理)

2、羅馬哲学者 Cicero 曰く、道徳に四種あり、(1)真理に従ふ事、(2)人に対して信実なる事、(3)小事の爲めに屈せざる事、(4)礼儀を守る事、是なり。さて(1)の爲めには徒らに机上にありて、一部の理のみを考へず、広く諸種の事に注目し、又社会現在の有様を実地に觀察して目的の理を明らかにし、之に従ふ可し。(2)の爲めには唯一概に人を信ずる事を止め、此人は信ず可き人、彼人はしからずといふ事を確かにして、其によりて方針を定む可し。(3)はいはゞ剛毅といふ事なり。決心したる上は瑣小の障害物ありとて屈撓し、再び首を揚ぐる能はざるが如きは取らざるなり。(4)の爲めには礼儀をなして其精神を失ふ可らず。儀式となれば礼儀の価はなきなり。尋常以外の人の場合に於ては、人の意を悪しくせざるを務むれば、礼儀は立ち居るものと思ふべし。(六月十日)

3、輒今人々はみな知識の一方に意を用ひ精神の修練に至りては顧みる事少なし。それ内界の精神は即ち人物の凡人と異なる所以にして、外界の質実はその末なるなり。是を以て本邦の蕃山は学問の該博なる点に於ては、時世の然らしむる処として、現今の欧州諸学者に劣ると雖も識見の潤大なるに於ては未だ其比を見ざるなり。故に此は彼よりも人物といふべきものなるに非ずや。(六月廿四日)

4、術は教師によりて伝ふる事を得るも、人材は自身に養成して成るの外なし。(七月八日)

5、心親切にして、言語挙動は質朴なれ。是れ人に対する礼とす。(仙舟見聞録)

6、信といふ事は個人間の私徳上大切な事にして社会的公徳なる忠と相對応するものなり。さて、友人として交際したる人はどこ迄も其心得にてたとへ其人の不徳をなすとも之を諫めて改めしむる工夫あるを要す。又約束したる後にて、不都合生ずるが如きは悪しき事なれば、約束は初めより余り確かにせざるをよしとす。(十月七日)

7、人生最も貴きもの三つ、身体、財産、及び名譽

是れなり。而して此三者は最も犯す可らざるものなり。故に動物に Self-preservation の性質あり、困に生命、財産保護の法律あり。以て前二者を守り、又人の名譽を毀くるものは道徳上の罪人なり。又此三者の欲を遂げんには、宜しく平均なる可し。又名譽欲の濫用を制せんには二途あるのみ。一途は全然之を棄つるものなり。此れいふ可くして行はれざる論なれば欲を大にし、広くしてその高尚の性質を失はざるを宜しとす。(十月廿一日)

8、友人と金錢の取極をなすは極めて精密なれ。一錢一厘は瑣事なり。而かも金錢に勘定精密の習慣は人生処世の要訣なり。

9、夜戸を閉ぢざる者は盗人の決心を堅くするものなり。断然たる言を以て人の惑言を却くる事能はざる者は、其人をして誘惑の心をさましむるものなり。人を詐くは悪事なり。而かも人に詐かるゝもの亦人をして悪事をなさしむるものなり。(十一月十八日)

10、人を服するに權を以てするもの最下、理を以てするもの中、情を以てするもの最上、然れども情は常に従ふべきものにあらず、時々理に従ふべき必要あり

ばなり。(同)

11、孤立主義は人生快樂の八分を失ふ。(明治廿九年一月廿七日)

12、人苟も一事業に従はば正に婦女の嫁せしときの心を以て心とし。一生餘る事なきの覚悟なかる可らず。(同)

13、知行合一につきての注意。

一、知りたる事は明亮になすべし。

二、知らんとする事は唯其事を知るのみならず、

凡ての關係を詳にすべし。

三、実行し得べき事と、実行し得べからざる事とを區別すべし。

四、旧習を破壊して新生活を得べし。(二月三日)

14、知りたる事は必実行し、得べからざる想像はせざるをよしとす。(同)

15、人は五十年の人にあらず。一寸の肉、一滴の血も測る可らざる古の先祖より伝へられしもの。而して其一挙手一投足は亦測る可らざる後世の子孫にまで影響するものなり。人生豈輕んず可けんや。(二月十日)

16、知識は經驗と書籍とより来る。蓋人生五十年に

欲望の事を研究せざる可らず。然るときは其問題は倫理学に關し、従つて心理学的討查を経ざるべからず。今余は是につき充分なる研究を経ざれども、尚將來研究の方策ともいふべきものはあり。夫れ欲望は五種に分つ事を得べし。(1)生命の欲——消極的。(2)肉體の欲、即衣食住其他の欲。(3)權力の欲、即自由及び積極的權勢を含むもの。(4)名譽の欲、即人によく思はれんとする小兒の欲より、功名心までを含むもの。(5)智識の欲、是中にはものを知りて応用せんとするものと、応用するのと否とに拘らず、好奇的に智を欲するものとあり。——(2)(3)以下を積極的とす。而して之等を討究せんには何の欲は何の欲より大なりとか、小なりとか定量的の方法なかる可らず。欲望の單位を取るは甚難き事なれども、日本にては上下貴賤に關せず其食ふ所の米の価は大概一定せり。故に米の市価を單位として他の衣の欲、住の欲等を量る事を得んか。今日余の調べたる所にては、通常中流の生活をなす人にて米の価と副食物の価とは同じ位、衣服の価はその四分の一位なり。

全宇宙を知り尽す事能はざるを以て、先人が遺す所の

書籍により、何千年の經驗を数ヶ月に知るなり。唯經驗にのみよりて事を知らんとするは迂遠の限りなり。

されど經驗は元にして、書物は末なり。故に書物にのみよらんとするときは、真に不完全なるものとなりたるべし。(二月十七日)

17、天然と人との關係 古人は天然を恐れ之を崇拜して其災を免れん事を祈れり。されど今日は科学發達したるにより、人は天然を研究して、其秘密を知り、却て是を自家の用に供するに至れり。

心理学と経済学との關係 (廿九年四月廿五日神田一ツ橋、大学講堂に於て) 元良先生

今日の經濟学者は Value in exchange のみを取りて、之を研究すれども Value in use 即某なる物は人類の欲望を満足せしむる上に於て、即ち其 use に於て何程の価値あるやを經濟学以外に置くもの如し。されども實際斯学を完全に研究せんには是非人類の

諸先輩の訓戒

1、家兄曰く、学問をなしたりとてそれを悉く実地に応用せんと思ふ可らず。あれは精神を養ふ為めにやる事と思ふ可し。

2、神田先生曰く、学問は事實を覚える為のみにならず、重もに心をねる為めなり。

(兩者の言よくも似たるかな)

3、家兄曰く、書生の中はあとさきの考なく、一番いゝ着物をきて錢を勝手につかつてえぼつてゐるが、社会へ出て見ると一錢の錢もむだにはつかへない、へぼ官員が弁当さげてあるいて行くのも笑はれないもんだなあ。

4、神田先生曰く、英語は口と筆をつかふ事が出来ればそれでいゝんだらう。それを此頃の人達はむずかしい本を読むばかりに身をいれてるのは実にこまる。ゆうべも高等中学の試験問題をみましたがね、それや一丸でなぞでもかけれる様にはなした。あれじや一昔の漢学者がめんどうな字義なんぞしらべてばかり居て、支那人の話はできず、殊に六すつば漢文のかけなかつたと同じ事で、なんでもあゝいふ方にむいては、

どーもけんとうがちがふね。云々

5、神谷豊太郎氏我校を去るに臨み、一時間の閑に
より吾人に一の心掛けを残せり。そはすなはち下の如
き事なり。或書生あり、いへらく。どうもおれは教師
のいふ事がわからない。脳でもわるいかしら。然し此
人は脳がわるくはなきなり。実は学問を秩序的にせざ
る故なり。学問の中に、殊に数理の学は順序を正し
て始めから step by step に進まざれば到底わかる管
のものではなきなり。又そこで一つ面白き事は目的の
事なり。これにつき私の考へでは、遠大なものをこし
らへて置くと同時に、其間に更らにいくつかの小目的
を作り、其小区域に於て一つ一つになし了り行かば遂
に大目的に達すべしといふ事なり。これは恰も体操を
するときには嚮導が先きの立木を目標とするに当り、其
より近き処に一直線上にある石を目標とし置くが如
し。

6、家兄其留守中を警戒して曰く、(1)病人の外出
を禁ぜよ。(2)火の元を用心せよ。(3)人に失敬する
な。

7、明治廿八年最終の校友会に於て、神田先生曰

ければなり。

10、古来偉人、傑士の人の上に居る者、必群雄に異
る所あり。之を例へしに、彼の高祖は算信の兵法なく、
張良の才智なく又蕭何の政才なし。然れども一種美妙
の気品ありて、三傑を巧みに用ひたり。此の如きもの
恐らくは所謂浩然の氣にして、無我の妙想が人を化す
る所以ならん。(松尾伯父)

11、己の意に適せざる人と相容るゝ事能はざる人
は、遂に孤独の姿となり、最終には己さへ意に適せざる
に至らん。如何なる人にもよき点は幾分かあるもの
なれば、其点を利用して、其人を容るゝ事を得る人は遂
に多数の人を化して己其上位に立つに至らん。(松伯)

12、神田先生曰く、試験の成績が受験者平生の力備
と異なるは、精神紛乱するが故なり。胆の動かざるは何
につけても肝要なりといふべし。(同窓会席上)

友人の言(余の思想、行動の事)

1、曾山君曰く、……君の立身上に抱ける観は非常
の利を得るか、莫大の害に陥るかの内にあり。いはば
山氣の考へにはあらざるか。(五月廿二日)

く、我校の校風は英国詩人 Kingsley の一節をもつて
ひあらはす事を得べし。

Be true, and let who will be clever. 実に正直、
信実なる事が第一なり、我々は、決して少年に英敏な
らん事を奨励せず。

8、廿九年紀元節、神田先生曰く、古代東洋の豪傑
は不品行の者多きが故に、少壯者の是に做ふもの品行
の如きは細事として度外に置き、遂には不品行のみ做
ひ得て、大事業はなし得ざるものあり。我々は西洋の
品行よき英雄に倣ひて細心に従はん事を諸子に勸
む。特に Franklin の如きは何人が倣ひてもよき人な
るべし。(先生のこの考は全く余と相符合す。)

9、小浦準三郎氏、(歓迎会の日にて、少しく酔ひた
るが)余に向ひて曰く、子の父上はえらき人なりし
よ、されば我は子が後年えらくなりて、父の子たるに
恥ぢぬ様ならん事を望む云々。

此言……ああこの言……実に余が幼時よりの家庭
教育の基なりき。何となれば母上も、祖母上も、亦
近隣の人も、其他父上を知り、父上の薫陶を受けた
る人々の常に余に教へ、余を励ませしはこの言なり

2、椿亮君曰く、……君は人より親しみ易く、小事
を氣にかけざる、議論に富みたる性質なり。又或点に
於ては、實際の才を欠きたる所あり。之を要するに、
實際家にもなる可く、理論家にもなる可しと雖ども双
方共いくらかの欠点あり。余をしていはしめば寧ろ理
論家か。(五月廿五日)

3、長与君曰く、……彼遂に実業家に適せざらん。
(五月卅日、加藤君より聞く。)

4、仙舟君曰く、……加藤氏は謙讓温厚の君子人な
り。所謂切てまはる(進取的操縦)事に於ては君の長
処にして、氏の短所なり。然れども己を治むる(保守
的自制)、に於ては君却て氏に及ばざる事遠し。故に
氏の行には失敗といふ事稀なり。要するに、君と氏の
性質を比較して式を作らば(△) Less than の符号は、
(▽) Greater than より多からん。(九月廿日)

5、加藤君曰く、……君は或種の人より一見して、
なまいきなる奴と思はるゝ傾きあり。是れ君が真面目
ならずして人をおだて忤する故なり。全体せじといふ
ものは、あまりいらぬ事なり。(九月卅日)

6、加藤君曰く、……人が君をなまいきと見る原因

の一つは、君があまり談笑の際に英語、又は漢語等の句杯を引出だす為めならんと。余は実に此言には感動したり。(十一月二十三日夜)——余は明日より此事に大注意をなさんとす。もし斯の如き事あるときは謹言則の違反として、嚴重に反省すべし。人より受けの悪しきは誠に損なり。

7、河野広一君曰く、……我が学校の生徒を見るに、学科に勤むるものは精神に注意せず、精神を練るに勤むるものは学科を度外視する弊あり。君はまず此弊を脱したるものなるべし。

8、加藤君曰く、……君知つたふりをすべからず。——敬服。

9、河野、加藤二君は余を商業家に適すといはれたるより、寧ろ、鼻毛三寸主義を取りて人の高説を拝聴せん。

一般倫理上の事

1、加藤成一君曰く、吾人が某事を斯々のものなれば、斯々すべき筈のものなりと悟り、之を実際に行ひ

るよりは、寧ろ、鼻毛三寸主義を取りて人の高説を拝聴せん。

5、友人河野嘯月和歌を好む。一咏あり。

なにはがた あしやよし野のしげくとも

ふみゆくみちは しる人ぞしる。

(廿九年一月廿六日)

余と同意見なり。

6、言語は己の徳を失ふに便なれども、失を補ふ用をなす事うすしと、仙舟君の見聞にありたり。(真に然り)

7、或人曰く、世間最難なるもの勉強せんと決せし心を、実行永存するにありと。(こんな事は訳ない)

8、仙舟君曰く、己なすべきをなして人之に服せざれば、亦天なるのみ、命なるのみ。(同感)

9、又曰く、交際の秘訣は温雅なるにありと。(御尤)

10、又曰く、小事に齷齪するは馬鹿の本性なり。(齷齪するのほわるいが、丸で頓着しないのもわるい。)

11、高橋仙舟君交際法を三種となす。(一)磊々落落、(二)敏捷円滑、(三)温厚篤実、是なり。余は勿論

得るに至るまでには、多くは極端の考へより、極端の考へに走り行くも、亦之に伴ひ終りに其中間の適當なる部分を悟るを通例とするが如し。(余思ふ、吾々が成年の後、何の職業につく可きやとの考へを起してより定まる迄には、此経過をなすもの最も多きを見る。)(五月卅日)

2、加藤成一君は正直純朴の士。其考頗ぶる真面目にして、所謂君子人也。一日語りて曰く、学校の科目は必ず下説をなさざる可らず。余曰く、然りと雖ども数科の日課を完全に下習せんと欲せば、在家時間の殆ど全体を費了し、運動の時間を減殺するを如何せん。君曰く、故に時を定め一科につき或は四十分、或は一時間とし、時来るときは日課の全体が未だ終らざるも之を止めて他の科に移り、或は休息し、若しくは運動すべし。如斯する時は勢其人の思想は万遍なく普遍し、中学校在学中には普通学の一般を知了すべし。余此に服す。是れ蓋し最良の温習法なるべし。(九月卅日)

3、河野広一君曰く、回想の結果は唯頭をいぢめるのみ。(十二月卅一日)

4、棒亮君曰く、まじめになつて、高尚な事を論じ(3)を取る。

1、加藤愛国、高橋仙舟にいひける事に、君常に心を正しくするのみにて、嘗て行を正しくせず、されば前後差なし。(ほんとにさうだ。)

2、河野東奥は加藤愛国を政治界に需要ある人物となせり。

3、加藤君、始め海軍機関士を志せしが、後友人等の意を酌み、兵学を取らんかといふ問題を起せり。然るに同君の嗜好は理学と軍人にあり。長処は人を使ふ事であり。故にこの二つの者の何れを取るべきが問題なりき。此時余は君に武官を取れと勧めたり。

自身の考察(廿九年三月以後の分)

1、実業家に必要な件 統率力、経営力、決断力、学問、機才。

2、事をなすには、凡て予算を立つるを要す。(金銭の事に限らず)

3、我々が社会に出でし後の信用は大概専門学校即真ならば商業学校在学中の成績品行にて定まるものな

れば、此時期には大に注意する所あるを要す。

4、之に付大体の方針を定めんに、(1)学校規定の科目は充分に勉強し、且成る可く成績のよからん事を力め、(2)凡て多数人に關係ある事には、容喙する事を避くと雖ども已むを得ざる場合には、大奮発を以て周旋し、(3)野鄙なる事は一切語らず、豪遊の如きは如何なる事情あるも決してせず、(4)言を寡くすれども、行を活潑にし、(5)曖昧主義、左顧右眄主義を嚴禁すべし。

5、余は、はりこに非ず。故に風雨は其意に介する所にあらず、又余は二本の脚を有す。故に車馬は迅速を要するときの外は必要少しもなし。

6、淡白に、正直に、親切なれよ。是精神的真交の秘訣なり。何か遊戯の中一つに秀で、且何にてもかぢり置き、並の言葉を使ひ、平生は真面目にして、洒落は時々出して愛嬌を付く可し。成る丈へり下る可し。是表面的(所謂)交際術の秘訣なり。而して前者は後者の神髓たる可き事勿論なり。

7、定木は千変万化の世態を理する事能はず。

8、世の中にて最良なるは精神病者なり。

9、慷慨する代りに困難を濟ふべき手段を考へよ。後悔はよけれども、いつ迄もくよくくするは馬鹿の至りなれば、改心したる以上は其後再過のなき様に注意せよ。

10、世の中に勉強して出来ぬといふ事なし。出来ぬといひて心配する人は未だ真に勉強せざるなり。天下何事か達すべき手段なからん。吾々は唯此を發見して実行すればよきなり。

11、小事を氣にかけて苦勞すべからず。(そんな事では浮き世が渡れぬ)

12、遊べよ遊べ。寄席にも行け、芝居にも、碁、将棋もせよ。 ترامプ、花合せも、玉突もやるべし。屁もするべし。万事のんきにやらかすべし。唯良心に問ふて愧づるが如き事は一つもするな——遊びは交際の一法なり、神心休養の一法なり。

13、往來で知た人にあへば礼をするのは当り前の事なり。それをしないのは威嚴のある人物にはあらず、変人なり。

14、動作活潑なれば仕事よく抄取り、外見も甚よし。

15、試験前の感 高等諸学校の入学試験を受けんとする人の多くは、汲々として其準備に忙しく、昼夜休む事なし。然らざるも心中恟々落第を恐るゝ事身代限りの如し。余乃然らず。二ヶ月許前より日々少許の日課を履み、今に至りて大体の復習を了れり。故に今日

にても午前数時間の学課を了れば直に外出して親友を訪ひ、或は擊劍をなし、或は散歩を試み、夜亦早く床に就く。謂らく、及第すれば最よし、落第せば力の足らぬ事とあきらめて地方に遍歴を試み、徐に身体の健全を計らんのみと。蕭洒落々光風斉月金波徐に動きて白鷗閑に眠る。(なんだ、くだらぬ自慢よしてくれ)だが実に試験になりて、汲々勉強して、揚句の果に病氣なんぞは不感服極まるでな、それより僕の様にして置けば、ちやんとさらひは出来て居て、身体にも害はなく、試験も自分の力丈は出来る様になりて居るぞ。

(又、自惚か)

16、自惚は確かに余の得意の一にして、又不得意の一なり。

17、事を処するに注意周密、己の為すべきを知悉して、平然之に従事する者、是をノンキといひ、万事不

注意に過了せしめて言蛇的に平然たる者、是をトンマといふ。前者は過誤なく、後者は狼狽、後悔多し。(七月廿二日)

斯くいふ自身はね、注意周到にやると局促に走るし、平々坦々にやるとトンマになるので、何方も不感服だから目下ノンキの修業中さ。

18、余り口の軽きは浅間敷き者なり。

自身の考察(一般倫理上の事)

1、或人はいふ、友人を評するは甚だ好ましからず、禍遂に其中に生ぜんと。余思へらく然らず、其害は甚だ有限のものなり。即ち余り親しからざる人、友人と此種の話しをする時にのみ生ずるのみにて、親友の話中互に学友等を評しあふは唯々其等の人々を知るの利あるのみならず、一般世人の性情を察するの力を得べく、又思想力を養ふの助けともなる可しと。而して余の説に反対するものは、増子君、賛成するものは加藤君なり。其他は知ず。(五月卅日)

2、或人は親に丁寧なる言を使ひ、丁寧にあつかふを以て孝行と思ふ。余之に反対なり。かくする事、固

より悪しきにあらず。華族、富豪はかくせざる可らざれども、通常の家に於て、あそはせ言をつかひ、出入りに毎日只今、行てまいります、と手をつきておじぎをしたとて、唯まだらつこしいばかりなり。それよりは心よりの親愛敬尊の形さへあれば、足をふいてもらふ事もあり、飯をさきへ食ふ事もありて可なり。互に水いらすにむつまじくすることそよきなり。父母に事ふるは難しなどいひて、親に色をかざるが如きは全然反対なり。孔子様のいふた事とて、いいとはいへませぬ。
(七月九日)

3、凡そ吾々が今日文明の恵を受くるは吾々の先輩祖先が勉強、蓄積の結果にして、吾々は之を借用したるが故に後年に此幸福を得たり。さて之を返すには諺にいへる如く、親の恩は子にかへすのほかなし。之には利息をつけざる可らず。是れ吾々が勉強して現今の文明を更らに進めざる可らざる理由なり。(八月十一日)

4、又考ふるに此(3)の理論は歴史を研究して、古人の性行を明かにし、又之を崇拜するといふ順序になりに行くは自然の勢なれば、神道の世界的なるものとも

を有するも人にへつらひ、其人の御蔭によりて不義の利を得るが如きは取らず、又事を高尚にして、深遠なる謀を計り、偉大なる事業に従事せんとするとも身に一銭の蓄積なく、米屋、酒屋の負債に堪えかね、家族をも養ふ事能はざる如きは取らず(九月八日)

7、社会に信用を博せんとするものは、唯正直なりといふのみにては足らず。即ち、前条の各項を供へ、加ふるに、多少の土地、家屋、及び動産を有して、公民権を得、近隣の人に親切なるを要す。而して後、初めて都市の公共議員等を選ばれ得べく、従つて自己の居住地の爲めに尽くすを得、然る時は是れ即ち国家に対して勲功あるものにて、先祖子孫に対する義務を果したるものといふ可し。若し夫れ学校、病院、貧民救助、道路修築其他貯蓄銀行の如き事業に己れの余力をそそぐに至りては、更らに積極の尽力にして最も望まじき所なりとす。(九月九日)

8、人を支配するにはよく考へて、権力と責任との釣合を取るべし。然らざればつかはるゝ人に不平があるが故に、事務抄らず、又つかふ人自身も世話のやける事多かる可し。人に事を托して置きながら、自らの

いふべき宗教が此思想より自然と湧き出づべし。
(八月十一日)

5、此頃の小新聞に一の話あり、兵庫県の某地にて人の頭を煮る家ありとの評判に探偵が調べて見るに、某家の亭主は梅毒に苦しみ居るより女房はいたく心配し、遂に人よりききたる事により墓場より他人の首をほりてきり来り。毎夜煮ては其汁を夫に飲ましめたるなりと。どうやら廿四孝にでもあらんやうなる話なるが、さて余の考へにては、此はやはりいつやら評判ありし女房を殺してそのきもを母に食はしめたる農夫の話と一般、考はよけれども、行は悪しきものにて、實際廿四孝流儀の社会といふ觀念に乏しき教育、とんでもなき変てこな孝行話の教育は害ありて、益割合に少なきものなるべし。(八月十七日)

6、独立といふ事は、第一有形上に於ては、自家の職業又は財産によりて得る所の利益にて衣食住を支へ、家族を養ひ、不義の負債なく無形の事に於ては心に疚ましき行なく、國民たるの権利を剝奪せらるゝ事なく、人にへつらはず、自己の意志によりて自己の言行を支配する事なり。豪奢なる生活をなし、幾万の金

意のままになる様なる事を命ずるが我儘の処置にして、人は心服せざる。以上は実に余の実験より得たる結果なり。(九月廿一日)

9、友人との厚情を密にせんと欲せば、其一法として、己れの家庭の様子を語る可し。人もし彼の家庭を語らば尚妙なり。

10、方今書生社会の弊風、一に曰く、事故なくして車に乗る事、二に曰く、烟草、及酒、三に曰く、食物店に屢々出入する事。是れ経済及衛生上より考察せしもの。(十月五日)

11、仕事をなすに、思ひ出したるまゝ何の順序もなく片付け行くときは必ず過あり、又は抜目あり。故に最初大体の順序を考へ置きて後、一の仕事をなすべし。此時には最早大体の事は考ふ可らず。唯其直次になすべき事を考ふべし。又現になしつゝある仕事に落度なき様注意すべし。

余自身に関する考案(六月廿二日記)

I、学校の課目中絶対の好嫌を分くれば。

イ、好……倫理、英語、地理、動物、作文

口、嫌……画学、代数(これは時に面白きを覚ゆ)
II、楽みとするものは、

(1) イ、散歩、口、談話、ハ、旅行。

(2) イ、新聞、口、好む所の学問上の談、

ハ、探險談、ニ殖産談、ホ、人物論。

(3) 処世余録

III、人物の好嫌

(1) 嫌……権謀家、徒らに慷慨する人(今日の排西洋家の如き)、絶対自愛主義者。

(2) 好……温厚なる人 孔子、マコーレー、徳川家康、元良先生、神田先生。

堅忍なる人 クロムウエル、高島嘉右衛門氏。

空論なき人 福沢先生。

IV、先輩及友人諸君の余に於ける考へ。

家兄 常にぼんやりを戒む。

伯父

曾山君 胆力あれども妄信し易し。

西浦君 美術思想に富めり。

長与君 遂に実業家に適せず。

同君 能く困難に堪ゆ。

高橋君(K) 能力あれども機才乏し。

同君 妄信し易し。

同君 中々切りまわす事上手也。

高橋君(T) 実業家としては余り理屈つぽし。

加藤君 能力、雅量、剛毅、独立心充分なれども機才やや欠く。

松山君 最も拓植家に適せん。

高橋君(K) 何となく文学者らし。

同君 第一流の人物。

加藤君 同

椿君 見識、能力あれども機才乏し。

同君 親しみやすし。

家兄 まだ坊ちやんだなあ

V、IVの諸評に斟酌して自身の自省を記せば。

至誠 良

能力 良 (事業経営すべし)

鞏固 稍良 (人のおだてにのりやすし)

雅量 良 (即妙といふまでにあらず)

機才 可 (即妙といふまでにあらず)

剛毅 稍良 (志のなんとなくよわき所あり)

(敦厚 良

善足の道を知る。

切りまはす力中々あり。

学問するに適當なり。

気がきかず(無頓着)

妄信し易し。

果断の力稍乏し。

物わすれ多し(不注意、燥急)

是れにより適すべき職業。

拓植家

牧畜家

水産家

事業家

通商家

或は会社銀行員

3

VI、朋党表

師事 元良勇次郎先生、神田乃武先生、福沢諭吉氏、

高島嘉右衛門氏、マコーレー、フランクリン、

孔子、徳川家康、クロムウエル。

兄事

家兄、松尾伯父、老人、経験家。

等視(1)

高橋鎗四郎君、高橋徹夫君、加藤成一君、長与

又郎君、松山信二郎君、中原兵太郎君。

等視(2)

椿亮君、西浦美次君、鶴沢文次君、弘中儀一君、

滝村妻夫君、岡田友吾君、曾山達夫君、山崎小

麓君。

弟視

高山直純君、山本嘉三郎君、金原東造君。

常に心掛けよ!

1、人の言を妄信す可らず。充分謙遜せよ。

2、万事万端注意せよ。

3、活潑に働く可し。粗忽なる勿れ。

4、考へて決心せよ。其上は死すとも渝るな。

5、よしと考へたる事は躊躇せずして断行せよ。

6、遠慮は無用なり。いひ過ぐるも引込むな。

7、人を恐る可らず、犬を恐る可らず、暗を恐る可

らず。

(右の条々一分間も忘る可らず。)

- 1、ぶしようは一切無用なり。
- 2、朝寝も一切無用なり。
- 3、体を適当に用ひよ。

廿八年八月二日定めしきちようめん条目。

- 1、物忘れ一切法度。
 - 2、小使勘定、銭位まで違ふ可らず。
 - 3、時間は五分以上後る可らず。
- 右本日より規約として実行す。(八月二日定)

* 明治二十九年の余録であるが、巻頭の凡例に記したように、余録は必ずしも厳格に年次別になっていないので、こゝに収めた(編者註)

処世余録 第四冊

処世余録の第四冊口首に書す

三月の二十八日、容体書の帳面を作らんと思ひて、半紙二帖を折りたるに、とぢたる跡にてよく見れば、其内一帖は残し、まん中の折目の方がくつつきてあるより、こいつしまつたと思ひたれ共、もう孔をあけたる紙は役に立たず。よりにて其ままとぢて、処世余録の第四冊を作りたる。其わけは予は少くより、いたりて無頓着(わるくいへば不注意の)にて、十七才の今年になりても、中々直ほらず。まことに困つたわけながら、唯々成丈直す様にするといふより外には、別に致し方もなきことなり。而も常々用ゆべき此余録にでもその記念のものを用的なば、少しは性がつくべしと思ふまゝ、かくはしたるなり。これも、セルフ・カルテニアの一方なるべし。(明治二十八年、春三月下旬 貞城しるす)

○神田駿河台なる、ニコライ大聖堂は、明治十七年に起工し、殆んど七ヶ年の後二十四年七月に成り、建坪三百十八坪余、本堂の高さは十字架の頂上より地面まで百十八尺九寸余、鐘楼の高さは百二十五尺五寸余なり。又其建築費は大凡四十余万円なり。(太陽)

○佐藤一斎曰く、人と語るに、彼をして其長とする所を説かしむ可し。(同)

○筑前の若松港は筑豊鉄道の起点にして、同鉄道は筑豊五郡の富有なる石炭坑を貫通し、四十余哩の幹支線を有するが故に、石炭運送には最も便利なり。且つ、港は満潮の時ならば三四百余屯の汽船ならば入港するを得る事とて、門司、東京、大阪、神戸に向ふ石炭皆一度此を過ぐ、されば去る二十六年の夏までは磯ふく風と浪の音の滔々たりし地も、今は四五百の人家立つなり、日々の石炭集散高三四千トンに上るに至れり。(時事)

○神田先生の忠告、先生が本年一月一日学校にてせられたる演説の中に、諸氏着実に勉学して、父母、親戚、朋友、教師等の信用を博するの人となり、漸次成長せば、我日本國も英独を凌ぐに至らん。(仙舟君見)

聞録

○元良先生の忠告、汝等宜しく自力を持ちて馬車にも乗り、疎瓦家屋にも住む様になれ。其方法は今より金銭を上手に使ふ事を悟るに注意すべし。昔は貯金の要訣を節儉としたれ共、貨物流通の頻繁なる今日は、只金銭を上手に使ふ事なり。諸子此事に注意せば向ふ八年中には之を悟るならん。(同)

○又、高橋君の見聞録を見るに、同君は時事を師として奉ずといふ。尤もの次第といふ可し。時計の様に規則正しく勉強して終歳止むるなくば、エラキ人になれること余も印紙を貼りて保証するものなり。為後日仍て件の如しだ。……又曰く、下流社会の放開したる有様を見んとせば、夜の十時前後に湯屋へ行くべしと。これも旨き方法なるべし。

○余は四月十一日、即ち今学期より学校へ通ふこと出来る様になれり。よつて学校欠席中家居の模様を記して後日の参考に供せむとせり。

先づ、通常の日には、朝七時乃至八時に起き、病人の目覚むるを待ちて掃除をなし、又病人の世話なし、新聞を読む。それより入浴、理髪等をなし、又は讀書

くして、仕事のなきに至りては、学校の稽古も少しはしたくなるなり。

四月十一日より登校せしも、皆は試験する都合にはこぼされば、十二日また登校せしに、教員岡氏のいはるるには、今試験するは無理なれば、一ヶ月なり二ヶ月なり元の級にて課業を受けたる後にする事とする方、君の爲めに好都合にはあらずやとの事に、余も好意を謝し、左様の取扱を願ひしが、余はむしろ五年の二に居る方、便利なれば、左様致し度旨申出たるに、同氏も其は君のよき方にてさし支なしといはれたれば、其日の第三時間目より該級の学課を受くることとなれり。

○病院学校等(会社銀行等の事務所等もさるべしと雖ども、余は経験なし)に用事ありて行きたる時は、何でもわからざる事は遠慮なくきく可し。然らずむば、無益に時間をつぶす事ありて甚だ損をする事往々なり。

○四月十三日、ボートに往きて余が平生坊様なり、何も知らざる輩なりと蔑視したる人々が、かへりて余よりも世情になれ、交際のかげひきに巧みなる事をつ

をなすなり。又爾後も讀書なり。これは病人の様子あしき時は出来ずと知る可し。即ち、如此日はたゞ番附し居るなり。三時頃より撃剣に行く。これは三月以後のことにて、其前は矢張り讀書などして医師の来るを待つなり。医師来るか、またはズトおそくなるも、来らざれば(此時はモウ六時過)時々は外出して鶴沢、山本、高橋等親友諸君を訪ふか、然らざれば散歩等を為し得ることありと雖も、其他は家にありて書見なり。夜中は病人の様子よき時は九時乃至十時より眠りしも、あしき時は夜半十二時もしくは一時迄起きて番附し、其後は人の代りを得て眠る。故に此場合に於ては、朝はおそく起るなり。此夜の番附は隔日なり。又午後はいろく雑談することもありたり。夜、起きて居たる時分に、初めの中は耳や鼻が痛く也、顔へブツくが出来たりし、又運動不足の爲め、胃腸を損ひ、医師を煩はしたることもありと雖も、十数日の後慣れてよりは、上ほせより来る疲れ、痛みはやみたり。別につかきものにはあらず。余はこれによりて日本地理は余程調べたり。兎に角、学校を休みて自分勝手の手書を讀むは、中々面白き事と思へ共、遂には好きな本もよみつ

くく思ひ、我ながらおれは坊様なりしと後悔せり。

○曾山君、余を評して曰く、君は困難を経て来りし故か胆すはれり。然れどもあまり正直に過ぎ、人のいふ事は何にても真と思ひ、誰にても信ずる事が欠点なり。今少し人に疑をかけ、人は中々狡猾なる事を知らざる可らず。余おもふに、之れ君は旅行をなせる事少なきによる事多し。旅行をすればいかなる人にあふや知れざる故に、自然戒心する様になる事余の実験する所なり。

○どこでも少しへだたりたるところへ行きたる後には、地図を開きて行すぢの町、橋、建物、坂等を注意して見るべし。又其通みちの町とつづける町などをも見て、こちらへ行けば、何町あちらへ行けば何坂といふ様なる事かながへる可し。しからば道をおぼゆる事に於て、得る処多きわけなり。實際余は此頃麴町、番町方面の道すぢをこの法によりておぼへたり。凡そ人と話をして己れが住み居る市中位のみちをしらざるほどふつがふは少なかるべしと余は思へり。

○曾山君の見聞録に曰く、自分より高等なる人には、たとへその人が自分を等視して交際を求め来るとも、

充分敬礼をばらふべし。決して狎るゝべからず。

○四月の十三日学校にて、神田先生はエヂプトの Scarabaeus といふものを見せて、これはこがねむしの形に出来て居て陶器の如し。エヂプトより出づるものなるが、全体何物なるやといふに、昔し全国にては宗教上の迷信よりして人間の靈魂は不滅にして千年たてば又死人の体へもどりてくる事と思ひ居たり。これぞかの Mummy を作る事のおこりなるが、この「スカラベウス」といふものは、その「マミー」と一所の処より掘出すなり。而してエヂプト人がこれを一所に埋めたる訳は、「ナイル」河辺にはこの「ピートル」がたくさん居りて中々しぶとくて死なざるより、それにあやかるやうにといふつもりにて、それに似せて作りしものなりと。又先生はこれと一所に印度、メキシコの仏像、エヂプト、ローマの玉等を示されたるが、みなあまりよき格好のものにはあらず。いびつのある玉、又その玉のあながまがり居るなどはあまりかんにせざれども、とにかく二千年、三千年前のものなれば充分ゆるす処なかる可からず。しかるにローマの Medallion には感心したり。これは白石の黒きす

じあるものを取りて、白き処を地となし、くろきところをのこし、それに人のかほをきざみたるものにて、その鮮明なるは今日の人が作れるかとあやしまるゝなり。又インドのセトモノの仏像はよく出来てをりしものならんが、すれてきたなくなりたり。

○元良先生曰く、人が其徳望によりて他の人を動かす力を西洋にて、「マクネチック、パワー」といふ。支那にては、君子之徳風小人之徳草、といふやうなる語にてあらはせり。これには、何か他人に秀でたところなかるべからず。かのグラドストーン氏が何となく超絶して平易にいへば、あかぬけのしたるところあるは、氏が政治家としてすべてのことに通じ居る外、ホーマルの詩の研究に於て、他の常人より遙かに秀で居るために、品位の高尚をいたせるに由るなり。又鎌倉の円覚寺に行きて見れば、意外の人が座禅をなし居るなり。故に政治家、商人の如きものといへども、ある秀絶したる技芸あること肝要なりとす。(十五日倫理)

○全体、余は自分のすぎなる学科は随分勉強することあれども、きらいの事には一向御留守なる性なら

り。これは、しひてとがむべきことにはあらざれども、あまり勝手きまゝにする時は性質の偏傾をきたすべし。よりて時々きらひのことといへども、つとめてすべき規則にせん。然るところ、此旨、余は幾何代數に於て余程必要あるにより、これらの中一つを毎日一時間づゝ勉強せん。

○元良先生曰く、書生の生活に於て緊要なる三条項あり。(一)書籍を読む時間、(二)遊ぶ時間、(三)反省考察の時間之なり。書生にして第一なければ書生たる実なし。第二なきは、或人は勉強家なりとかいひてはむ可けれども、之なきときは身体の健全を得ず。為めに世上に益を与ふる事能はず。実に他の二と並んで欠く可らざるものなり。反省の時間といふは、何事にかざらず自己が現在考へ居る事に誤りはなきやとか、又は之はいかなるものかとか、すべて疑ひを起こして自ら考ふる事なり。之れ実に人生処世の要件にして、欧米の国々にありては日曜の会堂に於ける説教が、人をして之をなさしむるの手引草となり居るなり。日本の如きは、如斯習慣なしと雖も、或人は座禅をなす可く、或人は経書を読む可く、又余が週に一回づゝここ

に於て倫理上の話をなすも、此点に於ける効用あらしめんとするものなりとす。然るに世の繁雑なるにつれて書生の学ぶべき科目も繁雑となり、此考察の時間の如きは最も得がたき事なれば教育家も此事につき苦心し居るなれば、学生諸君に於ても此点に充分の注意を望む。(以上、二十二日倫理)

二十三日 此頃余はつら／＼自身の性の浅ましき事を発見したり。といふは、(一)余は何か人より変りたる事をなして人ををどろかしてやらんと思ふ功名心に似て非なる虚飾心(ヴァニチー)あり。少々悪ししとは知りつゝも、人が笑ひ興じて賞めてくれれば、妙なまねを為すなり。(二)余は妙な所へまげをしみの子供根性ありて人が何か高慢顔にいふありとすれば、常に其中より欠点、誤りをさがし出さんと注意し、発見すれば少しもかす処なく質し詰むるか、又はイヤミをいひて暗に汝はあやまれり、余之ををしへんとあざけるやうなる口調を出さざるあたはず。そこに、なあに人の人はああいふ小人なり。あんな奴のいふ事を取り上ぐるは君子のなす処にあらず、と心に思ひ、口に「へえ、さうですか、ハ、ハ、ハ」といひ居る事は余程制せ

ざれば、六ヶ敷きなり。此等は、或る著しき点にして
 此他にも実にはぢり入る事多し。

○人に向て「これはもうしていただきましたか、ま
 だだらうね、又は「頼んだ事をして置てくれ玉へ、杯
 の事をいふには充分注意を要す。

二十五日 高橋仙舟君曰く、吾人未熟の青年が宇宙
 万物の原理を悟りて、一個の定見を立つるは殆んど不
 能なれば、善悪、当不当は暫く措き、自身が正なり、
 当なりと信じたるものを主義として可成易えざる様に
 する事肝要なり。然らずむば、事物にふれ、片々とし
 て治まる処をしらずと。余之に賛成なり。

我邦にて始めて散髪したるは外山正一先生なりとい
 ふ。

○余は此頃学生が流行を追ふは善なるや、害あるや
 に付き疑を起し、種々に考へ、友人にとひ、書物を読
 みたる後、かくせば可ならんと思ふ事定まりたるによ
 り、之を記さんに、先ず、ここに流行といふは時の勢
 力といふ程の事にはあらずと知る可し。扱、其流行の
 中にも殆んど社会全体の人が日常必須の事としてする
 ことは、必ず従はざる可らず。例へば、今日の学生は

て海參の収獲は一艘、一日につき製造海參二百斤を得
 る。百斤は三十五円の相場なれば、七十円を得る事な
 り、遠洋漁業の利も大なるかな。(朝日)

○此頃、風説の噴々として、人口に上るもの二つ。
 台湾の共和布告其一なり。今始めて之をきく。以て
 蛮民の兇戯となす。新聞紙亦しか説く。朝鮮、朴泳孝
 君の露国結托其二なり。余、都、朝日両紙を見て同君
 の変心の甚だしきを報ぜらる。大に怪しむ。毎日を見
 るに及んで、或はしからず、問するものあるやの疑あ
 るを知る。(六月二日)

○大隈伯曰く、小さな事にすねたり、怒たりする様
 な政治家になが出来るものか。(是れ朝鮮問題に關
 して同伯の所論なり)

○活識以て機を察するに足り、豪胆以て難を排する
 に足り、敏腕以て紛を解くに足り、沈重妄りに動かず、
 寛容よく容る。是れ其機なり。外交の典例を暗んじ、
 各国の言語に通じ辭令に稠ひ、応接に巧みにして、よ
 く周旋に勉む、是れ其能なり。(中略)材は以て能を
 用ゆ可きも、能は必ずしも材を兼ねず。苟も達材の士
 を得て是を助くるに、異能を以てせば百般の機務を裁

絹衣をきるものは最も少なく、又外出に帽子を被らざ
 る者も稀なり。これには従はざる可らず。次には、或
 る一部の人が当世はやりとして喜ぶものは、例へば衣
 服とせば前に自身が有せる者が役に立たざるに至り、
 新調するの外は之を用ひざるを可とす。尤も新調す
 るならば、其時の所謂、意気なる新形に従ふは勿論な
 りと雖ども、其ものにして弊害あるか又は無益なる散
 財を要するが如きは排斥して断然自身の新機軸を抽出
 す可きなり。

以下、事項の分類をなす為め、此帳面には書物
 より出でたる事を記する事と定む。

第一葉 新聞より抜きたる項……時事

○先きに馬関条約のなるや、人みな祝和の会を催は
 さんとて非常に奔走せしが、遼東半島還附の詔勅出づ
 るや、又みなひつそりとして和をいふものなし。こは
 各地より電報によりて知り得るなり。(東京朝日新聞
 より觀察す)

○頃来朝鮮近海に出漁を試むもの増加し、元山附近
 に行くものゝみにても五十三艘の漁船あり。同地方に

理するに於て亦、綽々として游刃の余地あるを得ん
 也。(六月廿五日毎日新聞社説抜萃)

○人材の事。樺山大將はもと陸軍出身の人にて、海
 軍の技術に於ては下級の士官にも及ばざれども、よく
 敢為の気象によりて黄海の大海戦を決せり。○兇島惟
 兼氏は細事の調査に於ては新進者と比するに足らざる
 老判事なれども、大審院長たりし時、其不屈のエナー
 デーによりて露国皇太子殿下を傷け奉りたる兇賊の判
 決が國法をまげて死刑にあてられんとしたるを、行政
 部及衆議を排して無期徒刑とし、以て我大日本の立憲
 法治國たることを示せり。(毎日)

第二葉 雜誌より抜きたる項……其二時事

○品川弥二郎氏曰く、「今は官民一致、大に國富を
 増殖し、軍備を拡張し、五六年後を待て大いに為すある
 可きの時なり。暗処の耻を剔抉して公案上に明提し、
 紛争是れ事とすべき秋にあらざるなり。」(太陽)

余は此れと同主義なり。在野政治家の徒が責任問題
 を云々して政府に反対するはよろしからずと思ふ。

(太陽)

第三葉 雜誌よりぬきたる項……其二倫理

○マコーレー曰く、クロムウェルは機才、文字、能弁なしと雖もよく其成功に処するの謹慎、失敗に処するの冷静、及頑執なる決心によりて自身が説明する事は是ざる大事業を果行したり。(民友社十二文豪)

○マコーレー、個人的美質は友に對して寛容信実なれども、偽善は大に惡み、家族に對して愛深く世に對しては面目、自由、独立を重んじ、人を怨む事なく、悲哀を去りて快活につき、樂天思想を持するにあり。殆んど完全なる紳士なり。(同書)

○松村介石君曰く、完全なる人物に要す可き五件あり。曰く至誠、曰く勇氣、曰く愛心、曰く才力、曰く智識。而して至誠(Sincerity)なりと。(立志の礎)

○イエス・キリスト曰く、汝既に小事に忠なり。余汝に大事を司さざらん。(同書)

○久米邦武先生の「倫理の改良」と題する論文の意に曰く、儒教に於て忠孝と云へるは、忠信孝悌の略にして、忠信は社会一般に對するの道、孝悌は親族の者全体に對するの道なり。然れども、後世腐敗下落して、忠とは君の言に従ふ事、孝とは親に背かざる事となり、漢に至りては、「其為人也孝悌、而好犯上者鮮矣、

不好犯上、而好作乱者未之有也」といへるをよく口実にして、愚民の唯上に従ふのみを善となし居れり、日本に來りては、仏僧の手につかはれて少しく後、快したれども儒教としては空漠たる理論に陥りたりと。其結論に曰く、德育で進むるには、是まで町村にありて資産あり、経験あり、名望信用ある實際家に齊家の心得をとかしむ可し。其主義は泰西キリスト教の自主營業なるものを斟酌す可し。徳義を知識の如く口舌にて説くは効益少しと。(太陽)

第四葉 生理学に關する事項。

○通常医学者が神系病(癩)といふは、神系全体につきては或部分の病氣なり。精神病といふは、腦の前部に位せる神経の高尚の作用を掌る一部の病氣をいふなり。(東洋学芸雜誌)

○マラリア熱(台湾熱)を予防するには、(一)冷水を飲む可らず。熱湯をさまして用ゆべし。生水をさす事も惡し。(二)入浴するには、やはり熱湯のさめたるを用ゆべし。(三)生の果実等を食す可らず等なり。こは該病の源は滴虫「プラスモデーム」より起ればなり。故に支那人は不潔なるにも拘らず此病氣もしく

は、コレラにかゝらざるは、全く水を生まにて食せざるによれり。(三浦守治氏述)

○咽喉がかれていたき時は、夜眠るときに、フラネルの水にぬれたるものを頸にまき、其上に更らにハンケチをまきて寝ぬべし。(通俗病理問答)

○凡て、口中のあれたるときは塩酸加里を溶かしたる水にて含嗽すべし。(同)

○通じあしき時は舍利塩、カルルス泉塩を用ゆ。ひまし油をのむもよし。之は強し。(同)

○コレラ病になれば、脈は一分間に百三十より百五十にふえ、体温は三十六度に下る。(同)

○入浴の度数、春は発育の時故一日をきに行き、夏は行水して汗をとればよし、秋は身体のかはりめなれば一日をきに入り、冬は垢のつかぬ時なれば、四日をき位にてよし。又一風呂三度入湯し、三十分位にて出るべし。(同書)

第五葉 理化及金石の學に關する事項

○一秒間の速力に付きセルマン某學者の調査

- 蝸牛 一尺の二百分の一
- 人間(走) 四尺

流水(最急) 十二尺

輕氣球(風なき時) 十九尺

蠅 二十三尺

自転車 三十尺

競馬 三十八尺

大洋の波 六十五尺

伝書鳩 八十二尺

燕 二百一尺

大砲の弾 千五百尺(毎日新聞)

○東京市内各所の高低
地名 海面上高度

青山六道辻甲賀町 一〇九、八(曲尺)

麻布六本木光高寺 一〇一、二

半蔵門外 九二、六

芝愛宕山上 八六、六

牛込喜久井町 八二、五

赤坂門 七四、〇

駒込追分町 七四、〇

牛込神楽坂上 六二、〇

湯島天神前 五八、八

牛込門 四〇、〇
小石川久堅町 三七、〇
水道橋 二四、七
桜田門 二四、〇
下谷広小路 二二、五
日本橋 一六、四
京橋 一五、九
兩國橋 一五、一
一つ橋 一四、〇
馬場先門 一二、四
一石橋 九、六
浅草本願寺 九、六
深川八幡 八、五
本所法恩寺 四、五

第六葉 歴史伝記に関する事項
○大山伯は質朴恬淡の軍人らしき人物なれば、誰人も詠歌賦詩の如き情味ある人とは思はざらん、伯が鳳駕に從て静岡にありしときの詠歌は左の如し。
金州城に日本の桜を植ゑ置きてよめる

(以下略、統計学雑誌)

合計 一一三二〇

二、アメリカ線

甲、横浜シヤトル間 四二八〇海里
乙、東京サンフランシスコ 四五〇〇海里
三、オーストレリア線

横浜香港間 一五六〇海里
香港マニラ間 六五〇
マニラ・タウンズビル間 三三五〇
タウンズビル・シドニー間 一一〇〇
シドニー・メルボーン 五七〇
合計 七二三〇

(毎日新聞)

○欧州諸国の語が用ひらるゝ人民の数

今より三百年前には、仏、西、独の三国語最よく行はれたれども、今日は英、西最も広く行はる、其数左の如し。

英 一億千五百万 露 八千万
西 五千万 独 七千万
仏 四千五百万 伊 三千万
葡 千五百万

植置きし家は大和にかへるとも
千代まで句へ山桜花

尤も將軍の歌は文人職業的の者にあらず、境遇の触るゝ処溢れて三十一字となるは其意味によりても知り得るなり。(毎日新聞)

第七葉 地理天文学に関する事項

○太陽と地球との距離は一、四八七〇万キロメートル、即ち四九〇七、一千万尺、即ち三七八六万里なり。地球の大なる半径は六三三七七七一七マイルなり。(東洋学芸雑誌)

○航海線の延長

○航海の延長

一、欧州線

横濱香港間 一五六〇海里
香港・シンガポール 一四四〇
シンガポール・コロンボ 一六五九
コロンボ・エーデン 二〇九三
エーデン・ポルトサイド 一三四三
ポルトサイド・ジブラルター 一九一六
ジブラルター・ハンブルグ 一二九九

而して英語を用ゆるものは毎年二百万人づつ増加し行く。又西ペイン語はブラジルを除けば、中央、南南アメリカに広く行はる。(毎日新聞)

○日本一の高山は自今不二山に非ず。台湾、モルク山なり。今台湾の万尺以上高山を挙げれば如左。

モルク山 一一、八五〇尺 草山 一〇、四五〇
シルウサー山 一一、三〇〇 大鳥山 一〇、四〇〇
分水山 一〇、九七〇 内鳥山 一〇、〇六〇
分水山命 一〇、五〇〇

(朝日新聞)

第八葉 政治、経済、法律に関する事項

○昔時戦争は干戈彈硝の間に決す。今日の戦は以上の他、別に外交の技術なるものを要す。故に露は戦闘に土にかちて其利を充分に得る事能はず。我日本は支那に勝ちたれども又充分なる償を得ず。而して独り独が仏に勝ち且つ其得を恣にしたものは実にビスマルク侯の折衝の巧による。(毎日)

○孔子曰く、三軍の帥奪ふべし。匹夫の志奪ふべからず。トーマスモア曰く、我頭断つべし。我信仰の一念ぬく可らず。百年前の米人曰く、吾人に自由を与

へよ然らざれば死あるのみ。此人間的の人、人間的の人民なり。今の印度人の如き他人に動かさるゝのみにて自自力なきものは器機的の人なり。(毎日)

○独仏戦争後独乙国の諸会社株券の高下は、甚だ著しかりしは人の知る処なり。其統計を下に示す。(太陽)

社名	千八百七十二年	七十三年	下落歩合
プロシヤ貸附会社	一五八	五〇	三分の二弱
クイストロフ同盟銀行	二〇〇	一八	十一分ノ十
州立割引会社	一八六	八六	二分ノ一
アングロドイツ銀行	一四四	六五	二分ノ一
伯林建築組合	一〇八	四四	五分ノ三
ブレッネル建築会社	一五八	七九	二分ノ一
レヲボルツハイ製菓協会	一〇八	三七	三分ノ二
ユージェストロフ器械製造所	一三五	三〇	九分ノ七
トルトムント同盟会社	二〇八	八〇	五分ノ三

○戦争後の経済世界に於て凡て原料其他製造の費用は物価が騰貴するが如く、にはかに変化するものにあらざるが故に、製造費の増加と物価の騰貴とが同比例をなすに至るまでは諸製造会社等に格外的の利益を得る

が故に、資本家は公債、銀行預等の薄利に其資本を委するに忍びずして、之等の事に之を投入するものなり。然るに此等の利益は益々製造会社の設立を促すを以て遂に反動を起して物価の低落となり、投機流行となり、資本家は遂に資本を浪費したると同様の結果を見る事となる。是古来勝戦国の屢々陥るの弊害なり。(櫻本大臣) (太陽)

第九葉 数学に関する事項

略

第十葉 世態上の事項

○神道にては、死亡の一周年及五年目(かぞへどし)、十年目、十五年目、二十年目エンドソーオンに祭祀をなす。

○仏にては死亡の次の月の同日に法事をなし、その後はかぞへどしの三年目、七年目、十三年エンドソーオンなり。(元)

○新華族の男爵は一万円、子爵は二万円を陛下の御手元金より賜はる。

○九月一日時事新報に曰く、近頃某新聞は実業界の系統を分て、松方伯派、井上派とし、日本銀行、正金

銀行、郵船会社を松方伯の手下にをき、渋沢、大倉及三井の中上川、益田等の諸氏を井上伯の手下に帰したり。此等実業界の泰斗が大臣輩の鼻息を伺ふとは実業家顔色なしといふべし、云々

第十一葉 自助論拔萃(貞城記)

○彼は成功によりて慢せざるなり。又失敗によりて失望せざるなり。

○人生の王冠と光榮は品性にあり。

○Buxton 曰く、人の賢愚強弱は只其 Energy といへるインピンシブルの決心の有無に關す。目的一度立つ、是に次ぐものはまた死か勝利あるのみ。

○Jonas Hayward の諺は Never Despair.

第十二葉 經濟事項

○添田先生曰く、遼東半島の遷附は軍略上、外交上の非難を外とすれば、中々利益ある事なりし。何となれば戦勝後、国民が虚譽空名に酔ひて傲慢尊大、奢侈放逸の弊に陥る事古今の通例なるに、今此事件は国民の謹慎警戒をひきをこしたればなり。(太陽)

○今年七月中旬前より雨降りつづき、土用になりてもやまず。ために地、水、空氣の三界が温度に大なる

差を生ぜしより、早稲の如きは、余程損害を被むりしが、未だ大なる不作の結果を生ずべしとは思はれざりし。然るに定期米の相場が暴騰せしため、白米小売相場も騰貴して、一時は一等米七升(円当)、五等米八升五六合にまでなり。此が為め貧民は余程困窮したるならん。(余の新聞よりの觀察)

○各国商船

英	一一、六六〇	一一、九六九	九五一
合衆国	三、三一四	二、一七一	四五九
ゼルマニ	一、七六五	一、七八四	七二五
ノルウェー	三、一三七	一、六六九	〇八七
仏	一、一七八	一、〇八九	五四〇
伊	一、二七六	七七一	七五九
西	七六〇	五四七	三五八
スキーデン	一、四四九	四九八	〇〇四
ロシア	一、〇六九	四七六	六七二
ホランド	四三一	四三七	一七九
그리스	八八七	三四三	四四二
丁	八一五	三三三	二三一
オーストロハンガリ	三三一	三〇二	六一八

トルコ	一、〇六九	二六六、三五二
日本	三六九	一九六、三六五
ブラジル	二九〇	一四五、九七六
ベルヂューム	八八	一一八、八二七
ポルチュガル	一八五	一〇五、二五九
チリ	一三七	一〇二、一九九
アルゼンチン	一七〇	五九、八三三
支那	三七	四四、六八八
布哇	二六	二二、六六三
ウルゲイ	四二	二〇、三二六
イダプト	二九	一九、二六四
ペルー	四一	一二、四八三

(国民の友より)

○我國に輸入する烟草は米國産最も多く、マニラ産之に次ぐ。その量は年々増加し、明治十七年には、五万八千円なりしもの、二十一年には、十五万三千円となり、二十六年には四十七万三千円となれり。毎五年に三倍づつの割合なり。二十六年の輸入紙巻烟草は合衆國より 二二九、四六五円
イギリス 八、九五六

イタリー	五、三二九
フィリピン	三、六四六
其他より	七、九四四

にして、同年葉巻は
フィリピンより 五二、三一〇円
ドイツ 五、八五二
合衆國 二、七四二
其他 七、八〇八 (太陽)

なり。此等は重に新橋江副にて取扱はる。

○果樹園は西及北より、東及南になだれたる傾斜面の地を最もよろしとすと云ふ。

○生獸の肉量をはかる方法 (太陽)
(原註)×体重/238=肉量(キログラム)

而して、一ストーンは一四ポンドなれば、之に一四を乗すればポンド、即ち百二十奴を単位としたる数を得べし。(但し肉量とは、頭皮、臟腑、脂肪を除きたるものにて、骨を含む。是れ肉屋の要する部分なり。腹帯は前肢に接して計り、体長とは肩骨の頂上より尾根までをいふ) (太陽)

○石炭酸は石炭タールより造るものにて、バクテリアを殺すに最も適す。又其代りには之をよはき植物にかくれば之をからすものなり。故に之を以て消毒したる人尿尿を作物にかくるは害あり。先づ、肥料を施し雨ふりて石炭酸をながしたる後に種子をまくべし。

(太陽)

○印度の手工品には、往々奇々妙々なる事をなすものありて、西洋の学者等も其説明には此迄中々苦しみしが、今その中の一をきくに、種子を下したる後一時間許りにして野菜を生ぜしむるといふ。さて、そのたねはなるやといふに、重もに土にあり。その土は蟻の塔をくづしたるものなりといふ。原来蟻は酸にとみたるものにて、塔も從て之を含む事多ければ、かくは奇なる事をなし得るなり。故に、蟻を水につけ置き、その水にて土をしめし、之に種子を下せば奇功あるといふ。

(都新聞)

第十四葉 時事談

○アウストレリアの東北隅、ケープ・ヨークがニュー・ギニアと相對して作る所の海峡をトールレス・ストリートといふ。其所に一小島あり。名をサースデー・

アイランドといふ。人口千四百七十余人にすぎざれども、良港湾に望み、近海千余哩以内より産する真珠貝を採集して露、英、仏等の諸國に出す。そこにて最も勢力あるものは日本人なり。(時事新報)

○欧州諸國と日本と燈台の比較

	海岸線	燈台	割合
英	一一、八五〇哩	九二七基	一四哩
仏	三、八二五	四四八	八、五
獨	一、九〇六	三一〇	六、一
伊	四、七七〇	二九三	一六
日	一五、一八五	一三六	一一二

(毎日新聞)

○軍艦の比較

英	四八九艘	八九六、〇九四屯	1
仏	四三六	四七一、四五五	2
伊	二二四	二一五、九二六	4
獨	二〇一	一四九、九七〇	6
露	一八九	三二八、九〇一	3
米	六八	一六五、一八九	5
日	四六	八〇、三八四	7

(毎日新聞)

○兵卒にして戦争の爲、不具者となるときは、毎年五十円づつ一生涯賜はるの常法なるが、今回は当座に於て特別に五十九円の三倍百七十七円を賜はると云。貞曰く、百七十七円を五分にて預金とすれば、利は年に八円八五、月に七十三銭。五十九円は月にわれば四円九一。合せて五円六四となる。

○兵卒戦死したるときは遺族に扶助料三十円を年々賜はるの常法なるが、今回は当座に於て特別に其六倍、百八十円を賜はるといふ。貞曰く、百八十円を五分にて預金とすれば、其利は年に九円、月に七十五銭。三十円は月にわれば二円五十銭。合せて三円二十五銭。右にては遂に家族の生計を立て得るものは少なかるべしと貞城は思ふ。之には何か市区村等の人民より成る会の如きものより、扶助しやりたきものなり。

○此頃、救世軍とかいふもの我國に來れり。其目的は軍隊を以て耶蘇教により労働者下流社会の者共を救ふにあり。而して世界至る処に航し、其國に帰化し、其國の風俗言語に倣ひて其國の下層不幸なる者を救ひつゝありと云ふ。

其傍にありし妻

明月やぎとりのつまがなく夜かな

第十七葉 経済事項

○綿花紡績同業連合会の報告によれば、本年七月中現在紡績所の数五十ヶ所、錠数五十一万八千九百九十九本、管糸出来高百三十八万二千七百七十七貫目、繰綿需要高百六十三万五千八百五十五貫目、製糸一梱平均代価八十一円八十銭也。(毎日新聞)

○大隈伯曰く、今日我國歳入中第一位に位する地租は、四千万円なるが、我海關税も今年十年の後は四千万円の額に達すべし、其由は今より十年前四千万円許りなりし、貿易は爾後三倍の進歩をなして一億二千万円に増加せり。而して此時代は如何なる有様なりしやといふに、工業修業の時代なりしなり。之に反して今後は邦人独立して、西洋人の手を借る事なく、各種製造に従事すべき時代なり。一紡績業は十年前に八万錠なりしが、今日は八十万錠となり、十年間十倍に進みたり。

又今後運輸交通の便を進むる時は、物価の低落を見るべし。従て物貨は争ふて開港場に出でん。

第十五葉 殖産談

○日本より産出する銅の全額の三分の一は足尾なる古河市兵衛氏の銅鉱より出づ。(博覧会賞状)

○此度の博覧会にて名誉金牌を得しは左の五氏なり。

- 北海道拓地成績表 伊達邦成
- 機械製生糸 宮城県 佐野製糸場
- 三池石炭 三井三郎助
- 足尾銅 古河市兵衛
- 茶 しずをか茶業者

銀牌は十七人なり。(時事新報)

第十六葉 格言及名句

○いまになり菊作らうとおもひけり

(古人の作 都新聞)

○なばたけや月は東に日は西に

(同 日本風景論)

○早乙女や 子のなく方に植てゆく

(太陽 古人の作)

○塙保己一、一夜明月に對して

夢ならばさはりても見んけふのつき

又金利は十年前、一割四五分なりしものが、今日は八分に下れり。即ち半分足らずの減額なり。今後十年間に更らに三分五厘に減ずべし。従て貿易に大益を与へん。如此外国貿易は五億円となるものとすれば、之に百分七の税を課するものと考へて、三千五百万の収入を見るべし。三千五百万の巨額は、よく陸海軍の經常費を支弁すべし。(毎日新聞)

○印度の鉄道は方今二万哩の延長あり。而して平均一年六百十五哩の割合にて増加す。一年の収入約そ一億五千万円なり。(孟買領事報告)

○英國の貿易は一人に付百九十円、日本は四十四円、印度は三十六円。

○印度の貿易十億円、輸入品中綿布一億五千万円、綿糸二千万円、石油千八百万円、砂糖千五百万円、機械千三百万円、鉄道用材千二百万円、日本よりは傘二百九十万円、マッチ百九十万円、輸出品中油製用種子類八千五百万円、綿花七千万円、米五千万円、黄麻四千万円、黄麻布千八百万円、茶三千五百万円、生皮三千万円、麦三千万円、藍二千百万円。(印度事情)

第十八葉 倫理事項

○勤儉尚武の氣風を養成する方法

(東京府教育會)

「茲には余の氣に留まりたるものを抄録す」

- 一、独立自治の精神を以て勤儉の基とする事。
- 一、自家の事務を尊重し、勤勉を樂む精神を養ふ事。

一、時々実業場を參觀し、実業上の觀察を擴むる事。

一、労働に堪ふる氣風を養ふ事。

一、日用各種の物品は実用に適するを度として、儉素を守る事。

一、病氣事故を除く外、乗車を戒むる事。

一、金錢の収支を厳にし、費用を節すると同時に、

吝鄙を除く事。

一、仰ぐ処の徳望家より、直接間接に其閱歷性行をきく事。

一、風雨寒暑に堪ふる習慣を作る事。

一、体操、遠足行軍の事。

一、水泳、漕艇、擊劍、射術、馬術の事。

一、海陸軍兵營、病院、軍艦、造船所、工場を見る事。

右は余が考へる場合也。自身の実行を務めんとする所也。九月十九日 貞城

第十九章 印度事情

「茲に記するは余の耳新しく聞きし節のみなり」

○地理 印度は北のヒマラヤ地方、中央の平原地方及南のデッカ高原地方の三区に分つことを得べし。

其中、北地方は海面上七千乃至二万九千尺の山地にして、未開不毛の地多く、中央地方は長千里、巾百乃至三百里あり、高野數百尺に過ぎず。土地豊饒にして、農商最も盛なり。南地方は高野千尺以上に達せる五十五万方哩の大高原にして、諸業の繁昌は中央地方の次にあり。

○天候 印度は熱帯國にして、東南の地は八十二度八、孟買地方は七十九度七にして、冬季最冷の候、即ち一月二月もなほ六十度内外なり。又印度にはモンスーンといふ定期の方位風あり。東南より吹きて雨をふらす。其季節は六月より九月迄にして、少なき処三四十吋、多き処は百二十吋なり。(東京二十六年十二月四中四十吋) 此時期は恰も吾國の梅雨を三倍したるものと思ふべく、其温氣の強きは甚だしく、此間は商

買も休みなり。又官省の吏員は一定の避雨地にさけて事務を取る。又商品がかびの爲めに損害を被るなり。故に取引をなすは十一月より三月迄の冷季にして且つ作物の收穫時にあり、当業者のよく注意すべき処なるべし。

○人種 印度の人種は、種族をもつて分くれば十五六種なり。宗旨をもつて分くれば、やはり十數種あり。又言語をもつて分くれば、七十六種許りにすることを得。而して此等は皆英國管轄のみにあらず。仏領あり、葡領あり、又別に半独立封建君主の支配を受くるもの數多ありて、宗教風俗を異にせり。四年前の調査によるに、全人口二億八千七百三十万の中、ヒンズーといふ宗旨を奉ずるもの二億七百七十三万あり。(七割二分) 此人種は、アリアン族にして、ヒンズスター語を用ゆ。故に印度全国中此語の通ぜざる所なきなり。又、此種族は階級制をとれり。性質温順柔弱なれども、商人は中々狡猾なり。次に多數なるは回教の人種にして、五千七百二十八万(二割)あり。三百三十年前にムガル帝國を立てたる人種にて、性質勇猛なり。之も商人の狡猾なるはヒンズーに同じ。又太古よ

りの土蕃は牧畜狩獵を事とし、商業上の価値なし。人口九百万。終りに人口は最も少數(八万二千)なれども、印度人中最も開化せるは、パーシー人にして政治上、商工上重要な位置にあるもの多し。孟買附近に住す。

○風俗 印度人は貧富に拘らず生活の程度低し。從て需要品も少し。衣服は熱帯國なれば簡單にして済むべく、住居は質素にして家具の必要なく、飲食は穀類、野菜、牛乳なれば、つまらなき如くなれども、其工業は甚だ幼稚なれば、製造品を輸入する事、割合に多し。故に欧州より現に輸入しつつある中、其半分を供給するも決して少なからぬ也。

○農業 人口の七割は此業に生活し、輸出品の九割は此業より出すなり。其中にて米の水田は全国耕地の四割二分(重に東北方)、粟は(南の方マイソール州孟買等)三割五分、麦二割三分(西北)、此三穀は印度人の常食なれども、米麦を輸出す。豆、菜、珈琲、亜片(ベソゴール、西北總)糖蔗も盛に耕作せらる。棉花の耕作盛なるは、世界中唯米國に亞ぐのみ。(デカン高原、ボンペーの北) 黄麻(ガンヂス河畔)は世界に冠たり。油種菜、胡麻、黄麻は米麦等と不毛作にす。藍

も盛也。シンコナ、生糸、ラック(植虫なり)、漆、生皮、革毛等あり。

○工業 綿織工場四百十三、紡績工場百四十二、錘数三百六十五万、機台三万千、職工十三万人、此中半は孟買市内にあり。○黄麻紡績工場二十八、錘数十九万三千、機台九千六百、職工二千百十七。此中二工場を除けばみなカルカッタにあり。黄麻織工場四十九。○藍靛工場二千百十七。○精硝場千四百五十九、飲用礦水工場三百四十七、磨粉場百五十、搾油場百十。○ラック漆工場百一、製糖場九十八、銅鉄工場七十。○生糸工場七十三、鋸場七〇。○柔皮場四十四、陶窯四十一、烟草工場四十、製紙場九、織絹場六、製氷場三十二、外国輸出品を製造するものは○印をつく。

処世余録 第六冊

自序

思想高卓ならず、故に人を服するに足らず。識量深遠ならず、故に業を興こすに足らず。斯の如きもの、固より取るに足らざるなり。然れども、未技を知らず、細事に疎く以て、世務を理するに足らざるもの亦、未だ欠なしといふを得ざるなり。而して特に、実業者に於て、余最もその然るを見るなり。項目の所感を記して自序に代ふ。

明治二十八年十一月三日天長節の日

処世余録第六冊目次

- 一 修身則を作る事
- 二 観短艇競争記(正則学校卒業試験文題)
- 三 小学卒業迄の余
- 四 土規七則
- 修身則を作る事

第一、其起因、修身則の起因は明治廿六年にあり今其項の日記を見るに、左の規定あり。

- 一、七時迄に起き、十一時迄に眠る事。
- 一、日に一度づつ、必ず室の掃除する事。
- 一、学校復習時間三時、新聞雑誌二時間の事。散歩二時間。
- 一、一週間に二度湯に入る事。
- 一、日曜は必ず外出遊ぶ事。
- 一、学課以外作文等は、前記外の時間になす事。

而して横側に点を付したるもの外は、必行したり。又此項余は、日々の仕事の順序をも作定したり。然れども、未だ日記に其日の言行が正なりや否やを、記入する迄には、至らざりし。是をなすに至りしは、実に本年一月規則を作りし以後にあり。尤も其以前と雖昨年十一月頃よりは、規則なしに日々の事を反省したりき。

(規則は処世余録第二冊にあり)

又右の如き考を余が起こしたる遠因は、明治廿三年の交(余が高等科一年位の時)と記憶す。学校にて定められたる家居品行録及余が明治廿三年始めて読みたる「ベンジャミン・フランクリン」氏の十二則等にあり。品行録は

生徒家居中の品行を、父兄が記して、学校教師に閲覽せしむるものにて、今惜むらく是を失遺したり。唯其個条書の中には、温順損生等ありし事を余は幽かに而も確に記憶す。

本年秋学期より学校「ベンジャミン・フランクリン」氏自伝を英語教科書に定めれば吾人は、是を読んで此ここに一生涯躬行すべき大規則の必要を感じ、修身則を制定するに至れり。学友加藤君亦余と同一の考へを以て、曾て自制作なるものを作る。而も亦今回又終身の自制作を撰めり。当時、相談する所亦多し。

第二、修身則自序
人には諸の悪癖あり。世には様々の誘惑あり。是を匡し、是を却け、従ひて又最もよく善をなす者は、即聖賢に庶しといふべきなり。故に古の賢哲十二徳を撰みて、其言行を願しと言ふ。今貞愚なりと雖、夙に正徳の道に志す。即是に倣ひて修身則を作る。

明治二十八年十一月貞歳十七

第三、凡例

- 一、修身則は終身実行すべきものとす。
- 二、修身則は綱領(甲)十二則(乙)細則(丙)より成

すべからず。

- 七 大胆 平生恐ること勿れ。躊躇すること勿れ。事に際して平静なれ。
- 八 寛大 胸中常に余裕を存し、譴責さるるも不平なく、謗らるるも怒らず。
- 九 決断 秩序を定めて、迅速に決心し然る後は是を厳守せよ。
- 十 礼儀 無益に人の意を害すべからず。
- 十一 高潔 正義をふみ権謀をさげ、諂諛を排し名分品格を堅ふすべし。
- 十二 仁愛 君国に忠を尽し、社会に誠を尽し家族朋友隣人を愛し且世の孤弱なるものを憐むべし。

観短艇競争記

夫学に志し文を習ふものの弊とする所は、柔弱に流れ蒲柳に陥るにあり。是を以て方今の書生みな運動遊技をなし、以て勇壯の氣を養ひ以て健全の体を得ん事を力む。就中短艇競争最盛大なり。人以て東都の一壯觀となす。余曾て之を墨江に観る。時正に四月春風駘

る。其内甲は不易、乙は時に変更するを得れども、大体不易のものとし、丙は随時定むるものとす。

- 三、毎日毎週の言行は毎夕及、毎日曜日朝反省し、修身則に違反せる時に、是を処世余録に記入すべし。
- 第四、綱領
貞が一生の大目的は善をなし悪をなさざるにあり。貞が処世の大方針を、完全なる紳士として、一世の模範となり、貨殖の事に身を投じて実業家の泰斗たるにあり。

第五、十二則

- 一 謹言 益なきことをいはざるをよしとす。
- 二 慎重 万事はよくその前後を考へ、注意周密に実行すべし。
- 三 厳密 時を厳にし、勘定を密にし、且規則法律を遵守すべし。
- 四 経済 吝ならず、驕ならず、よくその場合に適合する様に金物を用ゆべし。
- 五 摂生 食色の慾を制し、喫煙飲酒を戒め、且常に衛生に注意し腕力を養ふべし。
- 六 勉強 万事全力をもつて従事し、無益に時を費

蕩桜花爛漫の好時節なり。堤上観る者堵の如く江岸の一洋屋旗旛翻たるもの蓋し、授賞場なり。須臾にして軍楽の声起り、剽唳として緩流の波を動かすや、銃声一発四隻の端艇並で進む。漕者は艇によりて帽服の色を異にす。

互に先を争ひ一先一後一緩一急掌艇者各々帽を振りて、己の艇を励まし、観者又大声或は赤或は白緑と呼び、黒と呼び置々騒々満場の人みな狂するに似たり。已にして江上の一汽船復銃声轟然勝敗を決す。此時衆音再び湧きて、勝者得々賞牌を受けて胸にかく。如此くするもの數十回にしてやみ、金龍の鐘声日暮を報じ、吾妻橋上群集統々みな喃々勝敗の事を語るを聞くのみ。

明治二十九年四月十七日稿

小学校時代迄の余

去るものは日に疎しかや。年月の過ぎ行くまま、幼少のをりの事ども漸く忘れゆくまま、遂には筆にも止め得ざらむ。さては口おしき限りなれば、今年少しく閑あるにつけて思ひいづるままをかきつけてみぬ。余は明治十二年三月十九日の夜東京麻布飯倉町の旧

紀州徳川家の邸内に生れしが、当時父は同家の重臣なりしかば、余の保育法の如きも、中流以上でありきとは後にて聞きし事にて、父は余が三歳の夏に病死せし故、余が物心つきたるときは母は既に哀なる若寡婦にして、祖母と共に身自ら炊き自ら掃除し自ら其幼童を守りせしなり。

兄は死したる父の親友等の計らひにて、旧君より学質を得、慶応義塾に入り寄宿せし故、余は家に在りて独り優しき祖母と母との愛護を受けたり。かくして十二年経て後、余は伶俐なる而も憶病なる児童となり、特に筆もつ事を好みぬ。六歳の春より飯倉小学校といふに入れられしが一人にて行くこと能はず、半年が程は日々母に伴はれ行きけり。されど其の学業にては最もよき成績を得て、級中五六番より下席につきし事はなかりしかば、教師には愛せられ、又体力の弱きにも拘らず同輩にも尊敬を受けたり。

余は幼少よりの身体柳弱にして八、九歳の頃デフテリアの為、生命も危ふかりしを辛ふじて助かりしが、平生も屢々医師の手を煩し又、他童と体力の競争は常に避けて、仲間に入らず、時に辱めらるる等にて怒り

は刀劔を出して自殺を計り、又は戸外に飛び出ては入水せんとする等、危ふき有様なりしかば、伯母も兄も安き心なく、夜さへ常の如く眠る事能はず、交々不寝番をなしたる事多かりき。

伯父よりも書生を遣はしては、看護せしめられけれども中々恢復せず、其中勸むる人ありて耶蘇教に入りしに漸く氣も落ちつきしにや、一年余の後通常の人となり、かくて余も再び最愛の母の手をかれぬ。

されど此間の悲しさは唯母の病のみにてはなかりき。前には伯母の嫁したる夫の懶惰よりして、その離別の禍あり。母の如きも之がために非常の心配をなしたるが為、病の近因を作りしなるべし。然るに尚是のみならず、一の大不幸は祖母の死なり。余当時の事を思ひ出す毎に今尚思はず慄然たり。時は二十年の十一月或る日曜日の夜、余等は旧君の御殿に講談をききて帰り、寝につきて間もなく、伯母によびおこされるれば、祖母は悲しき唸りをなし伯母はあはただしく兄を医の許に走らしめしに、母も何思ひけん、突然飛び出でしかば、余は伯母に叱せられて急に走りて追ひかけ引きとめ、又其中近隣の人も来り、医も診察せしが、祖母

の余り喧嘩などすれば、大概はまけて泣き出しぬ。其のやや活潑となりしは、十二歳以後にして其よりは腕力強きものの参謀となりて、同輩を支配し、又学業上の事なれば自ら発起者会長となり、復習会幻燈会をなし或は学校、ごつこといひて己より歳下の児童を教へ、時としては、腕力家の専横を憤りて同輩間に遊説して、反対党を組み、隠然首領にありし事もありき。されば實際腕力を闘はしむれば決して勝ち難き者をして、よく尊敬せしめしなり。

斯くの如く余は腕力を以て人を制する事能はず又、唯々諾々として腕力家の言を奉ずる事能はざりしが故に、単に腕力のみに行はるる社会に入りては、弱虫として、又強情者、なまいき者として、いぢめらるるは自然の勢なり。是余が十二歳頃養生学舎に入りし時、年長の者にいぢめられて之と争ひ、遂に同舎に行くを止めるに至りし次第なり。

十一歳の時母は不図思わしき病にかかりければ伯父松尾氏等相談して、伯母名は恙と呼び看護せしめ旁々余等の世話をも托しけり。此頃は兄も慶応義塾より帰りて通学なし居たるが、母の病は余程重くして、時に

は遂に再び語らず。彼の一利那伯母の胸中いかなりしやらん、想像するに余りあり。

祖母は実に重ね／＼の不幸に心配を積み其苦勞の未だ終らざる中、哀にも六十歳を一期として空しく黄土に帰せしなり。又余が母の病中に於ける有様は亦哀なるものなりき。余は伯母に命ぜらるるままに母の怪しき挙動をなすを番したる事もあり。伯母も兄も母を導きて教会に行きたる夜などは独り留守して、風の音に驚かされたる事もありき。されど母が狂なる事は嘗て語られざりしが故に、明らかに知らざりき。伯母は唯母が氣がふれ居る故、汝はおとなしくせよといひて余をいませしめたり。母の手に置かれて後は、快活なる小児として愉快なる月日を送りぬ。此頃余が楽しみとしたりしは、植物を採集して栽培する事が普通遊技につけ加えられたり。又学校にては前にも述べし如き有様にて、教師は余を才子なりとして賞めぬ。学績の如きは上位を占むる事前の如く、特に文章読書は得意とする所にして、高等科二年の時臨時試験に及第して登級したる事もありき。されど算術は嫌なりき。

右の如くにして余は十三歳の春、小学校の全科を卒

へたり。実に明治廿四年なりき。
右は余が生れて十三歳小学校卒業迄の事を誌せしものなれど、尚母の家庭教育の如き足らざる所は別に補ふ所あるべし。

士規七則

- 一、凡生為人、宜知人所以異於禽獸、蓋人有五倫、而君臣父子為最大、故人之所以、為人、忠孝為本。
- 一、凡生皇國、宜知吾所以尊於宇内、蓋皇朝万葉一統、邦國士夫世襲祿位、人君養民、以統祖業、臣民忠君、以繼父志、君臣一体、忠孝一致、唯吾國為然。
- 一、士道莫大於義、義國勇行、勇因義長。
- 一、士行以質実不欺為要、以巧詐文過為恥、光明正大皆由是出。

一、人不通古今、不師聖賢、則鄙夫耳、讀書尚友、君子之事。

- 一、成徳達材、師恩友益居多焉、故君子慎交游。
- 一、死而後已四字、言簡義広、堅忍果炎、確乎不拔者、舍是無術也。

右士規七則、約為三端、日立志、以為万事之源、日

扱友、以輔仁義之行、日讀書、以稽聖賢之訓、士苟有得於此、亦可以為成人矣。

窮達在天、一善在我、在天不可必、在我者可企、聖人惜陰、孝子愛日、事在勉強耳、修身以慎飲食男女為先、接人以謙讓受教為主、処事正其誼不謀其利、堯舜孔子我師也、大中正正、之道在此、華盛頓彼得是我慕、維新活潑之機在彼、勿踐漢儒之固陋、勿蹈洋生之輕薄、取長短、捨、以補皇國之大政、嗚呼任遠而道遠。

卅三年夏、余が少時よりの文歌等にして現存せる者の内より面白き者を取りて、左に記す。

暑中休暇

此文は去二十四年頃、「文学会」の雑誌に出す為に寄稿したる者らし。従つて實際問題ならむ。

今や吾人が待ちに待ちたる夏季休暇こそ来りたれ。諸君は此時に際し如何なる事を以て、日を送らるるや。余は考ふ。旅行する人もあらむ。帰省する人もあらん。或は家に在りて讀書する人もあらむ。と是皆適當なる事なり。然り而して、今余は家に在る諸君の為めに望

む事あり。諸君は此炎々たる暑熱の有て、幾分の不愉快を感じらる可し。此不愉快を免るるの方法は、第一朝寝せざる事。第二昼寝せざる事。第三朝夕樹陰を散歩する事此ならむ。性質に由て之を守らずして却て、好気分を来す人あれども、此他の人、若し此等を怠たる時は或は眩暈、或は頭痛等を起す可し。諸君願くば此等を怠ることなく、愉快に此休日を用ひよ。是れ余の希望に堪へざる所なり。

夕立

此新体詩は二十五年の暑中休暇に作りたる者らし。当時余は大和田建樹氏の風に習ひて、新体詩を作らんと試み、屢々練習したり。

降るよ降る

地球の上に、いや高き、
みそらの雲の、その間より
空気の中を旅行して、
をどりつ、まいつ、さけびつ、
地にくれい

草木山川、海陸地、

町や田畠や、鉄道や、
天と人との、差別なく、
皆うるほふぞ、おもしろき、
降り止めは

遠近山の、色あをく、
夕日の影の、さしこみて、
雲一つなき、あをそらに
飛くる鳥、二つ三つ。

其後二十六年よりは、母上病氣にて、多く家にありたれども、余の好尚は文学を去りて、地理学、動物学に走り、二十六年七年頃は大に南洋開拓の空想を抱きたる時代なり。従つて詩文等多く棄まざりしなり。又二十七年、八年に至りては、余漸く精神の修養といふことを考へ、或は哲学論を喜び、或は修身則を作りて自制するに至り、文学杯は却つて之を無用のこととして厭ひ嫌へり、されど廿九年頃に至り真の修養は、理屈のみにては出来ぬことを悟りし為か、心にゆるみを生じ再び文詩など作ることあるに至れり。左の一篇は美士代町常盤館に在りし頃の作なり。

月さへこほる冬の夜の
ふけゆくままたたえゆきし
ゆきぎの人の下駄の音も
いまはきこえずなりはてて
ひをいましむる拍子木の
ひとりかすかにひびくなり
我はふすまにねむれども
をもてはいかにさむからむ
ころしもきこえし一声は
このさびしさをやぶりけり
をさなきこゑのちからなく
あんまかみしも五百文
またもひとこゑあはれげに
あんまかみしも五百文

又此頃より和歌を作ることを中心けたり
母上のみまかりたまひけるを
かねてよりつねならぬ世と知りながら
おしきはひとのわかれなりけり
さみだれのころ文よみければ

和田峠

あさひかけとぎせるきりをやぶるらん
まつあけそむる山のひとかも
爾来影は多く旅行したる時見るものきくものにつけ
ていひ出てつるもの多かりき

妙義山の紅葉

をにがみの立つともみゆるこのやまを
秋のにしきは誰がきせにけむ

碓氷嶽眺望

山々は嶺をつらねてねむるなり

小春日和の信濃路のそら

箱根底倉にて

うすけむるはやせのおとはたちこめて
そこくらたにいでゆわくなり

二子山(若松)

ふたごやまみねの白雲たえゆけば

はるかにはるる沖の白浪

木曾道中

山ふかく風はずしく水きよく
あをばがくれをうぐひすのなく

初恋

さみだれのそぼふるころはけふもまた
ふみのはやしにあそびくらさん
とりたててこれたふことのあらなくに
なにかはひとのかくもこひしき
高橋君掃郷せんとするとき送りける
海や山や道はちざとをへだつとも
心はおなじ月をみるらむ

秋夜対月

なくむしのごゑたえだえになるままた
さやけさまさるあきの夜の月
秋の夕ぐれに王子辺へ散歩しける折
ごとしもあきてくれそめにけり

甲斐へ旅行しける所

ありあけの月影ふみてけふもまた
みめくる旅にひとりゆくかな

昇仙峽

ちはやふるかみよのうたやうたふらむ
かねてみねよりおつるたきつせ

筑波山

筑波根は白雲をおふ風さへも

みちとせまへのおとにふくらし

古川初夏

夕日くれて小川の岸過ぎてみれば
くもれる空にかはづなくなり

駒込

動坂を谷中蓋の朝荷かな
植木屋の垣根つづきや草ひばり
田を過ぎて橋をわたれば木犀の

ほのかに香ふ森のしたみち

酒匂の海嘯

月くらき酒匂の浜の夕まぐれ

泣子は誰が子乳にうゆるか

箱根

蕭殺す古関の跡の枯尾花

冬十月箱根湖上の細雨かな

小石川関口

うら枯や野川のふちの鳥瓜
雨蕭々芭蕉あれたる山寺かな

中野大久保

薄原雑木林につつきたる

百舌ないて夕日一しほ沈みけり

碓氷を思ふ

道はたの絶壁高し鷲もみち

十丈の岩道を圧す鷲もみち

池上六郷

土手一里すすきそよぎて日はくれぬ

稲こきのいそがしげなる夕日かな

滝本兄の帰朝を迎ふ

出迎のまつさきかけや富士の雪

田端

麦畑の筑波につづく王子道

行く秋を焼場のけむりほそきかな

冬の月村は夜霧にかくれけり

門にそふて霧立のぼる広野かな

駒込

水仙の一りんざしや床机

不忍やたた簾々と春の雪

雪の夜を幼き声の按摩かな

伏かけの襟ばやしや冬の月
故郷の梅のたよりや昨日今日

京都

春正に落花流水の心かな

春雨や四条河原の蛇の目傘

長き日を桜かつちる山寺かな

○

御みやげを半紙につつむ新茶かな

苗売の花やかたる小路かな

春風に羽うつ虻の天地かな

矢かすりの袖つきまふ胡蝶かな

飛石のはなれにつづく若葉かな

小石川目白

朝すすや疎雨落葉のあしたより

月白しあやし山堂にわらひこえ

夕月や葱^葱あらふ人の高ばなし

出来秋や立場で富士の芸つくし

出来秋やはるかに富士の小むろふし

○

爪ひきのしんとした夜ぞ梅雨の中

小石川

葉桜や江戸川端にあめゆくり

明治二十九年 (一八九六年)

延生余錄 第五冊 (續)

January 1st. I was paid congratulatory visits by Messrs. Katō Seichi, Nishihara Yoshiji, Usawa Genji, Usawa Seiji, Kasai Kojiō, Kimbara Tōzō, Horinouchi Tomosaburō and Jinshirō, and Senoo Katsumi. I was sent congratulatory letters by Messrs. Yamada Kenji, Motono Tōru, Horiguchi Yonetarō, Suzuki Shūji, and Takimura Ayao. I paid congratulatory visits to the houses in our Masters' resident. I sent congratulatory letters to Messrs. Soyama Tatsuo, Horiguchi Yonetarō, Kōyama Naodzumi, Yamada Kenji, Sawano Tatsuzō, Takimura Ayao, Nagayo Mararō, Motono Toru, Nishi-

ura Yoshiji, Suzuki Shūji, and my uncle. I went not out of the residence, because my brother was in "Ban". (当番) Whole number of the persons who called on our house was sixty.

2nd. I paid congratulatory visits to Messrs. Kōno, Itō, Katō, Motoyama, and I was done so by Mr. Matsuyama. I sent new year's greetings to Messrs. Takahashi (in America) and Minobe, and received those of Messrs. Matsuyama Shinjiro, Itō Sueniko, Yamazaki Koroku, Fujikake Jūji, and Minobe Sadao. I went to Mr. Yamamoto's in the evening.

3rd. I visited our acquaintances' at Kojimachi, Aoyama, and Azabu. Their names are:

Iwasa (Doctor),	Iseki (Dr.),
Nishihara,	Koshishi,
Kanda (Teacher),	Yenomoto (Dentist),
Yamamoto (Doctor);	Yamada (Rev.),
Kaji,	Matsui,
Sasaki (Colonel);	Motora (Teacher),
Iguragakō (School),	S. Okada

Shibaura-kwan. There were seen about fifty persons. We bathed there.

15th. I went not to school, for my aunt was ill.

14th. We began our lessons in Elocution and Solid-Geometry from this month in the school.

I called Messrs. Katō and Kōno. I sent letters to Messrs. Matsuyama and Fujikake.

15th. I went to Mr. Motoyama's place; for there was held a New Year's Meeting. It was very pleasant, card-playing, kembu, joking speech, and thunder-playing were done. We returned at 9. I suffered from tooth-ache this day.

4th. I called on Mr. Itō, we had a karuta-party. I received letters of Messrs. Sawano, Kōyama, and Wata Masaru.

20th. I did not go to school because of tooth ache. I had my hair cut. I called on Messrs. Yamamoto and Usawa.

8th. I went to school but there was no lesson. I called on Mr. K. Takahashi with Messrs. Kōno, Tsubaki, and Kawai, a.m. I took a lesson on fencing at Sōyūsha, p.m. I called on Mr. Katō in the evening. I received Mr. Soyama's letter. It says he has been traveling and now is at Kagoshima.

23rd. I took a lesson in algebra at Mr. Katō's. I was in bed till 8. So I was too late for school.

9th. I went to the biva-party which was held by our school-fellows this evening at the

30th. *Shunki-Taikai* of Sōyūsha was held this afternoon. I attended there. There were many combats between members of the club and during policemen who were invited par-

ticularly. I called on Mr. Usawa. I went to bath.

February 1st. The Koyūkwai was held at the Genkōin; the addresses of the members and the Koshaku of Tōrin were done in the forenoon and in the afternoon there was delivered a lecture by Lieutenant Ogasawara Na-gau of Navy in regard to the naval battles in the late war. The lecture lasting about two and a half hours, he talked particularly both about the battles on the Yellow Sea and in Weihaiwei, showing some common or able things. I received Mr. Soyama's letter; he had to abolish his learning on account of the disease, so he made up his mind to settle himself in agriculture at the land which his father had given him to cultivate.

2nd. I called on Mr. Itō in the afternoon. I wrote to Mr. Soyama, encouraged him to cultivate his spirit.

8th. I went to a "fortress" by boat with some of my friends. I had been advised by the doctor to avoid an extraordinary mo-

tion of body so that I went not to boat during the past five months and this was the first occasion after the disease. I also began fencing again since the last month.

11th. In the morning, I attended at the ceremony of school which was held in honour of "Kigensetsu". We, members of school, sang "Kimigayo" and the "Song of Kigensetsu"; an address was delivered by Principal Kanda. I was called on by Mr. Katō, a.m. I called on Mr. Kōno, p.m., met with Messrs. Takahashi, Sawano, and Motoyama.

16th. 旧紀州領出身軍人凱旋歡迎会を、旧侯の御庭に開かると付、其接待手伝として行く。十一時を過ぎ、川口副会頭(武定)祝辞を朗読し、旧侯御挨拶あり。次に茨木少将凱旋軍人総代として答辞を朗読し、天皇陛下、皇后陛下、皇太子殿下万歳、凱旋諸君万歳、旧君閣下万歳を三唱す。正午饗応あり。それより川上演劇(二幕)、里神樂の余興あり。又、陸軍音楽隊は此間断々奏樂し、少年音楽隊も来れり。且庭内所々に茶店あり、來賓は自由茶業、ビールを得たり。因

記す同会は川口氏主となりて周旋し、安藤氏会長たり。發起人は有力者にして、金三田以上を離し、會員は金一田以上を離して費用を充したる。

19th. I went to the Kabukiza to see the performances, where I accompanied Mr. and Mrs. Uchida, and their mother. The subjects of the play was "Katō Kiyomasa" and "Dōjōji," and the actor was Mr. Danjūrō and his disciples. After it broke up we went to Manyasu, a restaurant, and had supper. I returned home 10 p.m. Examination in Algebra. (s)

21st. There was no school after 1 a.m. on account of the fiftieth anniversary of the Emperor's death. I called on Mr. Takahashi with Mr. Kōno. I went to bath. 25th. I was called on by Mr. Katō in the afternoon and we went to the Siba-Park for a stroll. (I made up my mind to tell any one anything which I didn't know certainly.) 26th. I went to bath. I had my hair cut. I called on Mr. Katō p.m. We argued the

most important things and I concluded that first of them is *Michi*, second the native country, third our home.

March 1st. I took a walk at the Shiba-Park. I called on Mr. Takahashi but he was not at home. I called on Mr. Matsui Sadahichi with whom I had never met for a few years.

2nd. I went to the Shiba-Park for a stroll, met there with Messrs. Takahashi, Katō, and Kōno, went to Mr. Takahashi's with him and talked till 9. I saw Mr. T. Takahashi's photograph which he sent to Mr. K.T., now he is studying language at a university at Tacoma, his business being in the rest through winter.

3rd. I went to the S.P. for a stroll. I took a lesson in Trigonometry at Mr. Takahashi's with him and Messrs. Katō and Kōno, left there at 9:30.

7th. A festival was held in memory of 'Nanryōkō'. So we went to the Marquise's Palace and received the visitors. As the Marquise's

son Tokugawa Yorimichi Esq. was to leave Yokohama for Europe with Messrs. Kamada and Saitō, we went there on the same train with him, at 10 P.M. stayed at a hotel named 'Tsukuiya'. The master, after resting a while at the hotel, went to the ヲノオト・シモン, the French ship that he would be navigate by. We walked through the Chinese street. We attended the master to the ship and saw the dining-room. It was a pretty splendid one. We slept at 3.

8th. In the morning we went to the gang-plank to meet the master who was to go to the station to receive the Prince Fushimi who was also to start on the same ship for Europe in order to be present at the coronation of the Russian Czar as the representative of the Imperial Majesties. After taking a stroll we went to the gang-plank to see the master off. At about eleven the ship gradually departed from the plank, the Russian man-of-war Azowa, was fired a salute from a band on a steam-boat attended

her in the offing, we celebrated the starting by stirring up our hats while the gentlemen on the ship replied by doing so. By afternoon often taking a stroll at the Chinese street and Nogeiyama I went to the station and returned to the Capital by the train of 2:50 P.M. while my company went to Sugita to see the plum blossoms, but I didn't like to do so from the want of sleeping through the last night.

9th. I have my stomach hurt, so I will be careful about the diet and exercise.

10th. My brother is ill in bed.

11th. From to-day our lesson will only be taken on Mathematics; for the examinations will begin from the next Monday and we have to prepare for them. I had my hair cut. I went to bath.

14th. This morning the Grand mother-in-law started for Wakayama. She intends to spend the rest of her life there. I took a lesson in Algebra at Mr. Katō's. I went to bath. Examination in English. (s)

Examinations for Graduation

Translation (Dictionary not allowed)

(1) "I am very sorry, Sir, I have broken your window. My father is out of work just now, and cannot pay for it; but if you will be kind enough to take a little at a time, as I can get it, I will be sure to make it up."

(2) Now it seems that Captain Cook rather preferred the coaltrade to the King's Service.

(3) The least attentive eye must have singled him out from among a thousand.

(4) Jervis speaking of Nelson said "Any praise of his would fall very short of his merit."

漢文積義

上招延士大夫常如不足然性嚴峻羣臣雖素所愛信者或小有犯法或欺罔輒按誅之無所寬假汲黯諫曰陛下求賢甚勞未及其用輒已殺之以有限之士恣無已之誅臣恐天下賢才將尽陛下誰與共為治乎黯言之甚怒上笑而論之曰何世

無才患人不能識之耳苟能識之何患無人所謂才者猶有用之器也有才而不肯尽用与無才同不殺何施

(資治通鑑)

漁父曰夫聖人者不凝滯於物能与世推移季世混濁何不隨其流而揚其波衆人皆醉何不鋪其糟而餿其醪何故懷瑾握瑜而自令見放為屈原曰吾聞之新沐者必彈其冠新浴者必振其衣人又誰能以身之察々受物之汶々乎寧赴常流而葬乎江魚腹中耳又安能以皓々之白而蒙世之溫蠶乎

(史記)

作文題

端履競漕記

代數學

1' 次の第一式を簡單にし、第二式を因数に分解し、

$$(1) \frac{a - 1 + ab}{1 + a(a-b)}, (2) (a^2 + 3x)^2 - 2(a^2 + 3x) - 8$$

2' $ax^2 + bx + c = 0$ なる方程式の二根と係数との間に存する關係を記し、之に依て此方程式の二根の二乗をそれぞれ根とする一つの方程式を作れ。

3' 同じ力の船頭五人にて、一分に二町流るる河を六

拾五町漕ぎ上り、直ぐに引返し、三人にて原の所まで漕ぎ下りした。此上り下りの間に総べて三廿一分を要せりといふ。静水を一人にて漕ぐときは毎分の速度幾何なるや。

$$\text{四} \quad a(y+z) = b(x+z) = c(x+y)$$

$$\text{なるべし} \quad \frac{y-x}{a(b-c)} = \frac{z-x}{b(c-a)} = \frac{x-z}{c(a-b)}$$

なるべき事を証明せよ。

五、或る中学校の卒業生拾人の中、三人は優等生なり。今此卒業生の中より七人を選抜して高等学校を推薦せんとす。但し優等生だけは必ず此選に預めんとすといふ。此選抜方法幾通りありや。

18th. This night I caught cold and was attacked by fever. Examination in Geometry.

19th. I consulted with Dr. Iseki; he said my fever rose to 38°2'C. Examinations of History and Trigonometry.

20th. From Yesterday afternoon I lay in bed and took medicine. So this day I was considerably well. But still in bed.

21st At daytime about 3:30 a.m. I was

woken up by my aunt, this night I was sleeping at the up-stair. I went down and was told that the mother looked greatly bad. So I got beside the mother's bed and found that her eyes moved scarcely and that her breath was hardly heard; and, more over, when I found her pulse beat no longer and her heart moved faintly and irregularly,

how my surprise was! I shivered and shrank and hardly told the brother and the aunt that she will die. Then the brother ran to Mr. Nakamura's to ask him to summon the doctors, I woke up Mr. Nagai's wife; and soon after Dr. Iseki and Mrs. Nagai came, but, alas! the mother's skin became whiter and whiter, and bluer and bluer; her arms and legs grew firmly stretched. Ah! she was dead! There was a way no more. And thereupon I became a poor boy without father and mother! We wired this sorrow accident to the uncles and the aunt who were all at Wakayama, posted to all the acquaintances. From morning

many persons visited us to console: they were

Yamada Sukejirō. (Rev.)

Koshiishi Kiwa. (Female preacher of St. Andrew's Church who was one of my mother's pretty good friends.)

Ibaraki Ryemon. (in service to the Marquis).

Kaji Masasato. (")

Kondō Kiyoshi. (")

Maeda Takaharu. (")

Yoshimura Urosuke. (relation)

Takahashi Masa.

Okada Hama. (Mrs.)

Nara Masashi. (in service to the Marquis).

Kobayashi Tatsugorō. (")

Watanabe Kitarō. (")

Ishino Asajirō. (")

Takenouchi Yasutarō. (")

Yamagiwa Seisuke. (")

Yoshimura Shiryō. (relation)

Kasai Isami. (in service to the Mar-

quis)

Nakamura Wasaburō. (")

Tsuji Seisuke. (")

Miura Yasu. (Representative)

Usawa Masafusa. (in service to the Marquis)

Saitō Saneyuki. (")

Okamoto Yonekichi. (")

Utagawa Fukutarō. (")

Yamanoto Risaburō's mother. (")

Nagata Kumagusu. (")

Oyama Nobukichi. (")

Kobayashi Sentarō. (")

Kasai Kojirō. (")

Kusano Takeo. (relation)

Kusano Bensaku. (relation)

Miyake Tokujirō. (in service to the Marquis)

Karibe Shojirō. (")

Ide Tasuku. (")

We resolved to bury the mother in the Christian ceremony. Miss Koshiishi came and changed her dress for a white one and

laid her into *Hitsugi*. The other business was all managed by Mr. Usui Shokichi, the partner of my uncle's store at Kyôbashi. I didn't "Tsuza", because I was feverish.

22nd. This day we were visited by many members whose names I will write down at all but chief ones were:

Miura Yasushi. (consulter to the Imperial Family, intimate friend of my father's)
Takahashi Wataru. (in the service of Marquis)

Egawa Yoshizumi. (")
Shiotani Takenosuke. (lieutenant paymaster, one of my father's deciples)
Oura Shunzaburo. (government official, my father's friend)

Yamai Kwanroku. (teacher, ")
Mr. Matsuo Miyotarô and Mrs. Kane returned home from Wakayama.

23rd. At 1 p.m. the mother's *Hitsugi* was brought out, we accompanied to St. Andrew's Church, funeral song was sung, preacher read some passage in bible. Then the fu-

neral marched along the street to Aoyama *Kyôdo-Bochi* and we hurried her there.

24th. We sent the thanking letters to those who accompanied the funeral and also advertised the same in the *Jiji-Shimpô*.

25th. In the afternoon I visited the mother's grave. I went to the school and asked the secretary if I could be examined about the studies of which I was absent at the examination; he replied I might. I received a letter from Mr. Tsubaki and Mr. Nagayo; he regretted my mother and consoled me.

27th. I went to school; teacher told me that the examinations will be given us about next month. I visited the grave. Mr. Nishinra called on me and consoled us.

28th. This day there was held the graduation exercises of our school and in the school grounds an athletic sports, but I was prevented from going to school. In the evening Mr. Motoyama called on me and told that tomorrow photographs will be taken of the graduates, so he hoped me to go with.

29th. I had my hair cut. I went to Maruki's photographic gallery and had photographed myself with the school mates and teachers. From there we went to Daidaimochi.

The desire of photographing was at first proposed by the members of the first class of the fifth year, and their plan was to each pay for themselves and still pay for the teachers'. But when we the members of the second class asked them to do together, they never explained about the plan, so that we thought we will have to pay only for ourselves; for this being ordinary way.

When we all went to the photographer's, the about fact appeared as a miss. The committee of the first was accounting the price of the photograph, distributing us the shares of the account of the teacher's. So some of us were much excited against them. Among these persons I rose to move. I went up to the committee and told them that we could not agree with them. We would be contented on sending to the school

a single copy. But, being only seconders, we will obey their opinion if they allowed us not to say anything. Then they kindly allowed our offer and required me to inquire into agreeing or not if the members with them. I consented and did so asking the aid of Mr. Tsubaki the representative of our class and replied to them. They said that the majority of the members of the two classes agreed with them, but it being not desirable to go with unpleasant feeling we the opposite ones, could pay for ourselves' and no more for the school's. Thus we could realised our opinion.

But after this I regretted of this motion, for I had been only over a week after mother's death and it was not good to go too farther among the people, and there were some person, otherwise who could try what I did. This I thought V.R. of the R.I.

31st. I called on Mr. Kanda Naibu with Messrs. Katô, Tsubaki, and Sawano, but the teacher was not at home. So we went to

Tokiwabashi from there and inspected the new office of the Japan Bank. Returning home I did home business. By the evening I wrote two letters; one of them was to Kanda Esq., asking him that I may finish my graduation examination as soon as I am possible; and the other one was the reply to Messrs Suzuki, Koyama, and Takimura who inquired me through Mr. Sawano that we will inquire the members of our class once more after agreeing or not about the photograph affair. By this letter I contradictorily refused their proposal about the opinion, but about the present way of management I agreed them a little and more over I told them that I cannot go too farther among the people because I had been only over a week after my mother's death, so I would choose a person who could negotiate with them instead of me. In the afternoon I went to Okechō on business, I had the occasion of seeing Miss Oume Tashiro for the first time who was a niece of Mr. Uchida.

pointing order which was respecting to the examination and given by the other teachers. On the afternoon I called on Mr. Matsuyama and found, that I am not in so much a disappointing situation from the talking. By the evening I received a letter from the school. It carried a more convenient message for me.

始、余高等学校にて、入学生を取るに入学試験及第者の中、最も願書差出時の早きを標準となす事をき、又其差出期日は三月三十一日なりと思ひし故、先月受けのこしたる卒業試験を早く受けて学校の証明書を得、早く入学願書を出さんと欲し、神田先生に請ひ、或は幾度か学校にも行きて談合せしに、学校の方にては十三日に試験期日知らせんなどいふ緩慢なる処置なりしかば、余はかくては願書差出の遅きを及第にもかゝはらず入学を得ざるが如き事ありては残念と思ひ、断然学校よりの証明書の事は断念して、早く競争試験の願書を出さんかと思ひしが、兎に角此等の事は一応経験ある人にきゝてみんと思ひ、松山信二郎君を訪ひ、色々様子をきゝて見るに、競争試験の出願は七月一日よ

the husband of my aunt.

April 1st. I worked at house business. Mr. Katō called on me and I charged him with my duty for the photograph affair.

2nd. I received Mr. Kanda's letter, he told me to go to the school in the morning of the 6th, and consoled me kindly over my mother's death. I took a stroll in the Shiba-Park and Kanasugi. I wrote to Kanda Esq., thanking for his kindness.

3rd. I went to Dr. Yamamoto's and houses in the Yashiki on the errand of Manjūbari. I visited the grave. I called on Mr. Katō.

5th. In the forenoon I attended at the sermon at the Yuisukwan. In the afternoon the graduates of the school of the last year called on me, the business was respecting to the photograph affair.

6th. In the forenoon I went to the school but Mr. Kanda was not there. I left there and called on Mr. Kawai. After a time I returned to the school but he was not yet back. So I got back home with the disap-

り四日迄の間なり。又、特別試験ならば学校よりよき頃を見て証明書を与へられ、且商業学校にては募集人員数位の特別受験者を被証生の中より撰出するを以て、之にきぎては願書の前後等をはまり関係せず。及第生は悉く採用せらるるの例なる由なりし。かくて、余は今迄余計なる心配をなしたり。さればかゝる時は早く経験ある人にきゝて見るべきものなり。

去年の卒業生諸氏は、吾々今回の卒業生中旧五年の一より出でたるものと二より出でたるものととの間に面白からぬ關係が、つまりぬ事(写真の件)より起りたるを思へて、仲裁の勞を取らんと申出されたり。其為に卒業生七人の諸君は打つれて今回の各卒業生の間を説きまはり、「何分吾々に仲裁の全權を与へられたし」といはれたり。之につき、吾々の中或人は断乎として前來の意見を固執し決して、「君等が吾々の論を打ちやぶるか、又は従ふにあらざる以上は仲裁の全權を托し難し。」と答へ、或人は「未定」と答へ、或人は彼等の威を怖れて其全權を托せしもありしが如し。されど余の之に対する意見は下の如し。「吾々が同じ二十九年の卒業生にてありながら、かゝるつまりぬ事より御互

にまちまちなる行を為すには甚だ子供らしき事なれば、今日の急務は兩者をして一律の方法を取り、一様の負担をなさしめ、外聞のよき様にするにまじりと信す。故に吾々五年生たるものは、今度の写真の事に限り、書生は浪費をなさずといふ立派なる主義を実行する事をやめて、多数者たる発起人派の意見に従ふも可なりと信す。されば吾々は如何なる事に結果がなるとするも、双方一様の事さへ出来れば満足せざる可らず。然れども、今日となりては双方相確執したる後の事なれば、いづれが譲るといふも勢出来ざる事なり。故に先輩の卒業生に仲裁を頼むは至極穩当の策ならんと思ふ。或は彼等は五年一派の依頼を受けたりやの疑なきにあらざと雖、余は甘んじて之を看過するものなり。併し、余は彼等が七人揃ひて運動する事なれば、まさか、かゝる不公平の事はなからんと思ふなり。「又思ふ。」「若し吾々発起人反対派のものが相談して、此度の事に限り発起人派の意見に従はん事を申出す事を得ば、是上々なるべし。」「いや、矢張之はだめなり。今日となりてはもはや遅し。先年卒業生に依託する方が穩便なり。」

we went to the Park for a stroll. In the evening Messrs. Takahashi and Motoyama called on me.

9th. Examination in Mineralogy, a.m. (s). Mr. Katō called on me, he told me that he resolved to enter the Naval College, p.m. I took a stroll to Akasaka Hikawa, I found a new road is being built through Tanimachi.

10th. Ex. in Chemistry and Physics. I visited my mother's grave.

11th. Examination of Trigonometry. I called on Mr. Nishimura's at Bancho and Mr. Sawano's at Ōji, starting from the house at 10 a.m. On the way I passed the Hanzōmon and the Yasukuni Jinsha.

On the way home from the Asukayama I took the way by the train, I found a new station between Ōji and Ueno. After walking a while at the park I returned home. It took me about 1 hour and half to walk to the home from there. Every place where were some cherry-trees were in pretty confusion with visitors.

7th. In the forenoon I went to the school to see the tables of the day of examinations. In the afternoon Mr. Nagai Isami called on us. In the evening I called on Messrs. Horiguchi, Kono and Kato, the details of the matter was as follows:

二十八年の卒業生は自ら教師諸氏に送るべき分の費用を分担し、五年級一、二の人々は自らの分の費のみを出せばよしといふ事を吾々の中の少数者に申出された。而して、少数者は之を委したり。之につき余は反対の意見を抱く。其意は、吾々がかかる世話に満足して人に銭を出して貰ひて氣の毒とも思はぬは誠に意気地なき不面目なる子供らしき限りにあらずや。されば今日に於て、吾々は先年卒業生諸氏に其厚意を謝するは勿論なりと雖、上の申出しは断りて、吾々同志間の相談にて多数者の意見、即教員にくばる事として、其費額を各人分担すべきなりといふにあり。余は之を堀口、河野両君に説き両君の同意を得、両氏より尾崎氏に申出す事を托せり。之、余が出しやばらぬ為なり。

8th. In the forenoon I went to the school. In the afternoon Mr. Kōno called on me,

12th. I attended at the sermons of Mr. Kanō Jigorō at Kodokwan, p.m. By the evening I went to Okechō on an errand and this night slept there.

13th. My aunt, Miss Onme, the two female servants and I went to Mukōjima. We started from the house at about 8, a.m., went to Azumabashi by a steam-boat, walked along the river, visited the *Kikkudo*, *Hasshugen*, and *Hyakka-gen*. Then we crossed the river by a watashtubue, went up to the *Matsuchi-gama*, walked around the Asakusa Park, dined at a restaurant there, and returned by a stage-coach. I bathed and had supper at the Okechō and returned home with the fullest pleasure.

The *Hasshugen* was pretty a large grass-plot garden with a large pond and various trees and bushes. It had considerably picturesque scenery.

The *Hyakka-gen* is a garden with numerous kind of the trees, bushes, and grasses, especially the plum trees and the autumn

flower grasses. Now it enjoyed the beautiful blossoms of *Kaido*, *Yamabuki*, and *Yae-sakura*.

14th. I went to the school and informed the manager that I desire to enter the Higher Commercial School. I had my hair cut. I called on Mr. Takahashi.

15th. I went to the school and received diploma, a.m. Mr. Kato called on me, p.m. (talked about love.)

16th. I was ill in bed from last night. Mr. Uzawa Genji called on us; he had been suffering from pneumonia at the Yojo-yen (Dr. Kitazato's hospital at Hiroo) for weeks and returned home just yesterday. I visited Mr. Nagai the senior and thanked for kind services which he rendered me as my guarantor to school showing the diploma. I informed to Mr. Soyama of my mother's death and my graduation.

17th. I studied 3 hours and a half. I visited Mr. Yamamoto at the Yojoyen Hospital. He had been suffering from *Hait-Kekaku* and

went to the hospital on the 6th of this month. His disease was said to be considerably severe some what regarding to the life.

18th. I studied 3 hours. I called on Messrs. G. Uzawa and Kinbara but they were absent. I read *Hakken-den*. I called on Messrs. Tsubaki and Matsuyama but they were not at home, so I went around to Mr. Takahashi and talked till 9. I went to the Figura Post Branch Office (Mr. Ida's) and got a pass-book of savings. This was the first time that I charged my savings to the postoffice.

19th. I went to *Misukaw* to hear Mr. Saiji's preach. I called on Mr. G. Uzawa on the evening.

21st. There was held boat races of our school at the Sumida River. I left home at 10 to go there. On the way I just called on Uchida's and went to the *Joto-Shogakukan* where I told the boys to go on the afternoon. The place was skillfully settled, the flags waving over the bank and a pleasant

25th. I studied for 4 hours on the forenoon.

By the afternoon I read Mr. Suehiro's "Japan after the war", a political novel. I went to the lecture hall of the Imperial University at Hirosubashi, Kanda, to hear the lecture of Prof. Motora which was on the subject of "Relation between Metaphysics and Economy".

26th. Mr. Katô called on me on the forenoon and we went to Mr. Motoyama's where we found Messrs. Sawano and Tsubaki. After talking a while, when we started from there, Mr. Itô came. Thus we, six in all, took a stroll to Meguro. We were much pleased there with waving wheat plant and Renge flower like red rugs, and still more with our friendly talking and laughing. Fudô temple and Shinfuji were visited and Takenokomeshi of Daikokuya furnished us a good meal. On the way home it began to drop the pieces of hydrogen oxide,—so we called them,—but there was made no inconvenience that we were not of hariko, and returned

band attending. The races were held one by one, and turn came to me, but the crew I belonged to lost. Uchida's boys came, we walked about the Asakusa Park and looked the Panorama of the Heijô battle and a show of wild beasts. We returned to the Okechô at about 8. I bathed and slept there.

22nd. I read Mr. Fukuzawa's *Fukuro-Hyakunawa* on the Jiji Shimpô. I returned from the Okechô by the evening.

23rd. I cleaned the garden. Mr. Nishinura called on me. I went to the Post Office on an errand. I visited my mother's grave by the afternoon. I called on Mr. Motoyama. I went shopping to Mita. I received Mr. Nishinura's letter and wrote to Mr. Soyama about his service. On the way I met with Mr. Higuchi who was one of my school-mates when in the grammar school. He said he was to go to Yokohama Post Office tomorrow; for he graduated from the Post and Telegraph School and have been appointed to a clerk of the office.

home safely at about 5:30. By the evening I called on Mr. Itō.

27th. I studied for 2:30 hours in the forenoon. I just visited the school for the business of entering the Commercial school. I received a letter from the school. Mr. Katō called on me in the afternoon and we studied arithmetic and then went to S.P. where we found Messrs Kōno and Tōchio. I went to Okechō on an errand. I went to bath.

28th. I went to the school to hand the written petition for admittance of the Commercial school. I studied for 4½ hours. I received the letters of receipt of savings from the Post Savings Office.

29th. I visited my mother's grave. I studied for 4 hours. I had my hair cut. I called on Messrs. Suzuki, Kawai and Tsubaki.

30th. I studied 4 hours. I went to Sannō for a stroll.

Summary of Account during Apr.
Received money

Remainder of the last month	800.9
Sen	
From brother	19.5
Returned	70.0
From aunt	10.0
For rugs	12.0
For May	500.0
Returned	45.0
Returned	31.0
B 甲	.5
Total	1493.9

Rules

1. You should not speak anything you know certainly. (Silence)
1. You should not say or do anything too farther.
2. Never forget; Never be thoughtless. (Prudence)
3. Be accurate about the time devoted. (Accuracy)
3. Be accurate about your account.
4. Be industrious in study. (Industry)
5. Eat not too much. (Healthiness)

6. Do your best and never look to another's saying. (Trang)

9. Be active; do decidedly everything by your hand. (Res.)

5. You should not take care of rain or wind.

May 3rd. Messrs. Katō, Tsubaki, Kawai, and Kōno and I called on Mr. Sawano at Ōji. On the way we rambled about the beautiful field of Senju. There the wheat plant was waving with sound and *Renge* flower enjoyed its duty given by Heaven furnishing us with the most pleasant and lovely pictures. At Sawano's house we made several games.

Thus with the fullest pleasure we returned home. It was 10. This day I heard the most sorry news that one of my dearest friends Mr. Yamamoto Kisaburō died at the hospital from 肺血格 I went to his mother's and consoled and was there till 2:30 for *Tsuga*.

4th. I called on Mr. Uzawa. I attended the

funeral of Mr. Yamamoto.

5th. I went to the Marquis' Palace to see the old weapons of the house by the afternoon. I called on Mr. Akashita in the evening.

10th. By the afternoon I went to the *Hitsu kawa* to hear Dr. Tsuboi's scientific lecture with Messrs. Takahashi, Sawano, Kōno, Kawai, Tsubaki and Katō. It was on the subject "About the cakes", and much memorable remarks were given of the cakes of Japan.

13th. I went to *Kameido-Tenjin* with Messrs. Horiguchi and Itō to see wisteria (Fuji) flower, but its beautiful appearance was already driven away by the wind of last few days. Then we went to the peony garden of *Uye-Bun*; we were much pleased with peony flowers, which we compared to a daughter of a rich house, and sweet flags (Ayame) which was attached to a daughter of a merchant from its refined brief figure free from ornamentation.

15th. On the way home from Kameido,

Messrs. Horiguchi and Ito and I agreed to taking lesson in dictation together. So we, by this afternoon, met at Mr. Horiguchi's for the first time. I believed this task will surely give us some convenience.

17th. Sun. Kato, Nishinura. Visited the Botanical garden at Koishikawa.

18th. M. Kato, Ito, Horiguchi (Lesson), Visited the graves of my mother and Mr. Yamamoto.

19th. Tues. Ito (Lesson), Went to Yose with Mr. Horiguchi by the even.

23rd. Sa Visited mother's grave. Attended the lecture at *Kogy-Shitsu, Hitobashiri*.

25th. M. Horiguchi slightly disposition.

26th. This morning Mr. Katô carried to me the most sorry news that Mr. Soyama died on the 19th inst.

June 2nd. T. (III) too late to rise. (II) Misremembering. Went to boat of school in the afternoon, went round to Okechô.

3rd. W. Kajima (I.K.H.N.). Got the first knowledge of billiards.

that lying too long in bed in the morning. I can think the goodness of my health has been one of the most important causes of this effect because it needs long sleep, but certainly is not the mean to be healthy or to make out the hour for studying. As the plan to correct the habit I will not sit up later than 9 at night.

12th. It was a curious matter that I felt vexation to-day. While I was fencing with Mr. Mamiya, I desired to strike his "men", but he giving me not even one opportunity to do so, my feeling was much excited. In time, my breath became pressed upon so that I gave the sign of bow, but he would let me not go and visited my head with a slight strike. I could not help standing up again and struggle; but, in vain, because my strength was exhausted. And I rested with deep vexation. This is, I think, a curious matter for a "coward" as me.

14th. S. Shiotani. Uchida boys. Went to Mr. Kojima's, teacher of handwriting, for the

4th. Th. (III) too late to rise, Kato, Ito (Lesson) Usawa. Got the first knowledge of Shogi.

5th. F. Barber. Ito, Horiguchi (Lesson). Went to Akasaka to view the festival of Hikawa.

8th. M. (III) the same. Kato (Lesson) Horiguchi (Lesson). Went to Okechô: the festival of Yasaka Shrine; taking Chotaru at Wadakura with boys.

大目

一、發中じり念ひたる一面識なる人には必脱離致す可
あつて

一、効能正の前と願はるべき、今々多言じたりつて
苦しみか。

碁 将棋、玉突、トランプ、花合せ、歌カルタ、腕
押、ミンマー、壓押等も確かに藝を達する方法なり。
發日、見や物等見本だじれぬものゝ如く見聞しつて
たゞ、見れば中々面白く、精神を養つた最妙なり。
乾燥なる議論は如何に趣味ありて、脳を勞するに
宜し、休むるに足る。

11th. Lately it seems getting to be my habit

first time.

15th. M. Horiguchi (Lesson). Went to the Tokyo Charity Hospital to see the model of Nikko made by a Shimotsuke Farmer seventy eight years old.

18th. In the forenoon when I was studying arithmetic at my room Uchida's servant-girl came up and invited me to go to view the 花菖蒲 blossoms of Horikiri with the members of that family. So I laid my pencil and went to Okechô by coach. After dining we, Aunt, Miss Onne, Kô, Setsu, the servant-girl and I, left home at about one. We passed away those prosperous streets by coach and reached 浅草 where we just rested. Then we walked to Mukojima, hired jinrikisha, and went up to the place aimed. At first we visited the 武藏屋's garden, next 小高園, of which we preferred the latter to the former; for it had more open view and was free from the unpleasant sounds of drums. Next we walked through field to 四ツ木 where we entered 吉野園, This garden

much agreed with us. Viewing this we took a departure on foot again for 淺草. This being already 6:30, we got to the 松田, restaurant there, bathed and supper there, and returned home. This day the flower being at its best time, we could have very much pleasure. I slept at Okecho this night and returned to Iigura in the forenoon of 19th.

19th. F. Itô (Lesson) Letter from Nishinura went for fencing.

20th. S. Usawa. Went for fencing.

21st. S. Nishinura, Kawamura. Walked about Iigura with Mr. Kôno.

22nd. M. Letter to Nishinura. Went to school with Mr. Katô to examine our physical strength.

23rd. T. Katô, Takahashi.

28th. In the forenoon I went to Mr. Kojima Unkei's to learn handwriting and then visited Mr. Nishinura. After this I walked to Kanda, dined at a Sobaya, and from one o'clock went to *Daï-Nihon-Kyôiku Kai* where were delivered an addresses each by Mr.

Kaneko Kentarô, Vice-minister of agricultural and commercial department, and Mr. Masuda Takashi, President of Mitsui Bussan Kwaiisha.

(former:—On the future of our spinning industry.)

(latter:—About the commerce in Orient.)

July 9th. I went to the Commercial College with Messrs. Itô and Horiguchi in the morning, and met Mr. Yamada there. After finishing our business we went to Mr. Yamada's place where Mr. Kawamura joined the company and pleasant argument was discussed. Just before noon we left there, then Messrs. Horiguchi and Kawamura returned to their houses, so we three dined at a beef-shop. And then visited Mr. Kanda, our noble teacher.

Examination

As the *Bango-Fuda* was to be handed over on the 1st, inst., we went there with *Saisensho* of the school. There were a great

deal of students who all had the same desires as me and among them I found the following persons from the *Saisoku* school, and *Shikemayo 2 yen.*

伊藤 未彦	鈴木 成助
堀口米太郎	明下 一郎
山田 謙治	特別試験 坪井九八郎
村沢孝三郎	浜野 信
田中 重雄	右卒業生他に水野栄(三年級)

After a pretty long time, I was called, went up to *Gakusei-Gakari*, 赤毛塾 and got the *Bango-Fuda* of No. 39.

此時九日では試験の日制を張り出す旨掲示ありたるにより、又九日に行きたり。吾々は特別試験に推薦されれば、掲示の中四科目に関する事のみを写し来れり。下の如し。(是日又自分の入るべき試験室を見たリ。)

第一期

十一日 書取及和文英訳……………七時より九時迄

携帶品……………ペン、インキ、鉛筆

第二期

十三日 筆算……………七時より九時迄

作文(記事文、消息文) 九時より十一時半迄

携帶品……………ペン、インキ、鉛筆、和小筆、墨壺。

十四日 書法……………十一時より十二時迄

第三期

十八日 口頭英文和訳(附文法会話) 七時より

愈々試験は十一日より始まりたり。吾々は早朝四時より起きて学校に出頭したり。やがて七時に鐘が鳴るや、みなみなぞろぞろと試験場に入れり。掛員来りて紙及和文英訳の問題を配付したり。(紙は自分に携帶を許さずして、学校より与へらるゝなり) 其中に又、神田先生と西洋人ヘーヤ氏と入り来り、ヘーヤ氏は reading をなして吾々に書取らしめたり。其方法は始めよりは少し遅くよみ、其次に少しづつきりて二度うつ極めて遅くよむ。(此時書取なし) 又其次に一度始めの如くよみて直さしめたり。

和文英訳の問題は十題ありて、六ヶしき方なりし。答案はすべて姓名を記せず、番号を記すなり。且番号札は試験をなす時機の上に出し置くべきものなるにより、忘れたり、失ひたりすれば面倒なり。やつと済み

て、帰りには松山信二郎君と同道にて帰れり。第一期の及第は十三日に揭示せられしなり。

十二日は少し許りの復習をなし、十三日早朝及か落かと思ひつゝ行きしに、及第者番号表といふ揭示の中に三十九番がありたり。其のみならず明下、坪井両君の他の番号はみな出て居たり。七時になれば、鐘の合図にて又試験室に入れり。筆算の問題は五題にて、二題は運算、三題は応用なり。紙はたつぷり与へられたり。余は最後のを考へ能ざる中鐘がなり、作文が始まりたり。問題は、

記事 過某港記

消息 客中某地の景況を報じて友人の來欲を促す文なり。是は両方にて二時間半なり。

十四日の書法 字は

清公者茲應所讐 の七字にして、試験官は黒板へ楷書にてかくを、行、草と共に三体にかくなり。

是迄されば少し目安になりし故、こんな事を書いて見た。是は後日試験を受ける人があつた中に（其人の中には自分もあるかも知れぬが）見せて参考にしようと思ふ余の Kindness なり。

十八日は英語と体格の試験なり。此は一人一人呼び出して試験するものなり。されば番号の順にて中々待たざるゝ事あり。吾々の如きも其中に入り、屋少し前に体格試験をされたり。始め体量をふんどし一つにて量り、次に身長、握力、肺量、視力を量り、終りに医員の所に行きて胸囲を充盈と空虚とに見て後、甲とか乙とか定められ、之を帳面に書き取らる。余の成績下の如し。

体重 十貫八百匁
身長 五尺七分
握力 右四十七キロ、左三十七キロ
肺量 三千五百
視力 左右共三十六度
胸囲 充盈 二尺四寸六分
空虚 二尺二寸八分

全評 乙（負け惜しみにあらざれども、医員は初甲と書きたれども、眼悪しときゝ乙に直したり。故に、余の体格は眼を除けば甲といふべき也）
屋になり腹が空となりたれば、山田君の下宿に行き屋敷を馳走せられ、又帰りしに、午後三時頃になり、

漸く呼び出されて、英語の試験をやる。之は Citizen Reader の二節とて、Union Jack の事につきての章の初なりし。

此で先づ先づ、試験全済となり、目出度帰れりと自らは及第を確信し居たり。

正則学校校友同窓会、来る二十五日に開くに付、來会を望む。郵便。

19th. In the forenoon I went to *Jitsu-Kan* and made a contribution in charity of the sufferers of the recent tydal wave.

二十四日 午前七時半より加藤、河野、堀口、本山、樺の五兄と同道して王子の沢野兄を訪ふ。是日霖雨新たに晴れ、炎威金を溶かさんとす。途中或は一杯の水に腹を涼ふし、一本のラムネに渴を癒し、或は道側の木蔭に憩ひて腰当てを開き、以て飢を和らげ、十一時頃沢野兄の寓に達す。足を洗ひて客室に入り、雑談より腕推しに移り、又天狗俳優に転じ、笑語の中に三時となりしかば去て権現の滝に行き、衣を脱して之に浴す。衣を沾ほしたる汗も忽ち洗ひ去りて、皮膚に粟を生じ、清涼なる事恰かも生を回したるに似たり。五

時三十九分の汽車にて上野に來り、又鉄道馬車に移り、余は京橋にて下り、内田を訪ひ試験の成績を報じ、且晩飯を済まして帰る。丸の内の濠畔、涼風面に似ざれども、明月皎々として並木の蔭は日中の如く黒し。涼しけれど日中に似たる木蔭かな。

二十五日 午前沢野兄來り訪ふ。蓋し昨日の約に因るなり。高等、商業両校の談より同窓諸兄のあらさがしに至り、閑談時を移して正午となり、屋敷を共にして同道して家を出で、余は青山なる加地兄を訪ふ。是れ同兄が入学試験の事に關し、余の為に勞を取られたるを謝せんが為なり。談は直に商業校の学事に入り、制服の事、用書の事より教師に対する方法、ボート会の様子等を聞きて帰り、更に正則学校に行く。是日は校友同窓会なれば、旧時の教員又は諸地方諸学校に在る校友等に至る迄來會し、神田、元良氏を始め、同じ卓上にて會食したり。夕刻より伊藤、樺、堀口三君と三田の寄席に行き、浪花ぶしの美音を樂み、落語に頗る解く。

Diary at Kamakura

29th. At 5:30 a.m. Mr. Ito and I started for

Shinagawa and left there by the 6:20 train for Ofuna. After arriving there we walked to Engakuji where we were to stay a week or more. This day we saw a procession of triumph of a honourable soldier which was held at Yamanouchi. We visited *Tsurugaoka-Hachiman*, *Yaiga-Hama*. We called on Mr. Kawais at Zaimokuza and went to *Hase-Dera* with him to see.

30th. We visited *Eno-Shima*. We bathed in sea.

31th. We bathed in sea.

Aug. 1st. We bathed in sea. We visited *Dabutsu*.

2nd. We fished.

3rd. We went to Yokosuka by the rail-way, dined there, went to Otsu, then to *Hagama* through mountain-paths, and called on Mr. Kajima. We were received warmly by him, supper and stayed this night at his house.

4th. After taking breakfast we left Mr. Kajima's and returned to *Engakuji*. I start-

who were taught by him, intended to offer him some present in memory of our intimate intercourse.

13th. In the afternoon I went to the Japan Swimming Society at Nakasu and was taught of that art. This was of pretty much satisfactory; for it had been long desire to learn that art systematically.

14th. In the forenoon Messrs. Kawai and Kato called on me. I went to the J.S.S. Mr. Takahashi sent me a photograph of the late Mr. Soyama which he received from the deceased friend's father. Letter to Mr. Takahashi.

処世余録 第七冊

修身十二則

人には諸の悪癖あり、世には様々の誘惑あり。これを通し、これを却て最もよく善をなす者は即ち、聖賢に庶しといふべきなり。

ed from Ofuna by the 3:30 train to *Shinagawa*. Called on Mr. Takahashi.

5th. I bathed in sea in the afternoon.

6th. I went to Mr. Kojima Unkei and presented him *Uchiwa*. Messrs. Takahashi, Kato, Kono, Tsubaki and I took photograph at Arakawa's. This was in memory of our parting each other. Letter from Mr. Nishura, to which I answered. Letter from Mr. Sawano at his native province.

9th. I called on Mr. Uzawa and played chess. A sun eclipse happened at 1:39 p.m. in Tokyo. The eclipse was said to be inspected most perfectly in Hokkaido and many astronomers from all the quarters of the world were there with several instruments.

10th. I went to *Kompiva* with boys. Letter from Mr. Akashita.

11th. I called on Mr. Horiguchi. Letter from Mr. Nishira, to which I answered. Mr. Shiozawa Masasada will go to America to enter the university of Wisconsin. So we,

故に古の賢哲十二徳を撰みて、其言を願志とし、今貞愚なりと雖、夙に正徳の道に志す。是に依りて修身則を作る。

- 一 謹言 益なき言は、言はざるをよしとす。
- 二 慎重 万事はよく其前後を考へ、注意周密に実行すべし。
- 三 嚴密 時を嚴守し、勘定を密にし、且規則法律を遵守すべし。
- 四 經濟 吝ならず、驕ならず、よくその場合に適當する様、金物を用ゆべし。
- 五 養生 食色の欲を制し、喫煙飲酒を戒め、且常に衛生に注意し、腕力を養ふべし。
- 六 勉強 万事全力をもつて従事し、無益に時を費す可らず。
- 七 大胆 平生恐るることなかれ。躊躇することなかれ。事に際し平静なれ。
- 八 決断 秩序を定めて決心し、然る後はこれを嚴守せよ。
- 九 寛大 胸中常に余裕を有し、譴責せらるるも怒らず、誇らるるも不平なし。

十 礼儀 無益に人の意を害す可らず。

十一 高潔 正義をふみ権謀をさけ、諂諛を排し、名

分品格を重んずべし。

十二 仁愛 君国に忠を致し、社会に誠を致し、家族

朋友、隣人を愛し、且、世の孤弱なるもの

を憐むべし。

右明治廿八年十一月定めたるもの也。

九月

当分実施すべき細則左の如し。

(一) 敵密 午前五時迄に起床、午後九時迄に就床。

(二) 敵密 就床前には、必ず日記をつけ、一日の

言行を反省すべし。

(三) 撰生 夜分は学校、日課等にて己を得ざるも

のの外、読書すべからず。

(四) 撰生 毎朝体を拭ふ事を忘る可らず。

(五) 勉強 学校の日課は毫も怠る可らず。

(六) 礼儀 交際法の改良に注意すべし。

九月一日 遊泳協会へ行く。家兄と同道にて稲葉洋

服店へ立寄り、学校の冬着制服を注文し、体の寸法を測る。遊泳協会にて試験を受け、赤白組に入る事を許さる。

学校誓書を作り、家兄及び、長井氏の捺印を請ふ。

二日 誓書の事に付き区役所に出頭す。

三日 午後一時より鹿島、加藤、椿、堀口、伊藤、

沢野、荒木の七友と芝浦にて漕艇をなす。

帰途、稲葉に立寄り洋服仮縫を試む。

四日 午前七時廿五分、本山君の新橋発金沢に向は

んとするを送らんとして汽車時刻に遅る。

八時より誓書を持って学校に行く。同行者は伊藤、

堀口、加藤三君にて芝より本所、明下君を訪ひ、神田、

山田君を訪ひ午後三時、帰宅の途に上る。夜、外国通

貨の金額を換算す。

五日 午前習字。

六日 習字のため、小島先生を訪ひしに、先生用事の

故をもつて休み。西浦、河村、二君を訪ひしに不在なり

しにより、中州に赴きしに、時刻早かりしかば、一銭蒸

汽に乗じて吾妻に向ひ、向島百花に入り、七草を見る。

園内、小径左右に通じ、萩芒両側より道を蔽ひ、叢

済して帰り、余は桶町に立寄り、午飯を喫し遊泳協会におもむく。

八日 午前、伊藤、堀口二君来訪、商業、必要なる外国語の話あり。

午後、堀口君宅にて同君及び、伊藤君と囲碁、夜、長井勇君を訪ひ、高等学校の学風、和歌山学生会の事及旅行談等あり。

十日 朝来、四肢だるく股に痛を感じ、同時に少しく胃を害したる心地したれば、外出を避け休養したり。夕刻、稲葉に行き制服を受取り代価を払ひて帰れり。

十一日 午前八時、堀口、伊藤両君と商業学校に出席す。時に校生数百、皆学生掛の掲示場集り、各成績順番、教場割、時間割等を閲して喋々噂々相説き、相談す。中に就き余輩は、正則校出身者にては山東、井上、尾崎等諸氏を、他の知友にては加地、松山の二氏を見たり。余等亦、掲示を一覽し必要あるものを書写し、且学生掛につき徽章を得、山田君等と雑談の中、九時の号鐘鳴りしかば、一同大講堂に集れり。堂は近年の新築に係り高広数百人を容るに足る。正面中央の壁には教育勅語の額面を掛け、其前に演壇を備へたり。

中蔭濃なる所、屋尚虫声の鳴くを聞くべし。一叢の花壇には千草を集めて雑植し桔梗は紫、女郎花は黄、雁来紅は紅とおのがむきく映出でて各其天与の分に、楽むの如く軟風一過樹葉を散らし草花をさはがすによりては、蕭条寂莫特に秋に遇ひて見るべきの好景なるべし。其より、竹やの渡しを渡り、浅草に出で、浅草橋、宇治の里にて午飯(此の時二時)を済し、中州に來れば、今日は免状授与式なるをもつて練習は度数少く、此時既に終り居たり。因りて上級生の水瓜取等を見て帰る。夜、飯倉へ洋傘、襦衣、股引、靴下、ツボンつり及び襟を買に行く。

七日 午前加藤君と共に元良先生を訪ひ、教を請ふ。談は入学試験より修養書類、外国語、正則校の教場、学校生活中の心得等に移り、我誇々として論ずれば、先生湛々として論し、我大に得る所あり。

蓋し先生は吾人に対するに、杏児に臨むの心を以てせられ、吾人は先生を見る亦、慈父に事ふるの情あり。然れども此何をか怪まん。吾人は精神上爽に、先生を父とするものなればなり。三十分許りして先生を辞し、二人共に日本橋に向ひ、加藤君は三井銀行にて要用を

やがて小山校長、神田教頭を始め、十数の教員達入場す。満堂寂として声なし。

時に小山氏は徐に歩を移して壇上に来りて一場の演説をなし終りて、諸教員より注意の教言ありて後、退散せり。

校長の演説は大意左の如し。

(先ず一応の挨拶ありて後) 休暇中格段の変事はなけれども、昨年来の計画なる学校の品位を高むる事に就き、その一着歩として学科の改正をなせり。即、予科に於ては従来中学教育の補助として、画学及博物を課し居たるを廃して入学試験を厳にし、是に代ふるに第二外国語を入れ、且化学、物理学を応用的に研究せしむる事となせり。

又学生の道徳を完全ならしむるには、之に関する知識の必要を感じたるを以つて商業道徳の一課を加へたり。本科に於ては一般社会の進歩と商業の発達につれ、商業者たるものは機械工学を理解するの必要あるにより、此一課を加へ、又商業者の頭たり、長たるものは法律的精神(リーガル・マインド)を必要とするにより、法律の時間を増して、民法、国際法を研究せしむる事となせり。

る事としたり。

要するに余は本校の品位を高むるには、年限の増加を必要と認められたれども、是在学の生徒に取りて、容易ならざる、不都合あるを思ひ、又学科の排列の変更及その取捨により、是と殆ど同様の効果を得べきことを知り、這般の改正を執行したるなり。

本校の趣意、斯くの如くなるが故に、生徒たるものは将来クランクたるを以つて生涯の能事となさず、必ず実業界の要素たる大望を有せざる可らず。

又新入学の諸子に向て一言せんに、諸君は小学、中学の科程を経て本校に入りたるものなるが、中学は未だ児童の教育なれども本校の如きは、全国中、最高の商業教育を施すべき所なれば一度此門に足を入るゝ以上は、須く自活の精神を以つて自家の良心に愧じざるべき品行なかるべからず云々……(尚、校長は、体操、習字の事、及衛生の事等につき、細密なる注意をなして降壇せり)

校長、名を健三といひ、文部省及農商務省参事官を兼ね。広額、高鼻、眼光鋭く、鬚髯蓬々として頗る威厳を備へ、而して笑ふ時は幼女も亦、是に狎るべきの

風あり。

風采質朴にして、其教育意見は神田先生の如く、自治的にあるが如し。

其履歴の如きは余、未だ之を詳にせず。

十二日 昨夜来、暴風強雨を吹き、早朝に至りて尚止まず。風雨を犯して、午前六時半より伊藤、堀口両君を訪ひ同道して出校す。

本日の教課はみな大体の方針等なりし。

余は久振りの靴歩行に足を傷めて難渋。

英語教員、高島氏は神田先生と同様に実用的英語の授業法を主張す。本日も本校英語会の事を紹介したり。余、思ふに本校の語学課は皆、此方針により授けらるるが如し。故に会話、作文、書法、書取等に費す時間は割合に、訳読に費す時間より多きを見る。

博士中島力造氏は、今般本校の囑託を受けて商業道徳を講義せらるることゝなれり。

博士、方額、黒面、身に質朴なるフロックコートを着し、今日の如き悪路にも徒歩にて来校せられたり。余は氏の風采と此一事によりて既に博士を欣慕するの情起りき。

十三日 午後日蔭町に赴き簿記の棒及算盤を購入す。

十四日 学校の帰途、東京病院にて立寄り、検眼を請ひしに、左右とも二十度なりき(此時、会計にて一円乞はれて一驚したり)。

学校の教課中、応用化学は冶金、酸類の製造、アルカリ物の製造、アルコール、有機酸類等の大体を講じ、その間に純正化学の補をも教ふるの方針なり。

簿記は予科にて商業簿記を、本科一年にて銀行簿記を、同じく二年にて英文記帳を教へ、三年に至り内国実践に日本記帳を、外国実践に英文記帳を応用することを習ふものなり。数学は代数と幾何にてなる普通教育の稍、迂遠なる方法を廃し実地に通すべき簡便法を練習せしむるものなり。

十五日 東京病院に学校の帰途立寄る。

検眼料のことにつきてなり。

本日の作文問題、水災に付、某会社工場員に与ふ。学校の頭算科は加減乗除を迅速に且、精確になすことを目的とするものなり。

十六日 学校にて会話に当てられ、夏期休暇中の経

驗を問はれたるにより、相州へ旅行の話なせしに文法上の誤謬はなしといはれたり。

婦途又、東京病院に立寄りたり。

十七日 旧藩侯の祖、南竜神社の祭典に付、午後より御殿へ参上、参拜の客に接待す。中に就き、長屋歳夫氏（松山尊生病院の書生にして医師志望者）は余に名札を送りて交際を求めたり。余は来客に接待中、遺漏過誤等なく、且活潑周到に働きたりと信ず。

本日学校英語作文（プレジューア・オブ・スチューデント）といふ題なりき。

英語書取は全級中、過誤最少の者三より四にして其総数五、六名、多くは十以上十七八位なりき。余は「フアイブ・ミステークス」なりければ大に得意なりき。（特に其中には確に教師の音声に慣れざるより出でたる者なるを以て。

暗算及珠算は余程の勉強を要するが故に、伊藤、堀口両君と相談し午後時々（目下は月水金土）に集まり其稽古を共にすることとなせり。

十八日 学校帰途、神田鍛冶町なる中村目鏡店に赴き、掛目鏡を、求む。始め余正則校に在る時、黒板の

を悟る者なり云々。

○余、雲溪先生より書法の注意を受けた。曰く、子は余りに字の形式、あたり、字口等に意を用ふるが故に、字に勢なし。

少しく勢に注意して大胆に筆を選ぶことを勉めよ云々（誠に余は何事にも時としては小心翼々たり）。

二十一日 午後三時、学校退散後、尚武学校に行き、妹尾克巳君と共に向島に赴き、水害を視る。

同所は去る十六日、中川堤防決潰せし為、一面の湖水となり民家は浸水、軒になんなんとしたけれども、排水等にて今日は漸く床位迄減水せり。然れども、皆人民は立退、又は二階住ひして船にて往来せり。

而も又、之を視んが為に來訪する人群をなし、恰も花時に異ならず。

中には瓢を携へて三冊の宮島を賞せんと欲する雅人（？）もあり。

唯余輩の如きは慘と評して敢て言をなすに忍びざるなり。婦途、徒歩す。

二十二日 午前筆記整理、習字。正午過ぎフランクリン伝を読む。鵜沢君を訪ふ。

文字を教室の後方にて、了解すること能はず。為に席順を乱して前方に座することを願ひたりしが、商業学校に來れば、席順を交換するが如きは望み難く且、万事に不自由を感じるにより目鏡はなるべく用ひざることをなせるにも関らず、用意し置くの必要に迫られたるなり。夕刻堀口君宅にて算盤稽古をなす。

十九日 午後、堀口、伊藤兩君と伊藤君宅にて珠算稽古。

二十日 午前、小島雲溪先生に行書法を習ふ。婦途、神田を散歩す。

午後、鵜沢君宅にて妹尾君と囲碁をなす。四回の中、三回勝を得て大天狗、（但心中）、夜、明日の訳読の下調をなし、且、化学参考書を読み、鉄の条を調ぶ。

○小島先生いはるる様、予科生は書法を嫌ひ一週二時間の教課を不用視し、本科はこれが必要に迫られて、其教課少きを恨む。

而も学制上之を置く能はざるなり。

蓋し予科生は尚未だ、卒業後就業上の考なきが故に、彼の如き意を抱き、本科生は其期に迫れるが故に必要

堀口君を訪ひ共に散歩し、杖を麻布仙花園に曳く。

園内秋色正に濃くして経路を蔽ふ白萩、花壇に生ふ。ひまわり、皆斜面の射る所となりて、長く其影を地に印す。

去て芝公園に遊べば、旬日前迄青々たりし木葉、今は半ば黄化し、時に数片の、風なきに落つるあり。満目蕭條として亦、蟬声の喧しきを聞かず。夕刻帰宅し、食後亦、笠井君と十番より芝公園及愛宕山に散歩を試む。

此夜、旧曆八月二十六日にして、天は一面に薄雲に蔽はれたれども月光朦朧として却て趣を添へ、大都会幾十万の民家は、模糊たる秋霧の中に現れ、所々電気、瓦斯の燈光を見る。婦宅後、家兄と囲碁。

二十三日 午後、伊藤君、堀口君と自宅にて珠算。夜、芝山内に家兄と散歩。

二十四日 午後三時より、神田大時計青柳に於て開会の、予科同級会に出席す。会合は同級生親睦の必要上、学校の慣習として各級に必ず組織せらるるものにして今回のものは前期落第の人々が発起したるなり。

満場の賛成により先例に従つて本会を毎年三回開くこととせり。又開会の趣旨、ポート会入会の勧誘演説

及、二、三番の滑稽演説、劍舞等ありて午後五時過散會せり。

今日の会にて余は格別親睦を温むる能はざりき。然れども是、余のみには非ざりしならん。

二十五日 午後堀口君宅にて珠算稽古。

二十六日 正午学校退散後、山田君下宿にて弁当を食し、其より上野の茶亭に開会されたる大中商会（在東京正則学校出身者同窓会）茶話会に出席し、田基、喫茶の間に友情を温む。

出席者は十数名にして、「出会を許す可き人を大学、高等学校、商業学校に限らず、工業学校、学習院等にも括む可きこと。」及び「本会は隔月に開くこと。」を談議し散會せしは、東台の暮色蒼然たる頃なりき。

其より余は山田君と同道にて本郷の牛肉店にて夕飯を食し、神田に行き青年会の学術講演を聞けり。講演は「刑法の現今の有様」（岡田朝太郎君）「本邦文明の性質」（横井時雄君）の二名にして、横井君の講演は、大意左の如し。

「日清戦争以来、日本の声価は大いに高まり、欧米の注目を引くこと非常なり。従て多くの人士は疑ふら

しなり。

然れども本邦は遂に亡国に非ず。

其西洋文明を輸入するや頗に進歩して今日の状態となりき。

されども尚此に不満足なるは我国には科学の思想乏しきこと及、私権の考少きことなり。後者は即ち、基督教が欧州諸国に与へたる者にして又、日本に与へんとする所なり。」

二十七日 午前小島先生宅へ行く。

午後、神葬地墓地を見舞ふ。（掃除はやれず）。其より畔道を漫歩し、すゝき、よめなを手折りかへる。いなごを驚かし又、叢中の名もなき草花の紅紫を喜び、稲葉にすだく虫の首をきゝつつ竹林に出で麻布本村に入り、三田に出で雑誌を買ひて帰る。

二十八日 午後伊藤君宅に於て珠算稽古。学校にて当半年分授業料を納む。

二十九日 山田君の実兄、病死に付、弔詞を發す。

夕刻、堀口君と共に散歩す。

三十日 大人とは強剛の決断を以て善を撰み、厳格に内外の誘惑を拒絶し、最も重き責を喜んで負ひ、困

く日本は何故にアジア人種にて有りながら、斯も進歩的なるや、又何故に僅々三十年間に於て斯る進歩をなせしやと、余は之に對して答へんとす。日本は旧國に非ず、新國なりと。蓋し日本は建國以來二千五百有余年の歴史を有すれども、其実、真に文明なる者、即ち多少美術的思想を以て家を作り、衣を織るに至りたるは神武天皇の後、八百余年を隔つるなり。即ち欧州の近代文明國（英仏独）が文明の種子を蒔きつつありし時代にして彼が欧州の古國たる 그리스、ローマ、

ユダヤの文明を受けんが如く、吾はアジアの古國たる支那の儒教と印度の仏教とを得たり。古來仏教は高尚なる無欲の主義を以て廉潔なる思想を養ひ、儒教は實際的、命令的の主義を説て、仏教より起る所の歴世主義を防ぎ、相俟て日本固有の文明をなしたりけり。唯其欧州文明と異なる所は、彼は多くの競争者を有して文明の発達を速ならしめたと、我は、支那、印度の老國の周圍にあるに加へて、他に友とすべき國なかりしが故に、孤立的に進歩し來りたる。故に本邦の文明は、三十年前にはある種のことは非常の発達をなせると同時に一般に觀察する時は、欧州に及ばざること遠かり

厄に遇ひて平静なるものなり。（セネカ）

十月

服膺すべき事。

一、物忘れ、遺漏、不注意等は自家の信用上大なる關係あるものなれば、よく注意すべきことなり。

二、新知己の人には特に謙遜なること肝要なり。滑稽杯は余り言はざる方よし。

三、起居眠食勉強運動等、成るべく規則正しくすべし。

四、常に平和主義を取るはよし、唯所謂、お人よしとなることを戒めよ。

お人よしは人の為に奴隸の用をなす者なればなり（たとへ其心には愧つるなきも）（此結果は吾人の威敵を害すべし）。

十月一日 学校帰途、岡田亮一氏と同行し始めて相語る。夜、筆記整理、習字をなす。

二日 学校退散後、同級生西村君と学校の図書館に入り、余は志賀重昂著「南洋時事」及横浜メール新聞を読む。夜、英語デクラメーションの準備をなす。

三日 学校商業道德講義中、感ずる所ありたり。今日の題は「理想認定の方法なり」

四日 午前、雲溪先生の宅に行き書を学ぶ。

「太陽」を読む。

五日 夜、手形雛形を作る。

此頃、日々雨天の為、道路溼靴を没す。神田、一ツ橋、西ノ窪特に甚し。毎日通学に困難す。此事は新聞紙上にも屢々出で、時事新報の如き厳しく攻撃の鋒を当局者に向けたり。

六日 夕刻、三田に散歩。夜、英作文。

七日 午後英作文、珠算、夜「太陽」を読む。

此為に時を不規則に過し且、勉強時間を減し、後に甚だ不愉快なりし。

八日 理髪床にて「わらひゑ」なるものを見て、為に心事不浄となり、後に不愉快なり。

夜、化学写真。

九日 午後、簿記、珠算。夜、習字、「太陽」を読む。是日、行為厳格にして人に対しても亦過誤なし。

十日 朝学校への途中、箕村幹君と同行す。

同君は余が小学校にありし時の友人にして昨年商業

会す。夜、簿記、英作文。

一 体和尚「世の中は心のまゝに住吉の松のはゝゝゝ船のはゝゝゝ」。

十五日 昨今、風邪の気味あり。撰修会に入会す。

先日余は、第二外国語を独乙語と定め、学生掛に届出置きしが、同語は成立したりと聞けり。夜、簿記、習字。

十六日 午後ボート練習の為、浅草橋なる艇庫に至りしが、人数余りし為、向島迄行き二回練習をなし、又帰路を漕げり。艇庫より帰途、鹿子君を同行す。向島有名の言問函子は火災の為焼失せしが故、余等は長命寺内桜餅にて休息したり。今日艇庫にて交際的手段に一籌を輸したりと思ひしことありて、不平なりしが、余はボートに熟練ならざるが故に少しく、譲歩的ならざる可らずとして、猶余すべき点もなきには非ざるなり。

余、学校に入りてより、僅かに一ヶ月、未だ同輩の面容さへ知らざる者ありと雖、又屢々談話したる人々の中には其人物の如何を推測したる者もなきに非ず。今日余が思ふ所、果して真なる哉、否哉、参考の為に之

学校に入られたるが、余は入校以来始めて相会したり。今日の商業道德は、人生理想認定の方針なりき。

学校退散後、山田君の下宿に行き雑談す。

沢野達三君も来れり。夜、ゴルドン伝下読。習字。

高橋繪四郎君より出京の報知来る。

一言一笑、重を欠く可らず。たわいなき問答は吾人の威厳を損す。

十一日 午前、雲溪先生宅にて習字、午後松山君と共に、井上好徳君を訪ふ。同君は正則学校出身にして現在商業学校本科二年級生なり。

十二日 午後珠算、夜簿記。高橋、河野両君来訪。

高橋君の入学試験準備のことに付、余の意見を忠告したり。

十三日 午後珠算、夜英作文。

頃日、冷気日に増し、旬日前迄は単衣に金巾シャツを着せし者を、昨今に至りてはシャツに袴を着し羽織を重ねるに至り、洋服も冬服にチョッキを重ねて尚、冷涼を感ずることあり。

十四日 午後高橋君を訪ふ。其より伊藤君と高等学校寄宿舎に赴き加藤、沢野、椿、大谷、鹿島の諸君に

を記せば、

稻生 是中々の敏腕家なる可し。(但し道德上に於ては?)

小沢 善人にして又熱心なる勉強家たるに過ぎず。

西村 随分交際上手なれども、学問の勉強をば決して等閑に附せざるきちやうめんの男なり。道德上に於ても決して大なる薄行は先ながらん。

岡田 いやに学者ぶりて己の才学を誇る奴なり。併し実力に於ては到底、我輩の敵にはあらじ(交際社会に於ても)。

鹿子 論ずるに足らぬおぼこならん。

曾我部、梅田 彼等は稻生の人物の仲間に入る可しと雖、其実力決して衆人に接するの器に非ざれば、到底、長与又郎、鈴木成郎(正則の)流に止まらん。

中島 是勉強家にして才学を兼ねといひて可ならん。但し、学問上に於ては充分の天才に加ふるに非常の勉強を以てして級中の一、二を争ふべく、交際上に於ては多少遊戯運動に得る

処あるが故に、彼の如く謙遜真面目なるもよくその地位を保つに足る。加ふるに其交際法が真面目の中に一種の愛嬌を含めるに於ておや。而も其心事は随分確然たる者らしく見ゆれば決して薄行の徒には非る可し。(級中第一の人物ならん)

多。

是も勉強家と才子を兼ねたる人物ならんも、其交際法、稍我儘の所あるが故に、衆望を撃ぐには便ならず。思ふに中島の次ならん。

白州。

面白き男なれども衆中の重きをなすの器に非ず。但、小才はきく可し。

右の中◎○を付けたる者には務めて交際せん。而して余自身の交際法は多少中島君に倣はん。交際上に於ては、決して松田、小沢、もしくは曾我部の徒たる可らず。必ず稻生、若しくは多久の徒たるべし。但し、其徒に入りて其徒の弊を受く可らず。唯、其利を得可し。之が為には彼徒と個人的調和を計り、其事業に深く関係を避るにあり。右の手段としては服装態度に注意し(一)ボートに屐々行き(二)英語に達する様に(三)ならん。

田圃に出でて川崎に向ふ。

此時日漸く暮れ、天上の半月光益々輝き、黄一色の稲田の間、所々の人家に煙立ちて霧中に髣髴たる樹枝に響く。是所謂暮色藹然の最上乘。(是佳景の三)街道を過ぎて六郷橋上に出で立て、水上を眺むれば斜陽僅に没して光尚全く飲まらざる辺、一星輝々として頭れ、直に水面に映じて一幅の油絵を現し来る。(是佳景の四)

川崎の町に入り、娼樓多きに驚き走りて停車場前に至り、茶漬三碗に飢を回復し、少時汽車を待ちて七時四十分発再び、騒々たる帝都に帰る。此日の遠足、真に一妙話、其田畔に大声放歌して喉をさらし、娼樓の前を疾駆して停車場を見失ひ、田舎駅女のうるさき世辭を厭ひて之を叱り飛ばし、帰途唯一銭を余して焼芋を買ひたるに至りては快、更に快。

十八日 午前、雲溪先生宅に行き習字。午後化学。加藤君来訪。高等学校の校風談をなし、又余の商業学校に於ける交際の方針を話す。

靴の修繕を命ず。夜、経済雑誌、時事新報を読む。此夜、余は何国又は何種の貿易に従事すべきやに付、

此方法固より完全ならず。而して余の交際に拙なる此不完全の方法さへ、充分に実行すること能はざらんと雖も、幾分か其効力を受くるは確実なることなり。又是によりて得たる結果は余の力にて得べき最良の地位と思ひて満足せざる可らず。

十七日 午前新聞紙を閲し終りし時、大谷敏一、中村精一両君来訪。高等学校寄宿舎内の奇談を聞き、午後亦阿氏と俱に、杖を曳きて散歩を南郊に試む。御殿山裏手より樹林を横ぎりて田地に出で、疎瓦製造の前より軍用鉄道の線路を横ぎり一丘に上る。

此処に立ちて東方を望めば、鈴鹿森の松、御殿山の茂林青々たる間に、品川湾の碧水湛へたるが如く深川芝の諸工場は恰其上に浮べるが如く、黒雲の如き煤煙を其煙突より吐出し、近く足下の鉄路には汽車走れども其形見えず。天晴れたるに何の雲ぞ、氣穏なるに何の雷ぞと疑はる。(是当日佳景の一)

去て大森に出で八景園に止り腰台に座し、淡味なるかき餅を嚙り一酌のビールに渴を医して眼下を瞰れば、一面の稲田黄色を帯びて街道に接す。(是佳景の二)其より地上本門寺に至りて日蓮上人の墓に謁し更に

種々考へしが、遂に止定する所なし。然れども、かかることは今日に於て定むるの必要はなきことなり。何となれば此等は唯、己と国家とに最利多き事業あらば、何にても取り掛りて差支なければなり。

即ち、此の如きことは其場合に依りて、何れとも決すべき者にして、目下の務は、百般の商売工業の大勢、各国貿易の状況を観察し置きて社会に出づる際、其選択を過まらざる様、諸般の智識を具備するに在りと余は信ず。

十九日 独乙語志望者は少数にもあり、学校にても同語は商買上、其有望の者と認めず、又露語の如き少数にても奨励したき者もあるにより、将来に確たる目的ありて、熱心に独乙語を勉強したしとの望を有せざるならば、他語に転ぜられたき旨、学生係より申渡さる。

午後、珠算。二十日 第二外国語の中、余は支那語(東洋貿易上より考へ)を最有望となし、同語を願出づ。

午後、麴町区大手町に於て天皇陛下の御通駕を拝す。午後、珠算。夜、英作文、物理。

二十一日 午後一時間、学校にてボールをなす。

帰宅後、化学、簿記、珠算。夜、英訳。

今日は随分ポートに行きたく相成り居れども、あまり屢々行けば学問の妨となると思ひ制したり。

二十二日 夜三田へ買物方々散歩す。簿記英語習字。

二十三日 正午より、浅草橋艇庫へ行き艇を出し、向島にて練習をなす。本日は平常よりは充分に練習したり。午後七時前、帰宅。

二十四日 午後、鵜沢君宅にて妹尾君と囲碁をなす。夜、英語下読、簿記、英文国民の友を読む。

倫理論文題 「余は如何にして実業家たらんとする決心をなせしや。」

二十五日 午前、天候を察するに濃霧日光を遮り、昨夜の雨は道路を泥濘となし、外出の如きは到底中止とは思ひしが、先日の約束もある故、雨降りを承知にて鵜沢、妹尾二君と共に途を青山南町より、宮益に取、吉田松陰神社に詣り、先生の墓に謁す。時に亭午少前なりしかば、社内の芝地にて携ふる所の弁当を開き其より玉川二子渡しに向ふ。道路泥濘を極む。清透なる玉川の好風景を眺めつゝ、渡しを過ぎ、鵜沢君北

堂の故家を訪ふ。

主人某氏、頗る丁寧に余等に接し、名物の柿が邸内によく熟せるを見て、余等をして自由に之を取らしむ。実々枝に連りて余等は其何れか善美なるを知る能はず。既にして得る所數十、食ふて残る所みな帰家の土産となる。遂に晚餐の饗応に預り、五時頃辭して帰家の途につく。暗黒にして道路を選ぶこと能はず。僅に蠟燭を買ひ得て時に之を燈すれば、身は沼の如き泥中に立ち一步を誤れば、数尺寸の深ある池中に投せんとする如く、行路最も困難を極む。かゝる中にも余等ののんきななるは、道傍の叢中なる残螢の点々たる光を見逸すこと能はず。之を取りて持ち来る。既にして憩ひてマツチの光にこれを見れば、豈に囿らんや螢と思ひしは翹なきワラジムシの如き小虫ならんとは。蓋し螢は決して十月末の冷氣中に生存すること能はざるものならんか。

斯くする程、月光東天の雲を破りて、輝々として道を照らしければ、大いに便利を得て足早く途を急ぎ、十時前帰宅せり。

皆の行程八里に上り道路の泥濘なること非常に歩行

を困めたれども、余はあまり疲労を感じざりき。但し、先見の外れて雨降らざりしは、天帝に向ひて謝せずんばあらず。

又意外の田舎にて、意外の馳走を忝くしたるは、鵜沢氏北堂の兄君に対し大に感謝せざるべからず。

二十六日 珠算、夜英語、筆記。

二十七日 夜、英文国民の友を読む。

二十八日 午後ポート練習の爲、隅田川に行く。夜、英文文。

二十九日 学校退散後、山田君下宿に行き、人生の問題に付、談論数時。夜、神田小川町を散歩し、買物をなす。是夜、同君宅に眠る。是、明朝出発の便を計りてなり。

三十日 早朝五時起床。直ちに洋服を着し、脚絆をつけ、鞋を穿ち、牛肉罐詰にて下宿女中が大奮発に成れる炊き立ての飯を食ひて腹を作り、一包の弁当を携へて軽衣早々、笑語断絶の中に兩人共に上野に着す。

時に天漸く明け曙光僅に來り東天の雲を破るの時、無慮二百の校生、一様の制服制帽に鞋脚絆の旅立(あじろの笠に杖は昔のこととなれり)。やがて六時四十

分、一同汽車に乗るや轟々段々車箱は進行を始め、数分の内、王子を過ぎ、赤羽を横ぎり、荒川を渡り、大宮に達せり。此時迄余は野田君と同車し同君の紀州有田郡出身なることを聞き、余が紀州に於ける關係を話しつゝ、熟柿茅屋に垂るるの村家、黄稻茫たる野田の佳景を賞し、が、是より伊藤、山田、金子、山崎等諸氏の車内に移り、キューニニューパーを盛に大呼して疾叫大笑の中、時々利根川の広きを眺め、水害の跡を察し等して、小山もやがて後にし、宇都宮も一瞬の中に走り過ぎ、十二時過日光の停車場に着す。

此時、余は稍、心地の不愉快を感じ始めたれば、密柑等食し、暫し旅宿座敷に休息する内漸く気分も回復したれば、少しく注意を加へて始の計画を曲げ、是日は日光廟を見る事となれり(前日の計画は今日中禅寺裏見に行き、夜晩く帰り、明朝早く廟と霧降を見物の筈)。

余等の同勢は教員、生徒等數十名、二手に別れ、各一名の案内者に伴はれ、先輪王寺の旧御廟内に入り三仏堂を見たり。是二丈許もあるべき一面金箔を塗りたる弥陀如来、千手観音、馬頭観音三仏を安置せる者に

其壯麗、未だ我を驚すに足らず。

其より順次、双輪塔より門跡御座、御用邸、五重の塔、一の鳥居、神庫、陽明門、唐門、東照宮本社、奥の院を見物し、更に宝物を拝見したり。

此等の建物に至りて、至麗至荘美し尽し、遂に先筆の頭すべきに非ずといへども、彫刻の巧緻、塗漆の善美等は、吾輩実に入らざるが故に是を拜すること能はず。唯いはんのみ、美にして且荘と。

其より二荒神社と三代將軍廟を見物せしが、これ等も前記の次第。別に永々敷いふも、一片の案内記を繰返すに過ぎざるのみ。

唯一の記すべき北白川宮殿下の分靈場なり。斯くして全く今日の仕事は御廟見物に止まりたりければ、旅宿神山徳平方に帰り晩飯を喫し、新知の人々と名指等をなし、笑談する中、中禅寺隊、霧降隊も帰り一層、賑はしくなり、当夜は僅々三時間許り睡眠をなし、余は笑談の中に過したり。(特に余は騒ぐ方にて人の騒ぐ為に眠を妨げられて困る方には非ざりし故に愉快なりし。)

三十一日 早朝四時より食事を済し、五時出発にて

道愈隘にして景益々佳。馬返し。(この所一、二の茶店あり)を過ぎて道路崎嶇或は急坂を立てるが如きあり。

或は凹凸鋸齒を植ゑたるが如きあり。磐若の滝はこの間にあり。狭軀の山中別に一面の谷谿を開き兩岸の紅葉織るが如き処、一条の瀑布深溪瀾々として落ち錦絵の面に水晶の文珍を置けるが如く其音塔々として絶ゆるなし。是より急坂を攀つれば稍平夷の地に出づ。一体の平地地尽くる所一茅屋あり。茶を売る。華嚴の滝は、即、其前に懸る。

一道の水流断崖の上より落下す。音は寥々として汽声の盛なるが如く形は蘆々として白布を掛けたるが如く色は玲瓏として玻璃棍を見るが如く一下数十丈、下方は水沫霧散して濛々観る可らず。断崖を下りて其中腹に至るに道険しくして、行く可らず。乃、止りて首を俯すれば細雨霏々として滝淵より飛騰し、衣袖沾ひて久しく居る可らず。

去て行くこと数丁すれば、静邃なる山湖眼前に顕はれ来る。水面波穏にして漣波徐々、岸边を打ち、四囲の諸山は秋既に老ひて初冬の蕭景を呈し、林間を歩す

大谷川に沿ふて中禅寺に向ふ。此道に狭少なる軌道あり。是、尼尾産の銅を運送する為、古河市兵衛氏の作る所なりといふ。

時に天未だ明けず。月光皎々として深く閉せる濃霧に映じ、冷風徐々に面を打ち寒氣十指をして離れしめんとす。余等一隊十人許、大声軍歌を誦し、詩を吟じて行く。進むに従ひて日漸く明け、四囲の景物愈々鮮なり。

見れば左方は断崖峭絶の下、大谷川の急流滔々として奔下して、大岩小石を洗ひ、碎けて飛沫となり、堰して瀑を起し、淀みて深淵を作り、流れて激湍をなす。対岸は即ち千仞の峻峯、一面の樹木みな楓檀栢榿の類ならざるなく満山の紅葉衆として錦の如く鬱として雲の如く、時々青松黒杉、其間を縫ふあり。既にして一木標に達す。此より右折して、山間樵路に入る。即ち中禅寺道なり。

大小の奇岩道に當りて横はり或は伏し、或は仰ぎ、牛の如きあり、虎の如きあり。

其間より出づる所の瘦樹亦葉色を染めて飛電雲を呼ぶの趣きあらしむ。

れば、落葉足下に音をなす、冷風肌を徹し、手足為に戦く時、未だ八時半なりと雖、腹中既に空きを覚ふ。

由て民家に息ひて行野を開き、早く権現の社を見て帰路に就き、途に紅楓を折りつつ、裏見の滝に向ふ。滝は險坂を上下すること数回にして達することを得。

見れば、瀑布懸崖に懸り崖足は深く地下をえぐりて細径を通ず。之を行けば即、瀑布は頭上より落ちて、前方に奔下するを觀る可し。是、裏見の名ある所以なりとす。此辺数条の小瀑あり。岩石に碎けて霧を起し、山角を縫ふて紅葉を浮べ、落ちて裏見の下流に合すれば、滔々の勢一気泡沫を飛ばして岩間を流る。其より旅宿に帰れば、一時頃となり、復空腹を感じ食を呼び、暫く休して二時ステーションに集り、汽笛一声長駆して東京に帰る。時に八時過、雨激しくして行く可らず。車を命じて家に帰る。

十一月一日 一昨夜は睡眠不足の結果として夜來、一睡の中に十四時間を過了し、正午に至りて、始めて覚めたり。夜、加藤、高橋、大塚三君來訪。

二日 学校ストライキ

午後、内田、松尾行、西浦君来、不在。

三日 午後、堀口君と目黒へ散歩。

六日 学校にて宮川領事の米國貿易に関する講話ありたり。

七日 午後ボートに行く。向島に都文館のレースありたり。又、一中の諸君に会ひたり。

八日 午前、雲溪先生宅へ習字に行く。

午後、東京基督教青年会へ松村介石君の演説を傍聴に行く。演題は「福沢先生の氣品論」なりき。夜、高橋繪四郎君来訪。

同君は明日出発、鎌倉へ保養旅行するといへり。松村介石氏曰く、

「実利主義は到底仁義を知り廉恥を重んじ、心事公明正大にして、行為は俯仰天地に愧ぢざるが如き、氣品高き人物を出す能はず。

福沢先生は、実に此主義をもつて天下を風靡されたのであるが、先生自身は、一心に唯実利主義を奉ずるの人に非ず。決して目前の利に惑ふて百世の悔を残すが如き人物に非ず。即、天下みな尊攘論に狂せる時に当りて、唯一人文の学を講じ、激烈に開國論を称へ

たる武士道の産物なるを以て今や人心の実利主義に化せられて漸く輕薄に走らんとするを觀ては、徐に前日説きし所の非なるを悟り、氣品論を唱へて先頃慶應義塾の懐旧会に於る演説にある如く、一片の氣品ありて、高尚の趣を存せざる者は君子として世に立つ可らず。学者万巻の書を読み尽して、才智芸能に誇るとも、氣品を具へずむば、到底一個の賤丈夫たるのみといふに至れり。

是、実に余輩基督教者が前年来稱へ来りたると同様の論旨にして、余輩は吾國の爲に大賀せざるを得ざるなり。

嗚呼余輩は遂に我日本を實利主義の弊中より救ふを得たり。何となれば、已に敵軍の將たる福沢先生を擁にしたればなり。」

貞を以て是を見れば、福沢先生が氣品を重んずるの人なるは、今日に決して始まりしに非ず。否、氣品の養成は實に先生説法中の一大要目なりき。其証は、時事新報の論説に於て、実業家に独立の氣象を勧め、富豪に肉体以上の安心を求めよといひ、又武士道を以て日本特有の大精神なりといひ、又故小泉信吉氏を引ふ

文の中に、元録武士の氣風を、明治の文明会に応用したるものとして賞したるが如き、皆然らざるなし。

八日 始めて支那語を学ぶ。教師は清人張滋訪氏。稲葉洋服店に立寄り仮縫を試む。

十日 和歌山学生会に入会す。

十一日 本日より簿記記帳に掛る。

十二日 山田君に宛たる忠告状を認む。

十三日 山田君より返書来る。是夜、奇夢を見る。

十四日 午後神田連雀町、金清楼に於る和歌山学生会、秋季大会に出席し、夜九時帰宅す。

十五日 朝家兄と共に雲溪氏宅に行く。午後加藤君来訪。共に芝山内を散歩し後又、加藤君宅にて談話し帰る。

◎山田謙治君に送りたる忠告状

(其意を録す文章は全然同様ならず)

謹んで敬愛なる山田君の足下に呈す。

方今、書生界の弊生意氣より大なるは無し。蓋し、余輩青年学生にして友人を軽んじ、教師を愚にし自ら欲する所を肆にし、毫も一般の世態に倣ふこと無くん

ば、其学業発達進歩は、到底期す可らざるなり。此の如きは、唯其人自身の損として、之を措くも可なれども、此等の行為は他人の威厳を損する者なるが故に、決して看過す可らず。然り而して、君の頃日為す所を觀れば、實に余輩をして無礼を叫ばしむる者屢々なり。是に於てか余は、再三君に向て忠告を試みたり。而るに、君遂に用ひず、却て増長の徵あり。

是に至りては、余決して黙々を以て過ぐる能はず。非常手段を用ひざるを得ず。即ち、君にして今後尚、慎むことなくんば、腕力を利用し、氣の毒ながら君が頭に加ふるに鉄拳を以てせんとす。

余輩原より其野蠻を知る。唯曰むを得ざるを如何にせん。否、曰むを得ると得ざるとは、今後の君が行爲にあるのみ。妄言多謝。

十一月十三日

上田 貞二郎

◎右に對し同君返書の大意

拝啓、御忠告の御手紙有難く拝見仕候小生も数多き人々に交り、度々誹謗、輕蔑に遇ひ候へども、真面目なる大忠告に至りては未だ受けしこと御座なく、實は國元より家兄上京致し、目下小生のの上に就き相談

中に御座候間、兩三日御待を願ひ篤と御面談の上、小生謝罪致べき事は謝罪し、又弁護すべき所は弁護致す可く、此際、小生の現状御諒察の上、御許被下度く小生は八万神に誓ひて君に無礼を加へざるを断言仕候。

十一月十三日夜
上田貞二郎君

山田 謙治

◎是に對し更に余の返書。

譚啓余は野蠻の文字を列して君の足下に呈せしに君之を捨てず。却て懇篤なる賞詞を以て余に加へらる。是に於てか、余実に君が宏大海の如きの量に泣かずむば非ず。

然りと雖、唯余が君の言に服する能はざるは面談の上にて言論せんといふにあり。

蓋し君は謝罪をいひ、弁護をいふと雖、余は決して謝罪、弁護に満足する者に非ず。

必ずや其実行に証せざるを得ず。

敢て貴金を拒む多罪多謝。

十一月十四日朝

東海迂流

北越健児の許へ

右に對し同君は更に余の誤解を論じて面会を求めた

然るに女に慣れたる人は必ずしも交際に妙ならずなり。

○農科大学教授、河瀬善太郎氏、最書生肌なり。吾人の仲間に入りて大声高談す。

余益を進めて告ぐるに上田の弟なるを以てす。氏曰く「そーかよく似てるな……」。君は商業学校に入りたそーだが、之からは小供で居ては困る。「そんなことがある者か。小供の中は小供らしくすべし。」「んー、御屋敷風の小供では困るのだ。」(余腹の中に先生中々うまくとぼける)

○高等学校医学科の三年生、清水虎之助君は余とは第一の会合なれども如何なる表裏か二人議論となり「貴様ことをするには日本帝国といふ者を眼前に置くのが必要だ。」

「いや僕は或時に於て眼中国家なし。唯世界あるのみだ。」「それはいかん。日本は我々の故郷である。之を忘れて何をかなさん。」

「然らば君は世界の利益を犠牲にしても、日本の利益を増さんとするか。」「うー……いやそーではないな。」「そんなら僕は君の説に賛成だ。即、僕は理想的

れども、余は復返答せざる覚悟なり。

和歌山会席上の所見

○商業学校の生徒は一般に對話に妙なり。

一例を挙げれば某君は黙然として独り嘯き居たる質朴の一書生に話しかけて曰く。

「君は何処の学校にいらつしやいますか」

「明治義会」「何時御卒業です?」「明年」「そーすると高等学校にでも御入りになりますか」「いえ、陸軍の方へ。」「あー陸軍へ、それは宜敷う御座居ます……」

明治義会には運動部として柔道、撃剣をやりませぬか?」「柔道をやりますが、撃剣はありません。」「あーそー柔道は何流ですか?」「講道館流で……。」「あーそーうですか教師は?」「三段位の人で。」「へー其人は上手ですか?」「此の如くして縷々陳述し、すらすらとして流るるが如し。

○余と同組なる其君は、平生の交際法は余程不完全なる者と見えしに、会に出で酒を飲むや、都々逸を歌ひ、追分節を囀り、果は嘯々喋々女中と艶語を交はらしめ、或は相共に鬼ごっこするに至る。

に世界主義を奉じ、実行的に国家主義を奉ずる者だから。何故ならば国家を利するは即、天下を利するの始めだから。」「大いに賛成だな。」「いや万歳々々。」「酒を飲めば面白くなるものかな。

○余は宴会に出席したること之を以て始めとす。是時に當り、

(一) 覚えたるは人の顔……玉置君(商業予)、津村君(商業本二)、滝本君(同)、田中君(法科大学)、清水君(第一高等医)、園部君(法大)、山口君(自由党)其他数人、但、名を知らず。

(二) 感服したるは或る人々の交際法。

(三) 氣に食はざりし女中の出しやばること。客のこれに戯むること。

矛とりて月見る毎に思ふかな

いつか屍の口に照るやと。

大於心、謙於見

交際は飽くまで先方を呑んで掛る可し。而も此を少しも顔に顯す勿れ。

(十一月十五日記)

十六日 簿記、珠算。

十九日 ポート練習に行く。

二十日 ポート練習に行く。

二十一日 浴

○去る十三日に見たる奇夢

或田舎に於て余が友人の一人(河野君とも思はる)が政治上の憤慨より一の為政者(主権者の如くにも思ふ)をピストルで暗殺したり。其為に多くの巡査は其友人を追ふて走せ来れり。然れども彼は、今日死すること能はざる事情ありしかば、汽車道の傍なる一民家に隠れたり。是に於て余は彼が探し当てられんことを恐れ、彼に偽して走せ逃れたり。

是時巡査等は漸く間近くなり、遂に余に向て発砲し、余は臀部を打たれて倒れたり。

其瞬間余は巡査が「今少しにて殺す所なりし」といふ詞を聞くと同時に体全部にほてりを感じたるがすぐ無心となれり。

暫くして巡査等来り余を捕へて病院に伴ひ行きしが、此時余は心元に帰り、自ら思へらく、彼為政者は実に天下の暴政を行ふ者なり。而して我友は之を殺したり。我今、此尊敬すべき剛毅の友に代りて天下の為に死す。復怨なしと、思はず微笑を漏し居たりし時、夢覚めたり。此夢は余に大なる愉快を与へたり。何となれば余の如き臆病者が今日は斯る大胆なる夢を見るに至りたればなり。

二十二日 朝六時出発、向島に行きポートレースをなす。敗北、是日は我校秋季小集会なり。

帰途桶町内田に立寄る。

朝来曇天、午後より雨降る、夜強雨。

二十三日 正午より家兄及内田子供兩人と与に、上野及、道灌山の方面へ散歩をなし、がんばにて夕飯を喫して帰れり。是時余は酒を過飲し、物を過食したる為、馬車中にて嘔吐を催はせり。今村英祐君に邂逅す。(不摂生)

二十四日、二十五日 浴

二十六日 伊藤君宅にて珠算、夜強雨。

余は福沢先生に倣はん。

平民的、実利的、進歩的、現世的

直往突進、円満自在。

二十八日 E・S・S・S・に出席す。数多の英語演説の後、茶話会ありたり。或人の性質及思想の程度を知らんと欲して其秘密に關する者を見る。為にその人の感情を害したり。礼儀欠く。

○君ならて誰にか見せん梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

○梓弓矢をさしそへてひくときは

返す心を志るかそもきみ

○都鳥いざことはんものものふの

恥ある世とは知るや知らすや

○武蔵野のあなたこなたに道あれど

我行く道はますらをの道

十二月一日 晴、入浴。呂宋島の形勢不穩に付、軍艦吉野をマニラに派遣す。朝丸ノ内にて群集旗施を押し立てたるを見しを以て之に近き諒視せしに、兵士の入

営を祝する為送り来りし者なりき。

◎此頃は試験前に迫れるを以て日々珠算の稽古をなすこととせり。

四日 晴、堀口君と三田に散歩す。

五日 晴、加藤君来訪。加藤君を訪ふ。(主義、性情、交際)

六日 晴、理髮、惟一館の演説を聞く。(昇天墮獄の解)。

簿記帳面整理。極楽は十萬億と唱ふれど我手のとどく所なりけり。増上寺某上人。

◎此頃「国家主義と世界主義」(従吾所好而不越則)の両問題に付、考ふる所あり。

七日 浴。此頃寒氣特に烈しく毎朝檐端白霜、雪の如きを見るのみならず、時として途上打水の凝れることあり。

○飯倉に勸工場を開きたる者あり。

八日 晴、高橋君を訪ふ。(主義、兩人性質、山田、堀口、加藤、河野、恋愛等六時間の長談論、一食の飯)十日 午後内田へ遊びに行く。夜、菊枝の和歌山行を止むる為松尾伯父と共に新橋ステーションに行く。

十一日 終日在宅。伊藤、堀口兩君来る。長井勇君来る。学校にては来十四日より学期試験ある為、今日より二日間温習の爲休業なり。

十二日 化学を復習、夜河野君を問ひ四時間の談論をなす(主義、両人性質等)。

十三日 朝惟一館二演説傍聴す。(自働的及他働的行政、基督の天国)。午後、化学復習。

夜、堀口君と飯倉十番三田へ散歩す。

十四日 入浴、散歩。

松田次郎君を訪ふ。高橋君を訪ふ不在。

十五日 中村子供を教ふ。学校試験準備に不注意の処ありたり。慎重則違反。散歩す。

試験の日割(毎日八時半より)

○十四日 化学 同 訳解同

○十五日 数学 同 和作文同

○十六日 簿記 同 体操

○十七日 英作文 同 珠詰算 書法

○十八日 物理 同 書取

十六日 午後、堀口、伊藤、金子三君来訪し、詰類算す。

十七日 向島へ行、海軍競漕会を観る。

十八日 家事。

十九日 家事。

二十日 家事。

二十一日 家事。夜、出奔。仙舟兄の寓に宿す。寛大ならず。

二十二日 下総行徳地方へ仙舟兄と同行遠足。

二十三日 家事。夜、加藤成一兄来訪、談話。

二十四日 家事。夜、結婚式済みし後、湖月楼にて酒宴し、散歩。朝、堀口兄来訪(用事に付、話す)

二十五日 家事、浴。

二十六日 家事、散歩。

夕刻より、兄及中村君と三村家へ来て、其より川瀬、松尾及び御家内、内田叔母と共に、伊勢虎の祝宴に参す。三村諸兄に紹介せらる。起居不規律の爲、胃を害す。

二十七日 伊藤兄を訪ふ。堀口君と三人共に碁。

二十八日 浴。前田、鵜沢両家へ年暮進物呈出の爲

参上。河野君を訪ふ。夜、大山、井出兩氏招待に付、接待す。

二十九日 長井、高橋、轟石三家へ歳末進物、進呈の爲参上。

三十日 午前餅切、午後、鵜沢君来訪に付、接待。

三田薬王寺参参。

三十一日 家事、浴。

29th Year of Meiji.

I had a Happy New Year. (Jan.)

Marquis Tokugawa's son Yorimichi started for Europe. (Feb.)

My dear mother died. (Mar.)

I graduated from Seisoku Ordinal Middle school (Mar.)

Entrance Examination of the Higher Commercial School. (July.)

I went to Kanakura. (Aug.)

Swimming Exercise. (Aug.)

Trip to Nikkō. (Oct.)

処世余録 第三冊(続)

- 1、余が物忘れ多きは主として二の原因によるべし。第一、性質大べらにして大体を制するに適すれども、却て部分の事に疎き事。第二、胃腸を患へたる為め物忘れの多くなりたる事即ち是なり。然りと雖ども余は嘗て注意周密なる人は、遂に気のきゝたる人となるべしと信ぜり。今も将来も然るべきは勿論なり。
- 2、余は時々自ら主人となりて、一家を経営したしと思ふ事あり。
- 3、普通学を修業中何の学科は吾には出来ずなどいふは間違なり。むづかしと思ふ科は特に心を用ひて勉むべし。然らば容易に上達する事を得るものなり。
- 4、試験の時に教へ合ひをなすはいやしき事なり。故に避け得る限りは避けざる可らず。
- 5、此頃友人、全蘭簿といふものを出だして余の姓名、宿所等を書せしめければ其中に、
信仰 科学。 主義 実利主義。

嗜好 談論と散歩。
希望 善をなし、悪をなさず。

- 6、我々哲学を専門とせざるものが倫理を研究するは初歩のみにて充分なり。而して平生実践すべき事共に關して考を費し、又自省を勉むる事に注意すべきなり。宗教等に関する議論は措きてよし。
- 7、何程の徳ある人にも其徳が人を感化せざるものならばまことに詮なき事なり。故に人不知而不愠といへる論語の言は人は己の徳を知らずもあれ、我は己の道をゆかんのみといふ事と思ふ可らず。成るべくは己の徳を人の知る様になさんと勉む可き事なれども、其時にたとへ人が知らずしてあるも慍る事なきをいひたるものと解くこそ面白からめ。
- 8、己の好まざる人にも礼を欠くべからず。人の氣をあしくするはすべて損なり。
- 9、我こそ温良恭謙なる君子なれと自ら任じ(これまでは甚だよけれども)少しにても正しからざる事は己の仲間がなしても之に加はらず端然として居るは、あまり著むべき事にあらず。斯様なるつまらぬ事はやはり其周囲の有様に感応して行く方がよきなり。社会

の勢に従ひ順応すると、与論に反対しても自家の持説を断行するの機会を見定むるとは難き事にして必要なり。

10、使役するものを誹責するに誤ありし後に叱咤するは、一度誤ちし事の復来る前に懇々注意するの利益多きに如かず。

(雑記)

- 1、学問を自習するに、地理は製図と伴ひ、歴史は文章と伴ひ、動物植物等は其々の実物の採集と伴ひ、地文は旅行と伴ふにあらざれば面白からず。
- 2、処世余録の編成法につき、考へをめぐらすて一案を得たり。

処世余録

日記帳 (Diary)

日々の記事

小使金勘定表 (Account)

社会・新聞 (News)

雑記録 (Collectanea)

I. 道義事項 (Moral)

一 自身の実践 (Fact)

自身の考察 (Thought)

自身に關す (Myself)

他人に關す (Friend)

一般に關す (General)

友人等の話

先輩の話

評論 (Review)

格言

II. 時事事項 (Current Topics)

政治 (Politics)

經濟 (Economics)

社会 (Society)

III. 科学事項 (Science)

物理化学 (Physics & Chemistry)

生理及医事 (Physiology & Medicine)

農牧及園芸 (Agriculture & Horticulture)

博物 (Natural History)

雜記 (Miscellaneous)

思ひ出づるまゝを

- 1、吾思へらへ、己は眞理を発見したるときは着々

之を実行し行く。即、「実は斯々すべきなれども今のところ先づ放任し置かん。」とする如き事は少し。(廿九年一月廿七日)

2、余思へらく、現今余の欠点は軽率なる事(物忘れ多き事等)、交際法の不完全、小胆なる事、決断の力乏しき事、数の觀念に乏しき事、身体の柔弱なる事等なるべし。(二月三十一日)

3、一事業をなさんとせば、金と力と時とを要す。社会の益をなさんとするも亦是を要す。然るに世の徳を修めんとするもの、貨殖の事を賤しとなすは真に迂遠の限りといふべし(二月十日)

4、余が一生涯の大目的は *to do good to the man* にあり。故に商業家になると雖も自利の為にせず、金を得ると雖も社会の為に散ぜんとす。(二月十日)

5、自ら思へらく、貞は小胆なり、小量なり、気力なし。理屈はいへど実際の役には立たずと。(二月十八日)

6、貞が最も貴重するものは、第一善の道、第二日本帝国、第三上田の家。(二月廿八日)

7、貞は元定見なき者なりき。貞は何度か別段の理

友人加藤成一君の父は海軍少佐なり。成一君其紹介状を得て、吉野艦を見んとす。余伴はん事を請ふて容れらる。

1、貞は己の確かに知らざる事は決して人に話さじ。(二月廿五日決心)

2、貞は母の死後廿五日間は人の前に出しやばる事は成可くすまじ。(三月卅日決心)

3、貞は、「理の愛」、「心の恋」ならすんば取らじ。たとへいかなる感情の襲撃にあふとも。(四月一日決心)

4、風雨の爲めに一旦定めたる外出を見合はずまじ。(四月廿五日決心)

1、余は十二、三歳の頃より文学者たらんと思ひ、十四、五歳頃(学問の方針、金の二書を此頃よめり)より生産的の事を好み、牧畜家、水産家、商人等にならん事を希ひ、今日に至りては商業家たらんと望む。(廿九年一月廿七日)

2、一月三十日相友舎の大会ありしが、此日余は子

由なく、目的を變じたりき。たとへこれは他の児童が、「目的」といふ如き高尚なる事を考への中に入れざる十三、四歳頃の事にせよ、又当時から事につき一人の監督者なかりしにせよ兎に角ふら／＼主義の者なりき。されど今日は一旦決心したる上は断じて之を行ひ、又事に當りて猶予する事なき気力と決断力をいくらか得、尚得つゝあり。是実に自身の心掛によると雖も、亦我が親愛なる親友諸君が言行の貞を感化したる功によらずむばあらず。(三月卅日)

8、確かに知らぬ事は決して人に語るまじき事なり。(四月八日)

9、働く時は骨をしみせず愉快に働くべきものなり。(四月八日)

10、決心をなさんとするときは秩序を立て、部署を定めて順々に決定し行き、着々と定め了らば頗る強堅なる、他の理由を発見せざる以上は變ず可らず。斯くの如くせざれば、余の所謂ぐ／＼とフラ／＼の爲に虻蜂取らぬ結果を来さん。

明治廿八年十一月廿四日(日曜日)吉野艦を觀る記。

供仲間に入れられたり。

3、二月一日曾山達夫兄の手書を領す。其意に曰く、同兄は病後書物を廢する事を命ぜられ、敵父により本国鹿兒島に地面を手へられしにより、以後同地に於て農業に従事する決心なり。又曰く、「君等は勉強せらるれども余は以後世間知らずの愚物とならん。君は余の頼もしく思ふ友人の一人なり。」云々。

4、余幼にして、美衣美食の人とならんと欲し、十三、四歳にして歴史に盛名を止めんと望み、十八歳に至りて真に財宝功名以外の人となり、偏へに社会の益をなすを以て一生の大目的と定めたり。(二月十日)

5、友人加藤、河野二君は廿七年秋に功名人の浅薄なるを悟れりと。(二月十一日)

6、二月十六日歓迎会の場にて、會員の一人(余の見知らぬ人)余に問ひて曰く、かしこにあるは誰なるやと。余其姓名を答へけるに其人、否そは誤れりと。余その悪札を怒り曰く、「それでも私は知て居るから仕方ない。」と言ひ放ちて走せ去りぬ。……さても愛嬌なき事なるかな。貞、実は小量なるなり。(二月十八日)

7、明治廿八年の秋学期より余眼を病み、教場の後

方にては黒板の文字を解する能はず。(二月十八日)

8、明治廿九年二月、余の最親しく交際する人々は加藤成一、高橋鎗四郎、河野広一の三君なり。加藤君は東京の人にて余と同年、性質温厚なる人なり。高橋君は美濃の人にて今年廿二歳、厳正にして事に熱する人なり。河野君は福島県の人にて余より一歳の兄なり。昨年末の頃より親交する様になれり。大胆果断は其長処なりと人はいふ。余は未だ何ともいふ事能はず。(二月十八日)

9、廿九年二月十九日は余が物覚えありし以来始めて大劇場を見たる日なりき。数日前内田伯母来り、老祖母始め観劇に行く筈なれば、汝もつれてくれんといはれ、此日行くを得たるなり。余は十一時学校より帰り、昼より行き、上総屋といふ茶屋より教へらるゝまゝに行き、伯母等の所にて共に見たり。こゝは辨井といふ観場なりき。外題は桃山物語、富岡恋山開、及道成寺なりき。

廿八年十月、余が家兄の間に応じて認めたる覚書下の如し。

に落第又は不受験等にて進級せざるときは例外とす。其細目は同校規則にあり。

一、慶応義塾に入るとすれば先本科なれども商業学校にてよし。

一、銀行等に奉公せんには別にいふ可き事なし。

一、之を要するに、貞は気永に細心に進みて最後の目的を達せんとするものなれども之が為に青年流の豪邁なる英雄精神を減ぜん事を嫌ふものなり。

右の如くに候也

明治廿八年十一月廿七日 貞二郎誌

一、二週間の後商業学校に入らしむ可き由家兄の許を得たり。

商業学校へ入学の為、入費に關し家兄は左の如き貯金の予算を作りたり。即ち二月より八月まで毎月一円の衣服及臨時費より三十銭を積み、四月より八月まで学校の月謝なきを以て其と同額を貯へ、又特別に二月より毎月一円づつを貯へ、八月末に於て十六円六十銭を得、足らざる所は其特別に出さんするにありき。

余は尚節約し、貯蓄し得べき望あるを以て左の如き

今後の修学に付覚書

一、先輩、友人及び自身の考を参酌して、

貞の性質を見るとときは支配力、経営力あれども臨機の才に乏しきの大欠点ありとするもの其綱領なり。

一、右の如くなるが故に活潑頻繁なる商業事務には不適當なり。然れども銀行、会社員等には最適可きが如し。此他適す可きものは牧畜家、農業家、開拓者、理学者等なる可きか。

一、以上の事により家の事情を斟酌して考ふるときは、今後取る可き修学の方針は銀行会社員に適す可きものならざる可らず。

一、然るときは其修学の場所は左の三に帰すべし。但し其順序は貞の志願の多少に従ふものとす。

第一、高等商業学校

第二、慶応義塾

第三、正則学校卒業後直に商家に奉公。(銀行書記助手等)

一、高等商業学校に入るとすれば来年の九月より貞が二十二歳の九月までにて全科を終る。但し其内

予算を立てゝ答へたり。

三月より八月まで貯金の予算

* 毎日小使銭の残り 3.36 ^H 但し一ヶ月56錢づつ六ヶ月分

毎月衣服及臨時費 6.00 此費は全部残る

特別貯金 6.00 此も全体残る

四月よりの月謝 7.50 但し五ヶ月分

* 九月份繰上げ高 2.67

合計 25.53

* 小使銭残金の内訳 ^H * 九月份繰上高内訳

書籍費 1.1 ^H 授業料積金 1.67 ^H

日用費 25 衣服費 1.00

旅行費 10 合計 2.67

貯金 10

合計 56

而して差当り必要と思はるゝ費目は左の如し。

受験料 ^H 1.50

授業料半年分 10.00

制服、靴 15.00

合計 26.50

自身実行の雜記

加藤君と相識る。

廿五六年の交我家に阿高といふ婢の居りしが其者は即ち同君と親戚の關係あるものにて時々余に同君の事を語り又、此頃より同君は我校に入しかば又相知るの機を得て時々話せし事なきにはあらねど、未だ友人たらず。廿七年十月頃に至り余は屢々高橋君の寓に於て同君と談話等をなせり。且つ高橋君は余に同君と交を結ばん事を勧めたり。此時よりして余は君と相識らんと務めたれども尚ほ友人とまでは進まざりし。廿八年四月余は学校にて同君と同級に列せり。同五月学校漢学試験あるに際し一所にさらはんとて同君の家を訪ふ。此前後より余は君の友人となれり。其後數日を経て余は再び同君を訪ふの機を得たり。余が親友として君に談話せしは實に此時を始めとせり。以上余が最佳の一友人を得たるの始末なりとす。

始めて軍艦を観る。六月三十日、五日十日又廿日、びしよびしよとふりつづく入梅の頃なるに今日は昨日よりつづける雲の切れ間あり。余はボート会へ出席す

当艦に四門あり元來旧式砲なるを以て甚だ便利といふを得ず。次に航海長室を見、次に速射機砲を見たり。此は稍新式にして形は小なり。比較的に細き四門の砲が鉄板の上に並び居り其下にあるネヂの器械によりて上下左右に回転するに適す。弾は上より打つ時は直ちに落ち、終ればからは下に落ちる様に器械を動かす事を出来る仕掛にて、すべて五人にてあつかふなり。一分間に百二十発より二百発を打つべし。又彈丸を見たり。これは二種あり、一は鉄艦を打つべきものにて、

其先きはかたき突りたるものにて中に火薬あり発射するときの勢にて火薬後部にのこり当りたる力にて前に進む。其間の動機によりて破裂するものなり。他は木艦を打つべきものにて、その先はやゝ鋭ならず、物質もやゝ軟なりといふ。それより十七センチ砲を見、次に祝砲に用ゆべき古式砲を見たり。これは通常の砲を用ゆる時は金を要し且つ掃除に手数を要する故、特に備へたるものなり。其傍にありしは陸軍用の野砲なり。これ陸戦に用ゆるなり。それより船室に下り水夫の諸室、士官室を過て風呂場を見、艦長の室を見たり。これにて見聞終れり。此を説明したる水兵は薩摩なま

る事を許るされたり。築地の舟宿にぞろ／＼と集りたるはこれなんボート会の出席員なり。やがて人もそろひて一艘の艇を出せしは一時間なる可し。其乗組員は伴野、堀口、加藤、伊藤、山内、高山、栃尾の諸君及余を合せて八人、ボートは海軍大学の裏手より浜御殿の後に出てたり。涼しき夏の海風はS・B・Cの旗を吹けり。進んで沖に向ふ程に金杉の家も、高輪の畑突も、三田の山も漸々水蒸気の中にかすかになり、旧砲台は目の前に来れり。吾等は第三砲台なる燈台の傍を過ぎて進めり。此時より浪は漸々にあらざりしが、吾等よりは少し先きに進み行く一のボートあり。同じく海門を目指して行くが如く浅黄に白にて何やらが染め出されたる旗が浪の間にちろ／＼するはあれぞ日本中学校の連中と知られたり。吾等は此ボートを抜けり。彼も力を尽して争そひしが勝利は吾等の上落ちぬ。午後四時頃海門に達したり。吾等は軍艦に上れり。余は全身寒むくして足さへふるへ、よく立つ事能はざりき。これ實に舟によるものなる可し。やがて一名の水兵(上等兵曹位)出て来りて吾等の為めに説明をなせり。最初に見たるは十二センチ砲なり。此砲は

りの陸戦隊(りくせんたい)勢力(せりき)などを用ひて親切になしくれたり。帰る時札をいひしに「このふねはふるうござんすかあ、みるもんはなにもありません。また、あたらしいふねがきましたときい、みにくるとよーござんす。」などいひたり。それより吾等は綱梯を下りざる可らず。此間は四間不足あるなり。割合にやさしきものなりし。帰途はいと迅速に風をはれ潮に送られて五時半頃築地につきぬ。これぞ余が始めての軍艦見物なり。

今年五六月の頃より記憶術なる事大流行となり東京の和田守菊次郎、大阪の長谷川某、和歌山の太田某等諸氏各自家の説を出して東西に旗を立て朝野の紳士紳商みな之を伝ふ。時に松尾伯父は余に和田守氏の同法講義書を買ひ与へんといひ金さへ送りくれたれば余之を買ひ見るに、中々巧みになるものには相違なしと雖も著者等のいふ如き科学ともいふべき程のものとも受け取れず。何となればあまりに頓智、文才等を利用する区域多ければなり。兎に角一人前の思想ある人ならば一通りは応用する事を得べく随分其「game」も広き事を得べしと思はる。始め余の記憶術なる語を聞くと、

いかなるものなるやと考へはしたれども遂に其想像だも得る事能はざりしに豈に計らんや其物はあまり足下
にありしが故に之を見る事能はざりしならんとは。吾
々が始め英語を習ふ時、Senseなる語を覚ゆるに酢草
魚を以てしたるかの方法、吾々が43429448の
数字を覚ゆる為めに死産死肉死志発の文字を作りし方
法の進歩したるものならんとは。(九月廿一日)

憶ひ起す記

余が履歴

明治十二年三月生 先上級の生活をなす。

(三才) 十四年八月 父死す 此時よりは下級に落

たれども其後祖母の慈愛によ
り応庸なりし(却てはいく
育ちなりし)。

(六才) 十七年 飯倉小学に入る。

(十才) 廿、廿一年 母病狂 此時より兩三年叔母

の手に督せらる。余はややい
ぢけたり。

(同) 廿年秋 祖母を失ふ

(十一才) 廿二年春 登級す。 母癒えてより再び

はいく育ちせらる。
(十三才) 廿四年三月 小学を卒業す。

此時頃より稍々兄の放念主義
に委ねらる。

(同) 廿四年四月 正則予備校に入る。

(十五才) 廿六年四月 母再狂を病む。

此時より全く自治せざる可ら
ざる境遇に入れり。又心配な
るものをなしたり。

(同) 廿六年十一月 母大に腎臓を病む。

余之を看護す。余が反省なる
事の大に起りしは此交なり
し。

(十六才) 廿七年十一月 母再び大に腎臓を病む。

余之を看る。

○我七八才の頃母上毎夜廿四孝の話をしてきかせら
れしに、或日我いづこかよりヲモトの芽萌を拾ひ来て
母に示し「僕がかあさん孝行をするもんだから天がこ

んなメバエを手へてくれたよ。」といひし事ありき。

○我六才にして麻布区飯倉小学校(此時は北新門前
三番地にありたり)に入りしが、氣よわき性なりしか
ば一人にては行き得ず母上に伴はれて行く事毎日なり
き。此頃日課表といふものありて日々行状あしかり
し、習字よくできぬなどいはれては○●の印をつけて
教師より与へられければ、○の多くつきたる日はかへ
り狸穴坂の上にて、ガライといふ菓子を買ひ与へられ
き。

○我四才の時なりと覚ゆ。祖母上に負はれて三田の
育種場へ馬、牛などを見にゆく事を好みぬ。或日祖母
は飯倉へ買物にと出でゆきしに我は育種場へゆく事と
をもひ跡つけてはしり行きしに、影見失ひ迷子となり
て泣き居しを巡査につれられて送り帰されたる事あり
き。

祖母の墓参 余は久しく祖母の墓を訪はざりき。然
るに此夏頃より一度行かんと思ひ立ち今月十六日其機
を得たり。祖母は明治二十年十一月に麻布飯倉なる我
現状の家の座敷にて死去し戒名を観光院幸譽得法大師
といひ麴町四谷門内の心法寺なる松尾家の塋域に葬ら

る。実に余が母、伯父(松尾三代太郎)、及び伯母(内田
カネ)の母なり。而して又余がやさしき教訓者、養育
者なりき。(廿八年十二月十七日記)

観劇の感 堀越団州は今年五十有余才なりといへど
其清正に扮するや活潑なる事壮者の如く、娘道成寺に
扮して舞ふや片々として胡蝶の如くなるは感じ入りた
る次第といふべし劇は実に美術なり。(廿九年二月)

此が恋か 寝ねんと欲するとき、歩行するとき、書
を読めるとき、凡ての時余が頭脳には彼が容あり。彼
何物ぞ。我が昨日始めて相見し人、而して其時には甚
少しの感動を余が心に与へしものなるにあらずや、我
は久しく彼が名を耳にし彼が言行を語られしと雖も、
曾て今日の如き感を起せし事なかりしにあらずや。然
るに我心は陶然茫然唯彼を忘るる能はず何となく彼を
慕ふ。嗚呼恋か々々我は此が「恋」ならざるやを疑ふ
と共に此が「色の恋」ならざるやを思ふ。(余は「色の
恋」ならざるを信ずれども)兎に角此感情は理の「恋」
ならず。然らば余は断然之を捨て誓つて無理の恋の誘
惑を排斥せん。嗚呼余は実に君子なりき。曾て自ら大
人なる事を悟りき。

人が寄合ひて一事を計画する時 例へば学校杯にて
写真を写すとか又は色々の会をするとかいふ時は始め
によく／＼相談をまとめ置くべし。始めが肝心なり。
(四月八日)

不案内の事 をなさんとする時は最初にその事を経
験ある人に問ひ合はずべし。例へば他の学校の試験を
受けんといふが如き時には現に其学校にある人又は受
験の経験ある人につき色々の事を問ひたす可し。決
して規則書又は広告位を見て安心すべからず。(同)
嫌ひなる学科 余は数学嫌ひにて数学は六かしき面
白くなき益なき学科と思ひしに勉強して見たる今日に
ては面白き有益なる而かも余り六かしくなき学科とな
れり。凡ての嫌ひなる学科も放擲せずによく勉強すれ
ば思ひの外容易に出来るものなり。(同)

現在の境遇

廿八年の暑中休暇に際し自習帳に題したる詩歌は

“The wise and active conquer difficulties, By
daring to attempt them: sloth and folly shiver
and shrink at sight of toil and danger, And
Make the impossibility they fear.”

Rowe
せを はやみ いはに せかるる たきかほの
われても すえに あはんとぞ おもふ
又同時に一の規定を作る事下の如し。
無理なる定にあらざるべき事
毎○日○四○時○間○以○上○左○の○表○に○よ○り○勉○強○す○る○事

土経歴代	英語四時間	地理二時間
金地英経	漢学三	幾何一
木漢代歴	經濟四	三角一
水経三英	代数三	和文一
火英経漢美	歴史三	美術一
月 歴地		
日英代漢和		

暑中休暇中八月廿四日より脚氣のある事を知りたれ
ば其前の日数三十七日の中、上の規定に反したるは五
度なり。(九月三日)

廿八年十月中改正したる Rule の如し。

1. Not eat the ankle, the fatty, and the hard foods.
2. Take the medicine regularly.

3. Rise before 5.30 in the morning.
4. Be accurate about the time.
5. Be accurate about the money account.
6. Be accurate about the business.
7. Not——

一、余の面白しと思ふ景色は

一、白の一重の桜が一杯にさきみちたる所へ十五
日頃の明月が足はやく空を行くを樹の下より見
たる所。

二、初夏さみだれが糸の如く降れる中に新緑滴る
カヤ類のやゝ黒色ををびたる大木ありて新来の
燕二三羽上下にとびかひたるさま。

三、公孫樹の大木一面に黄色の葉をひろげ一ひら
二ひら風もなきに落つる所夕日なほ少しの光を
送りて三五の明月は力を逞ふせんとして尚ほ能
はざるさま。

四、水成岩のきり立たる如き岸の上には青々たる
小松が茂り、すそは白蒼き大濤がどムーとか
みつく如くあたりてはくだくるさまを横より見
たる景。

贅沢をいへばいくらもあらんなれどまづ此位は
見る事易くしてをもしろきものなり。

二、近來作りたる学校課題の文章一二を録す。(十二
月廿一日夜試験終りし日)

◎楠公別子の図に題す。(漢文直訳体の部)

苦戦利なく献策効なく、而も子を遣して、報効を期
す。是忠義万世に比なき者、父を慕ひて共に死せんと
し遺戒を奉じ、退て武を講じ、遂に父志を継ぐ、是亦
至孝天下に傳なき者、あゝ是忠孝空絶の人。誰か此図
に対して涙なからん。廿八年十一月十八日稿

評に曰く簡にして情あり体あり敬服々々

◎秋(近世日本文体の部)

心なき身にも哀は知られけり 鳴立つ沢の秋の夕暮。
超俗の高僧も秋の夕景色に対しては哀を催ししものな
るべし。実に秋は木の葉落ち草枯れ吹く風さへ冷かに
て物さびしく感深きものなり。されど秋といへども必
ずしもかなしきのみにはあらざるなり。天晴れ日あた
たかき時杖をひきて野外に遠足などするはまたおもし
ろきにあらすや。月白く風寒き夜静かなる窓のもとに
学理を考ふるは甚だたのしきにあらすや。されば、我

は秋をこそ好むなれ秋をこそ楽しむなれ。などかは秋に逢ひてあはれに悲しき心を起こさん。廿八年十一月六日稿

評に曰く言葉すくなくしてよくきこえたり

明治廿八年の余が書物 一月二月は地理書及び和文英訳教授書及和田守記憶法。三月は専修学校理財科講義。七月八月九月十月は八犬伝と数学書。十一月十二月は論語、八犬伝、折焚柴の記等。新聞は一月より時事新報、中頃より毎日新聞。

余の卒業試験 今年の正則校卒業試験は十六日より廿三日迄の筈なりしが、余は母上御死去の為廿一日よりの試験に出席する事能はず。これが為欠席したる科目は四科ありしが葬送済して後学校に出頭して問合せしに四月に入り校務の閑になりたる時試験を行ふべしとの事なりしにより、そのまゝ帰宅せしが商業学校にて及第者を採用するには、願書の順によるといふ事を聞きしにより、成可く早く試験を行はれん事を校長に請願し漸く九日より行はる事となれり。今年と一昨年と余の活力の比較 (廿八年)

廿六年七月 廿八年七月 差

六月 五九〇厘 七七三厘 三二〇厘

平均 七〇一(〇) 三九〇(一) 三二七(十)

(備考) 一月二月の間に於て日用費、保養費の少なきは、母病氣にて学校も休み、外出する事も甚だ稀なりしが故なり。三月よりは撃剣其他友人の家に行くなどするを得たり。五月六月の間に於て文房具費多きは学校の上级期にて書物をかひしなり。四月の日用費多きは更衣期にて、シャツ、おびを買ひしなり。五月の保養費多きは、ポイントレースありしなり。又文房費とは、筆、紙、墨、ペン、ペンシル、書籍、雑誌等なり。日用費とは理髪、歯磨、湯銭、衣服付属品なり。保養費とは校友会、ポイント会、撃剣、菓子、遊歩等の費用なり。

廿八年下半年小使勘定表

七月	文房具費	日用品費	保養費	合計
八月	一八・五	九・五	四八・〇	七六・〇
九月	三七・八	一八・五	六一・〇	一一七・〇
十月	一三五・五	五・〇	三五・五	七八・三
十一月	一一六・二	三九〇	四三・〇	二一七・五
十二月	四四・一	六〇九	二三・〇	二〇〇・一
	二二三・七	九・〇		二七六・八

身長 四尺八寸一分 五尺一分 二寸
指極 四尺九寸四分 五尺一寸九分 二寸五分

周 左 七寸二分 七寸八分 六分
右 七寸六分 七寸五分 減一分
上 七寸三分 八寸 七分

胸 常時 二尺二寸二分 二尺三寸 八分
空虚 二尺一寸五分 二尺二寸一分 六分
充盈 二尺三寸四分 二尺四寸二分 八分

肺量 一四〇立方吋 一五〇立方吋 一〇立方吋
体重 九貫八〇〇匁 十貫九七〇匁 一貫一七〇匁
握力 左 二一キログラム 二七キログラム 六キログラム
右 二一キログラム 三〇キログラム 九キログラム

今年上半季小使勘定表 (廿八年)

一月	文房費	日用費	保養費
二月	三四三厘	八〇厘	〇
三月	二二〇厘	三三〇厘	一〇〇厘
四月	二二四厘	九四二厘	三九〇厘
五月	二六一〇厘	一九〇厘	七八〇厘

平均 六四・九 五九・四 三六・六一 一六〇・九

(備考) 此間八月末より十月初までは脚氣にて医につきたり。其後は撃剣、ポイントをなさざりき。〇八月に保養費の多きは、病氣になりたるが故に、滋養品を食したればなり。〇十月に文房費の多きは、書物を買ひたればなり。〇十一月の文房費多きは岸君送別会あり、且つ書物を買ひたるなり。〇十二月の日用費多きは、年末にして、シャツ、下駄、帯等を新調したるなり。脚氣になりし為、滋養食品として特別に費したる金は、九月中一六八・一、十月中五〇・九、合計二一九なり。又此時より季末までも牛乳を用ひたり。前期に比して、文房費は減じ、他の二費は増せり。

廿八年十二月調活力表

身長	五〇三分
指極	五一七
周	左 七三 右 七九
臂	上 七九 下 七七

胸	常時	二二六
空虛		二二二
充盈		二五〇
肺量	一七〇立方吋	
体量	一〇貫九〇〇匁	
握力	二五キログラム	
右	二八キログラム	
力量	四度	
概評	退歩	

第二集 時事 (有名なる人の事績)

明治廿八年十一月五日北白川宮大將殿下薨す。殿下は、維新前には、輪王寺宮と申し奉り上野の僧におはせしかば、東征の際には、幕府の為に、朝廷に向ひて請はるゝ処ありしも、成らずして、東北へ走らせ給ひしが、明治になりしより、兵学に御心をよせられ、独乙国に御遊学の後、軍人にならせ給ひ、此度の台湾征伐には、近衛師団長として、最多く御心身を勞せられ、敵の本拠台南陥落の報を聞かせらると同時に、御薨去あらせられしなりと。

同十二月郵船会社社長吉川泰次郎君逝く。君は和歌山藩士にして、維新前江戸に出で、福沢先生に従て英学を修め、慶応義塾の組織に預り、又各地に泰西学の普及を計りしが、後講学の本務を渡して、三菱会社に入り、二十年頃遂に同社長に扱ばれ、日清戦争の際には、数十隻の運送船を政府に供給し、加之内地の船線も迅速に不足なからしめ、功によりて従五位勲三等に叙せらる。君、性剛毅、一度決意したるときは、百雷眼前に落つるも、断じて之を廢する事なく、而して寡言にして、言は必信あり。又綿密にして、しかも大度よく人を容れたりと。

明治廿九年二月二日文学博士川田剛先生逝く。先生は、我邦近代の漢文学の大家なり。

同五日鉄腸居士末広重恭氏逝く。氏は我国新聞界の老将にして、又政治小説の作者として知らる。重なる著作は、雪中梅、花間鶯、明治四十年の日本、戦後の日本等なり。又氏は国会議員として、政府反対派中の錚々たるものなりき。

(雜) 明治廿八年十二月十五日より四日間靖国神社臨時大祭を執行す。天皇、皇后兩陛下の行啓を仰ぎ奉

り、戦利の旗旛、馬匹其他の武器を陳列し、参拝者の往来は蟻の甘きに集まるが如く、雑開いはん方なし。

(十七日)

明治廿九年四月十五日日本郵船会社の土佐丸、第一回の欧州行として横浜を出航す。

五月五日ベルシャ王暗殺の報伝へらる。

当年四、五月の交に企画せられたる大汽船会社二つあり。第一は、浅野総一郎、沢沢栄一、大倉喜八郎氏等の東洋汽船会社にして資本金四百五十万円、第二は横浜の大谷嘉兵衛、吉田、平沼専蔵氏等の大東汽船会社にして資本金二百万円なり。而して双方共、重に日本、アメリカ間の航路を取らんとす。

(事件) 先頃東京市の水道工事を起すにつき、其鉄管は内国製を用ふべきや、将外国製を輸入すべきやの議論一時喧しかりしが、遂に内国産を可とするに決し、鑄鉄会社なるもの起こりて、其用品を供給する事となりたり。然るに此頃該社は不正なる即ち市の水道事務員に於て、不合格とする処の品を巧みに偽りて、上納したりし事を発見せられ、為に社長浜野茂以下支配人、技手等就縛せしが、其後の取調べにて、尚以前社長た

りし雨宮敬次郎等も関係ある事露見し、是亦拘留せられたり。而して又此に連接して、司法官の手に入りし証拠物は内閣書記官長伊東巳代治が雨宮と共謀し政機を漏して、相共に南海投機機の利を占めん事を証せりといふ。因に曰く浜野は従来株式米の相場師にして有名なるもの、又雨宮は数年前矢張株式相場にて、大利益を占め(或は不正なりともいふ)急に実業家の仲間に入り炭礦、甲武兩鉄道の重役となりしものなり。後市会の常設委員も上の事件に関係ある事を探偵せられて、引致せられしかば、罪人の数は三十余名となれり。又市会は遂に知事三浦安氏等も責任あれば、辭職すべしといひたるに、知事は是を拒みしかば、知事不信任の決議をせしに、内務大臣は遂に市会の解散を命じぬ。

(学界) (一) 独乙のロエントゲン博士写真術上の大發明をなし、欧米の学界みな之を称し、応用盛に行はる。其方法は、器械を物体の前に置き、硝子をその後におけば、物体の内部にあるものは硝子に写る。之により、人身の内部、箱中のもの等を写し出す事を得。該光線の達せざる所を写し、不可思議なるものにて、發明者も其理を説明する事能はず。よりに唯単に又光

線とよぶのみ。(四月)

(政治) 朝鮮の大院君王后の專横を憤り、是を弑さんと欲し、我日本の公使三浦子、朝鮮軍部顧問岡本柳之助、公使官員杉村濬の諸氏は素より此意ありしかば、直に院君と謀合し十一月廿七日訓練隊(朝鮮兵)京城守備隊の助により王城に入り望みを達したり。我國にては、三浦公使以下数十名を捕へて、投獄せしが、証拠不十分にて免訴放免せられたり。是廿八年十一月廿七日の事変といふ。

廿九年二月十一日又々一変事こそは同じ朝鮮国京城に起りたり。露西亜は北方の強國にして、朝鮮に野心あるは勿論なるが、此頃某公使スパイエルは、謀をめぐらして韓人某を使ひて大君主に上書せしむらく。現内閣員等日本兵と結び、王闕に入り、王を廢するの陰謀ありと。是に於て王は大に怖れければ、又曰く宜しく露公使館に行幸あるべしと。乃十一日の晝天潛行して出でられしに、宮女にも内応するものありて、西大門を出て露兵に守られて公使館に入れ直に内閣員金宏集、鄭乘夏等を殺し、新内閣を組織して公使館内に置きたり。

當時世界の三征伐と称するもの。(一)伊太利のアビシニアに於けるもの。(二)西班牙のキューバに於けるもの。(三)英國の南アフリカ、トランスバールに於けるもの。

(政治) 日清戦争に際し、帝國議會は政府をして内顧の患なからしめん事を期し、二億の公債案を可決し、且少しも政府に反対する所なかりしが、戦争の終局望ましき結果得ざりしかば、政党中政府に反対し其責任をひきて処決せん事を主張せり。所謂責任派にして改進黨、革新黨、中国進歩黨、財政革新會、大手俱樂部等はなり。然るに自由黨は此時に當り、政府と結托せしかば、議院は常に政府の勝利に帰せり。されば責任派にては小党の分立を不便なりとし、乃大合同を組織して政府に対せんとし、廿九年三月一日愛宕館に會し、結党式を執せり。其名を進歩黨といひ其綱領は責任内閣の組成と自主的外交にあり。

(二)東京府では、水道鉄管事件以来市民と知事との間に衝突屢々起り、市會は二度迄解散を命ぜられしが、市會は幾回も知事不信の決議をなし、遂に三浦東京府知事は免官となり、久我通久侯其後任となれり。

(三)廿九年四月十四日自由党総理板垣退助伯政府に入り内務大臣となる。

(四)第九議會の事業は、軍備擴張及び之に應ずべき税法即ち登録税、營業税法の可決。

(五)自由党と政府の結托の結果、板垣伯内務大臣となり、黨員其部下の官吏となる。(四月)

第三集 世態

一、東京にて茶を売るに、三十匁何錢などいふ時の「匁」は目方にあらず、やはり錢の事にて昔しの唱へ方をとりにしなり。即ち六十匁は一兩なり。又十分の一匁は厘、十分の一厘は毛なり。此法は茶の代にかぎらず、昔は借金の利息にも用ゐたり。又現に今日にて式拾兩一分といふは、二十円一ヶ月、利息二十五錢即ち〇・〇〇一二五の率なり。此方に於ては、兩を一とすれば分は〇・二五、朱は四分の〇・二五 or 〇・〇六二五なり。

二、租税の事 租税を分て国税、地方税とす。又其中に下の如き小分あり。

地租 海關稅
国税 所得稅 印紙稅

酒、菓子等の諸稅
營業稅 船車の稅

地租割稅
戸數割稅
家屋稅

此内にて地租は地価の百分の二・五なり。所得は左の如き割合なり。

歳入(円)	稅率
三〇〇以上	〇・〇一
一〇〇〇	〇・〇一五
一〇〇〇〇	〇・〇二
二〇〇〇〇	〇・〇二五
三〇〇〇〇	〇・〇三

製造税に至りては其売上高に割り合するものと造石高に割合はすものとあり。營業税は何の營業には何円とさまりたる制規あり。故に多く造るもの、売るものは徳をする訳なり。地方税の方は名称其性質を示せり。

三、商売をなして人の払を見るに、通常の人其金高、少しにても多ければ紙幣を用ゆ。黒人は銅貨を用ゆ。此れ何故かといふに紙幣を両替店に行きて銅貨に

替ふれば、一円につき五厘なり八厘なり割にて此方へ店より払ふべし。故に黒人輩は、紙幣を得れば、多くは此手段を用ふるなり。此も一円に付きてこそ八厘なれ。十円となれば、八銭となる可く、百円となれば八十銭なるべく、三百円に付ては二円四十銭を得。以て週日の小使に供す可し。(叔母の話)

四、地代は下町繁華の地にて坪十銭、麻布、四谷の田舎に近き所にて五厘なり。地価は下町にて廿円、山の手にて五円、三円位なり(此頃の相場、八月、兄の話)

五、新華族は一万円もらふ。

六、十月十九日学校校友会の遠足ありしが、余は行かざりき。此日弥生館にて芝岳会(浄土宗)の仏教演説ある事は前より知りたりければ、午後二時半頃より傍聴に行きけり。此時は恰も蓮花某氏の演説中なりしが、其後にて加藤咄堂、井上円了二氏も演説したり。此中加藤氏の対救世軍政策中に感したる事あり。そは仏教の貴族的なるを駁したる時に引きたる貧民の状態なり。氏曰く、府下某所にある貧民の巢窟にては、一人一日の食料二銭を超えず。即ち彼等の米は師団の残

は日々市中に落ち居るものなり。

十、日清戦争は事業の勃興を来し従て人夫の不足を生じ、従つて下婢の不足を生じ、従つて車代の騰貴、下女給金の騰貴を来し、従て中以下の細君の手に餅を生ず。

(自身の考)

一、生理上一般の規則、之に対する簡單なる医法並びに其に用ゆ可き薬の名、通常の病気の徴候の大概、此等を知る事は処世上甚だ便利なりと考へらる。因て以後此等に付て、聞き得たる処は注意して筆記せん。

(服装等の事)

一、女帯に二種あり。一は即ち丸帯にして表裏同色又は異色のものあり。此は男帯の如く一枚を折りて表裏をなせるものなり。次は所謂ハラ合せなり。此は二枚の切れを双方より合せつけたるものにて各々一枚を帯側といふ。

昔がたり

一、麻布より青山への道の如きは、維新頃には唯人問一人を通ずるに止まる位にて両側に藪など生ひ繁り居るのみなりし。其適當なる道にナリしは実に明治十

飯及洗流しにして弁当屋の如きもの車にのせ引きて行商す。其価どんぶり一碗一銭五厘位にして、之に多量の水と辛がら如きものを混じて食すれば、一食に付き茶碗に二盃はあるなりと云々。

七、余の友人某氏といふ書生は東京に下宿なし居れるが、毎日の訪問者二、三人、各々二、三時間の談話をなす。而して其談話なるもの半は、実に有害無益の空談等にして、此が為めに学問を妨げられ、時としては睡眠を妨げられ、且つ此に費す所の菓子費用は一日十銭を下らずと。

八、征清役死亡者、統計下の如し。戦死及傷死九九二人、病死三七二人、計四七一三人。

九、紙屑拾ひといへばポロをまとひ、きたなき籠を負ひて、溝や路次の紙屑又はポロを拾ひ歩むものなるが、かゝる生業により生活しおるもの、市内に四百七十余人あり。下谷、浅草、芝、四谷の貧民窟より早朝出で、夕刻に帰る。紙屑の相場は一貫目八銭、ポロは十二銭にして一日の所得は平均十五銭位なり。よき時は三十銭の多きを得る事ありといふ。先づ十五銭と見積る時は、総体にて七十円許りとなる。即ち此丈の金

年頃なり。麻布狸穴の如き又然り。東京市中繁盛の進歩実に驚くに堪へたり。(以上間宮永吉氏の話)

二、昔或家に家督争あり。遂に財産を二子に分配したるに、一人其額の少きを不平としたりけるが、其時人ありて図の如き錢を与へければ、家内の風波おさまりしとぞ。

三、鎖港論、開港論の衝突せし頃は、双方共血をみても自家の望みを達せんとする勢なりしが、開国論者は(こたつやぐらは切てしまへ)といひたりといふ。こは又四角なる漢字を用ふる漢学者を切れとの意なりとぞ。

儀式等の事

一、出産、婚姻等目出度事は祝日後に延ぶるも差支なし。又葬礼、法事等は其式日の前に引上げられん方をよしとす。故に葬式の期日は雨など降る事あるも必ず行ふを常とす。

二、死者ある時は、死亡の時より二十四時を経て入棺するを式とす。

三、小児三才に達したる時は、男女共祝をなす。又男児は五才、女児は七才に達したる時同様なり。其日

は十一月十五日にして氏神又は傍近の八幡宮に参詣するを常とす。

四、贈物をする時、水引を以て結ぶには、右へ赤（又は青）が行き、左に白が来るやうにし、結び目には白が前へ頭はるる様にするべし。

大家の言

一、大隈伯曰く、我を知るものは我に如くはなし。

百毀一身に集まるも我を軽重するに足らず。

二、或人曰く、人間を完全なるものと思ふは誤なり。

三、松村介石氏曰く、人物には英雄的なるあり、君子的なるあり、平民的なるあり。故に某を評せんとする時、其人が己のが意に合はずとて、直ちに彼は非なりといふは当らず。

四、Brevity is the soul of talent.

五、Good manner is the art of making those

people easy with whom we converse. — Swift

六、才子元来多過事 議論畢竟無世功 誰知黙々不言理 山是青々花是紅（南州）

七、有子曰く信義に近きときは言ふべし。恭礼に近きときは恥辱に遠ざかる。因て其親を失はざれば亦以

て宗す可し（論語）

八、見る人の心ごころにまかせおきて、高根にすめる秋の夜の月。（唱歌）

九、佐治実然氏曰く、人の快樂に三あり、（一）身体、精神を適宜に用ひたる時、（二）行状を反省して正道に違はずと思ひたる時、（三）是により人より賞讃せられたる時に起る。

十、Bacon, Nature can be subdued only by sub-mission.

十一、大人とは強剛の決断を以て善を撰び厳格に内外の誘惑を拒絶し、最も重き責を悦びて負ひ、困厄に遇ふて平静なるもの是なり。

十二（なし）

十三、嘉納治五郎氏曰く、人の面色を視、人の批評を聞きて、己の行を左右すべからず。自身の信する所は、他人に聞せず、断然実行して可なり。唯其時に當り、空しく人の氣を害し、徒に己の品を落すが如きに走るは避けざる可らずと雖ども、今日所謂才子の為す所は余之を取る能はざるなり。（四月十二日惟一館の演説）

十四、Think much, say little, write less.

十五、Comte 人間思想の発達を三時代に分つ（一）神を恐るる時代（稲荷山水風川の神の時代）、（二）神を信する時代（念仏の時代、祈禱の時代）、（三）神を顯はす時代（即人が実践躬行の道德によりて、地球上に幸福円満なる天地を出す時）。

（工學上の事）

一、日本の大建築中維新後に就工せられたるもの三、京都東本願寺、東京ニコライ会堂、同日本銀行（常盤橋外）是なり。本願寺の建築費は一千万円にして、直径六尺の椽柱数十を用ひたり。次にニコライ会堂は壯麗なれども、是れ位置によりて助けらるるもの甚だ多く、費用の点よりいへば、日本銀行却て其上にあり、即ち総費額百余万円にして、坪千円の割合なり。又東京府庁は近日来の大建築にして費用は坪二百円に当れり。

二、砂金を採集するに、水銀を用ふるは、誰も知る処なるが、其を少量にて役に立てんには、銅の板に水銀をひき、その上を、砂金の入れる土をながすべし。然る後、布にてその水銀をこす時は、金は固体なるが故に、後へのこるなり。

三、時計等に用ふる黄金の性質をいふには全量を二八 Karat とし、其中何分黄金にて何分他金属なるやを以てす。通常黄金の分量のみをいひ、何 Karat といひて顯はす。

四、日本の工業は、毎年十二、三万屯の鉄を要し、是を供給する事能はず。英国にては、千二、三百万屯を製造し、外国にも輸出す。白耳義之に次ぎ、露國の如きも八十万屯を製造す。

（牧畜上の事）

一、我國の氣候は綿羊の飼養に適す。一年一頭の費用一円二三銭にして之より獲べき羊毛八封度、此代価三円二十銭位（一封度四十銭の勘定）故に純益二元也。又其増殖の割合は、一年に八、九分位にて、其肉皮等は高価に捌く事を得、又当時我國が濠州其他より輸入する羊毛及ラシヤ等の価額四、五百万より八百万に上ぼるといふ。

（医術衛生の事）

一、肺血略の伝染する方法は、多くは患者が、咳嗽する時に、肺中の血咳の細末が飛び出でたるを、常人が知らずして、吸氣と共に肺中に入るによる。肺血

略の肺に限りある可き病にあらざる故に、人が肺に其病を発するは専ら此原因によるべし。又肺病を予防するには、先づ身体殊に肺部を強壯にせん事を要す。胃を屢々病む人及度々風邪に罹りたる人は、肺病にかゝりやすし。次に患者と手拭、飲食器等を共用せず、成るべく患者に近よらず、汚れたる空気を呼吸せざるにあらべし。因に記す。風邪、インフリューエンザ、及マリア熱は肺病に変じやすきものなり。

二、極寒の地にては、食慾衝動せらるるものにて節制する事なり。欲するまゝに食ふ時は、水腫病に罹るべし。又運動は此病を予防する一の方法なりといふ。

三、廿八年秋の頃余眼を損じ、視力弱くなりしかば、友人加藤君に其養生法をこひしに、同君は下の数ヶ条を与へられぬ。即(一)読書の時首を直くする事、薄暗き所にて書見せざる事等、(二)毎朝眼を冷し、又凡て眼をつかれしめず、時には此を楽ましむる様に事、(三)胃腸を害せざる様にし、生殖器を保護し、凡て血液の充実せん事を勉むる事。其他にて、食物にては、衝動剤、麻醉剤を禁ずべしとなり。

四、踵の高き靴を穿くは、神経に害あり。足を一日一

係したるなり。又水道事件といふは、東京の水道に用ふべき鉄管に關し、兩宮、浜野等が詐欺したるに、市會議員中にも、其謀に与りたるものなどありたるなり。而して、悼むべき報知は春に於て有栖川宮殿下の薨去と、秋に於ける北白川宮殿下の御陣死。

第二、学問界に於ける出来事は北里博士のコレラ病免疫法の研究、和田守氏の記憶術。

第三、余の境遇は先善といふ可し。一、二の兩月は母上病状悪しくして一月元日の如きも来客さへ受くる事能はざりしが、三月よりは漸々恢復されたるを以て、外出も自由となり、擊劍、ボートをなし、友人と談論し、散歩するの愉快を得たるに、土用休暇の終らんとする頃より、脚氣病にかゝり、二ヶ月苦み、其後は尋常外の運動を禁ぜられしが、尚友人と相会するの樂ありき。又学校は三月まで休欠し、四月より出席せしが、最後の学期には、学課の忽にすべからざる事を悟りし故、好成績を得たり。特に此年を余が愉快とするは一生の大事業を起したるが故なり。大事業とは何ぞや、曰く修身則。

一、小笠原大尉我校々友会の需に応じ来りて、海戦

回位づゝ冷水にて洗ふは神経を強固にするの利あり。

明治廿八年の記

第一、日本の社会に於て、此年に出来したる事柄は最も記憶すべき事なり。即日清戦争の後半は、此年の前半に戦はれ、勝報頻に至り、遂に威海衛、營口の占領に至りて、李大使の米朝馬関の談判となり、平和条約を結ぶに至り(四月十七日)其結果として我国は遼東半島及台湾を領し、二億兩の償金を得る管なりしも、露仏独三国の干渉を受けて遼東は之を還附せざるを得ざる事となり、五月十四日に其勅語を發せらる。又議會は、此時までは、敢て政府を責めず、広島に於ける臨時会の如きは、頗る平穩なる景況なりしが、こゝに至りて黙する能はず。十二月に開けたる第九議會には、朝鮮事件と共に、政府の落度としてこれを責めんとする勢あり。所謂問責任運動なり。又一方に於ては、天皇陛下広島より御帰京に相成りしが、台湾は尚騷乱の中にありしに、これ亦十月末に平定たれば、其前後より賞功叙勲の事あり。又朝鮮事件といふは、九月末の事にして、同国京城に兵士蜂起し大院君を首領として、王妃を弑せし事にて、其事件に我國の三浦公使等が関

談をなせしが、其中に曰く、試に横浜に上陸せる他國の水兵を見るに必ず乱暴狼藉なり。然るに、我國の水兵は学問を好み規則を守り、品行甚順良なるは誠に賞するに堪たり。されど我々士官は、彼等が一旦有事の日に際して、勇猛なる働きをなし得るや否やを危ぶみ居りたりしに、今度海戦當時の有様を見れば、一方に於ては、整々と規則に従ふと共に他方には、慄慄なる運動をなし且つ情に厚くして、有志者が送る所の物品の如きは、涙を流して謝しつつ用ひたるが如き実に士官も愧づる行状なりき。

又曰く、海戦の惨は筆紙のよく尽し得べきにあらず、黄海の戦に、比叡は一弾の為に二十余人の死傷を生じ、松島は一弾の為に我弾数十個を破裂せられ、遂に百余人の死傷を生じたり。其有様はいふも凄じきものにて、弾片に中りたる人体にして、人体の形を有するものは稀なり。みな粉碎せらるるを常とすと。大尉は又赤城艦長坂本少佐が戦死の状態を語り、血斑ある地図を示し、且其図面の黄色になりたるを指して曰く、是少佐の脳髓なりと。是時我は思はず慄然としたり。

(笑ひ草)

一、銭は貯ふるが為に扁たく、散ずるが為に円く作
わる。

二、或人某名家の鯉の滝上りの画をみて罵りて曰
く、鰯がソウメンを食ふ所みた様だ。

三、某々二政治家会しける時、一人いはく、当今粗
暴なる青年を壮士といふは如何と、他の一人答へてい
ひけるやう、足下の如きをいぼれをやちを老練家とい
ふが如しと。

四、或僧高橋泥舟に書を乞ひけるに、心いふ字を筆
太にかき、其傍へ

牛鍋と地獄の味はよく知れど、此字の味を知る坊主
なし

五、九でわれれば、八を刺し、八でわれれば、七、七な
らば六、六ならば五、五ならば四、四ならば三、三な
らば二、二ならば一を刺す数は如何。答二五一九

六、釣鐘を根付になして、緒メをば、

半鐘にして象の巾着 福島正則

武蔵野にはびこる程の梅の花

天地に響く鶯の声 加藤清正

二、牛屋の看板を見るに、豚、しゃも等の字は黒書
しあれども、牛の字に限り赤く書くを常とす。

三、茶屋の軒に出しあるランプには、赤と青の色ガ
ラスの蔽ひをなすを常とす。

四、浅草の観音に分らぬ事二つあり。一は放す為に
売り居る雀なり。放す人あればこそ捕へて売る人ある
なれ。故に始めより放さずむば、雀は始より捕へられ
ざるなり。かゝるものかふとは、世の中に馬鹿もあれ
ばあるものかな。二には、堂の砂ほこりを集めて、袋に
入れて売り居る事なり。あれは如何なる功能のものに
や。坊主のもうかり方も亦盛なりといふべし。

五、永田町支那公使館の前に台湾事務局あり。

六、煙草屋のノレンはドス赤キが常なり。

一、Poscher 氏、経済原理に曰く、人類の経済を支
配するもの二つあり。利己心と、良心と、これなり。
利己心ありて慾を生じ、良心ありて之を制す。譬へば、
遠心力と求心力とが互に相働きて、天体の運動を調和
するが如し。又、人類が人類として、社会を組織せん
とすれば、勢良心に制せられざる可らず。而して其結

富士山を枕になして寝てみれば

足は堅田の裏にこそあれ 片桐且元

須弥山に腰打掛けて大空を

笠にかぶれど耳はかくれず 細川幽齋

須弥山に腰打掛けし其人を

鼻毛の先でつきこかしけり 曾呂利新左

天は顔眼は月日息は風

海山共に吾身なりけり 有馬道長齋

押まるめ虚空をぐつと飲んだれど

須弥も天地もさはらざりけり 曾呂利新左

髪の手筋にさきて面とりて

ほそ谷川のかげ橋にせん 同

芥子粒の中くりぬいて堂を立て

ひと間くゝに客を迎へん 同

蚊のこぼす涙の中の淡路島

砂をとりて粉にくだかん 同

(塗上雑録)

一、余桶町へ行くに往きは、車夫に神田へ行きまし
ようと勧められ、帰りは三田へ行きましよう勧めら
る。

果は利己心を満足せしむるものなり。即己の利を濟さ
んとせば、先、他人の利を就さしめざる可らず。是自
然の勢なりと。(貞曰く実に然り)

二、Baum 氏曰く、美德の富に於けるは、猶軍隊の輜
重に於けるが如しと。

三、個人と国家と其歳計予算の異なる点は個人の場合には入を計りて出を算出し、国家の場合には、出を計りて入を算出するにありと、添田先生の歳計予算論にあり。「貞曰く、余は始、會計なるものは、みな入を計りて出を制すべきものと考へ居たりしに、国家の場合に於ては、成程此に相違なし。独理屈の悪しき事(即学者、先輩の論をきゝて参考にせざる可らざる事)は、これにても知らるるなり。」

一、世の中は有のまゝこそすずしけれ。——五竹坊

——福沢先生

三、余の千古金言の評するもの

正直は最良の方便なり。ワシントン

徐かに急げ シーザー

四、鶯や高擗越のぢれつたさ。

五' Gentleman is always Gentleman and so in the time of troubles.

(地理)

一、濠州 Queensland の日本人植民地を去る数町の内地に住む野蠻人種は、世界中にて最劣等の人種なり。彼等は土と虫とを食ひ、巢をあみて住み、蚤多くなれば、他に巢を新造して移り、陰部を隠す事も知らず、全く裸体なり。

第四集

(商事)

一' It is stated that the United States foreign commerce is estimated at \$ 1,626,000,000 among which export surpasses import by \$ 23,000,000. Only one fourth of export is industrial goods and two third of agricultural.

二、日本現在の兌換金券額一五六六万余円政府及銀行紙幣三〇四一万余円、補助貨幣六九六四万余円なり。故に方今我邦の通貨は二億五千万円に上れり。(八月)

文 保 日 臨

一月 一二九五 八五一 五五一
二月 一七三 三一九 四二五
三月 一七五〇 一一五〇 六八一 四〇

内訳

四月 一四八八九 一〇七〇九
五月 一〇三六五 二七八五
六月 五六四〇 二〇二二

明治廿九年上半季小使勘定表

総収入 総支出

三' 日本現在の株式会社中、銀行と鉄道とを別とすれば、商業会社七百三十一社にして、資本額八三四八万余円、工業会社七百十六社にして、資本額一一九九万余円、農業会社七十七社にして資本額百八十八万余円、総計千五百二十四社、二億五百卅一万円にして一社平均十三万円に当る。

四月 七〇三 七〇一五 四五五
臨四二二九五 貯四六二〇
五月 四三〇 六二五 五〇〇
臨一一三〇
六月 四四〇 四七五 三六七 七四〇

一、西浦君 余を評して曰く、「君は友に接するや、謙遜丁寧なりと謂ふべからず。然れども、未だ嘗て其交情の渝らざるは真に賞す可きなり。之を彼の時に従て、冷熱の情を變ずる者に比すれば、優る事何等ぞ。」と。更に欠点を指して曰く、「君は自惚強し、君に於ては「ごうごうし」と。余対へて曰く、「君の如き君子風の人より見ば、余或は然らん。」と。(此亦自惚か)
二、加藤君 余を評して曰く「欠点は別になし。又長処は大欠点のなき事なり。」と。又曰く、「秩序的に事を理するは、君の一長処ならん。」と。
三、高橋君は曰く、貞城の万事に偏せざるは、他人の企及せざる処なりと。

四、高橋君 余の欠点を挙げて曰く、「詐欺の術に通ぜず。欺くなかれ、欺かるるなかれ。」と。

五、棒君 余の得点を挙げて曰く、「思考力、独立的勢力。」又欠点を挙げて、「余の真面目なる事。一時間合せの政略を知らざる事。馬鹿を装ふ能はざる事。考察力の欠乏。」此中欠点の方は特に交際上に重きを置くものなり。

六、加藤君 「余は積極的の交際法は知らず。消極的交際法としては、談話の際、人の非をいはず、己の美を挙げざるにあると思ふ。」

七、余謂らく交際は須く自動的なるべし。(先んずれば、人を制す。)

八、河野君 余を評して曰く、「彼真面目なるべき所に滑稽に流し、滑稽洒落なる可き所に四角張る。是彼が交際法の短なる所以。」

九、密々の明は交際の方にあらず。福翁百話

十、元良先生、訓へて曰く、学校にある中にて、初年生の中は、勉学を重とし、交際などは、十人並にて可なり。卒業間際に至らば社会と関係を作る為、交際も稍広くす可し。(是特に商業学校在学者に付きていふなり。)

一一、物忘れ、遺漏、不注意、等は新知己の人の間

にて己の信用を著しく減ずるの動機となるべし。(余の考)

新知己の人には、特に謙遜なるべし。滑稽等はいはざる方よろし(余の考)

十二、余り平和主義を取る時は、隠遁家と見らる可し。又時として無骨漢と思はる可し。而して其結果は吾人の威厳を損す。(余の考)

十三、一言一笑も重きを欠く可らず。タヘヒなき問答は吾人の威厳を損す。威厳を損する時は、交際上常に軽んぜらる。(余の考)

十四、余が商業学校に入りて以来、最力を尽して研究したる倫理問題は交際法なり。得たる結果に曰く、交際は飽くまで、先方を呑んで掛る可し。然れども、外見に於ては謙遜なるを宜しとす。

十五、余は福沢先生に倣はん。そは先生の言行、円満自在、不羈独立、直往突進、進歩的、平民的、実利的、現世的なるを感服したればなり。

十六、此頃高橋鑄四郎君、余を評して曰く「大分話が上手になつた」と。蓋し對話の方法稍改良せる所あるをいふなり。

十七、余は始、国家主義を好み、中頃世界主義を喜びしが、今日になり考ふれば、世界主義を以て今日の社会に処するは稍迂闊なるが如し。故に実践の上よりいへば、国家主義を取りて世界の競争を盛んにするの精神に出ざる可らず。唯国の利益を計る為には、正義も、真理も、天下の公道も破るが如き極端なる説には、決して賛成せざる者なり。

十八、高橋鑄四郎君曰く、主義とは其範囲内に於て自由に運動する事を得る者にて、決して之が為に窮屈を感じ、行為の円滑を欠くが如き者に非ず。

河野広一君曰く、主義無くして行ふ者は、平生はよしと雖、一旦有事の日には、迷ふ事多し。主義なる哉。

一九、余が今日の目的は、学校を卒業して何れかの会社、又は銀行に入り、精々勉強して、上役の氣にも入り、会社の役にも立つ様になり、従て、社会の信用も増し、資産も増加せば、自らも、主となりて、実業を起し、身を立つると共に、国家の公益にも幾万分之一の補をなし、余暇には、市町又は学校病院等の公共事業を助け、子弟後進の世話をもなし、進みては商業會議

所実業団体の主動者となり、或は代議士となりて、国家の為に尽力し又一方に於ては、才色並優れて、特に徳操に富みたる妻を迎へ、自ら親類一族の世話焼となり、清明円満なる家庭を造り、社会の賞讃と、妻子の優しき言葉を、聞きつゝ、温き夜具の中に死せん事なり。

若希望通り、社会が許さずんば、銃劔を取りて起ち、蒼海万里の地に死するか、三寸の舌によりて天下に呼号し、凶人のピストルにたをるか將に商業学生として空しく地獄に旅行するか、其処は未だ容易に考ふ可らず。

但し何れの場合に死しても、顧みて一点の疚処なきを期す。(以上赤インキの処十二月十六日)

二十、皇族方の新聞 余は新聞雑誌等にて度々奇怪なる思ひをなす事あり。即何親王殿下は某軍艦に乗り組まれ、他の士官と共に職務に勉勵せられ、自ら水夫を指揮し玉ふ、又は何王殿下は、竹園の貴き御身を厭はせられず、斯々の苦を閲して戦中に働き玉へり。曰く、いと畏こき事ならずや。曰く、帝國臣民たる者、誰か感泣せざらんやと。されど余愚にして少しも畏こ

き事に存じ奉らず。又其当然の職務に服せらるるを聞きて感泣するの情些も起らず。余の考ふる所にては斯の如き事少しも賞讃するに及ばず。皇族方が他の士官よりも一層抜群の功勲あらば、賞讃するもよけれど、海陸軍人が軍律に従ひ軍務に従ふは別にえらくなき事と余は断言し得る者なり。

ガリレオ曰く、否々大地実に動くなりとか々。

二一、賢者は追想によりて、利を獲し、愚人は之によりて徒に頭腦を困む。(高橋仙舟兄)

二二、おもしろやあなおもしろの月に雲(卅年一月九日自吟)

二三、頃日余、一の風流なる号を作らんとして考へ「青波」及「青月」を得たり。前者は、初夏稲草涼風に戦ぐの景、後者は読んで字の如し。共に上田に困む者なり。

二四、酒席に列して盃を辞するは礼ならざらん。多く飲みて言行を粗するに亦、人に接するの法に非ざらん。且全く飲まざれば、美絶の米水を味ふ能はず。飲みて過ぐる時は、得たる所の愉快を、後の不愉快にて相殺せられん。是に於てか曰く、酒飲む可し、決して

之に酔ふ勿れと。余は今後此が実行を期す。

二五、吾を誤らん者は酒か。蓋飲酒已に不可なるに、然るに吾之をなせば、時々女子に戯るゝの媒となす事あり。酒色亡国の説今にして始めて真に観る。(卅年一月十日)

二七、金を使ふには、綺麗に使ふ可し。是精神に愉快を与ふると同時に、實際上己の品を高め、人を服するの利あり。即文明紳士たる者の資格の一と知る可し。斯る所に極端なる実利主義を応用する者こそ、虚利を事とする事ならぬ。願はくは、吾、心よりシミタレ根性を遂ひ出さしめよ。愉快、清爽、高尚よ、人品よ、文明紳士よ。

二八、完全なる大人は真善美の三者を兼ね。余は今迄、性質として真を備へ、又力めて善を得んとし、其目的を殆んど達したり。是にて完全なる者と思ひ居たり。豈に図らんや更に美なる者ありて、余の征伐、否笑ひて余が手を握らんとして待たんとは。美哉嗚呼美なる哉。余は、曾て桜花爛漫たる樹下に立ちて、空行く明月を仰ぎし時、如何に天然の美を感じしよ。又花の如き美人粧を凝し、有らゆる艶麗を尽したる衣帯を

纏ひ、溢れんばかりの愛嬌を以て、吾を見し時、余は如何に婦人の美に打たれしよ。然も当時余は解釈を下して曰く、美を感じる時は、平生の積鬱を散ずるに足る故に実利なり。是即余が美なる感情を脳外に驅除せざりし唯一の纒なりき。今にして之を思へば亦殺風景の極ならずや。吾人は美を感じず。美は美なるが故に美なり。美は善悪以外に立ちて吾人の品性を高尚にする者なり。高尚必善と戻らず。然れども、美は実利を与ふるが故に貴からず。唯美は美なるが故に貴きのみ。是に至りて余が理想は、我をして真善美の化身たらしむるにあり。

一、雲溪氏曰く、書は二年間意を用ひば、手筒の美なる事を得んと。

間宮氏曰く、劍は一年間意を用ひば、趣味を解するに至らんと。

〔明治廿九年〕

明治廿九年は余の履歴上記憶す可き年なり。余が最愛の母を失ひしは此年の三月廿一日なりき。余が正則中学を卒業したるも此年の四月なりき。余が高等商業学校に入りしも亦此年の九月なりき。余が兄の結婚し

たるも亦、此年の十二月廿四日なりき。

明治廿九年中余の所謂は精神上に於ては、世人と實際の門を稍広めたるが為に得たる円滑なる道徳(頑固ならざるの義)、毎日通学の為里許の路を歩行するにより得たる健康なる胃腸、是なり。

明治廿九年中余の所得にして次に記憶す可きは、恋なる者に襲はれたる事(三、四月)。頑固なる道徳を崇拜するの頂上に達したる事、為に随分つまらぬ喧嘩(写真一件)をなせし事(春)。郊外各所に散策を試みたる事(五六月)。鎌倉に旅行したる事(八月)。水練の稽古したる事、交際法の研究(入学後)。日光行(十月)。山田君に忠告状を送りたる事(十一月)。極めて呑気なる学期試験(十二月)。好成績。

(脳中の歴史)

○かねてより、つねならぬよと、しりながら、おしきは人の分かれなりけり。(日記五月分)

○うみや、やまや、みちはちぎとを

へたつとも、こころは同じつきをみるらん。

(写真に題す)

○世の中に勉強して出来ぬ事なし。出来ぬといひて

心配する人は、未だ真に勉強せざる人なり。天下何事か達す可き手段なからん当人は唯是を発見して実行すればよきなり。

○定木は千変万化の世態を理する能はず。

○交際は飽くまで先方を呑んで掛る可し、且外見は謙遜なるを宜しとす。

一、渋沢商業会議所会頭が本年東京に開れたる全国商業会議所連合臨時大会の宴席上に於て松隈兩伯及実業家諸氏の面前に演説したる大意。

渋沢氏は先本会の營業税法研究を目的として開かれたるを言明して後、修正案に付、論じて曰く、蓋し吾々商工業者が右様の修正意見を取調べますのは、或は唯減税免租と言ふ丈の主意であると見誤らるゝのは、不本意千万であります。不肖なりと雖、吾商工業者は、文明の民たらんと思ふのであります。どうぞ、国家の歳費は例へば三十年の総額が二億五千万円であるならば、三億万円にも致したいといふ望でありますから、其財源を求むるに於ては、あらん限の力を尽して、其必要に応ずる覚悟であります。

目なき恋 昨日まで、水の如く清かりし心、恋知り
初めてより濁り曇りて胸の苦しき言ふに言はれず。
——霞亭主人著小説やどり木。

明治三十年 (二八九七年)

処世余録 第七冊(統)

一月

元旦 御屋敷中、御廟家、旧侯御殿、元良、神田兩
先生、稲川春氏、岩佐、山本兩醫師の諸家に年頭とし
て廻礼。高橋仙舟兄を訪ふ。不在。去りて山田謙治氏
を訪ひ暫時談話。其より野田一氏を訪ふ。岡本玉置、
中田、野田教一諸氏と酒盃を交して高吟放論し、次に
確井家を訪ふ。松尾伯父も確井氏も不在。

内田に來り、伯父と談話し、又諸兄と加留多杯為し、
時既に遅し。因りて同家に一泊したり。

二日 正午前内田より歸り、確井莊生氏來訪に付接

待。年始状の発着左の如し。

○一日午前発し分

野田一、岡本創、山田謙治、堀口米太郎、滝村斐男
長与又郎、高山直純、松山信二郎、沢野達三、本野亨。

○午後発し分

中村精一、大谷敏一、鈴木修二、尾崎敏。

○來賀諸君姓名

加地吉彦、大谷敏一、西浦美次、椿亮、河野広一、
伊藤末彦。

○賀状を送られし諸君姓名

尾崎敏、鈴木脩次、高橋鑰四郎、大谷敏一、高山直
純、松山信二郎、山田謙治、中村精一、堀口米太郎
滝村斐男、沢野達三。

○年始として回礼したる諸家

河野広一、椿亮、加藤成一、大谷敏一。
四日 鶴沢氏宅にて歌留多
五日 芝浦海水館にて正則出身者新年宴会に出席。
六日 本山氏宅にて旧正則五ノ二組諸君新年会に出席。笠井氏宅にてカルタ。

七日 来訪者、堀口、伊藤両君及河野、高橋、上村三君。(註、山内にて上記の三君及椿君と散歩す)。
八日 午前学校に出で校長の演説を聞く。午後本山兄を訪ひ暫くして三浦君来る。三人相伴ひて更科に蕎麦を食ふ。大谷君を訪ひしが不在なりき。

九日 午前学校に出でしが、始業日のこととて別に授業もなく退散後、高橋仙舟兄を訪ひ談話して夕刻に及ぶ。晚餐を饗せられて帰る。
此日朝来、雨降り北風指をして戦かしむ。
午前十一時頃に至りて雪となり、日暮には屋上一面の白氈を見たり。丸ノ内二重橋前の芝地、一面の銀世界となり小松所々に斑々たり。

小松原雪の夕にたどりくれば
空にはさむく雁なきわたる
帰宅後鶴沢氏宅に行き、カルタをなす。

はず慚愧々々。不節酒色。

十七日 日 入浴。天然痘流行に付、種痘をなす(井関氏にて)。堀口氏来訪(以上午前)。

堀口氏と共に盤山兄を訪ふ。談笑五時間。
夜早く寝ぬれば朝も亦早く起き得る理なれば、以後は夜九時就床と定む。

皇太后陛下の崩御の報、発布せられしは今月十二日なりしが、其日以来、天曇り、雪降らんとしては止み、又暫くして降ること数回、其情天も又地上の凶事を哀むが如し。

天もまたふりみふらずみ今朝の雪 青波
十八日 月 終日雨降る。学校退散後野田一氏を訪ふ。席に田淵氏あり、談話して帰る。

夜、菊枝叔母外出す。(和歌山行と称す)
十九日 火 北風寒く肌を徹し朝みぞれ降ること頻なり。昼休時間に岡本氏と相携へて神田街を散歩す。
夜「大日本」を読む。

二十日 水 学校へ行道、御屋敷乗廻馬車を利用す。和服にて出校。午後洋服塵払ふ。
夜、河野東奥兄来訪。大いに楽天主義の為に気焰を

会する者二十人許。

十日 昨夜就寝夜半一時、今朝起床正十一時。一日(実は半日)の為す所、理髪と入浴のみ。夜、鶴沢君来訪。
十一日 学校行、岡本君と共に玉置弥造氏の下宿に行。

十二日 火 皇太后陛下崩御に付学校は取敢ず、今明両日休業。伯父松尾氏と共に森島家に行く。
初めて森島脩太郎夫人及正造氏及向笠氏に会す。夜、諸氏と共に尻取発句をなし、夜半一時に及ぶ。朝、西浦美次君来訪す。

十三日 水 商業学校にての友人小泉新兵衛氏、正造氏の許に来訪。三人にて音羽の護国寺に散歩す。此夜、森島氏を辞す。

十四日 木 夜来雪降る。積ること五寸。鶴沢清、笠井両氏及家兄と同道して羽根沢御別荘に雪見の宴を開く。席上寄書をなす。浴。

夜、自宅にて鶴沢両氏と発句をなす。小説を読む。
十五日 金 鶴沢氏を訪ふ。堀口氏来訪(不在)。小説を読む。

十六日 土 三村氏義兄来訪。酒色の欲を制する能

吐く。後、明月に乗じて芝山内を散歩す。

皇太后陛下崩御に付、学生も黒布を以て、洋服、和服、及帽子につけ、哀甲の意を表す。

近作〇おもしろやあなおもしろや月に雲
〇意気でまるめて呑気でこねて
義理と情を心にした 波

二十一日 木 夜、筆記物写損をなす。浴。三村義兄へ手紙(確井に頼まれたる試験のことに付き)。
二十二日 金 屋後放課時間に一寸高橋兄を訪ふ。帰途九段より濠に沿つて景色を楽しむ。

夜、草野武雄氏より照会の件に付、桶町へ行く。
二十三日 土 学校にて西磯次氏の新年状に接し返事をだす。午後河野兄と共に石塚網太郎氏を訪ひ、文学を談す。夜、高橋兄来訪倫理を談す。

二十四日 日 天晴れ日漸く暖ならんとして梅蕾統ばんとす。是日、親友東奥兄と共に高橋兄を訪ひ、相談すること暫くして本山南香兄来り会す。

後相携へて山田氏を訪ふ(是時余は寸暇を得て小泉氏を訪へり)。山田氏と余等四人と相与に立て更に上野公園に散歩す。動物園を見て後、不忍池畔を散歩し万

世橋より鉄道馬車に乗じて帰途に就く。

是日山田氏宅にて昼飯一件に余等四人、其本性を表すの奇談あり。夜松尾伯父と共に、岡田昌作氏の家を訪ふ。座に向つて某氏あり、妻君あり。円座して尻取発句をなし夜半に至る。余に是夜名句あり。曰く

友うつり白き扇に富士の雪

今朝西村氏来訪但不在中。

二十五日 月 入浴、学習、今日より起居を正しくせんと決心す。

二十六日 火 午後、室、洋服、ランプ等掃除整理。夜理髪。風月堂発売、仏国名菓サブレ・ド・ファミレを味ふ。甘美いふ可らず。

二十七日 水 夜堀口氏を訪ひ修養を論ず。入浴。

阿嫂と優美を談ず。

二十八日 木 学校行途、御屋敷乗廻し馬車を利用す。

夜、本山君来訪、雑談す。

二十九日 金 河野、高橋両兄より書信。夜、山内、三田を散歩。新小説読む。神田錦町工藤にて半身撮影。和歌山県新宮町火災に付、学生会員義捐す。

金を使ふには綺麗に使ふ可し。是は精神に清爽なる愉快を与ふると同時に、交際上己の品を高め、気を悪くせざるの利あり。即ち、文明紳士たるものの資格の一と知る可し。斯かる処に極端なる実利主義を応用する者こそ、虚利を事とする者ならぬ。願はくば我心よりしみたれ根性を逐出さん。愉快よ、清爽よ、高尚よ、人品よ、是文明の好紳士！

三十日 嘯月兄及内田子供兩人と与に鴻の台に遠足。是の夜、桶町に宿す。朝、大竹謙治氏来訪。但し、不在。

三十一日 午前内田にて、松尾伯父と政治の大勢、和歌山の近世人物に就き評論。

午後同氏と銀座金沢にて寄席見物。夕刻帰宅。千田保太郎氏来訪に付接待。鶴沢氏宅に行き桜桃会の発句を考ふ。対談十一時に及ぶ。鶴沢君宅へ行くは屋間に限る。

二月一日 昨夜就寝遅刻の為、今朝朝寝し学校遅刻す。夜簿記。添田寿一氏「日本貿易の不振」と題する論説を読む。

二日 火 英照皇太后陛下御発箱に付、午前九時半

学校へ出で教授、学生一同と互に青山練兵場に赴き靈柩を奉送す。午後、伊藤末彦氏を訪ひ談話す。夜、井出東作氏を訪ふ。

三日 学校へ出でて見れば一同申合せ「ストライキ」に付直に山田君改大竹謙治氏を訪ひ、正午過、辭し帰る。時に四谷三村の御老母御出に付接待す。是日御土産を頂く。

午後三時より堀口兄を訪ひ、伊藤氏と共に三人珠算復習をなす。以後一週一日、水曜日に集りて復習する積りなり。夜入浴。その後、雑談の為に学校下読を怠る。此頃一体に怠癖付きたり。

四日 木 時計遅れ居りし為学校遅刻す。金原東造氏に商業学校改正規則を送る。夜買物旁散歩す。

五日 金 今日下女来る。夜堀口米太郎兄を訪ひ朋友の人物、実践的修養問題を論ず。堀口兄が近来盛に人物を高め来り、道徳、処世等の事物に付、思慮を費すに至りしことは余（高橋、河野の両兄も）認める所なりしが、此夜の話により一層其思考法の組織的、秩序的なること余と酷似せるを発見し、復頼母敷一益友

を得たるを喜び。

六日 土 午後同級生武田信一氏来訪。文学美術を談ず（文学者の背徳）。夜河野兄を訪ひ、人物の真善美を論ず。又余が政治家となり度なりしことに付、空論して十二時に至る。

七日 日 「紀文大尺」を読み人物を心服せしむる手段に付、大に感ずる所あり。

学校の日本作文「重要輸出品航路拡張に就ての意見」の大略を案出す。

夜堀口氏を訪ひ妹尾克巳君と囲碁。共に出でて河野兄を訪ふ。入浴す。読書。

八日 月 昨夜半就床為に今朝遅く起床す。午後鶴沢氏を訪ひ、妹尾克巳君と囲碁。夜、伊藤末彦氏を訪ひ同伴して堀口米太郎兄を誘ひ共に芝丸山に散歩す。

九日 火 夜学友森下勇馬氏と山内、三田を散歩す。入浴。

十日 午後支那語エスケープして高橋兄を訪ふ。与に発足して帰る。自宅にて伊藤、堀口両氏と与に珠算。河野兄を訪ひ、已に座にありし高兄と三人相語る。野兄病床にありたり。快男児沢元恭氏の伝を讀て夜半一

時に至る。

釈元恭氏は名古屋の産、一商賈の子なり。出でて仏法を学び海内を行脚す。偶々清八、呂嘉祥に遇ひ、携へられて同国に赴き、後又、欧米に漫遊留学して宗教法律を学び、印度に渡りて仏法、サンスクリット、医学を修め、加へて剣柔両道に達し哥老会の高級参謀となりて満清政府の一敵国をなす。一代の歴史快至り、爽尽す。蓋し稀有の快丈夫なり。

其伝中、特に余が感服したるは、体質の薄弱なるを恨み、其に打勝たんと勉め武術を練習し、其武術に達して屢危難を免れたることなり。此一条を読みたる時、我背冷汗流ること滝の如し。慚愧々々。然りと雖、我は唯に慚愧にして止まじ。

十一日 木 紀元節 正午起床、用向にて一寸岡田昌作氏宅に行く。家兄と共に桶町に行き、松尾伯父に会せり。又伯父は事業の為、十三日発台湾へ行く為、刀剣を要するに付、右研磨のことを日蔭町刀剣商に托す。余は伯父上に贈るに釈元恭伝を以てす。麻布相馬別邸内における撰修会大会に出席す。如何なる名義の下にも怠惰は美に非ず。

○友人を訪ふは土曜午後及日曜に限る。
○平生家人と長時間の談話を為す勿れ。
○休日の前日も平日の如く勉強す可し。
十二日 浴。英文課題、紀伊国屋文左衛門伝を書始む。

十三日 土 三村義兄へハガキを出し、其返事を受取る(明日訪問の件)。午後予科同級会に出席す。会場は呉服橋柳屋楼にて会する者百数十名、余興には琵琶、劍舞、尺八、謡あり。寿司、菓子の中食あり四時半散会す。夜英作文。

十四日 日 午前英作文、紀伊国屋文左衛門を書き了る。午後加藤成一兄来訪。三時より三村義兄を訪ひ社会と學術の關係方便論を論じ、高談神に入り時の移るを知らず。十時に至り帰宅を促されて始めて帰る。其間晚餐を共にし、愉快を極む。

此日遺忘せることあり慚愧(慎重則違反)
○彼中々の人物氣節あり。勉強家にして理想高し蓋余の友たるに足らん。

十五日 月 夜、兄上結婚披露の為、御家中上等官方を招待したるに付接待す。衆去る後、笠井氏独り残

りて奇語人題を解けり。

十六日 火 理髮、浴、雜誌買、簿記書直し。小説を読む。写真出来。

十七日 水 夜、伊藤氏宅にて珠算、小説読む。

十八日 木 浴。金原氏来訪。

十九日 金 学校帰途、六花粉々降来桜田門外、現来雪江双鴨の妙画図。簿記、支那語、小説。

○為さずに居れば六ヶ敷様で、為て見れば訳のないのは勉強。

二十日 土 午後武田信一氏と同道にて同氏宅を訪ひ、談論数刻、晚餐を喫す。其より高橋繪四郎兄を訪ひ、談論数刻十時に至りて辭し帰る。

帰途雪融の水凝りて路上屋よりも歩行し易し。二重橋前、小松原を過ぎる時、皎月中天に懸りて光は表を照す。

月の落す影は墨絵の雪の松

寒し／＼とはいふものの雪の月

月皎々雪豊々たり千代田城

二十一日 午前入浴。赴三田惟一館、聴日曜宗教演説、佐治突然氏掲来演題紫朱。論真智者。北島亘氏説惟

一教之主義、氣焰万丈、拍案唱破、排迷信的邪教無氣節。

午後英訳。訪野田一氏、与同氏及玉置弥造氏相携到金清楼、出席於在帝国大学、商業学校及高等学校連合新年宴会兼県下撰出代議士招待会、席上有太田代議士之挨拶。

盃飛耳熱頃、一団又一団、或吟或論、尽愉快、九時散会、是日余始見戸村定楠氏(法学士)平野康太郎氏(大学生)丸山秀三氏(高等学校生)及土岐嘉平氏。(本の滝本氏、本一の根岸氏の真面目なる議論を聴く)二十二日 夜、長井氏を訪ひ同氏及鶴沢氏と共に花かるたを弄す。簿記。

二十三日 火 午後、学校図書館にてサミュエル・スマイルス氏の伝を読む。夜家兄と三田に散歩す。

二十四日 水 浴。夜堀口宅にて珠算、同氏と三田に散歩。

二十五日 木 午後学校にてテニスをなし日暮に至る。

二十六日 金 午後テニス。夜家兄と寄席へ行く(落語)。

二十七日 土 午後少時テニス。後藤春一氏来訪。

高橋仙舟兄来訪。

二十八日 日 三村義兄来訪。河野兄を訪ふ。英語。太陽を読む。浴。

三月一日 月 夜簿記、数学。

二日 火 少し風邪の気味あり。

三日 水 伊藤、堀口両氏と珠算、簿記、英作文。

四日 木 理髪、浴、簿記、化学。

五日 金 気分悪しく天気亦不快なりしにより、早くより床に就く。

六日 土 学校終了後大竹君を訪ひ、談話し又御茶水橋畔なる教育博物館を観る。館は旧聖堂にあり、聖堂は即、徳川幕府の設立に係る孔子の像を安置する所なり。門戸堂宇皆宏壮にして而も華麗に流れず。青銅の屋根瓦、黒漆の柱壁端然として軋た吾人の情意を厳正ならしむる者あり。出品物に至りては余、其意不整頓且不充分にして復我眼に新なる者を見ず。唯阿米利加の都市にて用ふる所のタイプライター及台湾書房(小学校)用教科書は確に新知識を与へたる者なりとす。

大竹氏と共に晚餐を喫して帰る。途に高橋仙舟兄を訪ひしも不在なりき。

夜、倫理問題に付研究せる所あり。余はスペンサー、ミル諸氏の説ける功利主義は決して卑む可き殺風景の者に非ざるを信ず。之を卑むは畢竟思想家が狭隘なる見識の為に功利主義の高妙広遠なるを認むる能はざるが故なりと断言するを得。

七日 日 旧藩主徳川侯祖先南竜公祭典に付、御殿へ参上、來客に接す。同公年々の祭典は恰も旧藩士諸氏の親睦を温むるの好機を与ふる者なり。

余亦是日数多く知人に接するを得。殊に宮内官吏恩地徹氏、及ユニテリアン教会会計原権四郎氏は第一見の面なり。恩地氏は我追敬の情に絶えざる亡阿父の親友にして、漢学に達し、元判事たり。今や内大臣秘書官兼待從職として我皇家の事に参す。広額隆鼻、頭髮鬚髯半白にし、温顔笑ふが如し。今日、余進みて酌を呈するや静かに邸内梅園の花信を問ひ、又上田さん(家兄を指す)の在否を尋ぬ。其語慇懃苟くも後進を蔑下するの風なし。

余謹みて自ら上田の弟なるを対ふるや氏又、謙遜語

を卑ふして語て曰く、私は汝の父様の知遇を受けた者です。新年には阿母様に会ふと思つてお訪ねしましたが、昨年御隠れに成つたさふで大きに不平でありました。と言ひ了りて莞爾として笑ふ。次に余が年令、学校等を問ひ余が将来を祝す。其語其容徐々に余輩をして欣慕せしむる者あり。又氏は夕刻よりは大抵在宅なればとて余が来遊を促す。其語に曰く、御父様のことに付て沢山話さにやならん云々。

夕刻川瀬善太郎氏来訪に付、接見す。氏は即ち、家兄結婚の媒酌者なり。

日本晴れ今朝鶯の初音かな

八日 月 曇雨、夜堀口兄を訪ふ。浴。

九日 火 雨 簿、支、物、珠の勉強四時間半。

十日 水 晴強風 珠算、於伊藤氏宅。着手簿記帳。

勉強三時間半。

十二日 金 晴 放課後高橋仙舟兄を訪ひ、兄と磐山兄と談話す。夜に入り磐山兄は帰家し余は仙舟兄と共に錦輝館にて米國エジソン博士新発明の活動大写真なるものを観る。写真は電気作用を応用して数多の写真をして連続して幻燈の前を通過せしむるにより、恰

も絵の活動するが如く観ゆる者なり。散会後、兄と与に琴平町迄同伴し、或重大なる實際問題を謀議したり(余斯の如く深く余を信ずる友人あることを実に幸福に思ひたり)。其為帰宅は十一時半。

十三日 土 晴 浴。堀口氏を訪ふ。夜加藤成一兄来訪。

高等学校の学風、誌友の現況に付談す。

夜、国民の友を読む為一時半に至る。(特に連山人の小説すみれ日記は少からざる感動を与へたり)

十四日 日 晴天 風無くして桜花正に盛開。十一

時起床。鶴沢氏来訪。午後石塚網太郎氏来訪。正則校の現況を談す。氏は今同校五年級の首席を占め、文学を好む。夜、英作文を作り、簿記野を引く。十二時半就床。

十六日 火 鶴沢氏を訪ふ。

十七日 水 自宅にて珠算。

十八日 木 浴。理髪。

十九日 金 長井勇氏を訪ふ。松尾謹一郎氏来り宿す。

二十日 土 追慕する母の命日に付、親戚打寄りて

酒宴を開く。松尾謹一郎氏会す。

二十一日 日 母上記念の饅頭を親戚故旧に配分す。野田一氏を訪ふ(音楽)。

二十二日 月 堀口氏と互に寄席に行く(落語、講談、俗謡、踊等)。

二十四日 水 化学及英語訳解試験。

二十五日 木 数学、英語作文、書取、及第二外国語試験。

二十六日 金 物理。

二十七日 土 簿記、試験。珠算練習。金子氏を訪ふ。

伊藤氏と寄席に行く(浪花節)。入浴。

二十八日 月 珠算、及習字試験。十時半より四時迄テニス。内田伯父より和歌山田代義雄(伯父兄)氏死去の旨を申来る。余は田代氏の死去に付、親戚(たとへ血統上に非ずとも)に對し同情を表するの義務ありと信じ、今日より三日間煙草、酒を禁じ寄席、芝居に行ず。総て派手なる娛樂をなさず。

三十日 金子精氏を訪ふ。正則尋常中学校卒業式に臨席す。是日、神田校長、中島教授及藤沢教授の演説あり。

六日 火 長井勇兄を訪ふ(花)。渋谷徳太郎氏に会す。西浦兄来訪。内田総君を入学志願の為、正則校に伴ふ。

七日 水 晴 正則校競漕会に出席。加藤兄来訪。

八日 木 晴 午後堀口兄と山内に散歩す。内田伯母上より依頼され預り置きたる金円を貯蔵銀行に預け入れる。小説「萩桔梗」を読む(感有)。

理髪。入浴。

九日 金 雨 遅起。午後雜書(詩歌)を読む。家人と「トランプ」を遊ぶ。夜、加藤兄と共に河野兄を訪ひ、談論諸議時の移るを知らず。

十日 土 晴 午後訪四谷三村義兄、食牛肉酌麦酒、快談、是夜宿於兄家。

十一日 日 晴 随兄赴於上野公園。時正温暖、桜花半開、幾千人男女来遊、酔花雅客、酔酒俗人。白髮老翁、紅裙少女、学生、軍人、紳士、雜然相往来、余等亦徘徊、至於油画展覽會。入覽、仏国風新派名画相並。就中黄海々戦大図最壯、富士晚照図最妙。余別袖与兄於神田街、訪仙舟兄。

十二日 月 快晴無風 登校して時間割及第二学期

あり。又本年より生徒の品行方正学業優等なる者に賞牌賞状を与ふるの挙あり。夜、本山佗吉氏を訪ふ。

三十一日 水 午前入浴、訪堀口氏借仏語書、購西洋骨牌、午後訪鶴沢氏、迎正二位侯於新橋停車場、賜酒肴、夜訪加藤氏及長与氏大吹法螺且笑。

自ら接する事清潔なるべし。

人に向ひて之を責むるは不可。

◎浅みどり米よりかけてしら露を

玉にも抜ける春の柳か

古今集

四月一日 木 昨今齒痛、午前中睡眠、午後読シヤパン・タイムス新紙。散歩於芝公園。

夜、椿亮氏来訪。談亘正則校生一部対攻玉杜生一部事件。是日消費時間。

二日 金 曇 椿兄を訪ふ。小説「小猫」を読む。

三日 土 雨 河野兄を訪ふ。「小猫」を読む。

四日 日 晴 春季競漕会、終日水上に在りてボートを操り、責任競漕者に応援す。

夜、浅草松田楼にて同級会に出席す。

五日 月 テニス。内田家を訪ふ。「小猫」を読む。

評点数を見る(一般に好成绩なりしも応用化学にて落第点を取りたり)。テニス。午後高橋仙舟兄を訪ふ。河野磐山兄と共に皇城内、芝山内を散歩し遂に加藤成一兄を訪ふ(微熱にして臥床)。

夜、入浴。

十三日 火 快晴 暖風桜花の唇を解かしむる者幾

個。午後向島にてボート練習。夜勉強。

十四日 水 晴 浴。夜勉強三時間。

十五日 木 雨 於玉置弥造氏下宿直命車。揚々婦

来。転驚其価高。夜勉強三時間半。

十六日 金 快晴 帰宅後邸内にて運動、夜河野兄と共に芝公園に散歩す。桜化爛漫として雲霞錦爛の古臭き譬を眼前に顯し明月皎々として団々たる明鏡を香雪の間に懸く。山上高橋大塚両兄に遭ひ、又共に歩す。是夜市人亦風流の心(?)に誘はれしか三々五々相携て花月千金の一宵に酔ふ。余も親友と愉快なる散歩に紛れて十時(睡眠時間)に到りて帰家を忘る。嗚呼誰か今夜、余が露に消ゆる雁か音の一曲を語ひつつ花雪の下に逍遙たる時の情を解する者ぞ。天上の月暫時桜樹梢上に憩ひつつ我を俯し見て一笑するに似たり。

十七日 土 午後テニス、後訪野田氏、喫飯於同氏宿、至晩前、与氏及津村秀松氏（本二）相携趣飯田町仁泉亭。蓋為出席於在商業學校和歌山人会小会矣。是夜現在生来会者九、卒業生二、团座呼酒、談旧語新、或議論入於当世商界時事、或吟詩謠俗歌、更漸深而不與興、余以家遠故、九時半辞去。

○人物觀察。鈴木氏富才人、滝本氏親大局人、津村氏其中、中村氏富元氣人、山田氏着実人、野田氏自信人。

十八日 日 雨後曇、午前読小説芙蓉峯、赴芝三田惟一館、然演者病、無講演、乃入応接室、与書記原権四郎氏談話。午後入浴、散於芝公園、遭与伊藤、堀口、中村、鈴木諸氏、夜与家人雜談及深更。

十九日 月 曇少雨 夜勉強三時間。

二十日 火 晴 午後入浴、散歩於芝公園及愛宕山与鶴沢、長井、加納三氏及家兄。夜勉強一時間半。

二十一日 水 晴 午後テニス、夜勉強一時間半。

内田草野兩氏来訪に付接待。

二十二日 木 晴 風強、天候人をして怠惰ならしむ。朝寝の為遅刻。簿記甘く行かず。かんしやく屢々

起る（怒は敵）。

二十三日 金 快晴 入浴。簿記勉強（勘忍は無事長久の基）。散歩。

二十四日 土 快晴 本日より毎朝撃剣。午後ES S小会に出席す。席上前大学教授、博士ウッド氏の演説あり。テニス。夜、堀口、河野兩兄と三田及芝山内に散歩す。

二十五日 日 午前撃剣。惟一館演説（職業の品位、○佐治実然君）を傍聴す。

午後麴町富士見樓和歌山学生会春季大会に出席す。席上規則改正の議決。幹事一部の改選ありて後酒宴に移り八時頃散会す。

出席者、川口主計総監、村井少将、岡本日本橋病院長、岩橋謙次郎氏、利光技師、南方弥太郎氏、片山修輔氏等を始として七十有余名中には士官学校、成城校、高等師範学校生徒もあり、余は野田氏と共に同氏寓に赴き、藤田、三宅二氏と与に談話（宿屋の腐敗事情）す。是夜野田氏下宿に一泊す。

二十六日 月 快晴 夜勉強、入浴。

二十七日 火 曇 午後テニス。夜勉強。簿記試算表

を私製し不屈の精神を以て其符合を観る。（何だ当り前のことを……）。

二十八日 水 晴 夜、鶴沢、加藤兩氏と愛宕山に散歩す。午後玉置弥造氏を訪ふ。

二十九日 木 晴 入浴。読書（自助論）。

三十日 金 晴 朝風塵を飛ばす。簿記（此頃甚忙し）。

五月一日 土 晴 学校帰途河野広一兄に会し、相与に家に来りて快談す（処世余録を見せる）。

鶴沢兩氏と共に大磯に赴かんとして新橋停車場に行きしが、発車の都合悪かりし為、中止し、余はそこより内田家に来り、同家に此夜、宿す。

二日 日 曇 朝理髪。午前九時半より耕君と相携へて上野公園に赴き博物館を見る。最も余の注意をひきしは京都西陣濤川惣助氏製近江景画図を織出したる壁掛、其他陶器、七宝、及日本画等なりき、是日昼飯はパンを以て之に代へ、停車場中の水を茶となし、夕飯は天ぷらめしに空腹を満たしぬ。此夜も同家に宿しぬ。

右二日の宿泊によりて余生大に面白く感ぜられしは、無邪気なる少女の言。時として大人を抱腹せしむるに足る可し。

三日 雨 早朝飯を了りて婦家の途に就く。夜小説「リードル」を読む。

十数日以前の事なりき。余は面白き夢を見ぬ。学校同級生に一人の小賢しき男あり。常に人の目を盗みて己が良きまゝに行ひければ、余ひそかに爪はじきせしに、或日又他の男にて平生大胆剛直なる者、彼をいたく打ちすえけるに、前の男はいみじう叫びて狂ひまはりけれども、余も小気味よきことに思ひて、始めはただ見過しけり。

されど少時後、あまりあはれに、いじらしくおぼえければ行きて乙友の腕を押し、甲友にとく逃げたまへと叫ぶ時、目覚めぬ。（これこれ聖人無夢）

四日 晴 学校にて作文成功せず。家にて簿記成功せず。夜半十二時半迄不快の半日半夜。入浴。

余は幸なるかな如何に己の天才に適せざることにも勉強する所の愚かなる性を有す。
○余は決して天才の豊富なる青年に非ず。余にして

全く勉強すること無んば、魯鈍なる隠遁家とならん。故に益々勉強、注意、及鍛錬に力を用ひざる可らず。而して此力は学ぶ可きことに因りては他人の数倍に達せしめざれば足らず。(善く記憶す可し。)

五日 晴 天候人をして事に倦み易からしむ。夜、堀口氏を訪ふ。天井に張紙して曰く Reall Buton 其下に「起て朝陽を観よ」と。

六日 晴 早朝五時起。新鮮なる朝の空気を呼吸しつゝ簿記を付く。

夜堀口氏と共に芝山内、日蔭町散歩す。

気候不順連日熱気夏の如し。通学行路不自由不韙、心身共弛。

七日 金 雨 学校より直ちに内田に赴き同家に一泊 (在台湾松尾伯父の許へ除虫菊種子配送の件用談を兼ね)。入浴。

八日 土 晴 簿記精算表を製す。内田伯父来訪に付接待。

九日 日 雨 午前八時十五分發、新橋より汽車にて横須賀に赴く (内田伯父夫婦、家兄夫婦、耕君、及せつ子に随行)。途中野に菜花表青の美艶を眺め、山に

晚春新緑の好景を望む。

同地に着。直に休憩所三富屋に入る (酌酒食玉子)。雨を犯して吉倉に行き、船を命じて金沢に向はんとす。堀割を出づれば波荒ふして舟行頗困難なり。然りと雖、首を回して後方を望めば、十三峠の丘陵雨を帯びて緑滴り、舟越 (水雷団あり) より突出せる岬角は峻峰松を生じて藤花其枝より垂れ、脚下の磯波に映じて壮快と優美を一時に顯はす。暫くして眩暈を生ぜしかば、波を避けて日向の曲浦に入り一民家に休む。

須臾にして徒歩復雨中を進む。岡を越え、田を横ぎりて行くこと里又半余、金沢に達し、旅館千代本に入り憩む、之を暫くして発し同地豪農泥亀氏の牡丹園を觀る。園は野島にあり。突堤上を行くこと数丁風強く雨益々盛にして行歩頗る苦む。然も牡丹花は已に謝し去りて見るに足らざりき。

帰途朝比奈切通し方面の丘陵を望めば、雲低くして飛ぶこと箭の如く満山糶糊の内に没して湖の彼岸にあり。壮景狩野派の筆に非ずむは写す可らず。千代本に歸りて晚食、終に一泊す。

十日 月 晴 内田伯母及耕君は早朝車を命じて帰

京の途に赴く。起き出でて欄干に倚れば、朝陽州崎の民屋上に出で漣漪徐口に金光を送り来る。対岸の緑葉益々緑なり。朝飯後四人相携へて徒歩、鎌倉に向ふ。途に九覽亭に登り所謂金沢八景を一目の下に瞰む。金沢は唯海中の一洲にして朝比奈切通しを過ぎて鎌倉に入る。此間約二里、余は時々おせじを背負ひて行ずり。大落宮を拝して、八幡宮前、対鶴館角庄方に屋敷を終り、八幡宮に詣り、白旗山を仰ぎ、慕夫石を望みて長谷に出で、觀音を拜み、大仏を見る。此時少女は道傍に止り、勝なりしかば車を命じて鎌倉ステーションに至る。余は一人別れて由比ヶ浜を歩し、ステーションにて相会し土産物を求め、午後四時半發、汽笛一声長驅帰京す。学校を一日休課して旧朝府の故地に遊み亦不可乎。

十一日 火 高橋仙舟翁を訪ふ。

十二日 水 気分不宜候。

十三日 木 気分不宜候に付学校欠席仕候。

日記

(旭世余録七卷)

May 16th. Sunday. Rainy. Book-keeping in the morning. Audience of Mr. Saiji's address

at the Unitarian lecture hall. (How to reach the moral perfection.)

Short after the noon Mr. Katō called on me and we visited the "Senkwaen", which is a garden noted for every description of flower and now especially for the peony, but it was much more pleasant for me to hear the cheerful sound of raindrops ripping on leaves when reposing at the bench on the top of the hill in the garden. We then called on Mr. Kōno at whose house we boasted and bantered one another in our most eloquent oration. A letter from Mr. H. Okada.

22nd. Saturday. I went not to school because only of my disinclination to do so. English composition. I made a rule against the bad habit of being inaccurate and irregular which I have entered of late. A letter from Mr. Mashiko. Bath.

25th. Tuesday. Cloudy. Bath. I fairly practised the rule from yesterday.

26th. Wednesday. Clear. In competent attention (in common affair). I went to the

tailor Inaba for *Karimui*. I visited Mr. Okuhata Kenjiro on an errand.
 27th. Thursday. Fine. I sent an admission ticket of the H.C.S. English Speaking Society to Mr. Minura, my brother in law.
 29th. Saturday. Lawn tennis match. The annual exhibition of the English Speaking Society of H.C.S.
 June 2nd. Wednesday. Fair. Bath. I went to Iigura St. with a few of my friends to see the feast of Kumano Shrine.
 4th. Friday. Fair. Bath. For the last few days, I went to the library in the leisure hour afternoon for reading the book as 商工地理学(奈佐氏著), 大阪商工分業便覧, 東洋商略(飯田氏著)
 5th. Saturday. Fencing. Mr. Uchida visited us. He lately left the 15th National Bank.
 9th. Wednesday. Cloudy. Bath. After finishing the lesson of school I visited Mr. K. Otake and talked and supped with him at a restaurant at Kanda. He is to leave the school and return to his native province in

order to cure his sick. In the evening I called on Mr. Kimbara.
 15th—20th. During these few days I have been staying at Mr. Uchida's going to school from there every day. This gave me a great advantage for the distance between the two places is very short compared with that from my house to the school, and I got time enough for preparation for the examination.
 22nd. I went to Shiba-ura with Mr. Kato and swam in the sea. We bathed at the *Shiba-ura Kaisui gokujō* on the first class. (price 6 sen).
 23rd. Again I went to the Shiba-ura with Mr. Kato. This time we hired a Japanese boat in order to learn to row as well as swim.
 24th. From the yesterday evening I stayed at Mr. Uchida's again. Our examination began.
 From this day to 29th everyday I have gone to the school for examination in forenoon and prepared for the next day's work

in the afternoon.

28th. Notwithstanding the examination of Mathematics to-morrow I read the novel *Ukishiro-monogatari* by Mr. Yano and no preparation for it.

29th. The farewell meeting was held at Kin-kikwan, Kanda, in honour of Mr. Sano Zensaku who lectured for us on the study of Book-Keeping the last one year and lately has been appointed by the Government as a *Fyugakusei*. He is going to go to America and Europe (especially England). The meeting was characterized with studentlines. (the expence only 35 sen and Mr. Sano himself talked with us very intimately). The meeting lasted five hours, from 3 to 8.

July 4th. Messrs. Takahashi, Kōno and Motoyama called on me. Lately a book entitled *Oraculum* which is a method of fortunetelling and I composed one after that method. It was made quite an amusement for the company.

7th. Mr. Otani called on me. I called on Mr. Kōno. Went to Yose with him.

In spending these days I took a very unhealthful manner, having nothing more than reading (law, novel, and miscellaneous), and composing and talking after rising up lately in the morning. I called on Mr. Otani with Mr. Ito.

七月十六日 日晚くこゝ一天雲深く、雨將に到らん
 とす。加藤兄と相携へて、広尾に散策を試む。古川の
 流緩かなる辺、螢火所々に飛び、稲田人家遠き処、蛙
 声独り繁し。去て小径を辿れば、晚烟茅屋を籠して、唱
 歌幽かに聞ゆ。涼風一陣袂を払ふの快なりと雖、景致
 自の詩情を引くに足る。

夕ぐれて小川の岸邊きてみれば
 くもれる空に蛙なくなり

十七日 土曜日 曇天 午前番町に赴き、後藤、桜田両君を訪ふ。共に不在なるに由り、去る。神田先生に謁す。先生例に由り、温顔徐に諸弟の学績を談じ事問々吾人の反省を促す。先生曰く、河村は精神はよけれど、学問をなすの方法を知らず。之蓋才なきな

り。又曰く、金原はベースボールに凝りて学績下れり。但し此位にてよきなり。体を損するが如きは、馬鹿げたる事といふべしと。談一時間にて辞す。

学校に至り点数を知らんと欲す。職員、本日午後を約す、因て去て尾木氏等と太米楼に昼食す。隣席に久保氏あり。余と互に居宅を相示して爾後の往来を期す。神田鍛冶町より、鉄道馬車に乗して、新橋停車場に至り、岸幹太郎君を送る。君は和歌山の人、慶応義塾に学び、業就りて日本銀行に入る。今將に正金銀行に転じて、其倫敦支店に赴かんとするなり。余は今日、家兄の代理をなせる者なり。踵を回して桶町内田家に入り、伯母と閑談す。松尾伯父昨夜帰京して、同家に投じたる由を聞知す。

同家にて晩飯を終り、神田に向ひ青年会講堂に入りて、渋沢栄一君の「商工業者の志操」と題する演説を聞く。氏小身にして、稍肥満モニングコートを着て、金鎖の太きを輝かせ壇上励声叱咤、よく商工業を卑下する者を罵り又大に商工業者を自ら重んじてその言行を、高尚ならしめん事を勉む。君の言に曰く、商は信を以て立つ、正実にして然諾を重んずるは其最も力

むき処なり。又曰く、商工は国家成立の原素なり。

宜しく文明日進の学理を応用して富強を増進する可きなり。又曰く業に正、不正の別あり。嘗て公益と私利とを目的とするの差あらざるなり。何者の迂漢商工を以て私利の徒となし、政客を以て、公益を謀するの士となし、敢て其間に貴賤の別を立つると。意気軒昂大に満場の喝采を博す。小雨を犯して徒歩家に帰れば、嬢氏一紙片を示す。是即ち尾木氏の送る処にして、余等の及第を報ずる者なり。曰く上田、平均71、堀口、同66、伊藤、同58と。余一見にして心樂ます。

十八日 曇天 午前入浴、午後松山信二郎君を訪ひしに、座に井上好徳氏等あり。暫時雑話の後、相共に本村町、渡辺国武君の邸に至り、其池にて魚を釣る。蓋し此日は、松山氏一家の人、同邸より招待を受けて、邸内に遊びし者なり。余は之を機として、高山直純氏をも訪ひしに同氏は、病氣にて臥床中なりしが、余を自室に引きて閑談に一時間を費す。帰途一民家にて、青銅の花瓶鑄造に用ふる臘製の型を造るを見たり。夜家兄と共に、芝山内三田を散歩し、行く行く家事上の打合せをなす。

十九日 月曜日 曇天 午前長井勇氏を訪ひ、甲州へ旅行すべき順序及び、彼地の事情を質ししに、適々加藤兄来り訪ふに会し、同氏方を辞し、加藤兄と共に散歩し後、樺亮氏を訪ひ蕎麦を食ひ、午後に至りて、三人共に芝山内なる正則の故校に行き、運動場にてボールを練習す。

此日、後藤氏より余等の成績を詳報せられし故、曾我部氏に宛てたる同氏の成績書を送れり。之前の依頼に応ずるもの。

又堀口兄より同氏の成績を報ず。夜、加藤、河野両兄と共に芝丸山に散歩し快談をなす。

二十日 火曜日 曇天強風 松尾伯父台湾より帰り、今日午後来り訪ふ。一家団座して、該嶋に於ける珍談、奇説を聴く。晩景に至り酒を酌して、懐往事談を交へ、論説益々佳境に入り、十時に至りて相並びて床に就く(伯父の経験談は大に余を益する者あり。別に記録す可し)

二十一日 水曜日 曇天半晴 正午少かに過ぐる頃、樺、堀口両兄来り訪ふ。談笑数刻後、相携へて伊藤末彦氏を訪ひ、軍隊将棋を弄し、諧謔諷刺口を衝き

出で、又二時間余りを費す。夜、家兄及び内田従弟と共に、飯倉を散歩す。

大谷、西浦両氏よりはがき来る。大谷、森下、西浦三氏に宛はがき送る。

二十二日 半晴蒸暑 午前十時頃より出発、小石川、森島正造君を訪ひ、閑談二三時間にして辞し、本郷元良勇次郎先生を訪ふ。余は主観的徳義と客観的徳義との關係を問ひしに、先生対へて曰く、幼稚なる思想を有する者には、一般普通徳義を教へて、必ず之を守るべしとなすを要すと雖、苟も普通の智能を有せる者には、己の判断に由り、時の便宜を見計らひて必ずしも所謂徳義を守らざるも可ならんと。

余曰く、然らば其目的とする所は多数の人の幸福を以てして可なりや。先生曰く、方今多くの学者は然信ぜり。然れども兎に角、物に真面目なる事は是非必要なり。熱心に事に任ずると冷頭を以て之に接するとは、固より其人の性質に従はざる可らずと雖も、此真面目に世を渡る事は、是非要する所なりとす。余問ふ、其社会多数人とは世界中の多数なるや、国家中の多数なるやと。先生曰く、吾考へでは必ず国家の多数を考

へざるを得ず。試に考へよ。所謂世界主義に従ふ者は、欧米の各国に利益にして、日本と朝鮮に不利なる事件起りたる場合は、少数たる日本、朝鮮の利を犠牲にして、欧米多数の国々を利せんとするに至らん。豈笑ふべき限りに非ずや。余問ふ、先生の唱導されるは、日本主義は国家を終局の目的とせらるるや、又はヒューマニチーを行ふべき機会に達するの手段と考へらるるや。先生曰く、日本主義は飽迄日本と称する国家を膨張せしめんと欲すれども、敢て世界を併合せんとするには非ず。世界各国が一致して代議政体を形造るに至るの場合ありとすれば、其中にて吾等は其国家、即ち world state に忠ならんと欲するなり。此精神は現時所謂 humanity には非ず、して其 organized body を尊ぶの心なり。余問ふ、日本主義は我邦建国の精神を発揮するを以て目的とすと云ふ。然らば、国家の発達に害ある事にも神武天皇の宣はせ給ひたる御事は守らざるを得ざるや。先生曰く、決して然らず。吾人は大体に於て天皇の御精神を奉ぜんと務むと雖、国家の生存に害ある如き場合には、無論時の便に従はんのみ。是恰かも維新の際、勝安芳氏が幕府の死守論を排して、

徳川家の系統を今日に伝へたるが如くせんと欲する者なり。(余は大に日本主義を好む様になれり)

先生曰く、高橋は実に妙ですな——余答ふ然り。先生曰く、山田は生意気な処なきや。余答ふ、其事は断言するを得。先生曰く、河野も生意気なる事なきや。余曰く、大に然らず。彼は宏大なる胸腔を有し、一寸は明かにする事、難けれども、親交する時実に感服す可き人物なり。(此時余弁護に大に力む)

二十三日 金曜日 晴天 午後本山佗吉兄を訪ひ閑談数刻に及ぶ。

夜河野広一兄来訪、人生の目的に就いて大に論弁し、説議、虚言、方便論に及ぶ。

二十四日 土曜日 快晴 午後用務を帯びて、四谷三村氏を訪ひ、後閑談に移り、旧幕時代の武家旅行法等を聴き、晚景酒飯を饗せられて後、帰途につく。

夜河野兄来訪。
二十五日 日曜日 快晴 午後鶴沢氏を訪ひ囲碁す。夜笠井氏を訪ひ閑談。

二十六日 月曜日 快晴 高田屋嘉兵衛の伝を讀む。夜伊藤氏と共に散歩す。

二十七日 火曜日 快晴 内田家を訪ふ。帰途尾木氏を訪ふ。

是夜、嫂少しく病あり。余は三村家に赴きて明早朝旅行の途に上る筈なりしが、此故を以て、暫く延期するに決す。

二十八日 曇蒸暑 正午四谷発足徒歩新宿を経て甲州街道に向ふ。日没府中に達す。投宿す。途上所見玉川上水及畑地杉林なり。宿にて下野の養蚕家碓氷作君と初知を結ぶ。

二十九日 国分寺より汽車にて八王子に達す。平和二商会出張所(石炭販売)の齋藤房吉氏を訪ふ、同氏宅に宿す。八王子は火災後にて、市街頗る不整頓なり。市人尚當時の事情を語る者多し。惨状察す可し。

三十日 終日降雨 齋藤氏の案内にて市中の機業場、製糸所を觀る。同氏方に再泊す。

三十一日 少雨 高尾山に登り吉野を過ぎ甲州に入り上野原、若松屋に宿す。途上右に絶壁あり左に溪谷あり。鶯声時々聞ゆ。

八月一日 乗合馬車を駆て猿橋を過ぎ、黒野田より

下車笹子峠を越え駒飼に出づ。中央鉄道トンネル工事中なり。駒飼より再馬車にて甲府に至り、柳町佐渡幸に宿す。

二日 半晴 暑 県庁に出頭して統計を得、勸業製糸所を觀る。

加賀美嘉兵衛氏に謁す。市中を散歩す。

三日 晴 炎暑 和田峠を越え、吉沢に出で荒川に沿つて御嶽新道の絶景を訪ふ。巉々たる兩岸の絶壁、突兀たる尖峯、槎枒たる松樹、咆哮する水声、碌々たる溪中の岩石、山頂を掠むる白雲、岩影に香る百合花、仙娥の滝、鞍掛岩、野径を埋むる野花、余は唯自ら人なるや、神なるや疑ふのみ。

四日 鹹沢に向ふ、同地宿。
五日 富士川を下り、岩淵に出て其より鎌倉に至り、円覚寺に一泊。

六日 鎌倉を散歩す。材木座に赴き光明館に投す。
七日 海水浴、大谷敏一君と共に逗子に赴き堀口米太郎、三浦鼎両君を訪ふ、堀口君方に泊す。

八日 曇 少雨 海水浴、堀口、三浦諸氏とわなげす。

夜月に乗じて、波濤を見る。

九日 半晴 堀口氏と共に葉山なる鹿嶋氏を訪ふ。

海水浴。夜波を見る。

十日 晴 鎌倉に赴き大谷氏と共に江の島に遊ぶ。

汽車、帰宅す。

十一日 在宅。伊藤氏を訪ふ。

十二日 内田家を訪ふ。三村家を訪ふ。同家に泊す。

十三日 義兄と十二叢社に遊ぶ。浴槽。松尾伯父と

会談。

十四日 義兄と共に米沢町、義兄を訪す。同家に泊

す。

十五日 四谷に帰り、夕刻に至り帰宅す。河野、伊

藤河氏来訪。

十七日 芝浦にて海水に浴す。夜、河野氏来訪。

十八日 頭痛、発熱、就床。

十九日 同就床。

二十日 医に托す。

二十三日頃迄就床。此より河野、本山、伊藤、堀口、

椿及加藤諸氏来訪。脚氣の気味あり、尚引続て医を就く。

二十九日 河野兄、仙台に向て発す。

三十日 伊藤、加藤河氏を訪ふ。

三十一日 加藤、椿、本山三兄を訪ふ。医師に赴く

こと一日置。

小説日の出島を読む。

旅行日記を草す。

脚氣病は人をして柔弱隠循ならしむる魔物なり。之を追ひ払はんと欲せば大に快怏の氣を養ひ、身体に締りを付けざる可らず。

秋きぬとむにはちやかにみえなごも

風の音たぞしるへかりける

Take Attention Every Morning and Every

Night!!!

1. Rise at 5 and go to bed at 9.

2. Ever keep your body clear and your mind active.

3. Take the diet and

September 1st. Wednesday. Clear, hot. Forenoon: called on by Mr. Otani, walked in the

Shiba Park.

Afternoon: Composed the "minor rule for Self-culture", read "Oshio Heihachji".

Night: called on Mr. Itô, walk to Mita.

Conduct: common.

3rd. Friday. Clear, windy. Forenoon: Doctor. Visited my parent's grave at Aoyama.

Afternoon: wrote the account of my last journey to the Province of Kai.

Evening: walk to Jûban where was a "en-nichi" of "Daikoku". Conduct: common.

4th. Saturday. Clear, windy. Forenoon: called on by Messrs. Katô and Horiguchi.

Afternoon: called on Mr. Itô. Evening: saw the fire-works at Shibaaura. Conduct: Not healthful.

7th. Tuesday. Cloudy, cleared away later.

F.n. & A.n. called on Mr. Motoyama (Messrs. Itô, Katô, Otani, Horiguchi and Tsubaki were there.) and played.

Evening: walked to Shibaaura. The moon was brightening in the clear blue sky, the slight wind was blowing along the surface

of the water, where the shadow of the moon looked hundreds of thousands of pearls and diamonds.

Conduct: active.

10th. Friday. Clear. A trip to Haneda, Kawasaki and Omori with Messrs. Motoyama, Otani, Tsubaki, Katô, Horiguchi, Itô, & Koyama. Full pleasure. Conduct: Active.

13th. Monday. cloudy. School: I felt much restrained in the regular lessons of the school in consequence of keeping my body & mind so free during the preceding two months.

I heard Prof. Blockhuys's lecture on commercial sciences as the first time. He has a clever-looking countenance with beard and mustache. When on the platform he easily get through the most difficult lectures with his clear pronunciation, distinct voice and active gesture. In fact, he is said not only to be an able professor but that he has ever been a sagacious merchant in Orient. He is clothed in not so luxuriant manner as

many of Western peoples in Japan do, and, when he call the name of a student, he suffers san after it instead of Mr. before it. (He is a good speaker in French, German and Spanish but not in Japanese.)

Conduct: active.

18th. Saturday. Half clear. Played lawn tennis at the school. I removed my lodging place to c/o Ito Kamakichi, No. 11. 3 chome Nishikicho, Kanda, in the same room with Mr. Noda. This was done partly from real necessity arising from my troubles in walking long way on injured feet and partly thoughts to my curiosity expecting some different experiences. A stroll at Uyeno Park with Noda.

Conduct: common.

23rd. Thursday. Cloudy. (Holiday) Called on my brother's house, dressed hair, bathed.

24th. Friday. Rainy. Called on Mr. Tabuchi. Contracted with the master of a lodging house to take a room of him in a few days. A letter from Mr. Motoyama informing the

declaration of constituting the 互恵会 or the social club of the members of the former 5th year B class of the Seisoku Ordinary Middle School.

26th. Sunday. Clear. I removed to the under written house: c/o Nishi, No. 5, Mitoshirocho Shichome, Kanda. In order to do so, I went to my house to bring bed, for which I was borrowing Mr. Noda's till yesterday. A letter from Mr. Ohtake.

27th. Monday. Rainy. Afternoon: called on Messrs. Horiguchi and Katō, of whom the letter gave me an important advice which I wrote in the "Memorandum".

30th. Thursday. Cloudy. I visited Uchida's house on the evening. I read the Passage of Swinton's World's History regarding to the French Revolution.

Self-Culture

In the call on me on the 27th, Sept., Mr. Katō gave me an important advice concerning my living in a lodging house. This seems to have been done not only from his own opinion

but also from that of Mr. Takahashi. The effect of the words of this most clever and good friend of mine was as follows: "You, we regard as a man of daring spirit but with no heavy will which will stand for the temptation of the surrounding world. If such a person were to dwell in a place as the lodging house, we must fear of him whether he would not be drawn into the dirty current of vices which is prevailing in those cases. Especially you being now, in our opinion, in the period of transition from living in reason to that in practice, we must hope you will take the greatest attention not to go too far in your curiosity." Thus he felt great danger about the moving of my ground opinion. If I am allowed to declare my opinion freely, I will not hesitate to say this advice was not a very sound one to me, because I know of course the danger of my curiosity but I confide in myself that I do and will do, not anything beyond the restriction of my own conscience. But respecting my friends and their kindness, I

promised with Mr. Katō (1) that I will seclude those friends who have any unpleasant rumour and will not see any friend in no particular business on the day excepting Sunday and Saturday, (2) that I will enter the Japan Unitarian Society as a way to get for myself the chance for moral reflection.

October 1st. Friday. Clear. I translated the lecture in shipping usage by Prof. Matsumoto into English.

Conduct: stout self-denial.

2nd. Saturday. Clear. I played lawn-tennis on the forenoon. I rowed boat on the Sumida River on the afternoon. I called on Mr. Miyake on the evening.

3rd. Sunday. Clear. I visited the *Fisubukawa* in the forenoon. I rowed boat on the Sumida habits of the man". I visited my brother's house: read the Novel "Hinode-no-shima"; talked with Mr. Uchida. While I was at my brother's, Uncle called on my lodging in vain.

Conduct: common; I did a little kindness.

5th. Tuesday. Rainy. According to my uncle's letter I called on him at the Nihonbashi Hospital where he entered on account of his suffering from tapeworm.

9th. Saturday. Clear. Afternoon: visited the Uyeno Park with my brother, (in the Zoological Garden I heard deers crying. It is a solitary, deep, & piercing sound as complaining something.) visited Mr. Uchida's and finally went to my brother's house, I slept there.

10th. Sunday. Clear. An excursion was held by the "Dai Chū Shō" Association which is constituted by those who are in the Imperial University, the Higher Commercial School and the Higher School of Tōkyō. I started Azabu at 5:30 a.m. to join the company at Hongō. We, at first, visited Arai after passing Waseda, dined and were photographed there. Thence, we went to Horinouchi where is a big temple of Nichiren Sect named Myōhoji and the company was broken there.

Bath. Evening: Messrs. Okamoto and Tsuchi called on me. I lent 50 sen to a friend of mine as the first time since I have come to the present house.

5 hrs.' application to study.

13th. Wednesday. Clear. Tennis. Evening: Mr. Okamoto called on me. My brother called on me and told me to go to Kōshū on business.

14th. Thursday. Clear. Messrs. Kajii and Tamaki called on me. The latter came up to Capital only a few days before from his province where he had been suffering from Malaria fever. Walk. Tennis. A letter from Mr. Morishima.

15th. Friday. Clear. Afternoon: Lawn tennis. Messrs. Otani, Motoyama, Katō, Itō, Horiguchi, and Takahashi met at my lodging house and consulted together about the social gathering of the former members of the 5th year A Class of the Seisoku Ordinary Middle School. The day, place, time, expense of the meeting and the original

I took the 3 o'clock train and returned to Kanda with the fullest pleasure, and entered into the Autumn General Meeting of the Wakayama Student's Association at the Kinsei-Rō, where I found Messrs. Minakata, Kawase, Oura, Ochiai, Suzuki, Tsunamura and others. The former company was a cheerful, open-hearted one wholly free from restriction of mind, & the latter was a confused, noisious & vulgar banquet (?), but it cannot be said worthless to me at all.

11th. Monday. Clear. Brighting moon night. Evening: called on Mr. Takahashi, unexpectedly met with Mr. Motoyama there, and consulted together about the preparation of the social gathering which will be held at the closing of this month.

Afternoon: hair dressed.

12th. Tuesday. Clear, rain by evening. Afternoon: called on by my uncle, informed by him about an accident occurred at Mr. Uchida's on yesterday afternoon, talked about the Chinese salt imported into Japan.

copy of the constitution of the club were decided. The council lasted from 3 to 6 a.m. A letter from my brother.

十月十七日 日曜日 早朝車を命じ、家兄と従ひて
四谷信濃町メリーマンに宿り、六時発汽車より八王
子に歸り、同地への乗合電車より小幡に迄赴き能登
行客を負つ時を越や世路より質食(与瀬より)瀬の
瀬に取返す。上野原、旅館あへちまに宿す。

又十九日には、夕刻より小幡山に赴き帰路暗中に口
落せたり。二十日身延山久遠寺に詣り、次日本旅
寺に赴き居寺に宿す。養菜上人の墓に詣り、翌朝船に
り舞川をたどり、岩淵に田に興起り居り、同夜一泊。
二十一日舞川。

25th. Monday. Clear. I took 7:10 train from Shinano-machi to go to school. On the evening I called on Messrs. Miyake and Okamoto and supped at their house. This week I have a hard work as two times of the same interval in an ordinary case in consequence of the trip to Minobu-san. Today, 4 hrs application on the evening.

26th. Tuesday. Clear. Aftn: I called on Mr. Miyake to write in the Books. (supped at his house)

Even: I called on Mr. Noda to borrow the Note book of Drot Civil. 5 hrs. application, to day.

28th. Thursday. Clear. From this day I started on learning German language by myself with the assistance of books. Read and copied the alphabet & the rule of the pronunciation of letters in "A German Course" by George. F. Comfort. Talk with Mr. Tabuchi by the night. 3 hrs. application. A letter to Mr. Kōno.

29th. Friday. Clear. Bath. 1½ hrs. Reading in Library. (German Current-hand and a few vocabularies) by the aftn. A letter from Mr. Kōno, a reply to it. *Chugai-Eiji, shinbun-Kenkyūroku* and *Eigokenkyūshi* by the night.

30th. Saturday. Clear. After finishing my lesson at school I called on Mr. Takahashi dined with him and went to Azabu together

the other hand. This was, I confess, after the manner of B. Franklin in his youth when the great American once had to get nothing but a few pieces of loaf.

Read some pieces in English.

Nov. 3rd. (Wed.) Imperial Birth-day. The day was of clear, warm weather with gentle breezes. I, after dressing hair, went to the Ueno Park where thousands of citizens were crowding to spend their holiday in walking and amusements. The oil painting exhibition of the Hakuba-kwai was opened to the public; special works being Mr. Kurōda's naked female bodies, "Akigusa", and Mr. Andō's "Sunset in Reigwan-jima". To me the last work and Mr. Yasaki's "Waves on a coast" were appeared most splendid. On the afternoon the First Meeting of "Gojikkwai" took place at a restaurant at the park, Inshōtei by name. It was opened at 2:30 p.m. The opening address was given by Mr. Ōtani, one of the originators, at first, fol-

to see the temple where he is to go for lodging. Then we visited Mr. Kōno and had a merry talking company. Next we three took a walk to the Shiba Park, whence Mr. Kōno parted from us and Mr. Takahashi and I supped at my Brother's house. On the evening we called on Mr. Motoyama. I slept at Brother's this night. Reading the newspaper during this week, I sat up till 1 a.m. 31st. Sunday. Clear. Windy. Late in the morning I was waken up when Mr. Katō called on me and we had a pleasant talk till noon. On the afternoon Mr. Motoyama called on me and induced me to call on Mr. Ōtani. But the latter being absent at his home, I parted from the former and visited Mr. Katō. After talking a while we started again to call on Mr. Kōno, at whose house we elapsed four hours. By the way home I feeling hungry and cold, I got the baked potatoes two sen worth and walked to Shim-bashi eating it with one hand, and with the potatoes wrapped in a newspaper sheet in

lowed by the discussion regarding the constitution of the association, then came fukubiki, nazashi, go, shōgū, etc, and finally election of twelve heroes which consisted of easy "converser", lover of trip, tall man, future minister, tattler, rude person, and others. We took sushi, kwashi and imo; talked and laughed pleasantly as if we were yet Seisoku students; and broke away with fullest enjoy among the loudest shout of banzai at 5 p.m. With reference to the gathering I took a part of originator and publicly elected accountant secretary of the association, which I accept as a "proof of confidence" in me by my most intimate friends. After the meeting Messrs. Takahashi, Kōno and I took a stroll at the park forest and then came to my lodging house.

7th. Cloudy. The H. C. S. Autumn Regatta took place at the upper course of the Sumida River, so I went there early in the morning. But, to my considerable disappointment I was not conqueror to-day. Soon after the

race in which I took apart I returned home. I found at Mr. Shozaki's room him & Mr. Tamaki, and stepped in to talk with them there. After a while Mr. Araki called on us and we four took a stroll to Dangosaka, from where I returned about 4:30 p.m. After supper I went for bath when my Brother called on me. On my coming back he & I went to a restaurant and dined with. Then we took in a tram-way-car and I made a visit to Mr. Uchida's family parting my brother at Kyobashi.

8th. Clear. The so-called strike broke up in the school on the plea that we are too tired up to have lessons on account of the boat race last day. I went to Azabu with Mr. Horiguchi. I alone visited my Brothers house and dined there. On the afternoon I called on Mr. Ito at whose house I promised with Mr. H. to wait for me, and we three started for Hiroo to see chrysanthemum flower, first visiting the 仙華園 and next 茨花園 from where we went round

to Meguro to get fresh *kaki*.

On the evening, while I supping with my brother and his wife, a quarrel came to occur between her and me which was from misunderstanding on the both side, especially from my valuing her ability too low. But it having been cleared away in soon I felt so happy to have such a true woman as the sister. I slept there.

9th. Clear. Early in the morning I left my brother's house and hastened to the lodging house by jinrikisha on which I carried my *yogi*. On the afternoon, after our lesson address was delivered in English by Colonel Alexander Bacon of New York at our lecture hall. He is a lawyer now and known as a prominent orator in America. Two hours English and Chinese.

13th. I called on Mr. Nakamura with Mr. Noda. I called on Mr. Minura but finding him absent at home because of going out with my brother, I traced and caught them, whence we three called on Mr. D. Minura

and drank and supped. Returning to the former's again we reposed a while and then my brother & I went to his house. I slept there.

14th. Early in morning I hastened to the Shinbashi Station to see off Mr. Nakamura Takashi who has been lately appointed to the consul to Fusan, Korea. I walked at the Shiba park with Mr. Kōno and Mr. Kato whence I returned to the lodging house. After the dinner I and Mr. Tabuchi walked to the Ueno Park, but not being satisfied them, we make out ourselves to go to Ōji where we visited Takinogawa and Asukayama. Taking 5:44 train, we returned to Ueno, supped there at a restaurant and came back home at 8. The trip was the most successful one and we were in the greatest pleasure.

十二月一日 当学期試験は来月十三日より始まり
十二月十一日は温習日として、又十二日は日曜にて

何れも休養なれば、余は九日迄に大体の復習を終了、休日三日のうちの二日を満足其他の愉快なる仕事に費せんと欲す。因し今日より日勤を定むる、毎日四時間を試験準備に充てんとす。是決心は人の少しへ勉強するべきに大に勉強し、人の第々と勉強するところ遊ばんと云々、余が道理ある好奇心で基く。

How happy a man is who can always keep himself cheerful! He is pleased less than other ones when under favourable circumstances but he is also pleased in contrary cases when others fall into deep vexation.

The resolution of the 1st, inst. was fairly executed, and now I have almost finished the preparation for the coming examination. What a happy fellow I am! God bless me.

The account up to the 16 Nov. is not so particularly kept as to the hours of studying, but it is sure I have devoted 3 or 4 hours every day in average, excepting Sundays, when I took pleasures and amusements to the limits of possibility.

十二月四日 余或友人の家にて、他の二三の友人の

目前にて無礼なる語を受け、心中平なる能はざりしが、此時余は、怫然として座を去る事を躊躇し、又反対にその発言者を翻弄する頓智も出でざりき。余はこれをもつて実に残念としたり。この無礼なる語と称するは敢て其人の真実余を軽蔑せしには非ず。平生より傲慢虚飾の性質にかられて、面白半分に奇説を吐きたる者なり。然れば余が心中之を怒りたるは器局の小さきを表す者なり。されども他人の面前にて斯の如き言を為されて渋き面にて忍び居るは意気地なく見え、且つ威敵を損ずるが故に攻撃策を応用するは最可なるべし。又心中怒りたる者ならば致し方なければ、断然怒を示して席を立つか、正面的に譴責を試むる方寧ろ男らしかるなり。但し之を残念と思ひて自ら恥ぢたる丈け余に進歩の見込あり。

十二月六日 沢野達三君に送りし私信の要領。

余は君が在京中の行蹟を責めざるのみならず、却て同情を表す。何となれば、丈夫満腔の不平を漏すに処なくして却て花柳の間に逍遙するも亦、甚しく不可なりとせず。況や丈夫には丈夫の抱負あり、思慮あり、其本末を忘れて声色に沈溺するが如きは、万之なかる

べければ之を責るが如きは末と云ざるべからず。要するに男子処世の法、百難を排するにあり。一旦の蹉跌に屈す可らず。宜しく新なる世界に向つて新たな生命を求むべし。君、願はくば自愛して、益々健在なれ。愈勉学なれ云々。

十二月八日 近頃は何をしても愉快なり。自分乍ら其 cheerful man なるに驚きたり。従つて勉強も捗り、身体の工合も善けれども、其代り寝坊も甚しく、学校は四日続けて遅刻したり。又遅刻しても後悔せず之因太くなりたるよりは寧ろ此頃はすべての事が愉快にみゆる傾あるより起因する者と考へらる。

しかし遅刻は余り punctual merchant の喜ぶ所にも非ざれば、明日より注意して斯の如き事無き様可致候也。

下宿に入りし以来の面白き経験

(一) 常盤館の第五番室へ一美人の唯一人入宿せし者あり。皆々種々の想像を逞ふして或は良家の女子にして不品行の為、斯の如き場所に舞ひ込まざるを得ざるに至りしならんと云ひ、或は其高価なる品物を擔ぎ込むを見て、盗賊ならんと云ふ。余は先淫売ならんと

見込み居りしが、下宿人不服の為、宿の主人より退去を命じたり。

(二) 同じ宿に田舎丸出しの馬鹿下女来りしが、其以来来客人の金品の紛失する事一再ならず。余の如きも多少の損害を被りたり。これを發見したる順序は、大抵彼ならんと見込の付きたるを、隠して印を付けたる銅貨を余の机の引出しに入れ置き、其紛失より詰めかけたるなり。

Dec. 9. Th. Clear. Com. Arithmetic. Newsp.

Call on Mr. Takahashi (angry). Drinking.

Slept at Mr. Tamaki's. Good & Wrong.

10. Fr. Clear. Com. Arithmetic. Book-keeping. Newsp. Talk with Messrs. Okamoto,

Tamaki, Yamanari, & Tabuchi. Bath. Good

Call by Mr. Koidzumi. Letter from Mr.

Sawano. Call by Mr. Kato. Discovering a

main thief.

12. Su. Cloudy. Civil Law. Newsp. 2 hrs.

Audience to Mr. Saji's speech at J.U.S. Mr.

Takahashi, Mr. Kato & Mr. Tsubaki. Broth-

er. Good.

18. Sa. Clear. Newsp. An address by one Mr.

Soyezima about Malay and Siam.

Curiosity.

Curiosity makes a man thoughtless, careless, and sometimes madlike, consequence of which being ridicule and contempt of others and no more.

Pleasiness

Trifle words or conducts are trifle things, but trifle things often are enough to please ordinary people.

Friend.

A Japanese old saying truly observes the influence of one's companion, shu ni majiwareba akakunaru. I must avoid a friend with bad habits. If I will to be approved by a perfect citizen as Benjamin Franklin, I must be free from the habit of drinking.

Autobiography of Benjamin Franklin.

P.8. I continued, however, at the grammar school rather less than a year, though in that time I had risen gradually from the middle of the class of that year to be at the head of the same class, and was removed into the next

year class, where I was to be placed in the third at the end of the year.

Under him (George Brown Well) I learned to write a good hand pretty soon, but I failed entirely in arithmetic.

At ten years old I was taken to help my father in his business, which was that of a tallow-chandler and soapboiler.

Benjamin Franklin

Persons of good sense, I have since observed, seldom fall into it, except lawyers, university men, and generally men of all sorts who have been bred at Edinburgh. (P. 15)

三十年の暮

余は十八日で試験を終り二十日午後より家に帰り、二十二日午後下宿に赴き、一度の晩飯を食し、私を済して帰りが、其下宿料は二十二日分を取られたり。元來常盤館の規則として、二日以上留守なるときは、其日割を減額する事なるが故に、通常なら此場合の下宿料は二十日分なるべき筈なれども、下宿にては晩飯の際昼飯の菓を付けて二日分を取りたり。およそ商人

東京に帰り、直ちに某飲食店にて痛飲馬食せり。要するに、二十五日は極めて書生的なる無邪気なる健康なる遠足(此日行程約十里)を愉快の基礎とし、二十六日は風流なる紳士的なきな低酌住者を愉快の最なる者とし、二十七日は殺風景にして無益なる酒食の奴隷たりしを、愉快の源とせり。扱此中何れが真に余の趣好に適するやといへば、第一日の仕事なりとす。たとへ好む処なりとも、痛飲馬食浪費、放逸は余の禁すべき処なれば以後は、之を慎まざる可らず。

二十八日 朝食後下宿を辭し、桶町を訪ひ、屋敷を終りて帰宅せり。午後顔剃入湯。余が好奇心より失策を仕出かし大谷兄に詭言を郵便にて出す。(今日同君を訪れたれど留守に付)

夜本山君を訪ふ。

二十九日 正午起床、終日在宅、内田、松尾兩伯父來訪、小酌す。

三十日 午前、本山、高橋兩兄來訪。午後鬚剃入湯。

三十一日 松尾伯父の依頼に応じ、横浜に赴き、松尾薩一郎君の這回家を持ちたるに就き、其様子を視察し、同時に大沢次郎(医士、元伯父方書生)を訪ふ。是

の気転は、此辺にも存する事と深く感服せり。蓋し別個に耳を揃へて、何程かを出すときは、誰人も損したる如き氣持を生ずれども、或る出すべき高の何分かが増されたるときはあまり斯の如き感じを起さざる者なればなり。余今日は斯く損をする方の身分なれども、自ら商売をなす暇には限なく目をくぼりて、此辺の注意を怠らざる覺悟なり。

十二月二十五日、六日、七日の日記

十二月二十五日より余田淵徳三郎君と同行にて市川、鴻の台、真間、八幡を経て下総地方に遠足す。出発の日は終日徒歩にて日没後幕張に至り、疲労に堪へずして宿す。途中石地蔵を倒して、道しるへの倒れたるを立て練兵場にて工兵の作りたるぬけ穴をくぐり、駈足、突貫を試み、又は礮瓦製造場をみる等、活潑なる又は有益なる事のみ日を暮せり。第二日即ち二十六日には幕張よりかき灰の製造所を見、検見川を経て稲毛に至り、海氣館に投す。是日は上等の食事をなし、又少しく酒をも呼び、海水温浴を取り小説等読して暮せり。

第三日即ち二十七日には千葉に赴き其より汽車にて

日朝伯父より呼出されたる時、電話を用ふ。是一生涯始めての記事。次に夜、横浜よりの帰途、中等汽車に乗る。是又破天荒の一件なり。斯く文明の利器を利用するの機会を得たる日を以て千八百九十七年を終るは、吾輩の最も愉快とする処にして、以て明年の生活の吉兆となす。

謹一郎君の様子に就ては、余は元來未だ容易に改心せずとの意見なりしが一応伯父の命令により見分したるに、目下の有様は至極真面目なるが如し。然れども同君が事に當るや、好地位にあるときは、概して勤勉なるに拘らず、一旦些少の困難に遭遇する時は、忽ちやけを起して無責任なる放逸に走り、品行を害し信用を失ふは過去の経歴において明白なれば、這回の一事も未だ完全に保証し得可しとは言ふからず。故に余は今後更に三ヶ月間(ハンケチ業の活氣を生ずる季節まで)を期して、慎重なる監察をなしたる後、愈確実なる方針立ちたる者なりと断定し得れば、位牌相統等を為すべし。然れども今日之を確定するの必要ありとせば敢て、三ヶ月を猶予するに及ばず。何となれば此事に由り却つて、同君の心を固むるの利あるも知るべか

らざればなり。

今年九月の初めには、怠慢、懦弱の習慣を脱却せんとして、大に努めたる甲斐ありて今日は心身共常に學問も能く勉強する様になりたれども、是に反し飲酒の慾大に増し、一方に於ては好奇心のために屢々失策するに至れり。一例を挙げれば、怒らずして済むべき所に怒を発し、他人の帽子を無断にて着用し、無暗に飲食して有りもせぬ金を浪費するが如き、従来の上田とは思はれぬ輕薄なる事を敢てしたり。斯の如きは、苟も大市人フランクリン氏を模範とする者の口に言ふさへ深しとせざる処と考へつきたれば、以来は大に此辺を謹む事として、来年より修身則の現行細則を改正し快活なると同時に、真面目沈着なる人物となる様注意す可し。

奇言を吐て人をして呆然たらしむるも愉快なり。人の意の至らざる処をなして、愚俗の咽喉を窺も愉快なり。凡て奇をなして人を驚かし、人を笑はしむるは愉快なる事なり。然れども唯愉快なるのみにて好結果なきのみならず、多くは反対の悪結果を生む外は、人の信用を失ひ、内は己の操行を亂し、甚しきに至りては

悪習慣を後日に遺すべし。始め人の意表に出でんが為に、深夜酒を呼びたる者は、後には深夜に酒を飲むの慾を制する能はざるに至り、遂に衛生を害するに至るが如し。然るに人は平々凡々通常人の為さざる所をなして、其以外に逸する事なくんば、過なかる可し。何となれば世人一般の過は過と見られざればなり。然りと雖も、唯世人の糟粕を嘗め空しく習慣の奴隸たるが如きは、苟も眼あるものの為すべからざる所にして、

社会の先覚者たる可き義務を尽す所に非ざるなり。故に奇正の標準を脱却して、唯己の良心に訴へ、実利益の存する処に向て、己の歩みを進むを宜しとす。此場合には奇も正も自ら覚ゆる事なかる可し。

斯の如くにして尚世人の奇と呼ぶ事あらば是真の奇人にして、其言行は必ず後の予言をなすに足るべきなり。

明治三十年に於ける余が心の内容及外形

之を月の順に記載すれば次の如し。

一月 新に酒宴の席に列する事を覚えて、飲酒を好むやうになり、時に其害の衛生上に於ける範圍を超えて、道徳上の弊に及ぼんとしたる事ありたれども、幸

にして早く其悪習たるを覺えたり。

二月 先月以来、風流、美、優雅等の文字を誤解して稍もすれば、実利主義者の本分を忘れて、空理想に陥らんとするの傾あり。是が原因は、小説を讀して優美なる恋愛の思想文章に触れたる為と、一には余り目前の實利のみを視るの極端論者となりし反動とにあり。是が結果は将来に於ける、一個の快男子又は奇人たらんと云ふ柄にもなき空想となり、従つて怠惰に走るを免れざりき。然れども、一旦その不可なるを悟り『汝の常道を守れ』と叫びし以来は、復た頑固人に帰りたり。

三月 此月に入りて以来は大に勉強し、大に運動せんとの方針を取り、日々盛にテニスをしたれど、勉強の方は善く成功せざりき。六日の日記には頻りに実利主義の可なるを、主張しあり。

先頃より讀みたる「釈宗演」、「小猫」、の兩小説は「四、五、六月」大に余の好奇心及功名心の勃興を助けたる者と云ふ可し。

五月三日の日記にある奇夢は其明なる証なり。斯の如く此度は、恋、美等を離れて、功名心の擽となりし

か。遂に余は「天才の豊富なる青年に非ず勉強せずんば、取る処なきに至らん」と叫びて一時は決心したりしが。

金沢行の旅行以来、再怠惰の習慣に陥りたり。(此度は何と云ふ取所もなし)、此後「浮城物語」を讀みて、再功名心に浮かされたり。

七月 十日頃より、試験前の事とて漸く勉強に取り掛りたり(白むを得ず)。試験後は全く体の修養に努めん事のみ意を傾け、他事はなかりき。

八月 旅行より帰り、益々身体を鍛練せんとせしに、脚氣に犯されたる為、再柔弱怠惰と化せり。

九月、十月 是に於て大に快活の氣を養はんとして九月よりは、善遊善勉の格言を守らんことを決心し多少成功したり。

十一月 身延への旅行後は、必死の勉強をもつて、學事に従ひ、同時に一方に於ては平日も閑ある毎に、運動場に出で、又日曜日はず戸外運動(重に遠足)を為したり。

此成功は益々余の勉強を鼓舞し、本月中旬、「勉強論」を立て、余にしては空前の勉強家となれり。而も日曜

日其他休日の遠足は愈盛なり。

十二月 斯くして極めて容易に試験に應じたるは、余の大に喜ぶ所なり。此原因は下宿したる為、時間の余裕を生じたるに歸す可きが如し。然るに下宿は、余に飲酒を教へたるの跡なきに非ず。注意すべきなり(好奇心は相変らずあり)。

兎に角今日に於ては、余は己の義務に忠実にして活潑に事に従ふと共に、内心親切にして義侠心に富む所の、文明実利の世界の青年学生たる事を自信し得るなり。幸哉

反省録

力をもいれずして天地をも動かす、目に見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこ女のなかをも和げ、たけきものふのころをもなぐさむる如き、美事な序文を書かんとあせれども、かきても／＼思ふところの万一にも及びがたし。及び難きが故にみなやぶりさりぬ。やぶりさりしが故に、其跡残れり。残れるが故に見にくし。致方なし。いでや其しくじりの顛末を序文に代へて一足飛に本文に入らん。

む者あり。而して双方とも平氣の平左エ門。なんぼ猿の子孫でも此位の事に氣のつかぬとは人類社会の組織も不安定といはざるを得ず。

進歩。猿の子孫とはいひながら、是でも地球上及ぶ者なき智恵をもちたり。馬鹿にする者は其人の勝手。吾は人生を重しとなさん。吾は人世を育て甲斐ある物といはん。既に人世に生れ、人世を重んじ、人世を育て、甲斐ある者と思ふからには、吾人は確に社会の組織を益々進歩せしめ、人類の生涯を愈幸福にせんと務むるの責任を有す。何でも進歩、々々々々。万歳、万歳、々々々々。進歩主義万歳！

個人と社会。吾人人類はみな同じ人間にして、世に時めく天皇陛下も、さびしき田舎に田を耕す農夫も其人間たるに……

色情其一

色情にも等差ある可し。先分ちて三となさんにて、

一、唯肉慾に駆られて、起るものにて、獣鳥の類と雖も之を有す。色情の中にて、いと賤き者なり。されど此情なくば、動物は種族の滅亡を待つの外なきなり。

明治三十年五月三日記

おもしろや、あなおもしろの浮世かな、二十九年の師走の二十五日、家兄結婚式し、翌日、旧君邸内の自宅にてしるす。

面白き浮世。きのふまで榮華にあきし人のけふは衣食に迷ふをきき、むかしは花の如き美人今白髪のお老となれるを見て、あゝ世は無情、果なきは浮世となげく人あり。さてもきのしれぬかぎりなりけり。試に人世に苦も難もなきものとかりにさだめ見よ。さらば吾々は樂と喜とを知ることならん。榮華に誇る人と雖もつとめずむば、ほろびん。花の如き美人も、年を経ば衰へん。富貴貧賤、生老病死、苦樂、喜悲、或は去り、或は来り、転々回こそ世の成り立つ所以なるを知らずや。苦か樂か、喜か悲か、いづれか一方に定まらむ世は世ならず、人は人ならず、天下の厭世論は須く顔を洗ひて可なり。

貴族。久方の天の下、あらかねの池の上にあたいの分らぬ穀潰し兼製糞機械あり、名けて貴族と呼ぶ。彼一挙一動の労もなくして、美衣、美食、美住、人に誇り、己に驕り、寝て遊んで、而して後に死し又生る。然るを、一方には汗水流して働きてさへ時に饑寒に苦

二、容色風采の美秀を慕ふ者にて、動物にても高等なる者には、往々是ありといへども(一)よりは進みたる方法なる可し。

三、心の美を好む者にて、最高尚なる恋なるべし。されど唯心のみの關係に止まらば友人の信頼も亦色情とせざる可らざるに至る可きが故に男女の間に此事が成立ちて互に一生肌身を許す場合に(三)の色情起る者と考へらる。

余が心得としては、

(一) は言ふ迄もなく之を排斥し

(二) は全く之を捨つるに及ばずと雖

(三) を具へたる上ならでは取る可らず

されど斯る場合を求む可らず。我心を見抜きて其精神を感じる如き婦人は我より仕向けざるも来る可き者にて、其間一のArtを挾むが如きは未だ粹と称するに足らざるなり。

色情其二

恋は飽く迄神聖犯す可らざる者と考へ、決して肉體の慾に先たる可らず。凡そ恋は結婚の基にして、結婚は我身の實際的事業に対する内助と我兒の将来に大

關係ある家庭の教訓に値す可き婦人との結合なれば、決して浮きたる心もて空想す可き事に非ず。小心翼翼として其実行法を撰ばざる可らず。

従て我等が肉体的結合は唯最愛の夫婦間にのみ行はる可き事にして、之を前段(三)に適せざる如き者に許すが如きは、男子一生の不面目といはざるを得ず。又之に適する者と雖、己の妻たらざる者には之を許す時は所謂男女同権の真理に背く者にして是亦神聖なる夫婦間の愛情を蔑視するの甚しき者なれば不道德の限なりとす。

◎色情抑制の一点に関しては、余は如何なる美人の泣顔を見るも(まあ貞君の男振にしては無ささふだかから難さ)敢正なる徳義を遂行す可き事は天地の神明に誓ふ可し。

◎真に汝の精神に感じて汝を愛するの女子は、汝より之を構へざるも、彼より好んで汝に來らん。汝は唯己の本分を守りて、勉強に、忍耐に正直なる可し。
◎卑猥なる肉慾時として汝を襲はん。然らば、汝の己の紳士たる事を想ひ、紳士に相当する淑女を理想し、断然之を排斥す可し。孔聖曰はずや、君子固窮。

談で悪くなき者

書生の駄法螺と美人の泣顔(之は未だ拝談の榮を得ず。)

味て悪くなき者

驟雨漸く止みて、長空一碧片月高き時温泉宿の二階にて自然の景色を眺めつつ、麦酒の上等を一杯二杯(之も未だ……おやおや)

既に其境遇に接したる者は将来に於て尚度々逢はん事を希ひ、未だ其榮を得ざる者は何卒一生の中に得度ことと存じ侍るになんとかや

第一八号専売時許自惚気怪大安売大広告

さあ評判ぢや々々々々。江湖の諸君子よく御目止めて此広告を御覽あれ。

三十年九月一日も制定修身則細規

余は近來自身の欠点を見るに空想に耽り、隨循に走り、優柔不断にして活気に欠しく、徒らに高言を弄して元氣の日に消耗し、体力の進歩せざるを願はず、今日悟り來りて実に慚愧に堪へずと為す。因て本學期に於ては大に「大胆」「決断」「高潔」「撰生」及「勉強」の諸則を厳行し將に面目を一新せんと欲す。乃ち其細

小人窮則濫と

◎恋は神聖なり。古歌に曰く、君ならで誰にか見せん梅の花。色をも香をもしる人ぞしる。

余は文明の淑女を理想して彼と語らんのみ。彼は久いからずして、実体と化し來りて我手を取らん事を信ず理想の佳人願はくは余を捨つる勿れ。

六月二十一日記

漫録數則

見て悪くなき者

緑陰濃かなる公園の樹林に涼風一陣、佳人、すかしぼろの人車に駕して去る。願れば芳香徐ろに鼻を打ち来る。

聞て悪くなき者

初夏梅雨余輩正に試験準備に引籠れる時響き來る隣家少女か散譜の琴の音朗々として珠を転ずるかと思はる。

味て悪くなき者

脂濃き方で西洋料理と饅めし乃至天婦羅其後で草いちご或は奈良漬の類なり。

則を左に記す。

一、大胆 傲慢無礼の私利主義実行者を恐る勿れ。大に之に近づきて利を分たしめよ。

二、決断 一旦決意したる事は善も悪も之を遂行すべし。毀誉褒貶の如きは顧るの価なき者とす。

三、高潔 人に愛せらるゝは、人に畏れらるゝに如かず。愛せらるゝは等視せらるゝ所以、畏れらるゝは兄視せらるゝ所以。

四、撰生 早く起き早く寝、毎朝体を拭ひ隔日浴を取り、食過及間食を禁じて消化器の健全を謀り、運動を盛にして大に腕力、体力の充実を期す可し。喫烟飲酒を慎みて其費用を遊歩、遠足に転ず可し。蓋は撰生経済両全の策。

五、勉強 大に学び、大に遊ぶべし。

学校日課は必怠る可らず。但運動の為に不急の課目を怠るは咎むる処に非ず。学課外に商工業上の題目を定めて調査す可し。

以上の諸則は我が神聖なる良心に対して断然誓約せる者なれば、区々たる俗塵のために躊躇逡巡す可きに非ず。万一此の如き事あらば是決断力耐久力の足ざる

証にして最早実業社会の出世は望む可らざるなり。意馬心猿吾を誘ふあらば、

去空想就実行

排柔弱勸活潑

卑陋循貴果斷

の三句を三唱して皎々たる真如の誠意に帰す可し。西諺に曰く、

熟考は十分を過す可らず

元良先生曰く

考へたる事は実行せよ。実行す可らざる事は考ふるに足らず。

余曾て謂へらく、

我が手に在る事は飽迄実行せん。片語隻言たりとも一諾之を実際に見ずむば我が東海健児の面目を如何せん。若し機なくむば、自ら之を作り出さ

んのみ。天下何事か我が天職の実行を遏むる者あらんや。奴隸根性の如きは実に人間の本心に非ず

Resolution

Never smoke 禁んで行はれず Sept 18th 回廊者之間を共にす可らず 禁落には行れず Sept 29th

九月下旬川上中將軍事視察の爲 Siberia に赴く。歓迎甚盛。

九月下旬富士艦は Colombo にあり、八島は Malta にあり共に帰航の途。

十月十二日、朝鮮国に於て皇帝即位式執行せらる。

十月中旬大阪築港起工式は其内執行せらる可し。長崎築港起工式は来る二十三日三菱造船所新造船(6000 tons)の進水式と共に行はる可し。

十月十二日東京知事久我通久侯免ぜられ岡部長職子代る。

九月三日、先に陸奥後藤の兩伯相次で逝き今亦山路中將の薨するに遭ふ。兎に角日本国民の慶事に非ず。

九月下旬、進歩党、提議を松方首相に贈る伯決然之を拒む。

十月、台湾高等法院長高野判事非職せらる。氏之を以て国憲に悖る為なりとし、断然之を受けず。上京して憲法擁護の爲に絶叫す。此事一時政治法律界の一大問題となり、又神鞭内閣書記官長の辭職を惹き起す。

高野氏の再台湾に赴くや直に法院に入り、確として動かす。總督警察を用ひて氏を引出す。台湾に於ける二

日々学校外、二三時間以上の勉強をなし土曜日を利用して大に遊ぶ可し(好結果)——Nov 16th

時事雜観

明治三十年九月初徳富蘇峯、志賀短川、尾崎野堂、箕浦勝人、蒲生仙の諸政客、勅任参事官又は局長として任官す。毀誉褒貶頻に至る。貞には余り利益なるやり方とも思はれず。

九月九日午前五時より六時に掛け稀有の大暴風雨あり。市中家屋、樹木の損害甚多し。氣象台の予報にては、此嵐は海中に起る筈なりしなり。

数日の後、損害の報各地より至る。特に鉄道の破壊及電信線の吹倒しは著しく、通信運輸の便を止めたり。静岡県及福島県が特に被害多し。

九月中第二回水産博覧会を神戸に開く。

九月中銀貨益暴落し、金銀制度の実施を危む者あり。

九月二十九日大雨の爲、各地出水し、東海道鐵道程ヶ谷以西不通。

九月下旬中学教授法改良委員会を設く。委員長外山博士。

三の法官も亦其職を辭す。事は頗る安川會計検査院部長の問題と相似たり。

十月、米価益騰貴して十四円台となる。月給取大に苦む。

北陸の米産地大不作にして、外国米を輸入し細民大に苦む、米価十六円。

十月、進歩党内閣に提議して増稅案を撤せしめんとす。松方総理之を拒む。同党遂に提携を絶たんと決す。從て黨員の官に在る者は相率て野に下り、大隈伯亦辭職す。余は之を以て当然の処置と考へたり。然に此前に彼等が政府に入りたるを賛成せざりしが故に、今月に此事あるを甚卓見ある者とする能はざるなり。

松方内閣進歩党の分離に遇ひ、対議會の方策大に窮す。乃ち自由党に説て提携を求む。彼之に応ぜず。失望化して勇氣とならんとすと云ふ。若し松方伯にして此予想に違はざらしめば亦余が輩として語るに足らんか。

独乙軍艦清の膠州灣を占領す。宣教師虐殺の賠償を得んが為なりしと言ふ。然れども、此拳にして、若し永久の占領ならんには東洋の大変未だ全く起らずとな

さす。

反省録

一、我に良心あり、思考力あり。思ふて可とする所は、素より之を行はん。不可とする所に至りては、眞は決して行ふ事能はず。

二、我今夏八王子を訪ひ、甲府に遊ぶ。而して博多帯の産額を詳にせず、生糸売買の慣習を調査せず。交通の不便より生ずる甲州商業上の影響を研究せず。是果して高等商業学校生徒の旅行と称す可きや。帰來自ら問ふて答ふる所を知らず。慚愧何物か之に如かん。

三、沈黙考を離れ多数の人々と交際接す可し。

家居読書を省て遊戯、運動、音楽を専にす可し。是貞の如き神経質者の取る可き方針なり。平生勉めて意気の快活なる様心掛く可し。

四、吾に自信あるや否や。是近来余が念頭に屢々往來する所の問題なり。

五、余が性質は進取的なり。輕薄に流れ易し。思想は極めて自由なり。変遷し易くして確固たる執持に乏し。唯此間に一貫せる主義は己の良知認めざる事は全

く之を実行せざるにあり。

六、余は決断の流るるか如き者なく、意志の山の如き者なく、勇氣の虎の如き者なく、機才の神の如くなる者なし、交際に拙にして言語に嫻はざる木念仁なり。唯稍人に誇る可きは己の為さんと欲する事に忠実勉勵して正直に世上の善を為さんとする天性と広く万物を見察するが故に、事に処して議論の偏僻に陥らざるの注意とにあり。注意と勉強と是を除きて上貞なし。上貞をして其能ふる所を尽さしむる者夫れ此兩者に限るか。

実想録

一、現今行はるゝ所謂恋愛小説なる者は浮薄なる事のみ並べ立て青年男女の空想妄想を助長せしむる社会毒流の淵源なれば、吾人書生は全く之を読まざるを可とす。

二、古来の英雄豪傑或は磊落不羈にして、小事に踟躕せざるが如く見ゆる者あり。然れども、實際に於て彼等は大概は細心なる勤勉家なりしと考へらる。何となれば、其施設の根に徹して見るも必綿密なる注意と

精確なる打算が之に先立ちたるは苟も多少烟眼を有する者の観破せざる可らざる所なればなり。

試に今日の所謂政客中に見ても、志賀重昂氏が地理学に達精し、世界中の地名を誦せるが如き、高田早苗氏が非常の勤勉家なるが如き、又は伊藤侯が独乙の政治書を常に繙くが如き皆其成功の偶然ならざるを意味するに非ずや。

吾人は雄大崇高なる思想を以て我精神を養ふと同時に、精細なる観察を万端の事物に応用して、穀潰的大言家の轍を踏む事なく、又俗吏的無氣力者の弊に陥るなく、眞に日本国の指導者となり、日本国民の模範たる可き素養を作る可し。

三、商人は実用的理学即機械学、工芸化学農学に通ぜざる可らず。余の考にては、是寧法法律政治に関する科目よりも必要多かる可し。

山紫水明抄

九月七日は丁度旧の八月十一日で有たが、余り月がさえて渡り居たので、うか／＼と家を出て何の宛もなく、芝山内へ行た。其から大谷君を誘ひ出して金杉の海岸

へ出掛た……石垣の上へ立て見ると、まあ何と云てよからう空は一面に晴渡り月明かに星稀にと言ふ塩梅で有て其所々に白い、ふわ／＼した雲が椽の方丈月の光を受けて居るなど実に趣がある。

下を見れば、じやぶん々々々と引て行く汐の漣に月がさつとさして波が動く度に其影がきら々々々々々と右に転び、左に走り、凡て金色の鰻と云たら俗であるが、竜の子が何千万疋寄り集て鬼ごっこでもして居るかと思はれる様であるし其先の方は水面が一体に光て居て是も亦大きな竜が尾を曳て房州の方へ逃げて行くが如くに見える。其から右と左には、所謂夕煙がポーンと立ち籠めて其間からちらり々々と見える燈や帆かけ船や何かが丸で蜃気楼ではないかと思ふ様に髣髴として居る。特に時々ガタン々々と云ふ櫓の音もや、の中から水に響て聞える様な景色に見とれて居たが、やがて立ちて帰らうとすると自分の影は鱗色に見える土の上に黒く写て居て草の中にはコホロギの声が一せいに満ち渡りてきこえた。

十月二日、頃は秋高く馬肥ゆるの候、隅田江上 0ar を把て全身の血を動かし筑波の翠黛や鐘ヶ淵の夕煙を

後に遺して神田の下宿に帰る。先室に入れば、昨日学校の庭より盗み来りし木犀花の芳香一室を籠めて、感觸吾を天女に近きたるかを疑はしむ。乃ち、マツチを取てランプを点ぜんとすれば、薄光障子の中ガラスを通して机上に斜下す。窓を開けば隣の紺屋の物干に懸れる袂月宛ら磨ける鎌の如く光り一天雲なくして金風欄杆(之は窓の前の古き手すり)を渡る。即詩集を繰て朗々吟一番すれば向ふの家の少女が稽古三味線べこくとして亦愛嬌あり。之を裏店の三風流となす。

十月二十、二十一日、富士河を下りて駿河に入る。

岩淵を上る事、数里の所、一激湍あり。舟子竿を取て岩礁を避け絶壁を繞りて直に突出すれば、舟は已に山間を離れて平野に出づ。乃ち覗る富岳八采の裾を曳て高く天半に頭はれ白雲腰を繞りて遠く愛鷹山に連るを、絶佳絶壯にして而かも平和なるの妙景、遂遂我弄筆に上らす。

万頃の稲田一面の黄色を呈する処斜陽正に森林の影に入りて其光未だ全く収まらざる時一帶の暮鶯低く民家の屋辺を籠め横さまに鎮守稻荷の叢林にたなびき渡る。独り路傍に立てば歴声天に響きて秋気身辺を犯す

(余が美に打たれし秋色の一)。

交際録

一、余は人に惻巧らしく見られんとする虚飾心あり。其為に人の心を見すかしたる如き言をなす事往々なるが、其中見すかしたる積で自分は居て、實際見すかしたるに非ざる場合度々あり。如斯は実に愚にも付かぬ若い心なれば断然之を破らざる可らず。(九月十日)

二、時に謙遜なるを要す、時に傲慢なるを要す。(十二月)

三、余は友人間に謹厳にして犯す可らずとの讚評を得ん事を望む。

四、余が今日の交際法は人を一段下級の者と見做し総て広量を以て彼等を容れ置き、其善は之を讚賞し、其悪は面前に於て叱責す可し。但し是は陰にては一言半句も語る可らざる者とす。(十月一日)

五、人を訪はば、其辞去を惜しむる限りに於て帰る可し。(十一月一日)

都鄙所見

◎大森村辺にては、荒物屋にて硫黄塊を売るを見る。惟ふに麦藁を晒すに用ふるもの。

◎六郷川口運送船数十隻の碇泊せるを見る。皆羽田川寄附近に産する梨子葡萄及麦藁を東京に輸送するに用ふるなりと言ふ。(九月十日遊歩)

人世観

一、今日の世界は余が曾て考へたる博愛慈善的世界主義平和主義の実行せらる可き世の中に非ず。国際間には獸力の争闘の他何者も在なるし。是將に自国の利益を最大の目的となす可き秋なり。故に余は国家主義を奉ず。

二、然れども、徒らに高天原的死歴史に恋々して独り自ら高ふするが如き、又は国家の体面杯称して空威張をなし、為に実利を失ふが如きは亦最悪人の為にして亡国の徵なる事を信ず。故に進歩主義を取る。

三、是に於て余は自ら主義を立て、極端進歩的大日本膨脹主義と称す。其要に曰く。

吾人は日本国の為には何物をも犠牲に供するに躊躇せず、他国の利益は他国をして保護せしめよ。

日本国民は唯日本あるを知るのみ。

実利の存する所は西洋の事物と雖、喜びて之を迎へよ。風俗言語と雖、変更して可なり。

四、日本の天職は先 Philippine Islands を略取し、東印度を開き一方には、露国と戦て、其勢力を Ural の西に限り支那に遺利を集め巴蜀雲南の大富源を拓き、進て亜弗利加に向て日章旗を翻し、又他方には太平洋電線と Nikaragua Canal を竣工せしめて交通道を開き、大に通商を起して鹿を南米の中原に争ふにあり。

加藤兄は余を以て進取の氣象に富みたりとせられたり。されど余自身にては臆循にして臆病なる性質なるを觀るのみ。寧ろ更に元氣を鼓舞し心胆を練り以て所謂 Good and Great man たるの途に進む可き者ならん。疑ふらくは我尊敬する所の兄は余が輕薄にして事に動くを修辭学上より言はれたるには非ざるか。

余は自ら多少の道德的理想を有し、之を実行するに於て薄志弱行の徒に非ざるを確信せりと雖、我真友寧ろ敬友は余に信を置く事甚薄し。之何の過ならんか、再考三考余は遂に自ら己の不可なるを發見する得ざる

なり。

未来の大望は今日の繁忙を意味す。余輩豈優遊の秋ならんや。万般の事物一刻の短時間も注意なしに経過せしむ可らず。途上に在る時は店頭の商品に注目せん。圃にある時も一度に一箇の問題を解く可し。況や教授の講義を聞く時をや、又況や論文を談し新報を閲する時をや。

余は時間を節約して未来の大望に対する今日義務を尽くすに力む可し。

一、神聖なる恋を天外の神女に捧げて一切の劣情より、自由となる可し。吾は神女をして泣かしむるに忍びざるなり。

二、Conversation of ignorant を避く可し——日曜又は土曜日大に利用して盛に愉快を尽す可し。平生は之を樂しとして忍耐勉強す可し。

三、日々の仕事通常の日に於て

German, English	each	1 hr
商品、民法、経済等		1 hr
商総、商算、支那語、簿記等		1 hr

新聞、雜誌等

時

about 1 hr
5 hrs.

斯くして忙がしくす可し。

外に散步

1 hr